
イダー×魔法少女 5 5 5 ☆MAGIKA ～THE LAST K/NIGHT MISSION～

亜雲AZ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×魔法少女 555☆MAGIKA 〜THE LAST K／NIGHT MISSION〜

【Nコード】

N3532V

【作者名】

亜雲AZ

【あらすじ】

誰かの為戦う戦士、友の為に戦う少女。決して交わることの無い者同士が出会うとき、その『約束』は果たされるのか……？ ありそうでなかった555×まどマギ、ついに登場！ ファイズよ、絶望を切り裂き、希望^{ひかり}をもたらせ！

プロローグ

かつて、誰かの『夢』を守る為に闘う青年がいた。その名は『乾巧』、またの名『ファイズ』。彼は悪しき『オルフェノク』から人々を守る為、今もなお闘い続けている。

そして今、たった一人の友との『誓い』の為に闘う少女がいた。その名は『暁美ほむら』、またの名『魔法少女』。彼女は絶望を振りまく『魔女』と闘い、全てを捨てて友を守る為に闘っていた。

青年は『誰か』の為、少女は『一人』の為に闘う。

青年は『誰か』を想い、少女は『一人』を想う。

この二人の似ているようで違う、闘う『理由』と『想い』。

そしてこの物語は、この少女、『暁美ほむら』によって引き起こされる……。

荒廃した町、そこにそびえ立つが如くたたずむ巨大な『何か』。そして肩を落とし、うつむいたまま立ち尽くす一人の少女『暁美ほむら』。その容姿は少女というには大人びており、服装はセーラー服のよう。髪は黒のロングヘア。左腕には不思議な模様の盾が装着されている。そしてその眼には涙が溜まり、泣きじゃくる度にその涙は溢れ、大粒の滴となって足場に点々と後を残す。

「……また……、また駄目だった……。私は誰にも頼らなかった。なのに……なぜ？　なぜなの？　誰かに頼れば裏切られ、誰にも頼らなければ力が足りない……。どちらにしてもあの娘を、『――』を守れない……。私一人じゃ駄目なの？　私はいつまでたっても、

あの娘を守れない、弱い存在のままなの……？」

その数秒後、ほむらは感情を押し殺すかのように無理やり泣き止み、涙を一滴残さず右腕で念入りにふき取る。そして顔を上げるとほむらの顔は鋭い目つき、そして冷たい眼光。たった今まで涙を流していた少女の面影は何処にも無かった。

「……いいえ……あきらめないわ……。たとえ誰かを見殺しにしても、この手を赤く染めようとも……『――』との『約束』を果たす……！」

ある意味危険ともとれる決意を固め、髪をかき上げるほむらの横に真っ白な体、赤い宝珠のような眼、背中には赤い円、耳から生えているようにみえる何かの先端は桃色、その色の境界には黄色いリングがついている。その正体は願いを叶えるかわりに少女を『魔法少女』へと変える者、『キュウベえ』だ。

「『――』は凄かったね。あの『ワルプルギスの夜』を一撃で倒しちゃったんだからさ」

その声に感情はなく、機械音……いや、棒読みといったほうが正しいだろうか。とにかく、生気を感じられない声であった。ほむらはキュウベえと一言二言と言葉を交わし、巨大な『何か』のいる方向とは逆の方へと歩き出した。

「戦わないのかい？」

「……私の戦場はここでないわ……」

「曉美ほむら、君は……！」

キュウベえが言葉を言い切る前に、ほむらは左腕に装着された盾を稼動させた。するとほむらの周りの時空が歪み、そこに出来たワープホールのようなものにほむらは入っていき、姿を消した。

「……なるほど、それが君の力だったのか……。時を止める力を持っているのも納得だよ。おそらく君はこれまでに数多くの時間を巻き戻してきたんだろうね」

キュウベえはまぶたを閉じ、うなづきながら言う。そして、眼を見開き、こう言った。

「でもね曉美ほむら。その力は周りにとっていいものじゃないだよ。おそらく今君は体験しているだろう。君が時間を繰り返し、歪めていったツケを……」

そういうと、キュウベえもどこかへと歩き出した。

「楽しみだよ曉美ほむら。今度は、どんな『絶望』を見るのかな？」

そして、キュウベえの予言どおり、ほむらの行く世界は多くのイレギュラーによって運命は大きく変えられる……。

文字通り時をさかのぼりほむらが目覚めた同時刻。そこから新たな出会い、新たな別れ、新たな運命、新たな戦い、そして新たな希望と絶望。全ては、ここから始まる……！

仮面ライダー×魔法少女 555☆MAGIKA 〈THE LAST
STAGE〉NIGHT MISSION

二つの世界が交わりし時、少女の「約束」は果たされるのか……。

To be continued.

プロローグ（後書き）

作者「はい、てなわけで始まります！ 『555☆MAGIKA』

略して『ファイマギ』！ ハッピーエンドになるかはまだ分かりません。もしかしたらこれもまたループのひとつなのかもしれません」

ほむら「冗談じゃないわ。お断りよそんなオチ」

作者「あ、あとほむらの出番はまだ先だから」

ほむら「ええっ!？」

巧「最初は俺と!」

マミ「私の!」

巧&マミ「まだマギ本編開始前から始まるぜ(わ)!」

ほむら「わけがわからないわ……orz」

作者「そんなわけで第一話【Irregular World】を宜しく願います!」

第1話（前書き）

巧「うん？サブタイトルねえぞ？」

作者「ああ、ネタバレ防止で、目次には話数しか書いてないんだ。それに作中にサブタイトル書くほうが好きだし」

巧「ふう〜ん……。じゃ、始めるぜ」

マミ「ちなみに第1章のイメージソングはファイズのOP曲よ！」

巧「（最近読んだ人が歌詞関係で削除されたからぼかしてるのか……）」

追記…その人復活してました！復旧頑張ってください！

スマートレディ「おねえさんも、応援してまーす♪」

巧「Σどこから出てきたっ!？」

第1話

——……私は繰り返す。何度でも……！

どこかから聞こえる声。悲しみ、怒り、様々な感情が交じり合った声が……。

第1話【Irregular World】

「……あれからもう3年経つのか……」

もう一日の半分がたった昼下がり。土手に寝そべっている青年が一人、ぽつりと呟く。彼の名は乾巧^{いぬいたくみ}。またの名『555』^{ファイブ}。彼は今も戦い続けている。ようやくつかめた自信の夢の為に……。

3年前、『オルフェノク』の王『アークオルフェノク』が倒され、オルフェノクの本拠地でもあった世界的企業『スマートブレイン』は解体された。しかし、それ以降もオルフェノクは生まれ続け、人々を襲っていた。巧は『デルタ』である三原修二^{みはらしゅうじ}、人間との共存を望むオルフェノク達と共に戦っていた。

「さて、そろそろ行くか」

巧は立ち上がり、バイク『オートバジン』に乗る。

「……久々に行ってみるか。あそこに」

行き先を決め、巧はエンジンをかけ走り出した。行き先は……東京。

一方、とある町……名を『見滝原』。現在午後4時。

「ふう……今日も学校が終わったわ……」

通学路。一人の少女が歩いていた。制服を見ると中学生だろうか……。だが、そのスタイルはもはや大人顔負けだ。そして黄色い髪に縦ロールになっているツインテール、とても印象の強い容姿をし

ている。左手の指には指輪をはめていた。綺麗な黄色の宝石がついており、その輝きは美しいの言葉がよく似合う。

「……一旦家に帰ってから、『パトロール』しましょうか……」
そういつて少女は駆け出した。

何も変わらない日常、変わらぬ日々。だが運命の歯車は、既に狂っていた……。

~~~~~

——東京。

時は6時。辺りは暗くなりはじめ、人気のない道を青年が走っていた。

「配達で遅くなっちゃった……。早く帰らないと！」

青年は菊池啓太郎きくちけいたろう。クリーニング屋を営んでいる。今は、配達で帰りが遅くなってしまい急いでいるところだ。よほど急いでいたのか、路地裏などを使っていた。

「はあ……はあ……、疲れ……って、あれ!？」

啓太郎が休もうと立ち止まると、そこはいつの間にか知らないところになっていた……。いや、景色が変わったのだ。

「ええ!？ 何がどうなってるの!!？」

啓太郎は困惑していた。そこは……まさに不可思議空間だった。

——一方、見滝原。

少女は手のひらに卵のような形をした宝石を持ち、町を歩いていた。制服姿のまま。彼女は今、先ほど言っていた『パトロール』を行っているところだ。

「『ソウルジェム』の反応が悪いわね……。今日は収穫なしかし……?」

『ソウルジェム』と呼ばれる宝石が急に輝きだした。鮮やかで美

しい、黄色い輝き。

「近いわね……。この反応は……。『魔女』！」

少女はソウルジェムの輝きを頼りに駆け出した。

――戻って東京。

「……どうなってるの？ これ……？」

トランプのような装飾がされた迷路、あたりにやたらと貼られている赤いハートマーク、まるで某ふしぎの国のような迷宮。昔ビデオで見たトランプの兵のような者も居たが、ファンシーな景色のせいか、啓太郎は警戒しつつもその足を進めてしまう。そしてそれから少し歩いていると、景色が突然大きく歪みだした。

「な……。何!？」

それから少しして景色が安定したのか歪みが納まる。しかし、先ほどまでの景色が一変。辺りは暗くなり、ハートの意匠は残しつつも、あたりには地面に突き刺さった十字架がたくさん……。そこはまるで墓場のよう。しかも昔処刑で使われていた首を切り落とすギロチンが何台もある。いずれもおびただしい量の血がこびりついている。既に誰かがあれで殺されたのだろうか、そんなことを想像してしまい啓太郎は身震いを起こす。

そして、その空に浮かぶ赤い月に何かがいた。

それが異形の怪物だと、形だけで分かる。その体は人体を模しつつ、首が無かったのだから……。

「……何あれ……？ オルフエノク……じゃない!？」

そして、月から異形の者が啓太郎の前へと降り立った。その姿は2.5mはあろう某特撮物の元人間の怪獣のようだった。どす黒い体に、胸部にはさかさまのウサギのような顔がある、しかしその顔はどくろ、かわいさなど微塵もない。むしろ不気味だ。啓太郎は腰が抜け、その場に倒れこんでしまった。叫び声すら上げられず、地に尻をいつけたまま動けなくなっていた。この怪物にはあのオルフエノク以上に恐怖を感じてしまっている。単純に体の大きさに驚い

ているのもあるだろうが、それよりも怪物から発せられているのであろう、どす黒い邪気が啓太郎の恐怖心をより一層掻き立てる。

「……ウグオオオオオオオオオオオッ！！！」

「う……うわあああああああっ！」

啓太郎が全身の力を振り絞り出来たことは叫ぶ、これしか出来なかった。そして脳裏に浮かぶ走馬灯。特に三年前の記憶が現れる。その中には、乾巧、ファイズの姿があった……。

「たっくん……」

啓太郎がそう呟き、怪物の腕が啓太郎を掴み取ろうとした、その瞬間<sup>とき</sup>だった。エンジン音が辺りに響く。怪物は音に敏感なのか、耳を押さえるようなしぐさを見せ、うろたえている。そして……。

「うおりゃああああっ！！！」

銀色のバイクが跳び、怪物に突っ込んで撥ね飛ばしたのだ。怪物はギロチン台に突っ込み、台を倒す。バイクが停止し、運転手がそのヘルメットをはずすと、その顔は、啓太郎の知る男だった。

「大丈夫だったか、啓太郎」

「……ん……、たっくううん！！！」

乾巧、その人だった。

「ど、どうしてここに！？」

「いや、よくわかんねーけどさ、気づいたらここに……」

「……ムォー！！」

怪物が何か言うと、周りにトランプに手足が生えたようなものが巧と啓太郎を囲む。

「たっくん！ 何なのこれ！？」

「俺が知るか！ よくわかんねえけど……」

巧はオートバジンに乗せてるアタッシュケースから、ベルトを取り出し、それを腰に装着した。

——一方見滝原でも、危機が訪れていた。そこは、とある路地裏。

「あなた……一体何なのかしら……？ 人間ではなさそうね」

少女の目の前には、蚊のような姿の灰色の怪人がいた。彼女は先ほど言っていた『魔女』を追いかけていたのだが、運悪くこの怪人と出くわしてしまったのである。

「お前が知る必要はない……。どうせここで死ぬのだからな

怪人から感じられる殺気。だが、少女はそれに動じない。むしろ余裕を保っている。

「あら？ まるで私の負けが決まってるような言い草ね」

「事実だ。只の小娘に何が出来る？

怪人が挑発するように語り掛ける。もちろん、少女はそれに乗ることはない。

「悪いけど、『只の』小娘じゃないの」

そう言って、少女はソウルジェムを掲げる。

「私は巴<sup>へい</sup>マミ。そして……『魔法少女』よ！」

——東京。

巧は懷から携帯電話型トランスジェネレーター、『ファイズフォン』を取り出し、変身コード「555」を入力、ENTERを押した。

《S t a n d i n g   b y》

ファイズフォンから機械音声流れ、巧はそれを折りたたみファイズフォンを天に掲げた。

そして同時刻、異なる場所で同声の言葉が発せられた。

「「変身！」」

《Complete》

巧はベルトにファイズフォンをセット「Complete」の音声流れる。すると装着しているベルトから赤い管が現れ、巧の体は赤く光る。その姿を紅き閃光『ファイズ』へと変えた。ファイズは右手首を振る。

そして、マミもソウルジェムから発せられる光によって、『魔法少女』へと姿を変えた。

2つの場所に、異なる戦士が同時に現れたのだ。

「……行くぜ」

「覚悟なさい、怪人さん！」

~~~~~

F a i z s i d e

「さて、まずは……！」

ファイズはオートバジンのバイクハンドルを引き抜き、ファイズフォンから『ミッシュンメモリー』を取り外す。そして、それをバイクハンドルに取り付けると、

《Ready》

赤い刀身が伸び、ファイズ愛用の剣『ファイズエッジ』となった。
「オートバジン！ 啓太郎を頼む！」

『PiPi』

そう叫ぶと、オートバジンが変形する。

《Battle Mode》

オートバジンはバイク形態「ビークルモード」から戦闘形態「バトルモード」に変形した。

「……っし！ お前ら、容赦しねえぜ！」

ランプもどきが一斉に襲い掛かるが、オートバジンの強力なマシンガン攻撃、ファイズの攻撃に圧倒された。

「あ？ たいしたことねーな」

ランプもどきはよくある「質より量」なのだろうが、無数に発射される銃撃の前では効果をなさなかった。

「すごい……」

啓太郎はそれしか言えなかった。

「じゃ……相手はお前だ！」

ファイズが目をつけたのは、今回の元凶であろう怪物。ファイズは怪物に向かって走り出す。そして怪物もまた、ファイズに向かって拳を振り上げる。

Mami side

「はあっ！」

マミは白いマスケット銃を数本召喚、それを怪人目掛けて放つ。
戦国時代の某合戦のように銃を持ち替えて連射、単発式であるマスケット銃の弱点をみごとにカバーした戦術である。

「おっと！」

しかし、怪人ははねを広げ、それを飛んでかわす。その姿はまさに蚊。マミは若干それを気味悪く思った。

「中々やるわね！ でも……っ！」

マミは自信の周りにさらにマスキット銃を召喚、それを放とうとするが、それよりも怪人の攻撃が速かった。怪人のくちばしが、マミの胸を貫通、心臓に突き刺さったのだ。

「え……あ……？」

（くふふ……これであの小娘も死んだか。奇妙な技を使っては来たが、流石に俺に敵うは……ずが……!?!）

怪人は驚いていた。怪人の思惑通りなら、マミは死んで灰となっているはずだ……。しかし、マミは灰どころか死んですらいなかったのだ。本来ならそれは驚くどころか、むしろ歓喜するところだ。だが、マミの場合『ある点』が異なっていた。

（馬鹿な……!?!? あの小娘……人間のまま……だとお!?!?!）

怪人がマミに対して放ったのは『使徒再生』。大抵の人間はこれで死ぬがまれにそれを耐え切り、『同属』となることがある。しかし、マミは人間のまま、それを耐え切ったのである。

無論、怪人の動揺は隙となった。それを、マミは見逃さなかった。「よくわからないけど……チャンスね！」

マミはマスキット銃を持ち替えながら連射、それは怪人に命中、しかも怪人のはねを打ち抜いていた。

「ぎゃああああああっ!! ぐええっ！」

怪人ははねを失い墜落、地に叩きつけられた。

「……はあっ！」

「ぐっ!？」

怪人がふらつきながら立ち上がるが、黄色いリボンが怪人を縛り付けた。かわいらしい花の錠がついている。

「……これで終わりね」

「馬鹿め……連射しようがちっばけな銃じゃ俺は死なない! こんなものすぐに破って……」

「確かにそうね。でも……」

リボンを破ろうとする怪人の目の前に、巨大な銃口が現れた。マミが巨大な銃をリボンで作り上げたのだ。

「これはどうかしらね」

巨大な銃に魔力が込められる。怪人は、これを食らえば間違いなく死ぬ、そう予感した。

「なああ！？ ま……待て……！」

怪人は命乞いをするが既に手遅れ。魔力のチャージが完了したのだ。

「『ティロ・フィナーレ』！」

巨大な銃口から、それに見合ったサイズの光弾が打ち出された。

その威力は絶大。怪人はその光弾に飲み込まれた。

「ぐおおお！ ば……かなあああ！！」

怪人は青い炎を上げ、灰となって絶命した。

「……くっ！」

マミはその場に座り込み、胸を押さえる。

「さっきのあの攻撃はなんだったのかしら……。急に体がだるくなっただけ……」

あの攻撃、『使徒再生』は効果は発揮せずとも、肉体には確実にダメージを与えていた。なんとか立ち上がると、辺りからパトカーの音が聞こえた。あれだけの銃声が聞こえれば、通報されずとも警察は駆けつける。マミは警察が来ないうちにその場を離れる。

「あっ……『魔女』！ すっかり忘れていたわ！」

マミは慌てて『魔女』の元へと向かって行った。

F a i z s i d e

「はあああっ！」

ファイズエッジが怪物の左腕を切り裂く。怪物は悲鳴を上げたじろぐ。オートバジンはすでにトランプもどきを一掃し終わった後だ

った。

「たっくん！頑張って！」

「分かってる！これで終わらせてやる！」

ファイズエッジからミッションメモリーを取り外すと、動力を失ったファイズエッジは元のバイクハンドルに戻った。ファイズはそれを啓太郎に投げ渡し、今度はベルトに付けられているデジタルカメラ型パンチングユニット『ファイズショット』を取り出しミッションメモリーを取り付けた。

《Ready》

そしてファイズはそれを右手に装備、ファイズは一度怪物を見る。怪物は何かを悟ったのか、無傷の右拳でファイズを殴りつぶそうと拳を振り落とす。ファイズはそれを回避、ベルトに装着したままのファイズフォンを開き、ENTERを押す。

「お前と俺の拳、どっちが強いだろうなあ？」

《Exceed Charge》

ベルトから右手にかけて力が集中される。その間ファイズは右手をスナップさせ、その後右拳を力強く握り締めた。そして、チャージが完了。ファイズは再び振り落とされた拳に向かって必殺技『グランインパクト』を繰り出した。

「ゴオオオオッ！！」

「はあああぁっ！！」

拳と拳の競り合い、征したのは……。

「っらあ！！」

「ブオアアアッ！！？」

ファイズだった。殴り飛ばされ、浮き上がった怪物を迎撃すべくファイズは跳んだ。

《Exceed Charge》

そして、ファイズは怪物の顔？ 目掛けて再び『グランインパクト』を叩き込む。

「やああああっ!!」

爆音にも似た打撃音が響き、怪物は急降下していく。

「ブギヤアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

怪物は地面に叩きつけられ、赤い「Φ」の文字が浮かび上がると同時に爆発したのだった……。

ファイズが変身を解くと、怪物が倒されたからなのか、景色はごく普通の道路に戻っていった。

「はぁ……疲れた……」

巧はその場に座り込んでしまった。

「たっくんお疲れさま。あと……ありがとう」

啓太郎が笑いながら巧に礼を言う。

「別にいいって……うん？ なんだこりゃ」

巧が何かを見つける。それは黒い宝石のような、禍々しい『何か』。

——今宵の戦いはほんの序章。本来ありえないはずの物語は^{たにかい}今、幕を開ける。そしてこれは、ある少女の歪んだ物語の始まりでもある……。

To Be Continued.

第1話（後書き）

巧「なんか戦闘シーンがあっさりしてたような気がするな」

作者「まあ……そこは気にしないで；」

マミ「今回こっちサイドは私だけだったわね……」

作者「まあ本編開始前だからね」

巧「つーか、なんで俺は3年も生きてんだ？それにオートバジンまで復活してるし」

作者「そこは次回触れると思うよ」

巧「だいいいな。そんなわけで次回は【共存していく者達】だ。次回も見てくださいよ！」

ほむら「早くまどかと私の出番来ないかしら」

さやか&杏子「アタシらは蚊帳の外かいっ！」

三原「というか俺名前だけか……orz」

作者「ちなみに今回登場した魔女とオルフェノクの紹介！」

ウサギの魔女…その性質は「残酷」 ジャミラのような体つきで顔はさかさまのどくろにつさ耳をつけた感じ。パンチの破壊力は高いが『グランインパクト』には勝てなかった。結界は最初「不思議の国」で、魔女のいる場所は「歪みの国の」をイメージしました。

トランプの使い魔…その役割は「兵」。ハートのトランプにそのまま糸のような手足をつけた物。1個体の戦闘力はかなり低い。

モスキートオルフェノク…蚊の姿を模したオルフェノク。変化する人間は男である以外は不明。使徒再生にはくちばしを用いる。飛行能力を持つがはねがもろいのが弱点。

第2話（前書き）

作者「第2話、5時間程度で書けちゃった」

巧「お前遅筆って言ってなかったか!？」

作者「テンション上がるところなることがある」

マミ「流石きまぐれ作者ね……」

啓太郎「とりあえず、今回は新キャラ登場だって!」

巧「大体想像つくメンバーだけだな……」

作者「そこ、想像つくとか言わない。ではだ」

ほむら「第2話、始まるわ。今回はどうなるのかしらね」

作者「台詞とられたっ!？」

ほむら「出番出るまで、前書きをと後書きはジャックさせてもらおうわ!」

まどか「いいよなあ……ほむらちゃんは……orz」↑同じことやろうとしていた

さやか「それに比べ……orz」↑上に同じ

杏子「アタシらなんて……orz」↑言うまでもなく

ほむら「……申し訳なかったわ;」

三原やら海堂「「っーか俺達は……?」」

第2話

「見滝原」、ここには一人の魔法少女がいる。巴マミだ。彼女は先ほど灰色の怪人を倒し、追跡途中であった『魔女』を探していた。先ほどの戦いから、マミは体にだるさを感じていたが、それを無理して魔女を追跡していた。魔女は人を襲い、殺すからだ。

「はぁ……はぁ……！　ようやく見つけた……！」

無人の駐車場、マミはようやく魔女の潜んでいる『結界』を見つけ出し、魔女を倒すべく結界へと入り込んだ。

しかし、魔女の結界の割には結界が安定していない。さらに膨大な魔力を有する魔女がいるならば、それを感じ取ることが出来るはずだ。しかし、マミはどれだけ気を探っても魔女を見つけられなかった。つまりここは、『魔女』の結界ではなく、その『使い魔』しかない結界なのだ。おそらく、魔女は結界の一部を切り離し、マミがそちらに気をとられている内に逃げ出す魂胆だったのだろう。いわば「トカゲの尻尾きり」。マミはそれにまんまとはまってしまったのだ。立ち止まってしまったマミに、使い魔達が襲い掛かる。

「……許せない……」

マミは青筋を立てていた。もっとも、マミは元々切れるようなこととはほとんどない。だが、今夜の出来事はマミを切れさせるには十分過ぎた。謎の怪人との戦いは結局無駄足、無駄に時間を使った拳句にこちらは体調不良を起こし、そこから生まれた焦りが魔女の搜索に支障を来たし、より魔女の搜索に時間がかかった上、結局見つけた頃には魔女は逃げ、そこには使い魔しかなかった。魔女にいっぱい食わされた自身への怒りなどが混ざりあい、マミは体の疲れやだるさすら忘れ、怒りがマミの体を動かすエネルギーとなってい

た。おとなしい人が怒ると怖いとは言うが、今のマミはまさにそれだった。

「ああああああああああああつ!!」

マミは怒り狂う竜の如くマスケット銃を召喚、射撃する。怒り狂いながらもその狙いは正確。確実に使い魔を打ち抜いていた。わずか数分、マミは全ての使い魔を倒した。結界は崩壊し、マミは変身を解いてその場に倒れこんでしまう。落ち着きを取り戻し、疲れやだるさが戻ったのだろう。

「はぁ……はぁ……ふうう……」

マミは荒い呼吸を整え、深く深呼吸する。

「……我ながらひどいわね……怒りに身を任せて戦うなんて……これじゃ正義の味方なんて言えないわ……」

マミは魔法少女を「正義の味方」として、誇りに思っていた。正義の味方が怒るがままに戦ってはいけない、そう考えていた。

「マミ、大丈夫かい？」

マミにとっては聞きなれている声がした。声のした方に向いてみると、兎のような、猫のような白い生き物がそこにいた。

「『キュウベえ』……」

「ソウルジェムがかなり濁ってるね……」

おそらくテレパシーの類で話しかけているのだろう。証拠に喋る際に口を動かしていない。白い生き物『キュウベえ』は背中から黒い『何か』を出した。

「完全に穢れを取り除くことは出来ないけど、少しぐらいならまだ大丈夫だよ」

そう言って、マミに黒い『何か』を渡した。

「ありがとうキュウベえ」

そう言ってマミは指輪からソウルジェムを取り出し、『何か』を

近づける。すると、ソウルジェムから、邪気が出てきた。それを、『何か』が吸い取った。ソウルジェムはまだ穢れを残してはいたが、先ほどよりは輝きを取り戻している。

「ところで、魔女はどこに行ったのかしら？」

「あの方角だと……あの隣町だね」

キュウベえが意味深にその方角を見つめる。それを見て、マミは察する。

「なるほど……『佐倉』さんのテリトリーね。なんだか悔しいわ……」

マミは苦笑する。

「そんなことより、今日はもう家に帰ったほうがいいよ。疲れてるみたいだし」

「そう？ でも……」

「君に今倒れてもらうわけにはいかないんだ」

キュウベえは自分を心配して言ってくれている、それを無為にするわけにはいかない、とマミは思い、キュウベえに従うことにした。

「そうね……そうするわ」

そう言ってマミは立ち上がる。すると、マミは思い出したかのよう
にキュウベえに尋ねた。

「ところで……灰色の怪人みたいなもの、知ってる？」

「灰色の怪人？ そんなのは知らないけど？ 見たこともないしね」

「そう……使い魔の一種かと思ったんだけど……。まあいいわ、ありがとねキュウベえ」

マミは立ち去った。キュウベえはその後ため息をつく。

「マミ……君にはまだ倒れてもらうわけにはいかないよ。君にはまだ戦ってほしいしね」

そう言ってキュウベえは歩き出した。

「灰色の怪人……ね。僕達に危害をくわえるようなら……魔法少女達には注意してもらわないと」

第2話【共存していく者達】

巧と啓太郎は夜道を歩いていた。

「ふーん、車は車検に出してたのか」

「うん、だから徒歩で配達してたんだけど……ね」

啓太郎はうつむく。先ほどの体験は既にトラウマレベルなのだろう。

「いや……思い出したくないなら別にいいぞ」

気づけば、巧と啓太郎は啓太郎の家の前であった。

「真理ちゃん、ただいま」

啓太郎がドアを開けると、同居人である女性が出てきた。

「啓太郎、遅かったじゃない……って、巧!？」

「おお真理、久しぶりだな」

『園田真理』そのだまり、彼らと同じ、「共存」の思想を持つ女性だ。

「……でも、ちょうどよかったかも。今日はちょっと作り過ぎちゃって」

「たっくんも食べよ？ 久しぶりの再開だし」

「……ああ、そうするよ」

巧は笑いながら、家に上がった。

~~~~~

三人そろっての夕食を食べていた。

「……うまい。また腕上げたな」

「そう？ いつも食べてたから気づかなかったよ」

啓太郎ののろけっぽい発言に、なんだよそれと巧が笑う。先に言っておくが、啓太郎と真理は付き合っているわけではない。真理は啓太郎の家の居候なのだ。

「ところで、どうして巧が？」

「ああ……実はな」



「……そんなことがあったのね」

真理は先ほどの出来事を知った。謎の空間、そこに住む怪物のこ  
とを……。

「俺もあんなのを見たのは初めてだ」

「それはそうですよお」

「「「え？」」」

気づけば、三人以外に別の人間がいた。

「はーい、スマートレディの、おねえさんです」

「え……えええええ！？ い、いつからそこに！？」

啓太郎が驚く。もともと巧と真理も驚いているのだが。

「先ほどからですよお。インターホン押してもノックしても返事が  
ないので、入ってきちゃいました」

「「「いやいや！ むしろおかしい！！」」」

巧と真理が突っ込む。ところでかぎは！？ と啓太郎が言う。

「あ、安心してくださーい。かぎはちゃんと閉めておきましたから。  
危ないですよお、かぎの閉め忘れは！ 次からは気をつけましょ  
うね。おねえさんとの、約そ」

「長々しいんだよおお！ 何なんだ一体っ！」

巧がついに切れた。

「乾さん怖い。えーん」

スマートレディは泣きまねをする。それを見て巧はため息をつく。

「……で、『それはそう』ってどういうことなんだ？」

巧がそう尋ねると、スマートレディはすぐに泣きまねをやめ、わ  
ざとらしくコホン咳き込む。

「そうでした。まず、乾さんが接触した敵については……まだよく  
分かっていません。なんせ、今日突然現れたのですから」

「今日……突然？」

「はい、私達とオルフェノク、そして第3、第4勢力が現れました」  
「『第4勢力』？ あれの他にも何かあったのか？」

「はい。不思議な力を持った少女達でーす」

それを聞いて、三人は吹き出す。

「不思議な力を持った少女って……なんだそれっ!？」 『魔法少女』  
とかそんなのか!？」

「そうです」

巧がおかしいだろそれと言いたそうにしている。

「嘘ではありませんよ。彼女達のせいでこちら側のオルフェノクまでやられてしまいました」

それを聞き、巧は顔をしかめる。

「とりあえず、彼らには出来るだけあれらと接触しないようにを言っておきましたが……」

「ところで、海堂と三原は？」

「海堂さんは相変わらずふらふらしてます。三原さんは……数日前からオルフェノク討伐で遠出中。ついでに、琢磨さんは『見滝原』と呼ばれる場所で工事に行くようですよ」

「『見滝原』？ どこだそこ」

巧には『見滝原』と言う場所に心当たりがなかった。啓太郎と真理もいまいち分かってないようだ。

「おねえさんにもよくわからないんですが、なんでも最近になって急速に近代化している市だそうですよ。もともと、その人たちにも『見滝原』という場所に心当たりはなかったようですよ」

わけわかんねえなと巧は頭を搔く。

「とにかく、情報が入り次第お伝えに行きまーす。では」

スマートレディは帰っていった……。それは、嵐が通り過ぎたが如く。

「……スマートレディって、一体何者なの……?」

「さあ……今は『味方』……だと思う。オートバジン直してくれた

し……多分」

困惑する三人であった……。

「ああ……ところでさ、今日俺ここに泊まってっていいか？」

「あ、うん。たっくんの使ってた部屋空いてるから、そこ使って」

「……そーいや、あいつにこれ見せるの忘れてたな……」

巧はポケットからあの時手に入れた黒い『何か』を出し、少ししてそれをしまった。

~~~~~

——その頃、見滝原町。

「やっと手に入れたわ……『グリーンシード』……！」

マミはあの後、偶然別の魔女を見つけ、それを倒していた。そして、魔女から落とされた黒い『何か』、『グリーンシード』を手に入れていたのだ。マミは先ほどと同様、自身の持つソウルジェムにグリーンシードを近づけ、穢れを浄化する。体のだるさはまだ残っていたものの、体調は回復している。

「今日は帰ってすぐに寝たほうがいいわね……」

そう言って、マミは自分の家に帰って行った……。

——そして、隣町……。

「らああああっ!!」

一閃、槍の一撃は魔女を切り裂き魔女は消滅、グリーンシードを落とす。そして、空間が元に戻っていく。そして、グリーンシードを少女が拾う。赤いポニーテール、パーカーにショートパンツ、ボーイッシュな印象のつり目の少女だ。

「へっへっへ……これで4つめ。今週は大量大量っ！」

少女はポケットに詰め込まれたグリーンフシードを見て、笑いながらたった今手に入れた物もその中に入れる。その姿はまるで大金を手に入れたよう。

「きゃあああああ!!」

女性の叫び声が聞こえる。それも、すぐ近く。少女は悲鳴の聞こえた場所へと赴き、現場を目撃する。

おそらく、風俗店勤務の女性だろう。服装が派手だ。そして女性を狙っているのは、灰色の怪人だった。少女は気づかれぬよう、物影に隠れて見ていた。

「なんだあれ、見たことねえ奴だなあ……。魔女でも使い魔でもなさそーだけど」

少女はそう言い、振り向いた。

「ま、アタシには関係ないか。あの女……かわいそーに。ついてないってか、ご愁傷様だなあ」

少女のその声には同情のかけらもない。

「あれはグリーンフシード落とさなそうだし、戦うだけ無駄。あっちもこっちには気づいてねー、わざわざ出ている必要もなし。じゃ、そーゆーことで」

そう言っ、少女はその場を離れた。少女には、女性を助ける気など微塵もなかった。ただ、興味本位で行っただけなのであった。そして、女性の断末魔が町に響く。

「きゃ……ああああああっ!!」

「……るせなあ。黙って死んどけよ……ったく」

少女は耳をふさぎながら、立ち去っていく。その後、女性の死体は見つかることはなかった。怪人によって殺され、灰となったのだから……。

——少女の名は「佐倉杏子^{さくらきょうこ}」、手段を選ばない利己主義者の『魔

法少女』。

To Be Continued.

第2話（後書き）

杏子「……」

作者「……」そろゝ

杏子「待てやコラ！どーゆーことだオイ！アタシがクソヤロウみてーじゃねえか！！」

さやか「いやむしろ普通。それがあんたの本来の姿じゃん」

杏子「黙れやこの出番なし！」

出番ない人全員「「ひでえ！！前書きで散々へこんでたくせに！！」」

巧「まあ、スマートレディが若干予想外だったけど、真理の登場は普通に分かったな」

まどか「……」ジゝ

真理「ど、どうしたの？」

まどか「なんだか……それはとっても、懐かしいなって」

真理「……言われてみれば、あなたどこかで……」

マミ「大体分かった、中の人ネタね」

啓太郎「でも、今回はスマートレディは味方みたいだね」

スマートレディ「おねえさん、がんばっちゃいます！」

作者「多分、今回はスマートレディがメインの回になる」

巧「スマートレディ何があった！？」

スマートレディ「次回はある、【共存の架け橋】でゝす！皆さん、次回も見てくださいねゝ。おねえさんとの、約束でゝす！」

ほむら「……なんだか殴りたくなってきたわ」イラッ

巧「止めとけ。あいつは全てにおいて謎だ。未知の戦闘能力を持ってるかもしれない」

真理「ついでに言うと、劇場版では私に化けていたわ」

ほむら「……止めとくわ。まどかに変身されたら手がだせないわ」作者「では、次回をお楽しみに！」

マミ「というか私のキャラ崩壊にはだれも突っ込まないのね……」

第3話（前書き）

作者「今回は過去のお話です。多分、現時点で一番ぐちゃぐちゃな回かと。」

巧「大丈夫かオイ」

マミ「それはそうと、PVで既に5000アクセス突破したわ！」

まどか「ユニークでも1000アクセス！　すごいね！」

ほむら「これで私達が登場でアクセス数が一気に上るのが目に見えるわ……」

さやか「舞い上がっちゃってますね、あたし達！」

三原「ただ、今回は作者も認めるぐちゃぐちゃな回……」

海棠「これで見えるファンも減るかもしれないぜ？」

杏子「んなのあってたまるかー！」

作者「ぶっちゃけこれ番外編でもいいかと思いましたが、大事なことが入ってるのでナンバリングに入れました」

巧「……まあ、大事なところ以降はおまけと言っても過言じゃなさそうだしな……」

スマートレディ「では第3話、行きましょーか」

第3話

それは、3年前……。『アークオルフェノク』が倒されてから少し経ってから……。

「……ここ……だよな」

巧はある廃工場に来ていた。その手に、謎の手紙を持って……。

第3話【共存の架け橋】

「乾……お前も来たのか」

「お前……海堂か!？」

そこにいたのは、海堂直也^{かいどうなおや}。かつて巧と共に戦った人間側のオルフェノクだ。

「あ……あと、そこにもいるぜ」

「あなたは……乾さん」

今度は琢磨逸郎^{たくまいつろう}。元は敵対関係にあった者だ。しかし、かつてのその敵意は感じられない。その服装も、どこかの工事現場の作業着だ。

「あいつ……ほんとに琢磨か？　なんか人間臭くなってるけど」

「ああ……なんでも、最終的に人間として生きてくことにしたんだってよ。ま、信じがたいがな」

海堂は疑いの目で琢磨を見ている。ただ、少なくとも巧は信じているようであった。

「乾さんに……海堂さん」

「三原！お前まで来たのか！」

廃工場から入ってきたのは、三原修二^{みはらしゅうじ}、『デルタギア』を持つ者だ。

「しかし、何故私達はここに集まったのでしょうか？」

琢磨は時間を気にしているのか、腕時計を確認しながら言う。すると突然、大量のオルフェノクが廃工場に入り込んできた。4人は、互いに背を向け合うように集まった。

「おいおい……これって罠じゃねーのか？」
海堂だ。

「はぁ……急がなければならないと言うのに」
琢磨が言う。

「乾さん……やれますか？」
三原が巧に聞く。

「当たり前だ！……ところで、少しいいか？」
「どうした乾、時間はないぞ」

「俺達には、共通点があるよなぁ……」
「あぁ……そーいや、琢磨はともかく、俺達は……」

「「人間とオルフェノクの共存を望む者！」」

「ご名答です」

4人は背中を向けた方向、つまり、4人の円の中から声が聞こえ、一斉に振り向く。

「はーい、スマートレディの、おねえさんです！」

「「「うわわぁぁあっ!!?」」」

4人は驚いて再び一斉に倒れこんでしまう。いつの間に潜り込んだのだろうか……。ってかこれは誰でも驚く。

「い……いつからいたぁ!?!」

「たった今ですよ海堂さん」

「この人は本当に謎ですね……」

琢磨はため息をついた。つきたいのは全員一緒だが。

「……つうか、こいつらはなんなんだ!？」

「あなた達を同じ、共存の意思を持つ人たちです!」

その数、50数名。おそらく他にもいるだろう。全員が思った。

「……で、スマートブレインの奴がなんのようだよ」

「……皆さん、長生きしたくないですか？」

その言葉に、全員は頭に疑問符を浮かべる。

「はっきり言いますと、おねえさんに、協力してほしいんです」
「はあ? と巧が言う。」

「乾さん、これにうなづくだけで長生きできるんですよ?」

「だから、こういうことだよ! お前はあっち側の人間だろ!」

「それは、あくまで社長命令でしたから。今は私個人の行動であり、花形元社長の意思でもあります」

花形、その名前に誰もが食いつく。その社員がオルフェノクであった大企業『スマートブレイン』の初代社長であり、オルフェノクでありながらオルフェノクを滅ぼそうとした男でもある。その名を聞き、巧は静かに聞く。

「……で、なにしてくれるってんだ?」

「まず、肉体の崩壊を防ぐ薬品の治験、そして、『これ』です」
スマートレディが指を鳴らすと、銀色のバイクが入り込んできた。

《PiPi》

「あれは……オートバジン!!」

「はい。なんとか作り直しました。精密射撃など、ある程度改造していますが」

「……お前……なんなんだ?」

「私達是对オルフェノク組織『コエグジストCOEXIST』です!」
コエグジストCOEXIST、「共存」という意味だ。

「単刀直入に言いますと、スマートブレインはまだ息を潜めています」

す。オルフェノクの王、『アークオルフェノク』を蘇らせる為に」
「「「！！」」」

オルフェノクは死んだ人間が覚醒し、蘇って誕生する怪人であり、いわば進化だ。だがその進化は急激で、肉体が耐え切れず崩壊してしまうのだ。アークオルフェノクはオルフェノクを不死身にする力を持っており、3年前巧が1人の友の犠牲の末に倒した、最強のオルフェノクだ。

「何故だ……奴は乾が確かに……」

「その肉体は滅んではいませんでした。既に不死身の体となった者が、蘇生させようとしています」

「……冴子さんですか……」

琢磨が言った冴子とは、影山冴子^{かげやまさえこ}、ロブスターオルフェノクであり、アークオルフェノクによって、人間の姿を捨て不死身となった者だ。

「影山……生きてやがったのか……！」

海堂は拳を握り締める。

「アークオルフェノクは復活するのか？」

「それはどうでしょうか……ただ、万が一復活した場合……」

「させねえよ」

三原の質問に答えようとするスマートレディの言葉をさえぎり、巧は静かに言う。

「俺はようやく『夢』を持てたんだ……『誰かの幸せを守る』って……。その幸せを壊そうとするあいつらを……俺は許さない！」

この言葉を聞き、スマートレディは微笑む。

「スマートレディ……一応、信用してやるぜ。『夢』を……『幸せ』を、『誰か』を守るなら、俺は戦う！」

「そうだな……復活以前にあいつらを生かしておけない」

「琢磨さんよお、協力しないとやばいんじゃないかあ？」

「わかってます……この際、仕方がありません」

巧に続き、三原、海堂、琢磨が答えた。

「皆さん、ありがとうございます。では乾さん、本題に入りますが……」

「……そういや、さっきは流してたけど、『治験』って何する気だ……?」

「はい?」

「へ?」

スマートレディはにっこりと笑い、巧は間抜けな声を出す。他の3人は何か悟ったようで……。

「乾さん、死ぬなよ……」

「万が一のことがあったら俺がファイズを継いでやるから、安心して逝け」

「乾さん……あなたのことは忘れません。いろんな意味で」

「いやいや! お前ら何言ってるんだ!? 海堂に至っては何か字が違うし!!」

巧が何言ってるんだと言ってる内に、スマートレディはなにやら物騒な装置を用意する。それはまるで、改造人間の手術のような……。

「お、おい……? 『薬品の治験』だよな? 間違っても改造手術とかじゃないよなあ? ……なあ!」

「うふふ」

スマートレディは子供のような笑顔で巧を見る。たじろぐ巧をオルフエノク達が拘束、そのまま機械の台に縛り付けた。機械のドリルやらが稼動しだした。

「おいしいっ!? 止めろおおおおおっ!!」

「乾さん、痛みは一瞬だ」

「それなんか違っ……お前ら! 早く何とかしてく……助けてくれえええ!!!」

スマートレディの某怪盗のような台詞に突っ込もうとするが、その前に3人に助けを請う。だが、巧の懇願むなしく3人はただ見ているだけ、そこを動くことは無かった。

「すまない……俺にはどうすることも……」

「琢磨……俺達もあれの餌食になるんだよね……」

「ええ、目に焼き付けましょう、この光景を」

「こんなのつてあるかあああつ!!!? この裏切りも……あああああああああああつ!!!!」

そのまま巧は……意識を失った……。

「のはあああああああああつ!!!!」

巧はベッドから飛び起きる。今までの夢……ではなく、3年前の出来事なのだ。あの治験は実は注射一本ですむ物で、巧が失神した後でスマートレディが普通に注射を刺していた。3人が何であることをしたんだと突っ込むと、スマートレディは、

「なんとなくです」

と回答、3人はそのまま崩れ落ちるように倒れこんだという……。無論薬品は効果を現し、巧の肉体の崩壊は緩和された。一時の効果の為、数ヶ月に一度、薬品投与を定期的に続けている。が、あの時のせいで巧はそれが苦痛な物になってしまったのだという……。

「最悪だ……」

巧はうずくまってしまう。スマートレディ。表には出さぬものの、巧の恐怖する存在となっていたのであった……。

「呼びました?」

「え?」

巧の目の前には……スマートレディの姿が。その刹那巧は絶叫、啓太郎と真理は巧の部屋に入り込んできた。

「た、たっくん!? 何があったのっ!?!」

「巧……って、なんでスマートレディがいるのよ!? いつ連れ込んだの!」

「俺が知るかああああっ!! つーかどうやって入り込んだっ!」?

「窓から入りました。サンタクロースのような気分でした!」

「サンタは煙突から……じゃねえ! 堂々と不法侵入してくんなああああっ!!」

「たっくんそれ俺の台詞! この家俺んち!!」

啓太郎と真理の加入でその場はよりカオスに。巧も突っ込むところを間違いかけ、その突っ込みにさらに啓太郎が突っ込む。

「もう! 何がどうなってるのよー!!」

真理の悲痛な声が響く。

それからもう少しするまで、カオスな空気は続いたのだった……。

To Be Continued.

第3話（後書き）

まどマギ勢「「「出番が……orz」」」

巧「出番は気にするな！」

杏子「アンクかお前は！」

さやか「あんたが言うな！」

杏子「どーゆー意味だ！」

マミ（大体分かったわ『アンコ』つながりね）

巧「スマートレディのクラッシャーぶりの件について」

スマートレディ「♪」

作者「反応どうなるかなあ……今回はギャグの実験もかねてたからなあ……」

全員「「「なんで本編で実験する!?!」」」

さやか「なんで!?! あんた馬鹿じゃないの!?!」

作者「お前がゆーな」

さやか「どうせあたしは馬鹿ですよ！」

巧「で、あの組織はなんなんだよ」

作者「スマートブレインが組織だったから……いっそこっちにも組織立てちゃえと思ってやった。反省はしていない」

三原「しろよ」

作者「さて、次回は……どうしようかな」

海堂「考えてねーのかよ！」

まどか&さやか「「わたし（あたし）の出番あるよね?」」

作者「さあ? ただ、次回は巧達には動いてもらうよ！」

巧「『達』? まさか……」

琢磨「さて、次回は第4話、サブタイトルは未定です」

ほむら「本格的に決めてないのね……」

作者「どんな話かはすでに骨組みは考えてるよ。ただサブタイトルが思いつかないだけで」

啓太郎&真理 「「それじゃ、次回もお楽しみに！」」
作者「ほんと、スマートレディ動かしやすいわ。ただ、毎回名前打
つのめんどくさいからSLって略していいかなあ？」
巧「……『クラッシュヤーSL』……？ なにそれこわい」

第4話（前書き）

作者「今回はあまり詰め込んでないからちょっと短いよ」

巧「つーか第1話からじわじわと字数が減ってる気がするけどな」

マミ「まあ、そこは置いていきましよう」

啓太郎「前は過去編だったね。そしてスマートレディ（以下SL）の異常な存在感」

SL「別にいつもどろりです！」

真理「平常運転すぎるのよ！」

さやか「で、今回こそ出番ある……よね!？」

作者「さあ？」

まどか&さやか「……orz」

ほむら「私なんて、実質出番まだ……!」

さやか「ところで、タイトルの英文ってどう読むの？ Kで区切ってるけど」

作者「普通にTHE LAST K／NIGHT MISSION
って読むよ」

巧「そういうのって先に言うもんじゃねえのか……?」

マミ「まあいいわ。それでは第4話始まるわ!!」

作者「ちなみに前回のあらすじ」

・SL異常な存在感

・まどマジ組出番皆無

巧「こんなんでもいいのかよ!？」

第4話

「……はあ」

マミは通学路を歩いていた。あの後、体の調子はある程度戻ったが、まだだるい状態だった。それでもマミは登校していた。具合が悪くなれば早退すればいい、そう思いながら。もっとも、マミはまじめな性格なので早退という選択肢は最終手段をしているが。

「やあマミ。学校かい？」

マミはその方向を向く。キュウベえだ。

「ええ。学校を休むわけにはいかないわ。受験もあるしね」

「マミはまじめだね。まあ、だからこそ魔法少女を長くやっていたれるのかな」

マミはほめられたような気がし、頬を赤くして照れていた。

「じゃあねキュウベえ」

マミは駆け足で去っていく。キュウベえはそれを見送った後、足を進め始めた。

「ふう……じゃあ、僕も行こうとする……!？」

すると、キュウベえは突然立ち止まってしまふ。そして学校のある方向に顔を向けた。

「……この感じは……ありえない」

キュウベえはうれしそうに、反面驚いていた。

「わけがわからないよ……本来人間が持つはずのない『才能』が存在するなんて……」

そう言っ、キュウベえは学校へと歩き出した。

「少し、調べてみるかな……」

第4話【交わり往く物語】

あの後、空気が落ち着いたのは数時間経ってからだった……。時間がそこまでかかったのは、スマートレディが空気を何度もめちゃくちやにしていたせいなのだが……。

スマートレディ以外は荒い呼吸を整えていた。ちなみにスマートレディはお茶を飲みながら普通にくつろいでいたのだった……。

「落ち着きましたあ？」

「……人事みたいに言ってんじゃねえよ……」

呼吸を整えながら突っ込む。もはや巧の突っ込みキャラは確定か。……まあそんなのは置いといて、スマートレディは本題に入る。

「では、本題に入らせてもらいますね」

スマートレディはいつもの調子で口を開く。

「三原さんが例の少女と接触していたようです」

巧はこの言葉を聞き、スマートレディを見る。

「その結果、少女達は『魔法少女』、その敵を『魔女』と『使い魔』と呼んでいるようです」

「まほ……。なんつうか……。いまいち信じられねえな」

巧はため息をつく。

「でも、昨日俺を襲ったのは『魔女』、それは確かだよね……。じ

ゃあ、『使い魔』って？」

「『魔女』は呪いから生まれる存在で、『使い魔』はその魔女から生まれた、いわば子供です。使い魔は人を食らうことによって魔女に成長するみたいです」

「人を……!？」

真理は驚愕する。

「それと、魔女は『グリーンシード』と呼ばれる魔女のタマゴといふべき物を持っているようで、魔法少女はそれを集めているようです」

「ああ……これのことか」

そう言って巧はあの黒い『何か』を取り出す。そう、それこそ『グリーンシード』と呼ばれる物だったのだ。

「うわっ!？」　なんで巧がそんなの持って……ああ、昨日のあれね」
真理は驚くが、割とすぐに落ち着いた。

「それで、なんで魔法少女はその……グリーンシードを集めてるの？」

「そこなんですが……よほど知られたくないのか、そこだけは教えてもらえなかったようです」

啓太郎に、スマートレディが言う。珍しく落ち込んだ顔で。

「……まあいい。で、俺はどうすればいい」

巧はスマートレディに尋ねる。スマートレディは少し考え込んでいる。

「そうですね……では、『見滝原』に行ってもらいましょうか。あそこについても調べてもらいたいので」

「調べるって何をだよ」

「乾さんも分かっているはずですよ。『見滝原』という場所に心当たりがないのを。少なくとも我々は『見滝原』という場所をほとんど知らないですし、魔女同様突然現れたようなものなんですから」

その言葉を聞き、3人は不可思議な表情を浮かべる。

「それ……どういうこと？」

「まるで、それらが別の世界から突然来たって感じだな」

「いや……流石にそれはないと思うけど」

まともに受ける啓太郎、ファンタジーなたとえ話をする巧、それに突っ込む真理。

「ま、とりあえず行ってくればいんだろ？」

「はい、今日はあちらでの準備もあるので、明日出発してください」
「ああわかった」

巧は了承、スマートレディは帰っていった。

「たっくん……明日には出てっちゃうんだね」

啓太郎が残念そうに言う。

「大丈夫だって、なんかあったら連絡してやるからよ」

「そう言って長いこと連絡よこさなかったくせに」

真理に確信をつかれ、うっとたじろぐ巧。それを見て、啓太郎は笑っていた……。

「あ、そういえば朝食まだだったわね。すぐ作るから!」

はっと思い出し、真理はキッチンへ向かった。

「とりあえず、今日はクリーニング屋手伝ってやるよ。配達ぐらいなら出来る」

「ありがとうたっくん。じゃあ、今日はよろしくね」

巧達はそうして、朝を過ごしていたのであった…。

ちなみにこの後、配達中に啓太郎が「た、たっくん! オルフェノクが!」と毎度おなじみの呼び出しをしていたのは言うまでも無からう。

~~~~~

『風俗店勤務の女性のその日着ていた服や所有物が置かれ、行方不明になっている事件ですが――』

「ああ、昨日のあれかあ?」

電化店のテレビのニュースを見ている少女がいる。佐倉杏子だ。

昨日、女性を見殺しにしたにもかかわらず彼女は平然とそのニュースを見ていた。もちろんそれは昨日杏子が見ていたものだ。もつとも、彼女は既に使い魔を成長させて魔女にする為何人も人間を見殺しにしているのだ。今更一人見殺しにした所で彼女に罪悪感などが湧くことは無いのだ。

「証拠も残さず人間を殺す、か。魔女みたいな奴が出てきたもんだなあ……めんどくせえ」

そう言って、杏子は歩き出した。おそらく目的地はコンビニだろ

う。

「さあて、食料調達していきますか」  
彼女は金を持っていない。つまり彼女の食料調達とは万引き、『盗む』なのだ。

~~~~~

——夕方、見滝原……。

仲良さげな3人の少女達が歩いていた。彼女達はマミと同じ制服、見滝原中学の生徒だ。おそらく、ゲームセンターに行っていたのだろう。アミューズメント用の景品をいくつか持っていた。

「いんやー、今日も楽しかったなー」

青い短髪の少女が首の後ろで手を組みながら歩いていた。

「あはは、そうだね。『さやか』ちゃんダンスゲーム必死だったし」
ピンク色のツインテールの小柄な少女が笑いながら言う。

「まあ、その割には点数の方が……」

「『仁美』……それは言うなあああ！」

青髪の少女は涙目になって緑色の髪の長い少女に突っかかる。それを見てピンク色の髪の少女は苦笑していた……。

そして、そんな光景を高い所から見ている不思議な白い生き物が一匹、もちろんそれはキュウベえだ。

「『志筑仁美』……彼女は駄目か……。『美樹さやか』、彼女は悪くないが平均的……」

どこから調べたのか、青髪の少女、緑色の髪の少女の名前を言う。
「やっぱり、彼女には是非魔法少女になってほしいね」

「『かなめ鹿目まどか』……！」

次回、物語は本格的に動き出す。その歯車は歪んだまま……。

To Be Continued.

第4話（後書き）

まどか「やった！」

さやか「よっしゃ！ 出番ゲットだぜ！」

作者「はい、てなわけでいよいよ物語の開幕だ！」

巧「ちなみにこれ4時間程度で書き終えたぞ」

啓太郎「すごいね」

マミ「短いこともあるんでしょうけどね」

まどか「次回は……第1章クライマックスらしいけど……」

作者「そこは文字数と長さとの相談だね」

ほむら「まあ、そんなわけで次回は【夢の中で逢った、ような……】

！いよいよ私の参戦ね！」

さやか「あえて原作と一緒にか」

巧「つうわけで、次回も見ろよ！」

絶望^{やみ}を切り裂き、希望^{ひかり}をもたらせ！

第5話（前書き）

全員「「アクセス数PV10000、ユニーク20000突破！

ありがとうございます！」」

ほむら「ついに私の出番！」

まどか「よかったねほむらちゃん！」

さやか「これでまどマジ組全員登場！」

作者「上条は？」

さやか「あ」

巧「あいつもカウントはいつてんのか!？」

作者「うーん、今回で第1章終われなかったなあ」

マミ「ま、それは置いといて、第5話スタートよ！」

作者「今回はぶっちゃけアニメの第1話書いているようなもんだよなあ；」

巧「そんなこと言うな。悲しくなる」

第5話

少女は駆ける。チェス板のようなモノクロの世界を。階段を上り、長い廊下を走り、少女は息を切らせながらも足を進める。

そして、少女は非常口の光る標識を見つけ、その扉の前に立つ。

そして少女は、扉を開けた――

曇天、光の差さない闇。その景色は自身の住んでいた町であった。だが、その町にはかつての姿はない。全て、廃墟と化していた。瓦礫どころか、建物すらも浮いている。

そして、上空に浮かぶ巨大な『何か』。一見人間のような姿だが、どちらかといえば逆さまにしたてるてる坊主のようだ。

「何……あれ？ ……!？」

少女は何かを見つける。おそらく自分と同じ年だろう、長い黒髪の少女。彼女はたった一人、巨大な『何か』と戦っていた。瓦礫を蹴り、空を舞う。だが、『何か』は黒髪の少女を逃がさない。謎の光を発し、それを黒髪の少女に命中させる。彼女の体はボロボロ、それは明らかに劣勢だった。

「仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた」

目の前の激戦を見、ただ立ち尽くすしかなかった少女に、白い生き物が近づいてきた。少女は犬でも猫でも無い外見を見て驚くが、爆音を聞き再び戦いの場を見る。黒髪の少女は吹き飛ばされ、傾い

たビルに叩きつけられていたのだ。

「でも、彼女も覚悟の上だろう」

「そんな……あんまりだよ！　こんなものってないよ!!」

少女は涙目になり白い生き物に叫ぶ。そして同時に、絶望を感じた。どうしようもない滅びに。

「諦めたらそれまでだ。でも、君なら運命を変えられる」

えっ、と少女は思わず声を上げる。そして同時に、その心に希望が灯り始めていた。

「避けようのない滅びも、嘆きも、全て君が覆せばいい。そのため
の力が、君には備わっているのだから」

「……本当なの？」

白い生き物に、少女は問う。その言葉には、わずかながらの希望があった。そして、少女は続ける。

「私なんかでも、本当に何か出来るの？　こんな結末も変えられる
の？」

遠くで黒髪の少女が叫ぶ。だが、その声は轟音によって、少女の
耳に届くことは無かった。そして、白い生き物は少女に答える。

「もちろんさ。だから……」

「僕と契約して、魔法少女になってよ！」

《P i P i P i P i P i P i》

「っ！」

目覚まし時計の音で少女は目覚め、体を起こす。朝日が眩しい。そして、少女は眩いた。

「はぁ……夢オチい？」

少女は安心する反面、どこか残念そうだった。

第5話【夢の中で逢った、ような……】

少女の名は『鹿目まどか^{かなめ}』。どこにでもいそうなごく普通の女の子だ。優しい父『知久^{ともひさ}』、頼もしい母『詢子^{じゅんこ}』、かわいらしい弟『タツヤ』、幸せそうな4人家族である。

「パパ、おはよう」

「おはようまどか」

父知久は主夫であり、知久はベランダで栽培しているミニトマトを取っていた。

「あ、タツヤと一緒にママを起こしてきてくれないか？」

「わかったー」

まどかは母親を起こしに寝室へと向かった。

「ママーおーきーてー！」

こちらは弟のタツヤ。元気な3歳児である。まどかはなかなか起

きない母を起こすため、カーテンを開き、布団を一気にはがした。

「おつきろー！」

「でああああああっ！！……あれ？」

母詢子は太陽光を浴びた吸血鬼のような叫び声を上げ、起床した。

まどかと詢子は洗面台で歯を磨いていた。

「……最近どーよ」

詢子は歯を磨きながら言う。

「仁美ちゃんまたラブレターもらったんだよ。今月に入ってもう2通目」

まどかがうらやましそうに言う。

「直接告れないような男は駄目だ。そーいや、和子の方はどうなってるんだ？ 別れたか？」

「確か3ヶ月目。記録更新だよ」

まどかがそう言うのと、詢子は無愛想に言った。

「あゝ多分駄目だわ。大抵の男はそんぐらいしたらボロ出すから」
世間ばなしを終えるころには詢子は既に化粧を終え、まどかは洗面して濡れた顔をタオルで拭いていた。そして食卓へ向かう。

「じゃ、行ってくる」

一家の大黒柱である詢子は朝食を食べ終え、出勤する。詢子と知久の仲は良好であり、今でも出勤の際にはキスをするほどだ。

「ほら、まどかもそろそろ学校だろ」

「あ、うん！」

まどかは時計を見て、時間があまりないと知ると急いで朝食を食べる。

「いってきまーす！」

まどかは朝食を食べ終えた後、家を出て学校へ向かう。こんな普通の日常が「運命」によって崩れ去ろうことなど知らずに……。

「さやかちゃん！ 仁美ちゃん！ おはよう！」

まどかは遠くにいた2人の少女見つけ駆け寄る。

「おーっすまどか！」

「まどかさんおはようございます」

まどかに最初に挨拶したのは『美樹さやか』。青い短髪の、活発そうな少女だ。もう一人は『志筑仁美』。お金持ちで優雅な雰囲気を出している。

彼女達は交友関係にあり、よく一緒に登校したり遊んだりしているのだ。

「ん？ まどかりボン変えた？」

さやかがまどかの赤いリボンに気づく。朝、母である詢子に進められたものだ。まどかは派手すぎると言っていたのだが、詢子曰く「コレぐらいがちょうどいい」らしい。

「さては！ 仁美に対抗しようとしてるな！？」

「ち、違うよ！ これは……」

まどかは否定しようとするが、さやかは聞いてない。

「くうー！ 許さんぞまどか！ そんな娘は、こうだ！」

「ちよつとさやかちゃ……キャハハハくすぐりたいよお！」

さやかはまどかをくすぐり、まどかは大きな口を開け笑っていた。そんな光景を見て仁美はクスクスと笑っていた。それはとてもほほえましい光景だった。

「まどかはあたしの嫁になるのだー！」

「キャハハ……仁美ちゃん助けてえー」

「あらあら」

嫁発言をするさやかから離れたまどかは、まるで母親の背に隠れるように仁美の背に隠れる。それは少女達のよくある光景だ。その後、仁美によってこの悪ふざけは止められ、3人は再び歩き出した。その後ろに『何か』がいることに気づかず。

「……鹿目まどか……」

そんなこんなで学校。現在ショートホームルーム中だ。

「今日はみなさんに大事なお話があります。心して聞くように」
まどか達のクラスの担任、『早乙女和子^{さおとめかずこ}』だ。

「目玉焼きとは固焼きですか!? それとも半熟ですか!? はい、中沢君!」

突然「目玉焼き」の話を出し、男子生徒に指示棒を向ける担任教師、早乙女和子。生徒の何人かはその理由に感づく。

「え、えっと。ど、どっちでもいいかと……」

「その通り! どっちでもよろしい!」

男子生徒、中沢はどっちつかずの意見を述べ、早乙女和子はそれを正解と言う。

「たかが卵の焼き加減なんかで、女の魅力が決まると思ったら大間違いです!」

すると、早乙女和子は指示棒をへし折った。ベキツツという音が教室に響く。

「女子のみなさんは、くれぐれも半熟じゃなきゃ食べられないとか抜かす男とは交際しないように! そして、男子のみなさんは、絶対に卵の焼き加減にケチをつけるような大人にならないこと!」

「あっちゃー。また駄目だったかあ……」

「だね……。記録更新してたのに……」

さやかとまどかがコソコソと話す。特にまどかは朝に詢子とその話をしてただけにタイミングがよすぎると苦笑していた。担任早乙女和子、男性との仲が中々続かないのが悩みであり、付き合ったとしてもすぐに別れてしまうのだ。和子本人は美人なのだから、もったいない。

「あ、あとそれから、今日はみなさんに転校生を紹介します」

「そっちが先だろ……」

さやかが呟く。転校生より愚痴を優先されたら、転校生もやるせないだろうなあ、そんなことを思いながら。

「じゃ、曉美さん。いらっしやい」

そういうと、一人の少女が入ってきた。その瞬間、クラスがざわつく。

「うわぁ……美少女」

さやかがそう呟くように、その容姿は美しいという言葉がよく似合う。大半の男子は頬を赤く染め見とれてしまい、女子は嫉妬する者、いーなあとうらやむ者、男子同様見とれたり。そんな中、まどか一人が驚いたような顔をして呟いていた。

「嘘……あの娘、夢に出てきた……!？」

そう。まどかの夢に出てきた黒髪の少女と、瓜二つだったのだ。

「^{あけみ}暁美ほむらです」

黒髪の少女ほむらは、最小限の自己紹介をして頭を下げた後、まどかをじっと見つめていた。

「え……?」

まどかはほむらの視線に困惑していた……。

「前はどんな学校にいたの?」

「髪綺麗だね。シャンプー何使ってるの?」

転校生が来たときのお約束、質問攻めだ。ほむらは質問に淡々と答えている。

「いやーまさかあんなレベルの高い転校生が来るなんてねー」

さやかはクラスメイトに囲まれているほむらを見ながら言う。

「ところでさ、さっきまどかのこと睨んでなかった?」

「うん……勘違いかもしれないけど」

そんな会話をしていると、ほむらが近づいてきた。頭を抱えていた。

「鹿目さん、確かあなたが保健委員だったわね。気分が悪くなってしまったから保健室に連れて行って欲しいのだけれど」

「あ……うん」

まどかは席を立ち、ほむらと共に保健室へ向かったのだった。

「あ、あの、どうして私が保健委員だって……」

「早乙女先生に聞いたの」

そっけない答え。

「そ、そうなんだ」

まどかは納得する。

「保健室、こっちよね」

「う、うん」

本来ならばまどかが先導しているはずだ。だが、先導しているのはほむらだった。これではまるで、ほむらがまどかを保健室に連れて行っているようだった。

（これ、逆だよね……）

まどかはそんなことを思っていた。そのまま、2人は沈黙する。まどかは雰囲気を変えようとほむらに話しかけた。

「ねえ、暁美さ……」

「ほむらでいいわ」

暁美さんと呼ぼうとすると、ほむらが即座に言う。

「あ、うん。あの……ほむらちゃん」

1テンポ遅れてほむらが返事をする。

「なにかしら」

「ほむらちゃんの名前、変わってるなって……あ！別に変な意味じゃないよ！珍しいなって思ってた……なんか、ほら！燃え上がれ……って感じで！」

ほむらの表情が一瞬変わる。どこか、悲しい表情だ。だが、その表情はまどかに背を向けていた為、まどかが見ることはなかった。すると、ほむらの表情が陰しくなる。

「……鹿目まどか」

「は、はいい！」

ほむらが突然振り向いたので怒らせてしまったのかと思い、思わず声を上げてしまった。そして、ほむらは問う。

「……あなたは、自分の人生を尊いと思う？ 家族や友達を、大切にしている？」

~~~~~

——東京、現在10時。

「ここか」

巧はスマートレディに呼び出され、小さな公園に来ていた。朝方ということもあって、人はいなかった。今更だが、スマートレディの青い制服は浮いて見える。

「あ、乾さん。来ましたか。こちら見滝原までの地図と、こちらで準備したホテルの場所です」

「ああ」

スマートレディから地図とメモを受け取った巧は、オートバジンにまたがりヘルメットをかぶる。

「ではお願いしま〜す」

巧は出発。スマートレディは遠くに行くにつれ小さくなっていく巧に手を振っていた。

「たっくん……行っちゃったね」

啓太郎は仕事をしながら呟く。

「まあ、すぐに帰ってくるでしょ？」

真理の言葉にうなづく啓太郎。だが、心の中では、どこか不安を感じていた。

（なんだろう……いやな予感がする）

~~~~~

――戻って見滝原中学校。現在、体育の時間。走り高飛びの授業だ。

ほむらは走り、高飛びを超える為、高く跳ぶ。

「……ハッ！」

ほむらは優雅に空を舞い、飛び越える。その姿に、誰もが見入っていた。

「これって……県内記録？」

体育教師が驚く。ほむらが県内記録の上回ったのだ。

「マジですか……。さっきの授業といい、相当な優等生ですなあ転校生は」

「本当ですわね……。しかも県内記録を更新するなんて」

さやかと仁美も驚きを隠せない。ほむらは心臓病を患っており、そのため入院していたのだが、その姿を見るとどうも信じられない。

「あいつ本当に病み上がり？　ねえまどか……まどか？」

まどかは黙ったままうつむいていた。まるで考え事をしているように。

「まどかさん？」

「まどかぁー？　具合でも悪いの？」

「えっ！？　あ、いや……なんでもないよ」

まどかは慌ててごまかし、さやかはふうんと言いながらまたほむらを見ていた。そしてまどかは、先ほどのことを思い出していた……。

~~~~~

「……あなたは、自分の人生を尊いと思う？　家族や友達を、大切にしている？」

その言葉にまどかは困惑していたが、まどかはおどおどしながらも

ほむらに答える。

「えっ、と。私は……大切、だよ。家族も、友達の皆も。皆みんな大好きで、とっても大事な人達だよ」

「本当に？」

「本当だよ。嘘なわけないよ！」

頭の中でうまくせり出来ていなかったせいか、ほむらに本当かと言われ、つい強く言ってしまう。まどかはあわててごめんねと言うが、ほむらはその表情を変えない。まるで、人形のように。

「もしそれが本当なら、今とは違う自分になるうだなんて、絶対に思わないことね。……さもなければ、全てを失うことになる」

まどかには、ほむらが何と言っているのか理解できなかった。

「あなたは、鹿目まどかのままでいい。今までも、そしてこれからも」

そう言っ<sup>て</sup>ほむらは歩き出した。まどかがほむらを追おうとするが、

「鹿目さんありがとう。もう一人で行けるわ」

そう言っ<sup>て</sup>、ほむらはその場を立ち去ってしまったのだった。

~~~~~

意識が現在へと戻り、まどかはほむらを見て呟く。

「ほむらちゃん……ほむらちゃんは一切……？」

To Be Continued.

第5話（後書き）

巧「今回こっちサイドの出番少なかったけど、まあしょうがないか」
まどか「……大人の対応だ!」

作者「次回こそクライマックス! もし出来たら外伝も書こうと思
ってる」

さやか「で、次回遂に両者接触!」?

マミ「とりあえず、確定していることはひとつ」
全員「「?」」「」

マミ「真理さんと啓太郎さんは出番終わりね」

真理& a m p ; 啓太郎「or z」

巧「……おいそこの恵方巻き。こいつの頭食いちぎれ」

まどか& a m p ; さやか「やめてえええ!!」

杏子「今回は第6話【歪んだ運命の出会い】だ!」

S L 「次回も見てくださいね」

恵方巻き「じゅるり」

マミ「ここが私の死に場所か……」

さやか「ここで死なないでください! いや本編で死なれても困
るんですけどね!」

——戦わなければ、生き残れない!

杏子「それ龍騎だろ!」

第6話（前書き）

作者「ついに第1章閉幕！」

巧「今回はどうなるんだろうな」

マミ「原作通り、ピンチに私が駆けつけ！」

まどか「私達の見本になって！」

SL「頭から食べられて死んじゃうんですくえーん」

マミ「orz」

さやか「いや私達に魔法少女がなんたるかを教えてくれるんですよ？」

作者「そういう意味では間違っていないけどね」

巧「お前は黙っとけ！」

ほむら「というわけで第6話始まるわ！」

第6話

「すっげえ……ここか、見滝原ってのは」

只午後3時。巧、見滝原に到着。到着と同時に町の進展ぶりに驚かされる。東京にはない、近未来的な町並みだ。

「うーん……とっととホテルに行くのもなんだかなあ……とりあえず、偵察がてら町を回ってみるか」

そう言って、巧はオートバジンを再び走らせた。

第6話【歪んだ運命の出会い】

「はあ、今日も終わったわね」

学校が終わり、マミはいつものパトロールを始まる。マミの日課であり、今の生きがいである。ふと見ると仲のいい少女達が歩いていた。笑いながら、楽しい下校。

「私も、本当ならああやって……いえ、駄目よバミ。私はもう、明るい道は歩けないのよ……」

『魔法少女』、それは人間に災いをもたらす魔女を倒すための存在、魔女退治という生死をかけた命がけの戦いにその身を投じる者だ。マミはその運命を受け入れたその時から、交友関係というものを断ち切っていた。魔法少女として生きる為の覚悟の証。そして、誰も巻き込まない為に人々から距離を置いた結果でもある。自分の代わりに人々が幸せであってほしい。それが彼女の魔法少女としての理念だ。

そんな彼女でも、本来ならごく普通の中学3年生。時折寂しさがこみ上げてくることもあった。だが、それでもマミは誰とも交友関係を持つことはなかった。自分と親しくなればいずれ戦いに巻き込んでしまう、そう思っていたからだ。マミは少女達を見て呟いた。

「あなた達は……幸せになってね」

その少女達の中に、運命によって出会う者がいることなど知らず……。

——それから少しして、とあるデパートのファストフード店。

「いいよなあ……転校生は……勉強も出来て、転校初日であんなにモテて。それに比べてあたしなんて……」

「さやかちゃん……そんな影の住人みたいなこと言っちゃ駄目だよ……」

学校が終わり、まどか、さやか、仁美はデパートのファストフード店でおしゃべりとしていた。さやかはやさぐれ、まどかは慰めながらも某地獄兄弟のような発言に突っ込む。

「そういえばまどか。転校生と保健室行ってからなんかおかしいような気がしたんだけど、なんかあった？」

「うん、あのね……」

まどかは廊下でのやり取りを話した。

「才色兼備に文武両道、おまけにスポーツ万能でミステリアス。とどめに電波少女ってただけ設定盛ってんだあの転校生は！」

さやかはうらやましそうに、反面呆れるように言っていた。

「それでね。私、ほむらちゃんと前に会ったような気がするんだ……」

二人がどこ？ と聞くと、まどかは頬を赤らめながら言った。

「その、夢の中で逢った、ような……」

それを聞いた瞬間、さやかが大笑いした。

「あっはっは！ まどかも転校生の電波受信しちゃったあ？」

「ひどいよおさやかちゃん……」

「でも、夢は深層心理の現れと聞きますわ。もしかしたら、暁美さんどこかでお会いしているのかもしれないわね」

さやかに笑われ、顔を赤くしてうつむくまどかに、仁美がフオロ―した。

「ああそうか。もしかしたら、前世で会ってたのかもよ？　そう、2人はかつて愛し合った運命の……」

さやかは目を輝かせながら妄想していた。そっちの方がよほど電波だと思うが。すると、仁美が腕時計を見ながら寂しそうな顔をしていた。

「あら、もうこんな時間。お稽古がありますのでお先に失礼しますわ」

そう言って仁美は席を立つ。さやかもそれに気づきいつものさやかに戻った。

「今日は生け花？　日本舞踊？」

さやかが聞く。

「お茶のお稽古ですわ。もう受験が近いというのに、いつまでやらされるのやら」

仁美はくすりと笑う。

「お嬢様は大変だねえ。あたしは小市民に生まれて正解だったよ」

「仁美ちゃんまた明日」

「ええ。まどかさん、さやかさん、ごきげんよう」

仁美は帰っていった。気のせいかな、その背は少し寂しげだった……。

「じゃあ、私達も帰ろっか」

「そうだね……あ、CDショップ寄ってもいい？」

「また上条くんの為に？　さやかちゃんは健気で献身的だね！」

「ちよっ、まどか声おっきい……」

周りの視線が自分に向けられ、さやかの顔は急激に赤くなってい

た。

「……それ、仕返し？」

「どうだろうね、エヘヘ」

頬を赤らめているさやかに、まどかは意地悪そうに笑っていた。

~~~~~

——デパート内別所。

町をあらかた回り終えた巧は、デパートの中にいた。

「ふう……小腹空いたし、どこかで食うかな……」

突然、巧は立ち止まる。

「ん？ 銃声か！？」

謎の音を感じた巧は、かすかな音を頼りにデパート内を搜索、そして、音のする場所を見つけた。工事中と書かれさえぎられたフロアだった。

「工事中？ 工事の音じゃないよな……。それに、このやな感じ、前にも……」

得体の知れない感覚を覚えた巧は、工事中のフロアへと足を運んだ。

~~~~~

——どこか。

「……」

無言で銃を構え、走る謎の少女。追われているのは、あの白い生き物だ。

「はぁ……はぁ……！」

「……助けてっ……!」

~~~~~

——CDショップ。

まどかとさやかはCDショップで音楽を聴いていた。

「……」

音楽を夢中で聴いていたまどかとさやか。だが、突然音楽とは違う音声が聞こえてきた。

(助けて……)

「えっ？」

まどかははっとする。空耳かと思っていたが、再び同じ声が聞こえてくる。

(助けて……助けてまどか!)

さやかや周りには聞こえてはいないようで、誰一人その声には反応しない。だが、空耳ではないのは確かだった。その声は、まどかに助けを求めているのだから。

「ん？　ちよつと、まどか!？」

突然店を飛び出したまどかに気づいたさやかもヘッドホンをはずしまどかを追いかけた。

「ここ……!？」

まどかは声のする方向へと歩いていると、そこは工事場中である場所であった。恐怖心はあったものの、助けを求めている声をほおって置けず、まどかは工事場のフロアに足を踏み入れる。

~~~~~

「確か、この辺りから……」

ここに足を踏み入れてからあの声は途絶えてしまった。しかし、まどかには分かる。声の主は、今も助けを求めていることを。

すると、突然上からガタガタを音が聞こえ、天板が外れる。すると、何かがどさっと音を立てて落ちてきた。傷だらけの、白い生き物だ。

「ハア……ハア……」

白い生き物はかなり弱っていた。

「もしかしてあなたが……酷い怪我！ 早く手当してあげないと！」

「その必要はないわ」

向こうから誰かがやってくる。だが、まどかには誰なのかすぐにわかった。黒髪の少女、暁美ほむらだったのだ。しかも、夢で見た時と同じ、紫色のセーラー服のような格好、左腕に灰色の盾を装着している。

「まさか……ほむらちゃんがやったの!？」

「私がやろうと誰がやろうと関係ないわ」

「そんな……酷いよ!!」

「鹿目まどか、忠告するわ。そいつから離れなさい」

ほむらは無表情で告げる。だが、まどかはなみだ目になりながらも白い生き物を抱きしめ、それを拒む。

「駄目だよ……この子が死んじゃう！ それにこの子、私に助けを……」

「……そう。仕方ないけれど……」

そう言って、ほむらはまどかに近づく。ジャキツツと音を立て、銃口を向けながら。無表情がさらに恐怖心を掻き立て、ほむらが一歩、また一歩とこちらに近づくと共に、まどかの心には恐怖が湧き

出てくる。動きたくとも、動けない。このまま、この子を奪われちゃうのかな……？ まどかがそう思ったその時、白いけむりがほむらを包み込んだ。

「まどか！ こっち！」

そこにいたのは、消火器を持ったさやかだった。まどかはようやく動けるようになり、まどかは白い生き物を抱いたままさやかと一緒にその場を逃げる。その間さやかは空になった消火器をほむらに投げる。それは盾で防がれたが。

「ゲホッ……美樹さやか……！」

ほむらは表情を歪めて齒軋りする。

ほむらがまどか達の後を追おうとする。が、周りが突然歪みだした。

「くっ！ こんなときに！」

それは紛れもなく、魔女の結界であった。

~~~~~

「！ これはっ！」

巧もまた、結界が張られているのに気づく。もっとも、巧は既に魔女と戦闘していた為驚くことはない。おそらく巧は魔女や使い魔とも戦えるだろう。

ただ……『ファイズギア』を持っていればの話だが。

「くっそ〜！ こんなことならアタッシュケースも持ってくんだっ  
た！」

なんと、巧はファイズギアを持ち歩いていなかったのだ。現在ファイズギアの入っているケースは駐車場に置いてきたオートバジンに乗せていた。無論、盗難対策はしてあるが。

「とりあえず、早く脱出しねえと……ってあれは!？」

——時間を少し巻き戻して……。

「何なんだよあの転校生! 今度はコスプレで通り魔っての!？  
てかまどか、その人形みたいな何!？」

さやかが走りながらまどかに問いたです。

「わからない……でも、この子が助けを……!」

「あーもう! なんなんだこのアニメな展開はあ!」

話しながら逃げていると、突然周りの景色は歪みだした。

「あ、あれ? 非常口は?」

「景色が変わってく……!？」

見る見るうちに景色が一変。奇妙な空間へと変わっていく。

「え? 何これ!？ ここどこ!？」

綿のような何かが現れた。カイゼル髭を生やした、不気味な怪物。

『クフフッ』

「ま、まどか……。これって夢だよね? 夢なら早く起きてよお!  
!」

「さやかちゃん……怖いよお……」

まどかとさやかはそのまま座り込んでしまい、綿もどきにあつと  
いう間に囲まれてしまった。

『クヒヒヒ』

綿もどきが不気味に笑い、襲い掛かってきた。まどかとさやかは、  
涙をこぼしながら叫ぶ。

「「いやあああああああつ!!」」

その時だった。誰がこちらに走ってきたのだ。それはもちろん……  
…、

「おりゃあああ!!」

乾巧であった。巧はとび蹴りを綿もどきに食らわせ、綿もどきは動きを止めた。蹴られた綿もどきは吹っ飛ばされ、壁に激突していた。

「ふえ？」

「あんた……一体」

「俺は乾……っと、その前に逃げるぞ！ 早く立……」

巧が立てと言おうとした瞬間、綿もどきの突進を食らい派手に吹っ飛び、積み上げられた箱にぶつかってしまった。

「ぐはあ！」

「乾さん！」

まどかときやかが駆け寄ろうとするが、恐怖が肉体を支配し動くことが出来なかった。しかし、ガララと音を立てて、巧が立ち上がる。

「おもしれえじゃねえか……」

巧は落ちていた鉄パイプを広い、綿もどきに立ち向かう。巧は鉄パイプを振り回し、綿もどきを叩きつける。しかし、見た目が綿なだけにやわらかいようで、ダメージは少なかった。

「くそっ！ ベルトさえあれば……」

「乾さん後ろ！ 危ないっ！」

まどかの声に反応し後ろを振り向くが、綿もどきは巧の頭を食らおうとその口を開けていた。このまま巧が食い殺される、誰もがそう思った矢先だった。その綿もどきが、光弾と共に吹き飛んだのだ。

「危なかったわね」

今度はまどか達と同じ制服の黄色い髪の少女が現れた。それはもちろん、巴ミミだった。

「もう大丈夫よ。ありがとう、キュウベエを助けてくれて。その子



は私の大切なお友達なの」

「あ、ありがとうございます……。あの、あなたは……」

「そんなことより……来るぞ！」

いつの間にか巧がまどか達の側に居り、巧が綿もどきがこちらに来るのを知らせる。しかし、マミは臆せずに出た。出ていった。

「悪いけど、自己紹介の前に一仕事させてもらってもいいかしらっ！」

マミはソウルジェムを取り出し、それを掲げた。

「お前、まさ……うおっ!？」

巧が何かを言いかけた瞬間、黄色のまばゆい光がマミを包み込む。そして、マミの姿が変わっていく。白い服、胸元の黄色いリボン、こげ茶のコルセット、茶色のミニスカート。そしてどこかの国の人被っているような帽子。

「姿が変わった!？」

さやかが驚く。そして、巧は心の中で呟いていた。

(まさか……あれが『魔法少女』!?)

「行くわよ!」

マミは白いマスカット銃を召喚、それを綿もどき……もとい使い魔に向けて発砲する。撃っては持ち替え、撃っては持ち替えの繰り返し、使い魔はあっという間にその数を減らす。

「すごっ……」

「かっこいい……」

さやかはその戦いに圧倒されて、まどかはマミの姿に魅了されていた。先ほどの恐怖心など、もうどこにも無かった。巧は黙ったまま、その戦いを見ていた。おそらく長年戦っているのだろう。戦いに慣れている……いや、慣れすぎているというのが巧の思考だろう。

そしてマミは飛び上がり、大量のマスカット銃を召喚した。

「これで最後よ!」

マミは遠隔操作で大量の銃を一斉発砲。使い魔達は文字通り蜂の

巢、全滅した。マミが地に降り立つと同時に、歪んだ空間が元に戻っていく。そして、マミは元の姿に戻る。

「ふう、あなた達大丈夫かしら」

「あ、あの……」

「ああ、私は巴マミ、あなた達と同じ見滝原中学の三年よ。あなた達は？」

「私、2年鹿目まどかです！　それで、こっちは友達の」

「同じく2年、美樹さやかです！　よろしく、巴先輩！」

「マミでいいわ。それで、あなたは？」

「俺は乾巧……まあ色々あってここにいる」

巧は自分の名前だけを教え、あまり詳しいことは言わなかった。言えないというのが正しい答えだが。

「じゃあ自己紹介が終わったところで……。そろそろ出てきたらどうかしら？」

「「！？」」

マミが後ろを振り向き、3人もマミの後ろを見る。そこには、暁美ほむらの姿があった。

「ほむらちゃん……」

「まさかあいつも……！？」

「転校生……っ！」

まどかは驚き、巧は彼女も魔法少女かと思い、さやかは歯軋りをしている。無論、巧のそれは当たっているようだが。

「あなた、学校じゃ結構有名になってたわよ、暁美ほむらさん。魔女なら逃げたわ。しとめたいならすぐに追いなさい？」

「別にいいわ。私が用があるのは……」

「飲み込みが悪いのね……見逃してあげるって言ってるの」

マミはほむらがキュウベえを傷つけたことを察知していた。そして今、眉間にしわを寄せたマミがほむらに対して送っているのは、明らかな、殺気に近い敵意だった。まどか達は後ろから見ていたため、その表情も、敵意も感じていなかったが、巧のみがそれを感じ

していた。

ほむらは振り向き、表情を変える。無論それは誰からも見えることは無かったが。そして、ほむらはその場を去る。ただ一人、巧は何かを察知していたのか、表情は、とても複雑なものになっていた。

「さ、キュウベえの傷を治してあげなきゃ。鹿目さん、キュウベえを横にしてくれないかしら」

「は、はい」

まどかはゆつくりとキュウベえをおろし、横たわらせた。

「はあ……」

マミ横たわったキュウベえに両手をかざす。すると両手が黄色に光り、キュウベえの傷が癒えていく。そして光が消えると、キュウベえの傷は完治、4足で立ち上がった。

「ありがとうマミ。助かったよ！」

「「うおおっ!?! 喋ったあ!?!」」

さやかと巧が驚いた。

「キュウベえ、お礼なら鹿目さん達に言って。彼女達が助けてくれたのよ」

「わかったよマミ。鹿目まどか、美樹さやか、乾巧、皆ありがとう!」

「別にいいよお礼なんて……」

「あたしほとんど何もやってないしね」

「俺にいたってはよく分からん」

3人とも異なる反応をする。

「それでね、まどか、さやか! 実は、今日はお願いがあって来たんだ!」

「「お願い?」」

まどかとさやかはきょとんとしていた。そして、キュウベえは、運命の言葉を告げる。

「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ！」

それは希望の光か。または絶望の闇か……。捻れた齒車<sup>うんめい</sup>は、ここから幕を開けた……。

Chapter 1 ends.  
Followed by Chapter 2.

---

## 【第2章予告】

Open your eyes for the next 5  
55☆MAGIKA!

「魔法少女体験コースってどこね」

「紅い……閃光」

「俺は元アルバイトさ。クリーニング屋のな」

「誰かの為に、願いを使っちゃ駄目なのかな……」

「止めなさい！ 巴マミ！」

「私、もう何も怖くない……！」

第2章【孤独との葛藤、魔法少女体験コース編】

「「マミさああああああん!!」」

「仇は討つぜ……マミ」

絶望<sup>やみ</sup>を切り裂き、希望<sup>ひかり</sup>をもたらせ！

To Be Continued.

## 第6話（後書き）

巧「俺……かつこわる……orz」

マミ「まあまあ……」

作者「さて第2章ですが、作者の都合で更新遅いと思います」

まどか「9月のはじめには速度が戻ると思います。皆それまでまっ  
ててね！」

さやか「次回、第7話タイトル未定！多分魔法少女が何かをマミさ  
んが教えてくれる回！」

マミ「……というか、次章予告あきらかに私がやばいんだけど……  
助かるのよねえ！？」

作者「……」

マミ「……もう、死ぬしかないじゃない！」

全員「「やめろおおおおおっ！！」「」」

——戦っても生き残れない！

杏子「不吉なことゆうなあああ！！」

巧（俺とこいつが突っ込み役になってる件について）

## 外伝【幻想（ゆめ）】

それは、もうひとつの幻想……。

巨大な『何か』がそこにいた。逆さまのてるてる坊主のような巨大な『何か』。それを泣きながら見つめる少女がいた。黒髪の魔法少女、暁美ほむらだった。

「どうして……どうしてこうなるの!？」

彼女の傍らには冷たくなった大切な人が横たわっている。

「『――』の力でも倒せないなんて……」

ほむらは、その人の顔を見る。そして、盾を可動させようとした、その時だった。紅い光が、『何か』に向かっていくのを……。

「紅い……閃光……」

それは、姿を変えたかと思えば、突如姿を消し、現れると今度はその全身を紅く染め、なにやら巨大な武器で立ち向かう……。

「何……なんなのこれは……?」

そして、暁美ほむらは目覚める。

「……また駄目だった……」

ここは病室。ほむらは今日退院し、数日後に復学する予定だ。ほむらは自身のソウルジェムを取り出す。すると、ほむらの目が紫色に光る。ほむらは近眼であり、魔法で視力を矯正したのだ。

「今度こそ……」

そう言って、暁美ほむらは病室を出た。

「何が、紅い閃光よ……幻想<sup>ゆめ</sup>なんて、もういない。『――』を救えるのは、私だけ……邪魔をするものは、全て消す……！」  
たとえば、それが『――』の大切なものだとしても……。

そして、ほむらは見る事となる。数々のイレギュラー、そして、紅き閃光との出会いを……。

それは、もう少し後の話……。

「私は何度でも、繰り返す――」

（F i n）



## 外伝【幻想（ゆめ）】（後書き）

はい。というわけでかなり短かったですが、若干ほむら視点でやりました。

ほむらは話の展開上まだくわしく書けませんし； てか確実に蛇足でしたね；

……まあ、次回から第2章開幕です。皆様、お楽しみください！

### 追記

感想受付を無制限にしました！

## 第7話（前書き）

啓太郎「たたたたつくん！ ファイマギのユニーク数が4000を越えたよ！」

巧「それは本当か！？」

マミ「PVも20000超えたし、これからが楽しみね」

さやか「ま、そんなわけでファイマギついに連載再開だあ！！」

作者「というわけで前回のあらすじ！」

・まどマギサイドと巧接触！

・巧かっこわる！

・マミさんマジ素敵

・ほむら敵対？

・まどかとさやか、キュウベえに勧誘される！

巧「俺マジ不憫」

出番なし「「こっちに比べたら優遇されてるよ！」」

杏子「今回からファイマギ第2章だ！ 派手に行くぜ！」

さやか「あ……アंकウウウ！！」↑オーズ最終回見た

杏子「誰がアंकだ」

作者「感動の最終回でしたね」

## 第7話

「はあっ！」

黄色い少女、マミが舞う。白い銃が怪物を射抜く。その優雅な姿にまどかは惹きつけられていた。恐怖などはとうに消えていた。

「ふう。大丈夫だったかしら？」

戦いが終わり、マミが地に舞い降りる。自分に向けられた笑みに、まどかの心は打ち抜かれ……？

「ふえ？」

小鳥のさえずりが聞こえる。朝日が眩しい。

「はあ……また変な夢……」

まどかはため息をつく。しかし、その目の前に……。

「やあ、おはようまどか！」

昨日助けた、キュウベえがいた。

「……夢じゃなかった……」

## 第7話【運命の始まった日】

「昨日は帰りが遅かったんだってな」

「うん。先輩も家にお呼ばれしちゃって……」

「まあ、門限とかうるさいことは言わないけどさ。晩メシの前には一本入れなよ」

まどかはいつものように母、詢子と歯を磨きながらの話をしていった。その横で気持ちよさそうにお湯に浸かっているキュウベえがいる。が、詢子は気づいていない。いや、見えていないのだ……。

キュウベえは一部の人間しか認識できないらしく、まどかはその一部であった。まどかは、昨日の出来事を思い出す……。

~~~~~

その後、まどか達はマミの案内でマミの家に向かっていた。魔法少女について話すつもりらしい。そこで、巧も同行していたのだった。巧はオートバジンを押しながら歩いていた。

「それにしても、まさか男の人にもキュウベえが見てるなんて……初めてだわ」

「それは僕も同じだよマミ。例外以上の例外だ」

マミとキュウベえが話していた。それを聞いて巧は疑問を浮かべる。

「お前は男には見えないのか？」

「正確には、素質のある少女にしか見えないんだよ。もちろん、例外もあるんだけどね」

巧はふうんと、まどかの方を見る。

(……なんだ？ どっかであったことあるような……)

「ちょっと、何まどか見つめてんだよお。はっ！ まさか、そういう性癖^{やつ}!？」

「そんな趣味はない」

さやかはロリコン疑惑を一蹴する巧。それを見て、まどかはくすりと笑っていた。

「あの、巧さん。さっきはありがとうございました！ もしあの時助けてくれなかったら今頃……」

「まあ、あんまかつこよくはなかったけどねえ」

「悪かったな。かつこ悪くて」

さやかの嫌味に眉間にしわを寄せる巧であった……。

気づけば、マミの住むマンションの前に来ていた。巧はオートバ

ジンを駐車場に残し、アタッシュケースを持ってマミ達の後を追う。

「遠慮しないで入ってね」

「「お邪魔しまーす！」」

「邪魔するぜ」

マミは部屋のカギを開け、まどか達を部屋の中に入れる。

「わぁ……綺麗な部屋」

「おおー完璧じゃん」

ややシンプルながら、整頓され落ち着いた雰囲気の部屋。まどかとさやかは目を輝かせる。巧はあることに気づく。

「……にしても、なんか広い気がするな」

「私、一人暮らしみたいなものですから……」

マミはその後は言わなかった。言えないこともあるのだろう、巧はそう思っただけ深く追求はしなかった。

「……あ、ちょっと待っててね。今紅茶とケーキを持ってくるわ」
そう言ってマミは台所に向かった。

「おお！ マミさんやさしい！」

「あ、俺は紅茶いらないからな」

巧は猫舌なので紅茶を遠慮する。気を使わせたくないのもあるが。

「皆どうぞ。乾さんには紅茶の代わりにミルクを持ってきました」
ほのかに暖かい、ぬるめのミルクだ。

「おお、悪いな」

マミはそうなら言ってくればよかったのにを呟くが、それは誰にも聞こえなかった。

「このケーキ、おいしい」

「んー！ めっちゃうま！ 最高っすマミさん！」

「……確かに」

「ふふ、喜んでくれるとうれしいものね」

三人の反応を見てマミは微笑む。喜ぶ顔を見て心が落ち着くのだろう。マミにとっては久しぶりに感じるものだった。

(マミさん!)

もう味わえるとは思えなかった感情。もう取り戻せない過去の記憶が蘇り、マミの目が潤む。

「……マミさん？」

まどかが不安そうにマミを見つめていた。それに気づいたマミは慌ててなんでもないと返す。

「さ……さて、そろそろ本題に入りましょうか。二人も魔法少女としてキュウベえに選ばれた以上、人事じゃないものね。ある程度の説明も必要でしょ？」

「ふっふっふ、何でも聞いてくれたまえ」

「さやかちゃん、それ逆……」

さやかにまどかが突っ込む。

「俺もいいのか？」

巧にキュウベえが答える。

「君は個人的に興味があるんだ。ぜひ聞いて欲しいね。それに、君のことも知っておきたいんだ」

キュウベえが巧を見つめる。その瞬間、巧は異様な感覚を覚える。キュウベえの瞳に何かを感じ取ったのだろう。

(こいつ……一体なんなんだ……?)

そんな巧をよそに、マミは黄色い卵型の宝石を取り出した。

「これは『ソウルジュム』。キュウベえに選ばれた女の子が、『契約』によって生み出す宝石よ。魔力の源であり、魔法少女である証でもあるの」

「マミさん、その『契約』ってなんですか？」

さやかの疑問にマミではなくキュウベえが答える。

「僕は、君達の願い事をなんでも一つだけ叶えてあげられるんだ」

「「なんでも？」」

まどかとさやかが声をそろえて言う。

「そう、なんだって構わない。どんな奇跡だって叶えてあげられるよ」

「ええ！？　それって、金銀財宝とか不老不死とか……満漢全席とか！！？」

「さやかちゃん、最後のはちょっと……」

ボケるさやか、それに突っ込むまどか。巧は黙ったまま、キュウベえのそれを聞いていた。そして、キュウベえは続ける。

「でも、それと引き換えに出来上がるのが『ソウルジェム』なんだ。この石を手にした者は、『魔女』と戦う使命を課されるんだ」

まどかとさやかは、聞きなれない言葉に表情を曇らせる。

「その、魔女ってなんなんですか？」

「魔法少女が希望を振りまく存在なら、魔女は絶望を振りまく存在。魔女は人の心の闇に取り付いて徐々に精神を蝕んでいくの」

「「……」」

まどかとさやかは息をのむ。

「原因不明の事件や事故の殆どは、実は魔女によって引き起こされているものなのよ」

「でも、なんで魔女は世間に知られてないんですか？」

さやかがマミに聞く。

「魔女は普通の人間には見えないの。それに普段魔女は結界の奥に潜んでいるのよ」

「結界って、あの変な空間ですか？」

今度はまどかが聞いてきた。

「そう。普通の人は結界の中に迷い込んだら、二度と出られないわ。あなた達、結構危ないところだったのよ？」

「うへえ……じゃあ巧が助けてくれてても、マミさんがいなかったらやばかったんだ……」

（俺は別に問題なかったんだけどな。ベルトが無くて……）

さやかという言葉に聞きながら、巧はそう思いながら自身の右手を見る。

(……ていうか、何で呼び捨てなんだ?)

そして、巧は流したものを心の中で突っ込んでいた。

「……」

「どうしたのまどか？」

何かを考え込んでいるまどかに気づいたさやかは、まどかに声をかける。

「うん……どうしてほむらちゃんはキュウベえを襲ったのかなって……」

「そのことなんだけど、おそらく暁美さんは新しい魔法少女が増えることを恐れているのよ」

「え？ 魔法少女同士、仲間じゃないんですか？」

「それがそうでもないの。魔法少女達は一人一人、自分の縄張りを持っているの。新しい魔法少女が生まれれば、当然自分のテリトリーが減ってしまうわ。それに、魔女を倒すとそれなりの見返りがあるから、それ目当てで魔法少女同士が対立することも珍しくはないわ」

「その、見返りってなんなんですか？」

「魔女の卵、『グリーンシード』。魔女がまれに持っているの」

「『魔女の卵！？』」

まどかとさやかは魔女の卵を聞き驚く。キュウベえは補足を付け足す。

「『グリーンシード』は魔力を回復させるアイテムなんだ。それを巡って魔法少女同士で争ったりするんだ」

キュウベえの回答に、巧は納得する。どおりで話したくなかったわけだ、と。

「じゃあ、持っていない魔女は……」

「『使い魔』と呼んでいるわ。使い魔は大抵は放置されているの。グリーンシードを孕^{はら}むまで。……そう、人を殺すことによって」

マミのその発言にまどかは顔を青ざめ、さやかは眉間にしわを寄せて怒りをあらわにする。

「そんな……」

「……そんなの許せないですよ！ そのあいだ、人がどうなってもいいってことですか!？」

「むしろそれが普通なんだ。だから、マミみたいに使い魔も狩る魔法少女は珍しいんだ」

「もちろんそれは人として許されるものではないわ。でも、それは魔法少女が生きていくためには必須なものなの」

「でも……だからって!」

怒るさやかに、巧が問いかける。

「さやかつつたつけ？ お前、肉食動物に動物殺しって言うのか？」

「えっ？ それは……」

「もちろん、俺はそれを正しいって言うわけじゃない。でも、生きるためにはそういうことも必要ってことだ。魔法少女になるなら、そういった罪を負う覚悟がないと駄目だってことだろ」

巧の正論に、さやかは黙り込んでしまった。

「それに……俺は契約とかは反対だな」

「どうしてですか？」

まどかが聞く。

「『願い』^{ゆめ}ってのは、自分でかなえるための目標だろ。それを、戦う指名を背負ってまで叶えたいとは、俺は思わないな」

「『『願い』……』」

巧の発言に、二人は考える。自分達に、そうまでして叶えたいものがあるのか、と。

「巧さんの言うことも正しいわ。契約しない、そういう選択肢もあるわね。それに、魔女との戦いは常に命がけ、命の危険だってあるもの」

「でも……そうです、よね」

まどかはうつむいてしまう。

「まあ、すぐに結論をだすことはないわ。これから、ゆっくり考えればいいじゃない」

マミはそう言った後、何かを思いついたのか

「そうよ。提案があるんだけど……しばらく私の魔女退治に付き合ってみない？」

「「え？」」

「まあ、『魔法少女体験コース』ってとこね。私の戦い方とかを見て、魔法少女の仕事を体験してから答えを見つけてもいいんじゃないかしら」

「おい、子供だけでそんな危険なことさせられるかよ」

マミの考案に巧が反対する。

「……乾さん、これは二人に聞いているんです。あなたに権限はありません」

マミの謎の威圧感に、巧は押されかける。

「……だったら、大人も連れていけ。それならいい」

「ええ〜？ 巧、マミさんみたいに戦えるのお？」

「なめんなよ。ちゃんと準備すれば俺だって戦える」

ふう〜んと小ばかにしているさやかをよそに、巧はマミを見つめる。

「……大丈夫なんですか？ これは一般人の人には危険で」

「少なくともこいつらもまだ一般人だし、俺はこいつらよりは力になれる。それにキュウベえ、こいつも俺のことを知りたいだろうしな」

「……そうだね。マミ、僕からも頼むよ」

「……キュウベえが言うなら……」

キュウベえには反論できないのか、マミも渋々納得する。

「じゃあ今日はもう遅いし、これまでにしましょうか」

マミが手を叩き、その日は解散となったのであった……。

~~~~~

「ねえママ。もし、もしもどんな願いでも一個叶えられたら、何を願うする？」

「うーん？ そうだなあ……あたしだったら家族の幸せ……かな？」  
意外な答えにまどかはきよんとする。

「そんな小さなことでいいの？」

「小さなことが一番大切なのさ。それに、願いにでかいも小さいもないだろう？」

詢子はまどかを見て笑う。それを見て、まどかも微笑んだ。

「うん……そうだね」

「……まあ、でかいこと頼めつつんだったら役員を二人ばかりヨソにとばしてもらおうかな」

「へ？」

詢子の言葉に、まどかはあっけにとられてしまう。

「はっはっは！ ま、冗談は置いといて、そろそろ朝メシ食わないとな」

そう言って、詢子はリビングへと向かっていった。冗談とは言っていたが、その目は明らかに本気だった。

「……やっぱり、ママはママだなあ……」

~~~~~

場所は変わり、ママのマンション。

「じゃあ、留守番宜しくお願いしますね。乾さん」

巧はなぜかママの家に泊まっていた。実はあの後……。

「ところで、乾さんはどこに住んでいるんですか？」

「ああ、用事があったて見滝原に来たんだ。確かポケットにホテルの番号とかが……あれ？」

巧はポケットを探るが、メモがないことに気がつく。

「い、いつ……まさかあの時にっ!？」

巧は魔女の結界内で派手に吹っ飛ばされたのを思い出した。

「もし結界内でなくしてしまったとしたら……もう無理ね」

「うっそだろお……」

マミの言葉がとどめとなり、巧は落ち込んでしまった。ホームレス確定だ、そう思った時だった。

「あの……もしよかったら、ここに泊まりますか？」

「「マミさん!？」」

マミの言葉に、まどかとさやかは驚く。

「ちょ……マミさん相手は大の男ですよ!？ あんなことやこんなことされちゃいますよ!？」

「お前は俺をなんだと思ってるんだああ!！」

さやかの発言に、切れ気味に突っ込む巧。その後、結局巧はマミの家に泊まることになったのであった。

「はぁ……マジでかつこわる……」

自分のふがいなさに落ち込む巧なのであった……。

乾巧、見滝原にて現在いいとこなし。

To Be Continued.

第7話（後書き）

巧以外「「合掌」」

巧「うがああああああ!!」

さやか「ま、いつかかつこよくなるよ」

作者「まあ、まどマギクロス系ってクロス側の人がマミの家に居候してことも多いし、気にするな」

杏子「しっかし、ブランクがたたって若干文章力落ちてんな」

作者「うん、なんとなくぐしゃぐしゃなのは気づいてた。それよりもさあ……」

全員「「ん?」」

作者「おりこ☆マギカ読みたい」

全員「「買えぼ?」」

作者「……置く場所ない」(TT)

まどか「うん……こっちも」

全員「「合掌」」

作者「あ、無制限で感想書きこめるようにしたので、皆さんお気軽にどうぞ!」

ほむら「さて、次回第8話【幸せと不幸、二人の思い】。次回も乾巧の影は薄いわね」

巧「止める……俺を呼ぶなああああ!!」

さやか「どこのアギト!?!」

第8話（前書き）

巧「今回俺の出番少ないみたいだな」

まどか「それにしても、フォーゼ……」

さやか「どうしてこうなった（田中的な意味で）」

ほむら「ま、あの骸骨はほっておけばいい」

マミ「それでは、第8話スタートよ！」

第8話

『魔法少女と同居ですかあ。変なことしてないですよねぇ？』

「そんな性癖しゅみはないっつーの！」

マミが家を出てから少ししてファイズフォンが鳴り、その相手はスマートレディーであった。昨日もさやかに同じことを言われ、巧は心の中でため息をつく。

『それで、これからどうするんですか？』

「とりあえず、その『魔法少女体験コース』ってのを見ていこうと思う」

数秒の沈黙。

『そうですか……あ、むやみに変身しないでくださいね？ どうやら魔法少女達がオルフェノクを警戒しているようですから。下手をすれば乾さんまで狙われる可能性がありますから』

「ああ、わかった」

ブツツと通信が切れ、巧はファイズフォンを折りたたんだ。

「ま、マミなら一人でも大丈夫だとは思うけど……けど、なんだ？ この変な感じは。マミ一人にやらせたら、まずい気がするな……」

巧には『魔法少女体験コース』には何か裏があるような気がしてならなかった。

~~~~~

時はさかのぼり、昨日の夜。その頃、巧は既に寝ていた。

「キュウベえ、あなたに言われた通りに『魔法少女体験コース』を発案したけれど、大丈夫なの？」

「問題ないさ、ママが頑張ればいいんだから。それに、ママもまどかやさやかに魔法少女になってほしいんだろう？」

「っ！　それは……っ！」

「ママの行動によっては、まどか達がママから離れていくことも考えられるんだよ？」

「そ……そんなのいやよ！　一人ぼっちは……」

「だよね？　だから、………分かったかい？」

「……分かったわ……」

「いい子だ、ママ」

~~~~~

少なくとも、巧の予感は当たっていた。ただそれを巧は知らない。

「……暇だなあ……」

とりあえず、この暇な時間をどうしようか、そう考える巧であった。

第8話【幸せと不幸、二人の思い】

いつもの通学路。さやかと仁美が歩いていた。

「おっはよー！」

まどかの声が後ろから聞こえ、二人は振り向く。

「おはようございますまどかさん」

「おっすまど——うえええ!？」

仁美が普通にあいさつを交わすが、さやかはなぜか驚いていた。なぜなら、まどかの肩にはキュウベえが乗っていたからだ。そんなさやかを見て、仁美はきよんとしていた。さやかのまどかの側に駆け寄って耳打ちをする。

「……やっぱり、あたし達にしか見えないのか」

「そうみたい。ママにも見えてなかったし」

「なんで巧は見えるかなあ。実は男装女子だったり？」

ひそひそと話している二人を見て、仁美は首を傾げていた。

「お二人とも、どうかしましたの？」

「え？ あ、いやいや何でもないから！ ほら、行こ行こ！」

さやかはごまかしながら、仁美の背を押して再び歩き出した。仁美は不思議そうに思いながらも、さやかに押し流され歩いていく。

くあ、あと頭の中で考えただけで会話が出来るみたいだよ？>

「うえい!!？」

突然頭の中にまどかの声、テレパシーが響き、さやかは再び驚く。さやかは慌ててまどかの方へ振り向き、さやかも思考をまどかに向けてみる。

くあーテストス……ほんとだ。あたし達いつの間にそんなマジカル能力が!？>

くいや、今は僕が間で中継しているだけさ>

キュウベえがテレパシーに入り、さやかに説明する。

くなんか変な感じだなあ>

さやかは納得しつつ再び歩き出す。流石に変に思ったのか、仁美は不審な眼差しで二人を見る。

「お二人とも、さっきからどうしたのですか？ しきりに目配せしたりして」

「え？ あ、いやあこれは……」

「うーん……」

二人が気まずそうまた目配せしているのを見て、仁美にある疑惑が生まれた。

「ま、まさか……私が帰った後でお二人の仲が急接近するようなことが……!?!」

「え、えーと……その、違うんだって!」

流石に仁美に魔法少女のことは話せず、さやかははっきりとした反論が出来なかった。しかし、それが仁美の疑惑をより立たせてしまった。

「い、いけませんわそんなこと……女性同士で……」

「あ、あの。仁美ちゃん?」

様子のおかしい仁美に、まどかが近寄ろうとするが、仁美はカバンを落として振り向いてしまう。

「それは……それは禁断の恋ですよおおー!!!!!!」

そして仁美はそのまま叫びながら走り去ってしまった。

「仁美ちゃん鞆忘れたまま言っちゃった……」

「まったく、あたしとまどかがそんな関係になるわけがないじゃん」

「……え?」

「は?」

さやかの発言にまどかが過敏に反応した。

「さやかちゃん……私をお嫁さんにしてくれるんじゃないの? 私のが好きなんじゃなかったの?」

まどかの頬が赤くなる。そして、その目は潤んでいた。

「え? あの……まどか? あたしはあくまで友達として好きなわけ……」

まどかの予想外の反応に、さやかは戸惑っていた。

「そうだよね……女の子同士じゃ駄目だよね……それに、さやかちゃんには想い人^{上条くん}がいるもんね……」

まどかは今にも泣きそうになっていた。

「いやいや恭介は関係ないでしょ!? ていうか……嘘でしょ? まどか……あたしのことをっ!?」

「ううん、いいの。私のこの恋は元々届くものじゃないっで……ひぐっ……分がっでだから……うえええ……」

ついに、まどかは泣き出してしまった。

「ええええええ!!? ちょっ、泣かないで!? ごめん! よくわかんないけどごめんなさいいいいっ!!」

もはやさやかの頭の中は混乱、泣いているまどかを慰めることから出来なくなっていた。

「う、あ、うう……ごめんまどかああっ!!」

さやかが考えたすえ見つけた答えは、まどかを抱きしめることだった。さやかはまどかに抱きつこうとする……が。

「あら……ぶっ!?!」

まどかはそれを避ける。「スカッ」という効果音が似合うくらいに。さやかはそのまま倒れこんでしまった。

「えっへへー、嘘だよーだ!」

「……ふえ?」

今さっきまで泣いていたはずのまどかは、けろっとして笑っていた。さやかは何が起こったのか、何がどうなっているのかわからなかった。ただ、ようやく理解できたのは、騙されたことだった。

「いつもの仕返しだよ! じゃ、私も先に行くからねー!」

そう言って、まどかも走って学校へと向かっていく。

「……まどかめ、騙したな……。このさやかちゃんに一杯食わすとは……むううゆるさーん!! ……っと。待てええええ!!」

さやかは仁美の鞆を持ってからまどかを追いかけた。

「……許さない」

~~~~~

そんなこんなあって只今お昼。昼食の時間である。まどかとさやかは屋上で弁当を食べていた。まどかはキュウベえにおかずを分けたりしていた。おかずを食べ終わると「きゅっぷい」とかわいらしいゲップをする。

「いやー仁美の誤解解くのは苦労したわー」

「でも、さやかちゃん。ほむらちゃんににらまれてたよね、確実に」

「ああ……確かに」

あの後教室で仁美の誤解を解いた後、さやかは教室に入ってきたほむらに睨まれていた。覚えておけを言わんばかりに。

「……なんかとって食われそうだ」

さやかは身震いを起こす。さやかは空気を変えようと話題を変えた。

「そういえばさ、まどか授業中になんか描いてたよね？」

「え！？ あ、いや、うーん……」

まどかはなぜか気まずそうにしていた。さやかは怪しく思ったが、とりあえずスルーすることにした。

「ところでさまどか、願い事考えた？」

「ううん、まだ……さやかちゃんは？」

「あたしも全然。ちっちゃい頃はランプの魔神とかを読んで、色々とは考えてたんだけどなあ……」

さやかは立ち上がり、金網のフェンスに向かって歩き出す。

「欲しい物とかやりたいこととかいっぱいあるけどさ、命がけって考えると、命懸けるほどのもんじゃないなーってさ」

「意外だなあ。君たちのような年代の娘なら大抵は二つ返事で契約するんだけれど」

キュウベえは台詞どおり意外そうにさやかに言う。

「まあ、きつとあたし達がバカなんだよ」

さやかは金網に手をかける。

「さやかちゃん、それって……」

「早い話、幸せバカ。世の中には、命を懸けてでも叶えたい望みを持つてる人って、大勢いるはずでしょ？ そんな望みが見つからないってことは、その程度の不幸しか知らないってことじゃん。恵まれませんで、あたし達バカになっちゃってるんだよ」

さやかの表情が歪む。金網が独特の金属音を上げてきしむ。

「なんで……あたし達なのかなあ？ 不公平だと思わない？ こういうチャンスを心の底から欲しいと思っている人は、他にもいるはずなのにさ……」

さやかの脳裏に、ある少年の姿が映りだす。少年はベッドに寝たきりで、窓から景色を眺めている。とても、さびしげな光景だ。

（さやかちゃん……）

その時だった。暁美ほむらが、屋上にやってきたのは……。

「「！」」

ほむらが現れ、まどかはキュウベえを抱きかかえ、さやかはまどかを自分の背に隠してほむらを睨みつける。

「な、なんの用だよ。まさか、昨日の続きかよ!？」

「どうしよう……今は私達しか……」

<心配しないで>

ほむらほ来訪に困惑するまどか達であったが、頭の中にマミの声が聞こえた。まどかとさやかが辺りを見渡す。

<マミさん……どこに？>

<あなた達から見て左側の別棟にいるわ。この距離なら向こうが襲ってきてもすぐに対処できるわ>

「……いいえ、そのつもりはないわ」

ほむらが静かに口を開いた。キュウベえを睨みつけながら。

「そいつが鹿目まどかと接触する前につぶしておきたかったけれど、もう手遅れのようなだし。……それで、どうするの？ 魔法少女になるつもり？」

「そんなこと、あんたに関係ないでしょ！」

さやかがほむらに向かって言い放つ。だが、ほむらは表情を変えずに冷静に対処する。

「あなたに聞いてないわ。鹿目まどか、昨日の話は覚えているわよね？」

（今とは違う自分になるうだなんて、絶対に思わないことね。……さもなければ、全てを失うことになる）

昨日、ほむらが言っていたことだ。

「うん……」

まどかはおどおどしながらも首を縦に振る。

「そう、ならいいわ。忠告が無駄にならないことを祈るわ」

「ま、待って！」

ほむらは振り向いて立ち去ろうとするが、それを止めたのは、まどかであった。

「ほむらちゃんは、どんなお願いで魔法少女になったの？」

ほむらは反射的に振り向く。だが、相変わらずの無表情だったため、ほむらが何を思っているのか察することは出来なかった。ほむらはすぐに振り向き、歩き出した。

「なんだよあいつ……言うことだけ言っというて聞かれたことにはだんまりかよ」

さやかは眉間にしわを寄せながら言う。その一部始終を見ていたマミは考え込んでいた。

（暁美さんの狙いは一体……？）

~~~~~

あれから数時間後、帰りのHRが終わり、生徒は部活や帰宅の準備をしていた。まどかとさやかは廊下にいた。

「まどかさん、さやかさん。今日も一緒に帰りましょうか」

そう言ってきたのは仁美だ。

「ごめんね。今日はちょっと……」

「悪い仁美。あたしも今日は大事な用事があつてさあ、ごめん」

まどかは苦笑いをし、さやかは手を合わせて頭を下げていた。それを見て、仁美は落ち込んだ。

「そうですか……もう、私が入る余地はありませんのねええー！」

「だから！ そんなんじゃないってー！」

仁美は朝のように叫びながら走り去ってしまい、さやかも訂正しろと叫んでいた。

「まったくもー！ 仁美の奴！ そんなじゃないって何度も」

「……え？」

まどかの目が潤む。だが、流石に二度目は通用しなかった。

「もう引つかからないからな」

「あはは……じゃ、行こっか」

そう言つて、まどかとさやかは歩き出した。マミとの待ち合わせ場所へと。

~~~~~

デパート内のファストフード店。まどかとさやかが到着した。さやかは見慣れないものを背負っていた。

「あら、来たわね」

「遅かったな」

マミと巧が既に来ていた。巧はアイスコーヒーを飲んでいた。巧の側にはあの銀色のアタッシュケースがあった。

「待たせてすみませんでしたマミさん」

さやかが腰を低くして謝る。

「いえ、気にしないで。じゃあ、魔法少女体験コースははじめましょ

うか！」

「「いえーい！」」

まどかとさやかが楽しそうに張り切っている。巧はそんなことで大丈夫なのかよとため息をつく。

「それで、準備はいいかしら？」

マミは三人に聞く。

「準備になってるかは分からないけど、これ持って来ました！」

そう言っ、て、さやかは持っていた包みから、金属バットを取り出した。

「無いよりはマシかと思って！」

「さやかちゃん、気合入ってるね……」

「やる気は分かったからさっさとしまえ。目立つぞ」

巧にそう言われ、さやかは舌をペロッつと出しながらバットをしまう。

「で、巧は？」

「俺は……まあ、なんとかなる」

さやかにそう言われ、巧はアタッシュケースを触りながら茶を濁す。

（このことは言えないもんな……）

「それで、鹿目さんは？」

「え、えーと私は……その……」

マミに聞かれ、まどかはそくさと一冊のノート取り出した。三人は開かれたページを見ると、そこにはファンシーな服装の女の子が描かれていた。その中にまどからしき絵もあった。

「一応、衣装だけでもと思って……」

三人は一瞬静止し……。

「あははははっ！ こりゃあまいった！」

「うふふ」

「……っ」

さやかは盛大に、マミは控えめに笑っていた。一方で巧は、握り



拳で口元を押さえつつも、肩を震わせていた。声を殺して笑っているのだ。

「わ、笑うのはちょっと！ ひどい、かも……」

まどかは顔を真っ赤にさせる。

「いやーまどかはかわいいなあ！ 流石あたしの嫁！」

「ふふっ、その意気込みは素晴らしいわ」

まどかは真っ赤になった顔を隠すようにうつぶせて、ノートをしまった。

「ふう、じゃあ第一回魔法少女体験コース、張り切っていきましょうか！」

「「おー！」」

まどかとさやかが盛り上がる中、ただ一人、巧は浮かない顔をしていた。

To Be Continued.

## 第8話（後書き）

巧「次回はいよいよ魔女との戦闘か」

さやか「てか、サブタイトル変わったな」

まどか「さりげなく前回の後書きも修正されてるし」

作者「だって、廃屋のくだり書こうと思ったけど長さにやめちゃったからさあ」

マミ「まあいいじゃない。私の活躍がまるまる1話なんだから！」

全員（（まあ、そこが数少ない見せ場だし））

マミ「……？」

さやか「つか、まどかが小悪魔な件について」

作者「まだまどマギが明るかった頃だからさ、こういう内に出来るだけ笑えるところを作ったと思うたから……」

ほむら「まどかかわいいわまどか……」

巧（「……ゆるさない」って台詞、絶対こいつだ！）

マミ「というわけで！」

巧「次回第9話【呪いの薔薇、正義の銃声】。次回も宜しくな！」  
杏子&amp;SL「とうーびーこんでいにゅーど！」

## 第9話（前書き）

前回の555☆MAGICA三つの出来事！

ひとつ！ 巧はマミの家に居候することとなった！

ふたつ！ まどかとさやかは、ほむらから忠告を受ける！

そしてみつ！ いよいよ、魔法少女体験コースが始まる！

巧「どうしてオーズ風なんだ？」

マミ「なんでもいいじゃない。さあ、行くわよ！」

まどか&amp;mp;、さやか「おーっ！」

## 第9話

あれから巧達は昨日魔女の出没した場所にいた。

「魔女の搜索は魔女の魔力の痕跡をソウルジェムでたどって行うの」  
そう言っマミは手のひらにソウルジェムを置く。すると、ソウルジェムが淡く輝いた。

「これは魔女の魔力に反応しているの。魔女が近くなるとこの光もつよくなるわ」

「なるほどな。それで魔女の居場所が分かるってか」

「なんか思ってたより地味だなあ」

「地味だけど大切なことだよ。どうやら、美樹さんはそういうのが嫌いなようね」

「ギクッ！」

凶星なのか、さやかは顔色を変えた。

「さやかちゃん勉強苦手だしね」

「ちょ……言うなよまどか！」

黒い笑顔でさやかを見つめながら言うまどか。

「うーん、思考が弱いとなると、仕事をこなすのは難しいね」

「キュウベえまでなんだよお!!」

まどかの肩に乗っているキュウベえもさやかを見つめながら言う。

「さやか、お前絶対魔法少女向いてないな」

「ひどっ!？」

巧にまで言われ、さやかはへこんでしまった。

「さ、行きましょ」

マミが歩き出すのを見て、まどか達も歩き出す。巧は後ろをチラッと見た後、マミ達の後を追った。

(……気のせいかな?)

第9話【呪いの薔薇、正義の銃声】

外に出たマミ達。空は既に赤く染まり始めていた。巧はオートバジンに乗ってこなかったようで、アタッシュケースを持ったまま歩いていた。

「光、全然かわんないっすね」

さやかがソウルジェムを見ながら呟く。

「取り逃がしてから一晩経ってしまっているからね」

「マミさん、どうして昨日の内に倒さなかったんですか？」

まどかはマミに聞く。

「確かに仕留められたかもしれないけど、あなた達を放っておいてまで優先することじゃなかったわ」

「あうう……ごめんなさい」

自分達に責任があると思ったのか、謝るまどか。

「いいのよ」

心優しいマミにさやかはうんうんとうなづいていた。

「うん、やっぱりマミさんは正義の味方だなあ！ それに引き換え、あの転校生……ホントにむかつくなあ！」

さやかがほむらの悪口を言っていると、そこに巧が介入してきた。「そういうな。お前そいつの何を知ってんだ？」

そう言われ、焦るさやか。

「え！？ いや……だってあいつは……」

「仕留められてない、ってことはあいつは魔女を倒さなかったことになる。変だと思わないか？」

「な、何が？」

さやかはまだ理解できていないようだ。巧はため息をつきながら言葉を付け足す。

「それが魔法少女が増えるのを阻止しようとした奴のすることか？ 見返りが減るのを阻止するためにキュウベえを襲っというて、見返りを出す魔女を倒さないって、おかしくないか？」

「あ……！」

さやかはようやく巧の言っていることを理解した。確かに、見返りがほしいのなら、見返りが手に入る魔女を倒さないのはおかしい。それに関してはママもそうねと呟いていた。

「多分別の理由があるんだろ。お前がぐちぐち言えるもんじゃない」  
「……ふぁーい」

若干不満げではあったが、納得するさやか。そんな中、まどかは巧の傍に近寄る。

「巧さん、ありがとうございます」

「ん？ 俺なんかしたか？」

「ほむらちゃんの誤解を解いてくれて……。私、ほむらちゃんが悪い子じゃないような気がしてたから……」

まどかはそう言って微笑む。巧はそっぽを向いてあつそと呟く。夕日で赤くなっていたから見にくいが、巧は照れていた。それを見てさやかは素直じゃないなーとにやけていた。

「あ、そういや、魔女の居そうな場所ってあんのか？」

場の空気を変えようと思ったのか、巧がふと思ったことを口にする。

「乾さん、昨日魔女は呪いや災いを振りまく存在って言いましたよね？」

「ああ」

「交通事故や障害事件は呪いによって起きるのかほとんど。だから大きな道路や交差点、喧嘩の起こりやすい歓楽街に潜ひそんでいることが多いんです。それと、自殺に向いていそうな人ひと気の無い場所も」  
ママの顔がやや陰しくなる。

「それと、病院も気をつけたほうがいいです。弱っている人達の多い病院で魔女に生命力を吸い取られれば、大変なことになりますから」

『病院』、その単語を聞き、さやかの表情は一片。真面目な顔つきになる。

「それって、死ぬってことですか？」

「……そう考えた方がいいわね。だから、そこを重点的にチェックする必要があるの」

マミの言葉に、空気が一気に重くなる。まどかは不安そうにさやかを見つめる。すると、マミのソウルジェムが突如強い光を放った。つまり、近くに魔女がいるということだ。

「魔女！ それもかなり近いわね……！ 皆、行くわよ！」

「はいっ！」

「ああっ！」

四人は一斉に駆け出した。

~~~~~

四人の目の前には小さな空き地にたたずむ古い廃屋ビル。自殺でも起きそうな場所だ。

「いかにも魔女がいそうな場所だな」

巧がそんなことを言うと、まどかが屋上を指差しながら叫んだ。

「あっ！ あそこに人が……！」

三人はまどかの指差す方を見る。そこにはなんと女性の姿があった。あと一步前に出れば間違いなく落ちる場所に。無気力に、何かをぶつぶつとつぶやいているようだ。

そして、最悪の事態が起きた。女性が落ちたのだ。マミと巧が走り出し、まどかは悲鳴を上げる。

「くそっ……！」

巧は全速力で走るが、女性を受け止めるには距離が遠すぎる。そんな中、マミは黄色い光に包まれ、魔法少女に変身した。

「私に任せてください！ ハッ！」

すると、マミの胸元の黄色いリボンが何本も伸び、女性を受け止めたのだ。

「よかった……」

「やった……！」

まどかとさやかがマミに駆け寄る。巧も額の汗をぬぐいながら歩み寄る。

「……やっぱり」

マミは女性の首筋を見る。すると、蝶を模したタトゥーのようなものがあつた。

「これは魔女の口づけ。これを受けた人は自殺や事故を起こすの」「もう少し遅かったら魔女に殺されてたってことか」

そういう巧をふと見ると巧はいつの間にか鉄パイプを持っていた。

「巧それどこから!?」

さやかは驚く。

「好きですね……鉄パイプ」

「好きで使うかつ! 落ちてたのを拾ったんだよ! ……で、そいつは大丈夫なのか?」

「ええ、気を失ってるだけ。急いで魔女を倒しに行きましょう!」女性を安全なところで寝かせ、マミ達は廃屋の中へと入っていた。

~~~~~

「美樹さん、乾さん」

マミがそう言うと、バットと鉄パイプに触れる。すると、バットと鉄パイプの見た目がファンシーになった。

「魔力を注いだの。気休めだけれど、身を守るぐらいには役に立つわ」

「すっげー」

さやかはバットが変化したことに興奮しているようだ。一方で、巧はいやそうな顔をしていたが。

「さて、絶対私の傍を離れないでね! 行くわよっ!」

マミは魔力のゲートを作り出し、その中へと入っていった。ここからは魔女の結界、危険な戦場へと赴くこととなる。まどか達は意



を決してゲートをくぐった。

~~~~~

結界の中はまるで城の廊下のように。白い壁、床。シンプルで綺麗だ。だが、それでも魔女の結界、危険な場所に変わりは無かった。使い魔達がマミ達に襲いかかる。マミはマスキット銃を召喚し使い魔を一気に打ち抜く。さやかはまどかを守りながらやって来る使い魔達を魔法のバットで殴る。巧は右手に鉄パイプを、左手にはアタッシュケースを持ち、さやか同様まどかを守る。ただ、巧は若干独断行動もあったが。

「えいっ！ こっちくんなー！」

「どう？ 怖い？」

「な、なんてことないっすよ！」

たった今までおびえながらバットを振っていたのに、強がるさやか。

「俺は別に怖くない！ それなりに鍛えてるしな！ はっ！」

その一方で、豪快に右手に持っている鉄パイプを振り回す巧。ちなみにアタッシュケースは左手で盾のように構えている。さやかとは違い、積極的に前に出ており、倒した使い魔も多い。だが、やはり使い魔を多く倒しているのはマミだ。流石に魔法少女として長く戦っているだけある。これならば巧が戦う必要はないだろう。

そして、ついに魔女のいる最深部へとたどり着いた。

「見て。あれが魔女よ」

その姿を見て、まどかとさやかは驚く。3メートルを越す巨体で蝶のようなはねを持ち、顔らしきものは半液体状のようであり、薔薇がいくつか咲いている。その名は、『薔薇園の魔女』、その性質は『不信』。

「うつわぁ……グロッ」

さやか顔は引きつっていた。

「マミさん……あんなのと戦うんですか？」

「マミ、こればかりはきつくはないか？」

「大丈夫、負けるもんですか」

そう言っ、マミはさやかの持っていたバットを地面に突き刺した。すると、まどか達はバリアに包まれた。

「はぁっ！」

マミが魔女のいる最深部へと降り立つ。すると、魔女が突然怒り、巨大な椅子を投げ飛ばしてきた。マミはそれを跳んで避ける。マミもマスキット銃を大量召喚するが、魔女はその巨体に似合わぬスピードに空中を飛ぶ。そのため中々命中しない。すると、突如鞭のようなものが出現、マミを縛り付けて空中で振り回す。

「う……ぐっ……！」

「「マミさん！」」

「マミ！」

まどかとさやかの悲痛の叫びがこだまする。巧はアタッシュケースを開こうとするが、マミが叫ぶ。

「……大丈夫！」

そう言っ、マミは魔女が作った物であろう薔薇園を攻撃、薔薇の花が散っていった。するとどうだろう。魔女はうろたえた。そう、この魔女は名前通り薔薇園を作っているのだ。マミが現れていきなり激怒したのはマミによって薔薇が荒らされてしまったから。マミはそれに気づき薔薇園を攻撃したのだ。そして、魔女が薔薇園に氣をとられている内に脱出した。

「未来の後輩に、あまりかっこ悪いところは見せられないものね！ハァッ……！」

マミはリボンを出現させ、魔女を縛り付けた。飛べなくなった魔女はそのまま墜落、動けなくなってしまった。そして、マミはリボンで巨大なマスキット銃を作り出す。

「惜しかったわね」

そして、銃に魔力がチャージされ、巨大な光弾が放たれた。

「ティロ・フィナーレ!!」

マミの必殺技『ティロ・フィナーレ』を食らった魔女はそのまま爆発した。マミが地に舞い降りると、魔女の死を哀れむように蝶の使い魔が飛んでいった。マミはどこからか出した紅茶を飲んでまどか達の方を見て微笑んだ。

そして、魔女が死んだことによって、結界も消滅していった。喜ぶまどか達。一安心する巧。そして変身を解き、何かを探すマミ。すぐに探し物は見つかったようで、まどか達に歩み寄る。

「これがグリーンフシード、魔女の卵よ」

「これが、見返りって奴ですか？」

「ええ。ほら……」

マミがソウルジェムを取り出した、その時だった。

「きゃああああああああああああっ!!!!!!」

女性の叫び声が聞こえてきた。

「な……何!？」

「もしかして、あの女性ひとに何か!？」

「早く行くぞ!　なんかヤバイぞ!」

「ええ、鹿目さん、美樹さん!」

「「は、はいっ!」」

巧が入り口に向かって走り出し、それに続きマミ達も走っていった。

~~~~~

「いや……いやあああああああああ!!!!」

「な……なんだよあれ!？」

さやかが見た光景、女性は怯えながら見ていたのは、灰色の怪人だ。

「あれは、こないだの……！」

「オルフェノク！」

「おる……？」

マミが以前あったのとは別もののようで、見た感じはチーターである。巧が『オルフェノク』と聞きなれない単語を発し、さやかはよくわからない表情で巧を見ていた。

「あ……っ！ ほむらちゃんっ！」

「うぐ……がつ、ゲホッ！ はあ、はあっ！」

まどかの声に反応してみると、そのには魔法少女の姿のほむらがいた。ただ、ほむらは青白い顔で苦悶の表情をうかべうずくまっており、腹部を真っ赤に染め、左腕で押さえていた。右手には拳銃を握っており、戦っていたことを暗示させる。

「ふひひひひ……」

灰色の怪人、『チーターオルフェノク』が不適に笑っていた……。

To Be Continued.

## 第9話（後書き）

さやか「まさかの急展開……だと……!？」

まどか「ほむらちゃんいきなりピンチだよ!？」

ほむら「解せぬ」

巧「これは……フラグだな」

マミ「ええ、フラグね」

作者「次回、第10話【赤き希望〜FAIZ〜】!

巧「次回も宜しくっ!!」

## 第10話（前書き）

作者「話数がついに二桁だ！」

巧「そしてまさかの連日投稿！」

さやか「しかも今日だけで書いた5時間クオリティー！」↑マジです

まどか「前はマミさんがかつこよく魔女を倒したけど、女の人に  
悲鳴が聞こえてきたんだよ！」

マミ「そしたら、以前私が対峙したあの怪人と似たようなのが現れ  
て、暁美さんがピンチに！」

ほむら「そして、今回ついに……！」

## 第10話

今回は時間を少し巻き戻そう。

暁美ほむらは廃屋ビルの前にいた。ほむらはマミ達を尾行していたのだが、巧に尾行を悟られ、大きく距離をとったのが裏目にでてしまい、ほむらはマミ達を見失ってしまったのだ。ほむらがビルの前にたどり着いた頃にはマミは既に魔女と戦闘中であつた。無論、ほむらはこのことを知らない。ほむらがビルの中に入ろうとしたその時だつた。黒いニット棒をかぶつた謎の男がやってきたのは。

「危ないぜお嬢ちゃん。こういう所は危ないからよ」

無論、ほむらはそれを聞き入れはしない。

「お氣遣いどうも。でも、行かなければならないので」

ほむらは男から離れようとするが、男が回り込み行く手を阻んだ。

「おっと。行かせねえぜ？　こういうところはな、出るんだよ」

「何が出ると言うの？」

ほむらは男をうっとうしく思い始めた。どうせ出るなど幽霊の類だろう。魔法少女として魔女を戦っているほむらに、その程度の脅しは通用しない。ただ、「出る」という意味がそういうものであつたらの話だ。

「おっかな〜い怪物さ。この……俺のようになあああああっ！」

そう叫んだ瞬間、男の瞳が灰色に変化し、顔にチーターのような顔が浮かんだ。ほむらは後ろに跳び、男を距離をとる。そして男の姿は一変、灰色の怪人へと変化した。チーターの特質を持つ、『チーターオルフェノク』だ。

「な、なんなの……？　アレは……魔女じゃない！？」

ほむらはオルフェノクと出くわしたこと以上に、ショックを受けていた。

(見たことがない……あの男と同じ、イレギュラー!?)

「魔女? 知らねえなあそんなの。俺は『オルフェノク』! 神に選ばれし者、だッ!」

チーターオルフェノクが地面を蹴ると、すさまじい速さでほむらに向かってきた。ほむらはギリギリでかわし、魔法少女に変身する。「おほお? なんだそりゃ?」

余裕そうにほむらを見るチーターオルフェノク。ほむらは左腕に装着している盾から、何処から取り出したのか拳銃を出した。チーターオルフェノクは手品みてえだと拍手している。ほむらは拳銃を構えると、間髪いれずに銃を撃つ。そして、ありえない速さで銃弾を撃ち切り、ほむらは銃を捨てる。だが、チーターオルフェノクは全くダメージを受けていなかった。

「嘘……そんな……!?!」

「はっ! この体に、そんな玩具は効かねえよっ!」

チーターオルフェノクの両手に、鋭い手甲鉤てこうかぎが装備される。そして、その爪をほむらに向かって振り落とした。ほむらはギリギリで避けるが、その地面は大きくえぐられ、爪あとを残す。

(……何か気に入らないわね)

ほむらは眉間にしわを寄せてそう思った。そして再び盾から拳銃を取り出し、チーターオルフェノクを撃とうとした時だった。

「う……ん……? ……きゃあああああああああああ  
っ!……!」

ママがここに来たときに助けられた、あの女性が起き上がったのだ。今まで隠れて見えなかったが、起き上がったことによってその存在を知られてしまったのだ。チーターオルフェノクを見た女性  
は、悲鳴をあげる。

「逃げなさいッ!」

ほむらは叫ぶが、女性は動かない。いや、恐怖によって動けなくなっていた。

「ひやははは! 上玉の女だあ! 逃がすかよ!」



ほむらは銃で威嚇するが効果はない。チーターオルフェノクは走って女性の元へ行こうとするが、突如視界にほむらが現れる。確かに、チーターオルフェノクは止まった。だが、進行を邪魔されたチーターオルフェノクが黙ることはなかった。

「邪魔だああッ!!」

そして、爪がほむらを引き裂いた――

「あッ……がはあッ!」

ほむらは吹き飛び、吐血する。焼けたように痛む腹部、飛び散る血。ほむらは地面に叩きつけられ転がる。

「いや……いやあああああああああ!!」

女性が泣き叫ぶ。

「ガッ……ああッ!」

ほむらは左腕で腹部を抑えて立ち上がろうとするが、激痛でうまく体が動かせない。チーターオルフェノクが不敵に笑う。女性はすぐに殺せると判断したのか、標的をほむらに変えていた。

（私は、こんな所で死ぬわけには……ッ! あの娘との……『約束』がっ……!）

「オルフェノク!」

その場にいた全員がその声のする元を見る。そこには……。

乾巧……そして、マミ達がいた。

第10話【紅き希望（FAIZ）】

巧は女性に駆け寄った。

「これって夢ですよね……? 夢なんですよねえ!」

女性は泣きながら巧の衣服をつかむ。精神が不安定な状態だった。  
「ああ、だから……」

——ごめんな。

巧は女性の首の後ろに手刀を打つと、女性は気絶してしまった。

「ちょ……巧！？ なにしてんのさ！」

さやかとまどかも女性に駆け寄る。

「悪い夢で終わらせてやりたいだろ……？」

そういう巧の表情は、とても悲しげであった。それを見て、二人は黙り込んでしまう。そんな中、キュウベえは目の前にいる灰色の怪人を見つめていた。

（アレは魔女でも使い魔でもない全くの別物、マミの反応からして、以前マミが遭遇したというのと同じ存在ものだろう。乾巧は『オルフェノク』と呼んでいたが、一体……）

一方、マミは再び変身し、ほむらの元に駆け寄っていた。

「曉美さんっ！」

「問題……ないわッ……離れなさい！」

ほむらはマミを拒否する。が、問題ないわけがない。腹部はあの一撃でズタズタにされていたのだ。マミは無理やりほむらを寝かせようとするが、ほむらはそれを拒む。

「うじゃうじゃと沸いてきやがって……そんなに死にたいのかあ？」

ああん？」

チーターオルフェノクは両手の手甲鉤の爪をすり合わせながら辺りを見渡す。そして、巧が立ち上がった。

「お前……いや、女にんげんを襲った上、ほむらを傷つけたんだ。こいつに共存そんなの意思はないか」

その表情から、巧の怒りが見えた。

「マミ！ ほむらの治療してくれ！ まどかとさやかそいつは女を頼

む。それと、まどかはこれ持ってる」

そう言って、アタッシュケースを開いた。巧はそれから何かを取り出すと、空になったアタッシュケースをまどかに渡した。それは、銀色のゴツイベルト……。

「なんかカッコいい……じゃない！ 何今更オシヤレ決め込もうとしてんだよ！」

さやかはそれをオシヤレアイテムだと思ったのだろう。そんな発言をする。だが、チーターオルフェノクはそれがなんなのかを知り、驚いていた。

「それは……まさか貴様！」

巧はフツと鼻で笑いながらベルトをつける。

「ああそうだ。俺は……」

そして懷からファイズフォンを取り出し、開いて「555」とコードを入れる。そして、ENTERを押した。

「お前達の敵だッ！」

（悪いな、約束破って……まあ、こういう場面だから仕方がないんだけどな……それに、俺はこいつを許せない！ 命を弄ぶ、こいつだけは！）

《Standing by》

ファイズフォンから機械音声流れ、巧はファイズフォンを折りたたんでそれを勢いよく天に掲げた。

「変身！」

ファイズフォンをベルトに差し込み、横に倒してセットした。

《Complete》

再び機械音声が流れ、巧が気合をためるような構えをすると、ベルトから『フォトンストリーム』と呼ばれる赤い管が現れ、巧を赤い光で包み込んだ。すると、巧の姿はなく、そこには別の姿があった。黒のスーツ、先ほどのベルトとファイズフォン、シルバーの胸当て、『Φ』を模した大きな二つの黄色い瞳のマスク。そして、赤いフォトンストリーム。

「な……なんだぁ!？」

さやかには、巧がどうなったのか分からなかった。

「これは……!」

当然、マミにも何が起きているのかわからなかった。だが、ほむらはどこか心当たりがあった。以前見た、あの夢だ。

「紅い……閃光!」

そして、チーターオルフェノクは後ずさりながら、叫ぶ。

「貴様が……『ファイズ』だったのかぁッ!!」

「ファイズ……?」

ほむらはその名を呟く。そう……あれこそが紅き閃光<sup>ひかり</sup>の戦士、『仮面ライダーファイズ』なのだ。

「容赦しねえぞ」

ファイズは右手をスナップさせながら、チーターオルフェノクに言い放つ。

「うおおおっ!!」

チーターオルフェノクが爪を振り落としてファイズに襲い掛かる。だが、ファイズはそれをさばき思い切り腹部を蹴る。そしてひるんだチーターオルフェノクに強烈な左フック、そして右アッパーが顎にクリーンヒット。チーターオルフェノクは宙に浮く。

「やあっ!」

「ぐほあっ!」

そして、ファイズの回し蹴りで蹴り飛ばされ、廃屋ビルの中に入り込む。

「たりいなあ。本気で来いよ」

右手をスナップしながら、ファイズも入る。暗くなっており、ファイズの赤い輝きが一層引き立つ。

「クソッ……なめるなあああ!!」

挑発を受け、チーターオルフェノクは猛スピードでファイズに向かうが、あっさりと見切られてしまい右拳の腹パンをもろに食らった。

「があ!」

「フン! ハアッ! ラアッ!」

そのまま腹パンの連打、チーターオルフェノクはうつぶせる。ファイズはチーターオルフェノクの首を後ろを右手でつかみ、今度は右足の膝蹴りを腹部にたたきつける。ぐえっと声を上げるチーターオルフェノクに、まどか達はわずかながらチーターオルフェノクを哀れに思った。特にさやかはファイズを正義の味方のように思っていたため、この惨たらしい戦い方を見て、若干引いていた。

「ハア!」

そして、うつぶせるチーターオルフェノクを蹴り上げてダウンさせる。だが、チーターオルフェノクもただでやられるわけにはいかない。ファイズのスタンピングキックを回避すると、起き上がりファイズを爪で攻撃する。胸当てに火花が散り、ファイズは後ずさった。

「ぐあっ! くっ……!!」

「「巧(さん)っ!」」

まどかとさやかが叫ぶ。

「人間の味方をする愚か者風情が……俺に触れんじゃねえよ!」

チーターオルフェノクはそのまま爪での連撃、完全に攻守が入れ替わっていた。

「ぐああっ!」

ファイズははじき飛ばされ、外へと飛び出した。ほむらはファイズの援護に向かおうとする。結果的に助けられた、借りを返す為。

だが、マミに止められる。

「邪魔しないで！」

「私は乾さんに頼まれたの！ 暁美さんを頼むって！」

そう言ってほむらを押さえつけ治癒魔法をかける。だがほむらの思いが通じたのか、ファイズの動きが変わる。

「死ねえ！」

「……はっ！」

チーターオルフェノクの一撃がファイズに襲い掛かるが、腕で防がれてしまった。

「何っ！？」

「らあっ！」

ファイズの蹴り飛ばされ、チーターオルフェノクは地面に叩きつけながら転がっていった。ファイズはこの隙にファイズフォンからミッションメモリーを取り出し、右腰に取り付けられたアイテム、デジタルトーチライト型ポインティングマーカースデバイス『ファイズポインター』にセットした。

## 《Ready》

ファイズポインターが伸び、しゃがんでそれを右足に取り付けた。  
「何をする気なの……！？」

戦いを傍観する形になっていたほむらは呟く。ファイズはファイズフォンをベルトに取り付けた状態のまま開き、ENTERを押した。

## 《Exceed Charge》

フォトンストリームに流れている『フォトンブラッド』が右足に集中する。ファイズはだらけるようにしゃがみこんだ。

「う……ぐッ」

チーターオルフェノクはようやく立ち上がるが、既に遅かった。ファイズは少し助走をつけて高く跳び上がり空中で一回転。そして、両足をチーターオルフェノクに向けるとファイズポインターから赤いレーザーが放たれ、チーターオルフェノクの目の前で止まり赤い円錐状に変化した。ファイズの必殺技のひとつ、『クリムゾンスマッシュ』だ。ロックオンされたチーターオルフェノクは拘束効果で動けなくなり、無防備の状態で立ち尽くす。

まどかとさやかが叫んだ。

ファイズがとび蹴りの体勢をとると、円錐に吸い込まれるようにチーターオルフェノクに向かっていった。そしてファイズのドリルのような一撃が、チーターオルフェノクを貫いた。

チーターオルフェノクの背後からファイズが現れ着地、そしてチーターオルフェノクに浮かび上がった赤い『○』を切り裂くように『／』が現れ、チーターオルフェノクは青い炎を上げて爆発、赤い『Φ』の文字を浮かばせて灰となった。

「やったああ！！ 巧の勝ちだああ！」

ようどほむらの回復を終えた。ほむらは傷が癒えると立ち上がり、そのまま去ろうとしていた。

まどかは引きとめようとする。

「暁美さん、あれほどの傷を負ったのよ!？」  
ソウルジェムだって濁って……」

「そのグリーンシードはあなたが獲物よ。受け取る気は無いわ」  
そう言ってほむらは立ち去ろうとする。

「待てよ」

ほむらを呼び止めたのは、変身を解いた巧だった。

「……何かしら？」

「受け取れ」

そう言って、巧はほむらにある物を投げ渡した。

「これは……グリーンシード？」

それは今日マミが取った物とは別の物であった。

「それは前に俺が倒した魔女が持ってたやつだ。俺には必要のないもんだし、マミの物でもない。それなら受け取れるだろう？」

巧はまっすぐに、ほむらを見つめていた。そして……

「……ありがとう、受け取るわ」

ほむらは静かに、そう告げる。

「……あなた、一体何者なの？」

「元アルバイトさ。クリーニング屋のな」

「……それ、ただのフリーターじゃなか」

さやかに突っ込まれ、こける巧。ほむらは馬鹿馬鹿しく思ったのか、くすりと笑う。

「あなた、名前は？」

「乾巧だ。お前は？」

「……暁美ほむらよ。乾巧……覚えておくわ。」

（また会いましょう……イレギュラー）

暁美ほむらは立ち去った。もう止める者は、誰もいなかった。

~~~~~

「う……うう……あれ？ 私……」

女性が起きた。

「大丈夫ですか？」

ママが寄り添う。

「あ……女の子！ あ……女の子はっ！？ それに……私っ！」
「大丈夫、大丈夫ですよ。ちょっと、悪い夢を見ていただけなんですから……」

女の子とは、そらくほむらのことだろう。ママは女性を慰めていた。

「しかし、まさか巧があんなに強かったとはね」

さやかが巧を見ながら言ってきた。

「それにしても……あの『オルフェノク』って言うのと、『ファイズ』って……一体なんなんですか？」

まどかが聞いてくる。

「……それは、また今度な。今日はもう休め」

「……はい」

色々あつて疲れていた二人は、今日のところは何も聞かず、女性を帰した後は解散となった……。こうして色々あったものの、魔法少女体験コース一日目は無事に終わったのであった……。

——『ファイズ』、『オルフェノク』。どれも聞いた事も見た事もないものばかりだ。一体、何がどうなってるのかな……？ わけがわからないよ……。

T
o

B
e

C
o
n
t
i
n
u
e
d.

第10話（後書き）

キュウベえ「最近僕の出番が少なくないかい？」

作者「多分皆こう言っている。『QBざまあwww』」

キュウベえ「わけがわからないよ」

巧「今回はついに念願の『クリムゾンスマッシュ』炸裂だ！」

まどか「かつこよかったねさやかちゃん！」

さやか「ただ、文章がどれだけいいかはなあ……」

作者「そこは気にするな！」

全員「「しろよ」」

作者「ちなみに作中に仮面ライダーファイズってでたけど、あくまで文章上の表記で本編に仮面ライダーの単語はでないからね！」

ほむら「で、今回は？ マミるのかしら？」

作者「いや、まだマミらせる予定はないよ」

マミ「私死ぬ前提！？」

作者「違う違う。シャルロッテ戦までってこと！」

杏子「早く出番ほしい」

さやか「もうちょっと待ちなさいよ」

マミ（ところで、暁美さんの気に食わないって、おりマギネタ……？）

作者「じゃあ、今回登場したオルフェノクの紹介！」

チーターオルフェノク…チーターの特質をもつ。男が変化するが、名前は不明。素早い攻撃が得意で、特に手甲鉤は一撃で惨殺できるほど鋭利。

巧「ちなみに、当初はあの女性がオルフェノクという設定だったらしいぞ」

全員「「嘘！？」」

作者「そーそー。だけど過激派のオルフェノクが口づけ食らうとは思えないな」と思って没にしました」

さやか「あ！」

マミ「どうしたの？」

さやか「ライオン、トラ（タイガー）、そして今回のチーター……オルフェノクでラトラーターが出来た！」

まどか「あ、ほんとだ！」

作者「最初はカメとかにしようと思ったけど、あれこれあってこの際チーターでいってなりました」

ほむら「それで、今言いたいことがあるのだけれど」

全員「「？」」

ほむら「私、今オルフェノクに対して一番の無力ってこと……！orz」

全員「「……ドンマイ」」

マミ「さて、次回は第11話【ファイズとマミと初共闘】！」

巧「ついにサブタイトルまでオーズ風に！」

作者「それはなんとなくそなたただけ。狙ってないよ。じゃあ、また次回お会いしましょう！」

第11話（前書き）

作者「最近ちょっと忙しいので更新速度落ちるかもしれませんが」
巧「しかし、話が進むごとにここ短くなるなあ」

まどか「シリアスになっていくのにあわせてるのかな……？」
さやか「じゃ、第11話いってみよう！」

第11話

『それで、結局変身しちゃったわけですか』

次の日の朝。巧はスマートレディと連絡をとっていた。

「悪いな、約束破っちまって……」

『いえ、オルフェノクがいたのでは仕方が無いですし。ただ、気をつけてくださいね。下手をすれば、乾さんまで狙われてしまいますよ？ それで今後は？』

「オルフェノクの説明、することになってな……どれくらいにしないとらしいんだ？」

巧はマミ達に説明する約束をしていた。オルフェノクのことをどこまで教えるべきか、スマートレディに聞く巧であった。

第11話【ファイズとマミと初共闘】

魔法少女体験コース2日目……学校は既に終わり、一行はマミの家に居た。ちなみに、魔法で回復したとはいえ、あれほどの傷を負ったはずのほむらは何事も無かったかのように学校に来ていたらしい。流石に途中からは保健室で休んでいたりしたそうだが。

「とりあえず、昨日できなかった説明をするわね」

そう言って、マミはソウルジェムを取り出した。

「ほら……前見たときより、ちよつと濁ってるでしょ？」

「あ……確かに輝きが鈍いっていうか……」

さやかと言うとおり、確かにソウルジェムの輝きが弱かった。

「この状態が続くと、魔力が弱まっていずれ魔法が使えなくなってしまうの。でも、このグリーンシードを使えば……」

グリーンシードをソウルジェムに近づける。するとソウルジェムから穢れが浮きで、グリーンシードに吸収された。

「す、吸い取った!？」

さやかが驚く。穢れの無くなったソウルジェムは強く光り輝いた。
「なるほど、力の維持のためにグリーンフィードを集めるのか」

「そういうことさ」

キュウベえが答える。巧は魔法少女がこれを取り合う理由を再確認した。

「で、今度は巧の番だね？」

さやかが巧を見ながら言う。キュウベえもそうだねと言う。

「その前に確認させときたいことがある。マミ、昨日はオルフェノクに心当たりがあるみたいだったけど、前にも見たのか？」

「はい、五日前に蚊のような怪人に。その時は倒しましたけど」

（倒した……だと……いや関係ない。五日前ってことは、俺が初めて魔女と出くわしたのと一緒に……これは偶然か？）

巧には、それがただの偶然には思えてならなかった。とりあえず、このことは後でスマートレディに報告しよう、そう思う巧なのだった。

「……！ ソウルジェムが！」

マミが見ると、ソウルジェムに反応があった。輝きはさほど強くなかったが、周辺に魔女がいる証拠であった。

「家の中でも反応してるってことは、ここからだいぶん近いか！」

巧がアタッシュケースを持ち、勢いよく立ち上がる。

「巧の説明受けてないけど……まいつか！」

「マミさん」

「ええ、行くわよ！」

マミ達は家を出、魔女を追って走り出した。

~~~~~

「……見つけたぜ」

魔女を追う道中、人気のない場所で謎の男が行く手を阻んだ。変

質者のような感じた。まどかは不安げな表情でマミの背に隠れる。

「狙いはファイズギアか……？」

巧はアタッシューケースを開き、ベルトを取り出す。

「まあな……後は貴様の抹殺……ついでにそのガキ共も殺ろうかなあ！」

すると男の姿が一変、灰色の蟻のような怪人、『アントオルフェノク』となった。

「え……！？ 人間が……オルフェノクに！？」

「どうなってるの……？」

さやかとマミは驚きを隠せない。キュウベえは考え込むように、まどかは青白い顔で口を押さえ黙り込んでいた。もっとも、彼女達は『知らない』のだから仕方が無いのだが。

「……あれがオルフェノクだ……死んだ人間が生き返って誕生する怪人……」

「「！」「」」

そう、オルフェノクは死んだ人間が極稀に生き返って誕生する存在なのだ。普段は人間と同じ姿だが、怪人としての姿になることも出来る。大抵は、その力におぼれ、人間を襲うようになる。目の前のオルフェノクのように……。マミ達は人間からオルフェノクとなる過程を見ていない為、それを知らなかったのだ。

「それって……『人殺し』ってことじゃなか！」

さやかが叫ぶ。マミは顔色を失っていく。マミもまた、オルフェノクを倒してたのだから。そんな空気の中、巧はベルトを装着、ファイズフォンを開き変身コードを打つ。

「ちよつと……巧！？」

さやかが巧を止めようとする。

「さやか、こいつらは人間を襲うんだ。倒さないと駄目だ」

「でも……それって『人殺し』と同じなんだよ！？」

さやかは昨日、オルフェノクが倒されたとき喜んだことを後悔した。まどかやマミも同じ思いだった。



「確かにそうかもしれないな……けどな。これが、俺の選んだ道なんだ」

そう言って、巧はENTERを押す。

《Standing by》

「夢を守る為なら……俺は戦う！　どんな罪も背負ってやる！　変身！」

巧はファイズフォンを天に掲げ、ベルトにセットする。

《Complete》

「お前ら下がってろ！！」

巧はファイズに変身、手首をスナップさせアントオルフェノクに向かって駆け出した。

（魔法少女になるなら、そういった罪を背負う覚悟がないと駄目だ  
ってことだろ）

三人は巧の言っていたあの言葉を思い出す。まどかとさやかは、その言葉の意味を理解した。

「……二人とも、離れた場所に隠れてなさい」

「ママさん!？」

「美樹さん、あなたが『人殺し』というのなら、私もそうよ」

「あっ」とさやかは声を上げる。さやかは思い出した。ママがオルフェノクを倒していることに。

「戦いつていうのは食うか食われるか、いわば弱肉強食なの。強いものは弱いものを殺す。でも、巧さんはその弱いものを守る為に戦っているの。強いものを敵に回して」

ママはファイズの戦いを見る。一人で戦うその背に、不思議と孤

独を感じない。覚悟を決めたその背中。マミはその背を見て、憧れを感じた。

（私も……乾さんみたいになりたい！）

そしてマミは魔法少女に変身、ファイズに向かって走り出した。

「だから……私も戦うわ！」

~~~~~

「うおおあああ！」

「！ やば……」

アントオルフェノクの武器の剣がファイズに降りかかる。だが。

「させないわ！」

銃声が飛び、アントオルフェノクの剣がはじかれた。マミの放った銃弾が剣に命中したのだ。

「マミ！」

巧が何で来たと言わんばかりの反応を見せる。

「乾さん、私も……戦わせてください！」

「お前……！」

マミは真剣な表情でファイズ……否、巧を見る。その眼差しには強い意志がこめられていた。

「……お願いします」

追い返そうとしていた巧だったが、その眼を見てそれが出来なかった。

「……分かった。いくぜマミ！」

「はい！」

巧……ファイズは右手をスナップさせ、マミは新たに召喚したマスケット銃を構える。

「うおおおおお！」

アントオルフェノクは剣を構えなおし、二人に向かって走る。

「はっ！」

マミはアントオルフェノクの足元を撃つ。ダメージはなくとも有効な手段であった。アントオルフェノクはバランスを崩し、よろけて隙を作ってしまう。ファイズはそれを見逃さない。すぐさま殴打の連続。

「はあっ！」

「グホッ！」

ファイズの蹴りが腹部に入り、アントは腹を抱える。そしてファイズはアントオルフェノクの頭をつかみ殴り飛ばした。ふらふらになりながらもアントオルフェノクは立ち上がり、マミに襲い掛かる。
「死ねえええ！！」

アントオルフェノクは剣を振り落とすが、リボンでそれをガードする。そして、そのままリボンが剣を奪い取った。

「何……はッ！？」

驚くアントオルフェノクだったが、腹部に違和感を感じてそこを見る。すると、マスキット銃二丁の銃口が触れていた。

「流石にゼロ距離ならダメージはあるわよね？」

マミはマスキット銃を同時に発射。これは効いたようで、アントオルフェノクを声上げてよろよろと後ろに後退する。そのまま、胸元のリボンを伸ばしアントオルフェノクを縛り付けた。

「乾さん、今です！」

「まかせろっ！」

ファイズはミッションメモリーを取り外してファイズショットに取り付ける。

《Ready》

ファイズはファイズショットを装着、ファイズフォンを開きENTERを押す。

《Exceed Charge》

フォトンブラッドがフォトンストリームを駆け巡り、右手に集中する。

「行きますよ!」

「こい!」

縛り付けたアントオルフェノクをファイズに向かって放り投げる。

「うわあああああッ!」

そして、叫びながらこちらに向かってくるアントオルフェノクを、ファイズが『グランインパクト』で迎撃した。

「やああああ!」

アントオルフェノクはファイズショットで思い切り殴り飛ばされ、青い炎を吹き上げて爆発、灰と化した――

「巧! マミさん! 大丈夫!」

さやかが駆け寄ってくる。

「今度は喜ばないんだな」

ファイズは皮肉そうに言う。

「まあそりゃ……元人間って言われると、正直……」

「それよりもマミさん……魔女の方は……!」

周りが突然、歪みだした。

「どうやら、魔女^{そっち}から来てくれたみたいね。乾さん。これからも、一緒に戦ってくれませんか?」

マミの共闘の誘いだ。ファイズはそれを鼻で笑う。

「いまさら何言ってるんだ。俺達^{なかま}はもう、共に戦う戦友^{なかつま}だろ……」

「……はい!」

マミが笑みを浮かべた。

「ぎゃきゃ!」

鎌のような使い魔がこちらに向かってくる。ここはもう魔女の結界、油断を許されない戦場。

「鹿目さん、美樹さん、気をつけて！」

マミは魔法でパワーアップしたバットをさやかに渡し、マスケット銃を構える。ファイズが使い魔に向かって駆け出し、マミ達もまた走り出した。

（乾さんと一緒に戦えば、もっと強くなれるかもしれない……そして、なれるかもしれない。何も恐れない、『正義の味方』に！）

ファイズとマミの共闘、マミの巧への憧れ、これが運命にどんな影響を与えるのか……それは、まだ先の話である……。

~~~~~

なるほどね……それがオルフェノク、興味深いね……そして、ファイズ。魔法なしに魔女に対抗できうる存在。……場合によっては……ね。

~~~~~

同時刻ほむらの家。

「オルフェノク……ファイズ……どれも今までの『時間軸』にない存在。一体、何がどうなっているというの……？」

ほむらは焦りを感じていた。まだ痛む腹部をさすり、考え込む。

「こちらの武器は効かない……こんなことで守れるの……？」 『約束』を、あの娘を……」

To Be Continued.

第11話（後書き）

巧「今回は今回の続き、ファイズとマミの共闘魔女編だ！」

マミ「第12話サブタイトル未定！」

キュウベえ「今回僕の出番が少ないじゃないか。しかも次回は出番
すらないなんて……」

作者「読者は言っている。『QBざまあw』ってな！」

杏子「アンタもこっちにこいよ……光はまぶしすぎる」

さやか「杏子が地獄の住人にいいい！？ 構ってあげるから帰って
きてえええ！！」

第12話（前書き）

作者「50000アクセス突破！ 皆さんありがとうございます！
」

まどか「時間がかかってごめんね！」

マミ「前は乾さんと協力してオルフェノクを撃破！」

さやか「かませだったうえに説明されなかったアントはマジ不憫」
巧「じゃあ行くぜ！」

第12話

武家屋敷のような空間……今回の魔女の結界だ。鎌や分銅のような使い魔が飛んでくる。巧の変身するファイズは、ファイズフォンを一度に光弾を3発撃てる拳銃モード『Burst mode』にする。さらにファイズポインターをファイズフォンにセットし、遠距離射撃を可能にした。

「巧今回はかなりやる気なんじゃない？」

現在いまだにバットを使っていないさやかがバットを振り回しながら言う。

「相手が刃物と分銅だからな……まあ、使い魔自体危険だけどな！ファイズとマミは使い魔を打ち抜きながら前へと進んでいくのだった。

~~~~~

「さて……どうすればいいのかしら」

場所は変わってほむらの家。ほむらはオルフェノクに対抗すべく策を練っていた。ほむらの武器は効かない。自身の魔法を使っても勝てるかすら怪しいのだ。

「ファイズ……あのベルトさえあれば……」

ほむらはあのオルフェノクをたやすく葬ったファイズを思い出す。あのベルトさへ手に入れば、そうほむらは考える。が、ファイズは未知の存在。自分に使えるのか、使えたとしても、『あの存在』を倒せるのか。結局のところ、一番の策はファイズである乾巧と手を組むことだった。ほむらは巧にもらったグリーンフィードを手に取りじっと見つめる。

「……私は誰にも頼らないと誓った。けど……乾巧、少しは信頼するに値するかもしれないわね……」



## 第12話【二人の戦士、一人の思い】

「マミさん……巧さん……」

まどかはさやかの背に隠れながらファイズとマミを見ていた。さやかは使い魔が近づいてこないで、退屈そうにあくびをしており、あまり戦いを見ている様子ではない。だが、まどかは二人の戦いから目をそらすことなくじっと見続けていた。正直、戦いは怖い。が、まどかの脳裏には、ある思いが生まれつつあった。

（もし……もしも……）

その瞬間、結界が大きく変動していく。

「魔女……いえ、なりかけの使い魔ね」

「なりかけてことは……既に襲われた人が……!？」

さやかは歯を食いしばり地団駄を踏む。被害が出てしまっていることに悔しさを感じているのだろう。無論マミも悔しい思いをしていないわけではない。だが、今は目の前に現れようとする強敵を迎え撃つ為に余計なことは考えないようにしているのだ。ようは、気持ちの切り替えだ。

「美樹さん、気持ちにはわかるけど今は目の前のことに集中しなさい。足元をすくわれるよ?」

「……はい」

マミはそう言いながら新たに召喚したマスケット銃を構える。さやかもバットを構えなおし、ファイズもいつでも迎え撃てるように身構える。そして、魔女もどきが現れた。

案山子のような外見。鎖鎌を持っている。あたりは鎖だらけ。まるで蜘蛛の糸のように絡まり、雪の結晶のようになっている。

『鎖の魔女』、その性質は「束縛」。ただし、あくまで親の話。今マミの目の前にいるのは親の姿をまだ真似ている不完全な状態。成長途中の使い魔だ。おそらく、後一人人間を食らえば魔女となり

グリーンフシードをはらむだろう。

「マミ、いいのか？ もう少し待てば魔女になるぜ？」

「なっ……巧何言ってるのさ!？」

ファイズがいやらしそうにマミに聞く。魔法少女にとってグリーンフシードは必須。特に今の状態なら、攻撃せずに時間が経つまで待つのが普通だろう。

「……乾さん、私の答えは分かっているはずですよね？」

マミは鼻で笑い答える。魔女になりかけだろうが関係ない。人間の脅威になるなら、倒すだけ。マミは自分の利益より人の命を優先させる魔法少女なのだ。それは、巧とはまた別の形で人を守る戦士  
の意思。

「……そうだな。行くぜマミ」

「はいっ！」

マミがまどか達に結界を張ると、鎖がマミ達を捕まえようと急速に向かってくる。ファイズはためしにファイズフォンで撃ってみるが、全く効き目がない。ファイズは舌打ちし、マミはリボンを伸ばし鎖に対抗する。鎖の進行を止めようとするが、弾かれてしまう。マミとファイズは鎖を跳んで回避、マスケット銃とファイズフォンで魔女もどきを狙い打つ。が、鎖でガードされる。

「堅<sup>かった</sup>いなあ……」

「ここは、大技で行きましょう！」

「「「うえええええ!!?」」」

そう言って、マミの両腕には大型のバズーカが装着される。三人は流石に驚いた。

「そんなのありか!？」

ファイズが思わずつつこむ。マミはそれを無視して発射。魔女もどきに命中すると魔女もどきは叫び声を上げて退く。流石に防ぎきれなかったようだ。ファイズはひるんでいる魔女もどきにショットを次々と打ち込んでいく。

「ギャアアア!！」

「よし……効いてるな！」

ファイズは手ごたえを感じる。が、魔女もときもただでは終わらない。鎖がファイズを拘束したのだ。

「あっ……巧さん！」

まどかが思わず叫ぶ。

「しまっ……うおあああ!!?」

ファイズはそのまま振り回され、壁に向かって投げ飛ばされる。が、ファイズは自力で鎖を破る。

「こんなので……縛ったつもりか！」

ファイズフォンをベルトに戻し、取り外したミッションメモリーをファイズポインターに取り付ける。ファイズは壁に足をつけ、右足にファイズポインターを取り付けて、ファイズフォンのENTE Rを押した。

## 《Exceed Charge》

「はっ！」

ファイズは壁を蹴り、魔女もときに向かって高く跳んだ。魔女もときに向かってポインターから赤いレーザーを打ち出し、魔女もときを拘束する。『クリムゾンスマッシュ』だ。ファイズはそのまま蹴りの体勢に入る……が。

「おぶっ!!?」

「あっ……!!」

「「マミさあああああんッ!!?」」

なんと、マミも『ティロ・フィナーレ』を撃つためにリボンをとランポリンにして高く飛び上がったのだ。そこで、ファイズの顔を踏んづけてしまったのだ。まさかの連携失敗にまどかとさやかは同時につっこんでしまう。

「……あっ！」

マミは既に『ティロ・フィナーレ』の発砲準備をし終わり、発砲まで後少しだった。マミは急いで標準を魔女もどきに戻そうとするが、光弾は発射されてしまった。そしてそれは偶然、取り残された赤い円錐に命中。すると、『クリムゾンスマッシュ』が発動した時のように、円錐が使い魔目掛けて動き出した。

そしてそれは魔女もどきに命中しドリルのように魔女もどきをえぐっていき、とどめの光弾が魔女もどきを飲み込んで大爆発を起こした。マミは地に舞い降り、紅茶をすすってつぶやいた。

「……『ロツソ・ティロ・フィナーレ』」

「……後で言うんですね」

~~~~~

「マあああミいいいいいいっ！」

「……ごめんなさい」

「「こ……怖い」」

魔女もどきとの戦闘を終え、先ほど蹴落とされた巧は泣く子も黙るというより、鬼すら泣いてしまいそうなぐらいな勢いで切れていた。巧から感じる怒りのオーラにマミどころか、まどかとさやかまでもが脅えていた。

「何がロツソだあ……？」 「ごめん」の一言もないのかあ？」

「す、すいません」

「お前……顔蹴られた時見えたんだぞ？」

「……え？」

巧の一言にマミはぼかんとした表情をした。

「まどか、さやか……お前らマミのパンツがどんなんだか知りたくないか……？」

先ほどの怒りの表情はなく、巧は笑っていた。だが、それがむしろ怖い。

「えええええあ、あの巧さん!?!」

「マミさんのパンツ……大人な感じ? かわいい系?」

顔を真っ赤にしながら困惑するマミ、変なところに食いつくさやか。

「これは罰だマミ……お前は恥じらいを覚えろ……! いくぞマミのパンツはなあ」

「ふんふん」

「やめてえええええええ!!」

「やめようよ皆……」

もはやマミの反応を楽しんでいる巧、パンツに興味津々のさやか、顔を真っ赤にして泣きながら止めに入るマミ。それを見て、まどかは苦笑いしていた。

——私、正直戦うのは怖いよ。戦いは命の危険があるし、いつかオルフェノクと対峙するかもしれない。その時私は、戦えるのか、倒せるのか……怖すぎて自分にもわからないよ。

……でも、巧さんは自分から罪を背負って誰かのために戦っている。マミさんも人助けのために、自分が傷つきながらがんばってる。そんな二人の姿はとっても素敵で、かつこよくって……もし、もしも私にも誰かの為に役に立てる、駄目な自分でも何かできるんだっと思うと……それは、とってもうれしいなって……

「……思っちゃったり」

まどかはくすりと笑って、騒ぐ三人を見る。すると、マミは魔法少女に変身しており、マスケット銃を巧とさやかに向けていた。

「……もう駄目……皆死ぬしかないじゃない!」

「落ち着けマミ! 言わねえから! 言わねえからそれ下ろせ!」

「ていうかなんでそこまで過剰反応するんです!? もしかしてかなり恥ずかし……いやいや何にも言ってませんから早く下ろしてくださああああい!!」

「……早く止めないとなあ」

そう言って、まどかはマミに駆け寄っていくのだった。

——戦うことはできないかもしれない……けど、守ることだった
らできるかもしれない。そうなれば、いつか私も……マミさんや、
巧さんみたいになれるかな？

「いい駄目よ」

遠くから誰かがつぶやく。無論、それは暁美ほむらだ。

「鹿目まどか……あなたはあなたのままでいい、変わる価値はない。

……やはり乾巧、あなたは私の障害てきなの？ それとも……」

ほむらの握るあの時のグリーンフシード。そして、ほむらは誰にも
気づかれぬまま、その場をしずかに立ち去ったのだった……

To Be Continued.

第12話（後書き）

巧「明るめに戻ったな」

作者「平和な内は明るくしたくて……」

マミ「解説ね」

アントオルフェノク…蟻の特質を持つ。剣が武器。ぶっちゃけかませw

ロッソ・ティロ・フィナーレ…ティロフィナーレをあの円錐に撃ち込んで発動する。でも使うほどのもんじゃない。

鎖の魔女…性質は「束縛」。気に入ったものは全て自分のものにしようとする。魔女自体は未登場。使い魔が鎌や分銅なのは鎖つながり

さやか「鎖だけに？」

マミ「前回書き忘れたアントオルフェノクのことまで書いてるわね」

さやか「（スルーされた）……で、次回は？」

ほむら「未定だけれど……巴マミ……」

まどか「マミさん……」

巧「マミ……」

マミ「なにこれ！？まさかシャルロッテ戦！！？」

さやか「……次回もよろしくー」

キュウベえ「今回はついに番がなかったよ……」

作者「別にいいじゃん。後からでまくりなんだから（本性が）」

第13話（前書き）

最近更新速度が落ちてますね； 元々不定期更新前提なんですけどね……

前回のあらすじ

- ・合体必殺技
 - ・マミさんマジ厨二
 - ・まどかの決意？
- まどか「それでは！ 第13話始まります！」

第13話

「はい、お疲れさん」

マミの家に居候するようになってから巧は、さやか『フリーター』発言を受け、コンビニでバイトを始めていた。バイトなどは長続きしない巧ではあるが、マミに迷惑をかけたくないのか、バイト初日で好印象を与えていた。……まあ、口は悪いが。

巧はバイトを終え、マミの家に帰ろうとしていた。オートバジンに乗ろうとする巧に、少女が声をかけた。

「乾巧、話がある」

それは無論、暁美ほむらだった。

「……そう、オルフェノクにはそんな秘密が」

巧はオルフェノクのことをほむらに教えた。人間がオルフェノクに変化するところを見たほむらだったが、やはりそれなりにシヨックを受けていた。

「……乾巧、私にはオルフェノクに対しての戦力は無いに等しい。だから……できれば手を組みたい」

「なんで俺だけなんだ？ マミだって」

「巴マミはどうでもいいの。それとできれば、巴マミを鹿目まどかや美樹さやかから切り離してほしい。巴マミは二人にとって有害な存在なの」

「……どういふことだよ」

巧は眉間にしわを寄せる。マミを有害扱いされ、巧は軽い苛立ちを覚えた。

「二人のことを考えているのなら、普通ならすぐに引き返させるべきよ。なのに巴マミは逆、二人を魔法少女に引き込もうとしている。

魔法少女と魔女との戦いは生ぬるいものじゃない、生死をかけた殺し合いなの。あなたとオルフェノクのようにね」

ほむらは淡々と自分の意見を述べる。巧は黙ってそれを聞いていた。

「……あなたはこう思っているの？」

「俺はまあ……まどか達にはあまり魔法少女にはなってほしくないな」

「……そう」

ほむらはなぜかほっと一息をつき、安心した顔つきになる。

「乾巧、ちゃんと巴ミの戦いを見ることね。おそらくあなたは幾たびの戦いに勝ち抜いてきた、だからわかるはずよ。巴ミが有害な存在である決定的な証拠が」

そう言いほむらは立ち去ろうとするが、巧は待てと言ひほむらを止めた。

「……俺は確かに魔法少女になることには賛成はできない。けどだからって、ミミとあいつらを切り離すことはできない。協力ならいくらでもする。けど、ミミ達は絶対に離さない」

「まあ……今はまだ、いいわ。彼女達が魔法少女にさえならなければ。ただ覚えておきなさい。巴ミはいずれ……化けの皮をはがすわ」

「おい待っ……！」

巧が再び引きとめようとするがほむらは早々を走り去ってしまった。

「なんなんだよあいつ」

巧はため息をこぼし呟いた。その時だった。ファイズフォンから着信音が流れ、巧は通話に応じた。

「巧大変なんだ！ オルフェノクが……！」

さやかから電話の呼び出し。ふと啓太郎を思い出したが、そんな

のは今は関係ない。場所を聞き出し、オートバジンで走り出したのだった。

「あーくそ！　どいつもこいつも！」

第13話【闇夜の変身、紅き一閃】

「おおおおお！！！」

マミ達はオルフェノクから逃げていた。マミのマスケット銃では倒せない、マミは足止め程度に攻撃を仕掛け距離を離そうとするが、相手はなかなかひるまない。まどかとさやかは息切れを起こしつつも走り続けていた。逃げる先は、人通りのない安全な場所。だが、世界最長のカブトムシのようなオルフェノク、『ヘラクレスオルフェノク』が執拗に追う。

「マミさん……！」

まどかが不安そうマミに声をかける。

「安心して……私が絶対にあなた達を守る！」

「守る……？　無理だなあ！」

ヘラクレスカブトオルフェノクは自身の武器である槍を召喚する。そして、槍はその長さを変えてまどかに襲い掛かる。

「え……！？」

「鹿目さん危ない！」

マミがリボンでギリギリのところでもどかを守り、マスケット銃を変化、ロケットランチャーのような小型のバズーカを作り出した。

「食らいなさ……！？」

バズーカを放とうとしたマミであったが、敵の槍がそれを阻んだ。槍がむちのようになり、叩き落としたのだ。マミは唇を噛み、新たに召喚したマスケット銃で応戦する。

「きゃあっ！」

「まどかっ！！！」

だが、事態は急変する。まどかが転んでしまったのだ。さやかは

急いでまどかを立たせようとするが既に時遅し、ヘラクレスオルフェノクが追いついたのだ。マミは急いで助けようとするが、間に合わない。

「ふはははは……あきらめろ！ お前達はおぶふっ!!?」

ヘラクレスオルフェノクがまどか達に手をかけようとした瞬間、銀色のバイクに轢かれた轢き飛ばされた。

「「「バイクに轢かれたああああ!!?」」」

あまりの事態に思わず三人は突っ込んでしまった。

「お前ら！ 大丈夫か!?!」

それはもちろん、乾巧であった。

「巧もっと早くに来てよ！ 危なかったじゃんか!」

「そんなことよりあの人轢かれてかわいそうだよ!?!」

巧の到着が遅かったことに怒るさやか、オルフェノクを心配するまどかなのであった。

「おのれ……!」

「まどかとさやかは下がってろ!」

そう叫び、巧はベルトを構える。二人は物陰に隠れる。巧はファイズフォンに変身コードを入れ、腰にベルトをつけようとする。

「させるかあああ!」

「ぐあ!?!」

だが、ヘラクレスオルフェノクは槍の伸ばし、ベルトとファイズフォンを弾き飛ばしたのだ。そしてそれは、マミの足元に落ちた。

「マミ……それを早く!」

巧はベルトを受け取ろうとするが、マミはなんと、ベルトを自分の腰に巻きつけたのだ。

「いえ……私が……戦います!」

そう言って、マミはENTERを押した。

《Standing by》

「な……よぜ！ お前には使え……」

巧はマミが変身できないことを知っている。だが、マミは聞かずにファイズフォンを天高くかかげる。

「……変身ッ！」

ファイズのベルトは使う者を選ぶ。適合しない者はベルトに弾き飛ばされる。巧はマミがベルトに弾き飛ばされると思った……だが。

《Complete》

なんと、マミは紅い光に包まれ、ファイズに変身したのだ。赤いフォトンストリームと眼が光り、闇がファイズの存在を一層引き立てる。

「嘘だろおおおおお!!?」

「どうした巧!？」

驚きを隠せず大声を上げる巧にさやかが思わず突っ込んでしまった。

「よし、行くわよ!」

マミはファイティングポーズをとりヘラクレスオルフェノクに向かってゆく。ヘラクレスオルフェノクは槍を曲げてファイズを攻撃する。

「きゃああ!」

ファイズは弾き飛ばされ、しりもちをついた。それでもファイズは立ち上がりヘラクレスオルフェノクに殴りかかる。だがそれらは全て避けられ蹴りを食らいファイズは飛ばされる。

「くっ……不味いわね……!」

マミはファイズフォンを取り外し、昨日巧が使っていたフォンプラスターを使おうとするが……

「……どうすればいいの!？」

「だから俺に返せえええ！」

マミはファイズフォンの使い方を知らなかった。早くベルトを返せと巧が叫ぶ。

「……邪魔だ」

ヘラクレスオルフェノクもあきれながらもファイズを攻撃、ファイズは吹き飛ばされ、変身が解けマミの姿に戻る。

「痛た……まだまだ！」

変身コードは覚えていたようで、マミは変身コードを入れ再び変身しようとする。

《Standing by》

「変身！」

だが。

《ERROR》

流れたのは『Complete』ではなく『Error』。すなわち……

「きゃあ!？」

「何っ!？」

ベルトに弾き飛ばされ、ベルトはヘラクレスオルフェノクの足元に落ちる。それを見て巧は驚く。そして、ヘラクレスオルフェノクはそれを手に取った。

「ファイズのベルト……もらったぞ」

「させるかああああ！」

その瞬間、巧はさやかから盗ったバットを投げ、そのバットはヘラクレスオルフェノクの顔面に直撃する。

「ああっ！ マミカルバットが！」

「マミカルバットってなんだよ!？」

さやかの謎の発言に突っ込みながらも巧はベルトを取り返し、腰に巻きつけファイズフォンに変身コードを入れる。

《Standing by》

「後で覚えとけよ……変身！」

《Complete》

巧はファイズに変身、右手をスナップさせヘラクレスオルフェノクに向かって走り出す……ことはせず、ファイズフォンを取り出して「106」のコードを入力。『Burst mode』にしミッシンメモリを取り出す。そしてオートバジンのハンドルにセツトし、振り向き際に一気に引き抜いた。

《Ready》

ファイズの武器のひとつ、『ファイズエッジ』と呼ばれる剣だ。ファイズは右手に剣を、左手にフォンブラスターを持ちヘラクレスオルフェノクと対峙する。

「うおあああ！」

先に動いたのはヘラクレスオルフェノク。自在に伸び、曲がる槍でファイズに襲い掛かる。ファイズはファイズエッジで槍を防ぎつつフォンブラスターで攻撃する。だがヘラクレスオルフェノクの体は硬いようで、決定打にはならない。ファイズは舌打ちしながらファイズフォンをベルト戻し特攻を仕掛ける。槍の矛先が迫るが、ファイズは相手が反応できないギリギリのタイミングで避ける。

「やあっ！」

ファイズの一撃がヘラクレスオルフェノクに命中する。ヘラクレ

スオルフェノクは槍を元に戻しファイズと攻防を繰り返す。斬つては斬られ、血の代わりのように辺りに火花が飛び散る。ヘラクレスオルフェノクはファイズから距離を離そうとするが、ファイズは逃がすまいと前へ前へと乗り出していく。そんな中、ヘラクレスオルフェノクは地面に槍を突き刺した。

「なんのつもりだ？」

「くくく……こういうことだ！」

ヘラクレスオルフェノクは槍の石突に乗り、槍を伸ばした。地面に刺さった槍はヘラクレスオルフェノクの乗せたまま伸びていく。

「な……なんだと!？」

ファイズは敵の予想外の行動に同様に隠せなかった。

「ははは……食らえい！」

ヘラクレスオルフェノクは槍から降り、槍を元に戻しファイズに向かって急降下していく。ヘラクレスオルフェノクは槍の矛先をファイズに向け、ファイズは避けられずにまともに食らってしまった。ファイズは仰向けで倒れこむ。

「がはッ!!」

「巧さん！」

「まどか危ないって！」

まどかが叫びファイズの元へ行こうとするがさやかに止められる。

「ぐッ……はっ！」

ファイズは何とか起き上がるが、ヘラクレスオルフェノクはファイズに向かって槍を構え飛び掛る。

「死ねえええ！ ファイズウウウ!!」

「巧さあああん!!」

「逃げろ巧いいい！」

まどかは泣きながら飛び出そうとする。さやかはそれを止めながらも巧に向かって叫ぶ。

「駄目……間に合わない！」

マミはリボンを使いファイズを助けようとするが、距離が遠く間

に合いそうも無い。誰もが諦めた。が、ファイズ……巧は諦めていなかった。

「うおらああ！」

ファイズは向かってくる槍をブレイクダンスの要領で腕を軸にし、回し蹴りで槍の蹴り軌道をそらしたのだ。

「なっ……しまった！」

勢いに任せていたヘラクレスオルフェノクは軌道をそらされそのまま狙いとは全く別の場所に攻撃、槍の矛先が地面をえぐる。ファイズはヘラクレスオルフェノクを蹴り飛ばし槍から放す。ファイズはそのままヘラクレスオルフェノクに特攻を仕掛ける。武器を失いながらもヘラクレスオルフェノクはファイズに立ち向かうが、ファイズエッジの連続攻撃に太刀打ちできずにいた。

「はぁ！」

ファイズの突きでヘラクレスオルフェノクは吹っ飛ばされる。ファイズはファイズフォンを開き、ENTERを押す。

《Exceed Charge》

フォトンブラットによるエネルギーが集中し、ファイズエッジの刀身がより一層輝きを増してく。ファイズの必殺技、『スパークルカット』だ。ファイズエッジをヘラクレスオルフェノクに向かって振り上げ、赤い衝撃波が地面を走る。衝撃波はヘラクレスオルフェノクに命中、その瞬間ヘラクレスオルフェノクは赤いサークルに拘束された。ファイズは動けなくなったヘラクレスオルフェノクに向かって駆け出し、何度も斬りつける。

「やああああ！！」

そして、力を込めた一閃、ヘラクレスオルフェノクを拘束していたサークルが消え、同時にヘラクレスオルフェノクは青い炎を吹き上げ灰になった。

「……痛い」

「大丈夫……じゃ、ないですよね」

戦いが終わった後、マミは巧に拳骨をもらっていた。一応変身を解いた後で。漫画的表現で例えるとすればマミの頭にはでかいたんこぶができているだろう。まどかはマミを見て苦笑いしていた。

「しかし、ファイズの武器って剣もあったんだねーかつこいいなあ。あたしも魔法少女になった時には剣がいいなあ」

さやかは羨ましそうに言う。

「お前が剣持ったら前へ前へって突進して行きそうだからなあ」

巧の言葉にさやかがなんだよーと突っ込む。そんな話をしつつも、巧はあることをずっと考え込んでいた。

——マミはベルトを使えないはずだ、なのに変身できた。いや、それならまだいい。一度変身できたはずなのに二度目はできなかった。これはどういうことだ？

魔女や魔法少女のこともいまだ謎だらけ……これはなんか、どんなでもないものが絡んでいる、そんな気がしてならない……

マミがファイズに変身したこと、変身できたはずなのに今度はできなかった。ベルトにも異常はない。今夜の不可解な出来事に頭を抱える巧であった……

To Be Continued.

第13話（後書き）

キュウベえ「前回に続いて今回も空気かい？ 感情のない僕も流石に怒るよ？」

作者「マジすんません。ま、次回からは出まくりなんで……ええ」

巧「今回からシャルロッテ戦にはいるかと思われてたみたいだけど、次回からだからな」

作者「もしかしたら外伝とか別の話はさむかも」
ほむら「今回のまとめよ」

マミの小型バズーカ…未使用。一応「S・ティロ・フィナーレ」という技が打てる。

マミカルバット…マミの魔法で強化されたバットのこと。さやかが勝手にそう呼んでいる。

マミファイズ…あっさりやられたので詳しい戦闘能力は不明。どうして変身できたのかも不明。ちゃんとしたファイティングポーズをとる。銃が似合いそう。

ヘラクレスオルフェノク…ヘラクレスオオカブトの特質を持つ。名前が長いのでヘラクレスに縮めた。体は甲虫だけに硬い。武器は伸縮自在で曲がる槍。使い方を知らなかったとはいえマミファイズを倒し、巧ファイズもピンチに陥るなど戦闘能力は高かったが、自身の油断と巧の機転によって敗れた。

杏子「へくしっ！ あたしの出番はまだか」

巧「まだだ。もうちょい待て」

マミ「次回はついに運命の戦いが……！？」

さやか「次回555☆MAGIKA第14話【願いと夢、マミの思
い】！ 次回も目が離せない！」

作者「外伝は【13・5話】！ ま、やるならの話ですが
キュウベえ「次回の話と契約もよろしくね！」

ほむら「黙りなさい」

外伝【第13・5話 Part A】（前書き）

まさかの外伝パート分け；

久々にキュウベえ出ますねw

長さ的にもうこれナンバリングでいいよと思ったけど、前回で14話からシャルロット戦っていっちゃったからなあと；

というわけでまさに13・5話です。ではどうぞ。

外伝【第13・5話 Part A】

「巧！ お願いあるんだけど！」

ある休日、さやかは巧に願い事を頼んでいた。

「さやか、僕と契約すれば願いなんて簡単にきゅぷッ」

「うるさい」

キュウベえはちゃっかりさやかに契約を進めるが巧にチョップを食らい中断されてしまった。

「あたし、まだちゃんとした願い事とか決まってるからさ、力不足だなあって思ってる……筋違いだとは思うけど、あたし、強くなりたいんだ。だから……お願い巧！ あたしを鍛えて！」

外伝【第13・5話 Part A】

「そんなこと頼むくらいなら、いっそ契約した方がいいんじゃないかな？」

「お前は黙ってろ」

契約契約と口にするキュウベえに腹が立ち言葉が乱暴になる巧。

「あたしさ、まどかを守る立場なのにつつもママさんや巧に危ないところ助けてもらってるさ。自分で守れないようじゃ魔法少女になっても駄目のままだなって思ってる……ほんとにはママさんに相談するつもりだったんだけど、よく考えたらあの人は射撃だから参考にできないし、でも、ファイズは剣あるし肉弾戦多いから、参考にできるそこは多いだろうなって」

「なるほどな」

確かに、と巧は呟く。さやかは強がってはいるが結局はただの女子中学生、使い魔におびえてばかりだ。そのせいで使い魔を襲われかけ、ママやファイズに助けられることも少なくはなかった。

「よし、わかった」

さやかと知り合ってわかったこと。さやかが意地っ張りだということだった。おびえてても大丈夫だと嘘をつき、どこか無駄にプライド高いところがあった。そのさやかが頼みごとをする以上、巧もほうって置けなかった。そんなわけで巧は了承したのであった。

~~~~~

「……で、なんでゲームセンター？」

「ここには色々と役立ちそうなのがあるからな。ほら、行くぞ」  
そんなこんなで、巧達はゲームセンターの中に入っていた。ちなみに、ちゃっかりまどかとマミがついていたりする。

「とりあえずまどか。マミと一緒にゲームしてこい」

「え……あ、はい。マミさん、行きましょう！」

「え……ええ！」

（誰かと一緒にゲームなんて、いつぶりかしら……ああ、し・あ・わ・せ）

「あの……マミさん大丈夫ですか？」

頬を赤らめ涙を浮かべるマミなのであった。

「なんでまどかとマミさん離れさせたわけ？」

「マミはともかく、まどかにはちよつと刺激が強すぎるからな。ほら、こっちだ」

そう言って、巧はさやかを誘導していった……

「これだ」

巧が指差す方向には、あるゲームがあった。

「『アンデットバスター』……ってこれホラーじゃん！？ しかもかなりやばいやつ！」

説明しよう！ 『アンデットバスター』とは、大量のゾンビを打

ち倒しながら進んでいくホラーシューティングゲームである！　これならまだ普通であるが、このゲームに出てくる敵や描写がリアル過ぎて大の大人でも泣いてしまい、ホラー好きや外国人にも「これは怖すぎる」と言わせるほどのだ。例を挙げれば、ゾンビの頭を打ち抜けば血や脳の破片が飛び散ったり、腹を撃てば腐った腹の皮膚が崩れ去り、内臓がずると落ちていくなど、グロテスク描写や怪物のデザインが外国のホラーゲーム並み、それ以上なのだ。そのためこのゲーム、やる人が少ないのだ。なぜこんなのを作ったのだろうか。

「無理無理！！　なんでこんなゲームやらされんの！？　ていうかランキングのトップに『MAMI』ってあるけどまさかマミさん！？」

「多分違うと思うぞ」

以前マミもやろうとしたらしいが、デモを見ただけで恐怖してしまい止めたらしい。その経験から、巧にどうだろうかと進めたのだった。ちなみに、その夜マミは泣いたらしい。

「これに慣れれば使い魔や魔女も怖なくなるだろ？」

「いやそうかもしれないけど荒治療過ぎる！　ちょ、お金入れんなあああ！」

「安心しろ、このゲーム難易度高いらしいからな、俺もペアでやってやる」

さやかに無理やり銃型のコントローラを渡し、ゲームが始まる。

『時は近代、一人のマッドサイエンティストが生み出したおぞましい怪物達によって町が支配され……』

ゲームのあらすじが流れ（ちなみに英語音声である）、さやかは息を呑む。そして、ゲームが始まった。

『グオオオオ！』

「ぎゃあああああああああああッ！　怖いいいいいいいい



!!」

「……確かにこれは少し……」

巧ですら引く程のリアルさ。正直、これが小説でよかったと作者は思う。

「ぎゃあああああ! 脳みそがああああ! 内臓がああああ!」

「わかるけど少し黙れよ。周りに迷惑だぞ」

涙を流し、恐怖しながらもさやかはゾンビを撃っていく。巧はなんとか冷静を保ちつつ進んでいく。

~~~~~

『Mission Complete! You's Perfect!』

「よし、やったぜ!」

「はあ……はあ……、二重の意味で死ぬかと思ったあ……」

どうにかゲームをクリアした巧とさやか。さやかは涙を流しっぱなしであった。

「夜絶対泣くよこれ……」

「よし、今度はあそこだ」

巧が指差したのは、バッテリーセンターゾーンであった。

「なるほど、ここのは速度をランダムにできるのか、ちょうどいい」
「……今度はなに?」

「反射神経とか、反応系の能力を鍛える。これから速度ランダムで球が飛んでくるから、それをちゃんと狙って打て」

そう言っ、巧はマシンを稼働させる。ちなみに、速度は80〜180kmまで出るらしい。そして、一球目が飛んでくる。

「ふん！」

さやかは渾身の力でバットを振るが、空振りに終わる。

「どうした！ 目をつぶってたら当たんねえぞ！」

「わ……わかってるって！」

さやかは眉間にしわをよせ、次こそはと力む。巧を腕を組み壁によしかかりながらそれを見ていた。巧はふと、ある事を思い出す。さやかの行動を思い出そうとしたときによりみがえった、ほむらのあの言葉を。

『乾巧、ちゃんと巴マミの戦いを見ることね。おそらくあなたは幾たびの戦いに勝ち抜いてきた、だからわかるはずよ。巴マミが有害な存在である決定的な証拠が』

巧は思い出してみる。マミの戦いぶりを。初めて会った時、圧倒的な力を見せ付けて使い魔を一掃した。薔薇園の魔女との戦い、ピンチにはなったものの、『ティロ・ファイナー』で撃退した。アントオルフェノク……は流すとして鎖の魔女の成長途中の使い魔……必殺技だそうしたらマミに顔面を蹴られたときのことを思い出す。それからは魔女退治をするものの出てくるのは使い魔のみであった。それでも、マミは全力で戦っているが。

「おーい巧！ 球でなくなっただ！」

「あ、ああ」

巧は新たに金を入れ、マシンを再び稼働させる。

（まあ……違和感が無いわけじゃない。マミの戦い方は確かに少し妙だ。戦闘が終わればどこからか出した紅茶をすすったり、使い魔を大技で倒したり……）

その時、巧の脳裏にあることが思い浮かぶ。考えたくも無いことが。

（まさか……な）

「おっしゃあ！ だいぶ当たるようになってきたぞおお！！」
さやかの大声が聞こえ、我に帰る巧。さやかはバットを構え、飛んでくる球を正確に打っていく。タイミングのつかみや反射神経がよくなってきたのだろう。

「うりゃああ！」

その日の魔女退治、さやかは果敢に立ち向かっていた。使い魔をバットで打ち返し、その使い魔でさらに使い魔を倒したり。さやかは確実に強くなっていた。

「まさか本当に強くなるなんてな……」

「あれ嘘だったの！？」

巧……ファイズの言葉におもわず突っ込むさやか。しかし仮に嘘だったとしても「嘘から出たまこと」、さやかが強くなったことに変わりはない。ファイズは、仮面の下で笑っていた。

「決めるわよ！ テイロ・フィナーレ！」

《Exceed Charge》

「やあああああ！！」

『テイロ・フィナーレ』、『クリムゾンスマッシュ』が炸裂、使い魔は全滅し結界が消える。今回は使い魔のみだったようだ。

「いよっしゃあ！ 今日とは助け無しでまどかを守りきったぞー！」
さやかは両腕を上げ喜ぶ。

「やったねさやかちゃん！」

「すばらしいわ美樹さん、これも乾さんのおかげですね」
まどかとマミもさやかを見て笑みを浮かべていた。

「これも巧のおかげだわ、バリサンキュー！」

「なんだそれ。でもまあ……」
変身を解いた巧はあきれて突っ込む。そして……

「がんばったな、さやか」
「……ッ!？」

巧はさやかの頭をなでた。巧もまた笑みを浮かべながら。ぽかんとしていたさやかだったが、少しして顔を真っ赤にして巧の手を払った。

「ちょ……止めろって! ……あーもう! 巧相手に……あたし不覚ッ!」

「それはどういふことだ」

さやかは真っ赤になった耳を手で隠しながら巧に背を向ける。巧は眉毛をぴくりと動かし、怒りをあらわにする。

それを見て、まどかとマミは微笑んでいた。

「……和みますねえ……」

「ええ、青春ね」

そう言って、二人は歩きだす。

「おい、ちょっと待って! 行くぞさやか!」

遠ざかる二人に気づき、巧もかけていく。

「……『がんばったな』……か」

さやかは頭を掻き、先ほどのことを思い出した。

「……へへっ」

(舞い上がっちゃってますね、あたし……)

にやけるさやかだったが、まどか達が遠くに言っていることに気がつき、あわてて駆け寄っていくのだった。

To Be Continued.

Next
Part B.

外伝【第13. 5話 Part A】（後書き）

元々は小さい話をまとめる予定だったのに、ここに来てさやか熱爆発ですよw

というわけでさやかちよつと強くなっちゃいました。しかし今回のたつくんなんかキャラおかしいぞ； 何気にPS2ネタもあったり。というわけで外伝続きます。

ちなみに作中出てきたシューティングゲームは架空のゲームです。仮に同名のゲームがあってもフィクションなんで一切関係ありません。

しかし、作中のゲームセンター設備いいなwww もちろんファイマギオリアルですけど。

外伝【第13. 5話 Part B】（前書き）

今回はつきり言って蛇足かつ駄文です。

外伝【第13・5話 Part B】

「魔法少女が変身ですか。それも、一度きりの」

巧はスマートレディと連絡をとり、マミがファイズに変身したことを話していた。スマートレディもそのことには驚いたようだった。「確かに妙ですねえ……その、マミちゃんは何か言ってますでした？ オルフエノクと接触した時のこととか」

「そういや聞いてなかったなあ……」

「乾さん、こちらのことを悟られない程度に探ってくれませんかあ？」

「……なあ、正直に話したら駄目か？」

巧はため息をつき、そう答える。

「どうしたんですか？」

「あっちは俺のことを信頼している、なのに、俺達があいつらを信頼しないってのは、なんか嫌なんだよ」

まだ知り合って一週間もたっていないが、巧とまどか達には確実に絆というものができていた。なんだかんだでお人よしの巧には、その絆を壊すようなことが出来なかった。

「……好きにしたらどうです？」

スマートレディも巧の意中を察し、そんな風に答えた。

「ああ……いずれ話す」

「……さて本題に戻りますが、魔法少女についてなんです、最近魔法少女が集中的に殺されてるという情報があるんです」

「な……オルフエノクにか!？」

「おそらくそうでしょう。そのせいか、オルフエノクをかなり敵視しているようで」

「……そういや、キュウベえの奴がそんなこと言ってたような……」

「とりあえず、私達ももう少し調べを入れます。新しい情報が入次第、また」

「ああ、頼むぜ」

そうして、通信が切れた。

「……俺はママ達を信頼してる……ただ、キュウベえ。あいつだけはどうも信用できないな……」

「……ふう。今日は寝るか」

~~~~~

「……動く時間だ」

「ええ……でも、ばれてないかしら」

「多分、問題はないよ。さ、早く魔女を狩りに行くといい。暁美ほむらにグリーンシードが手に入らないように。それが、君のためになる」

「……ええ。そうすれば……いってきます」

「ああ、いつてらっしゃい」

巧の知らぬところで、暗躍する者。その理由はさだかではない。そして運命は、その大口を開き待ち構えている……

To Be Continued.

### 外伝【第13. 5話 Part B】（後書き）

外伝あれだけでよかったなと後悔してます；

一応14話の伏線をいれてるわけですが、本編に入れろですよ、  
申し訳ございません。僕の構成力が無さ過ぎるせいで；

## 第14話（前書き）

今回は悩み悩んで書きました。結果ごちゃごちゃしてしまい、いまのところ一番長くなってしまいました。

それと今回はキャラ崩壊がございますので、ご注意ください。  
巧「前回のあらすじだ」

・銃火器ファイズ（トーマスさん命名）

・ファイズエッジ活躍

・外伝含むとさやかにフラグ

まどか「こんな紹介でいいんですかね；　それではどうぞ！」

## 第14話

「すう……はあ……」

さやかはとある病室の扉の前に居た。どこか緊張しているようで、深呼吸をしていた。

「……よし」

そして、意を決し、扉をノックした。そして、さやかは病室の中へと入った。

「やあ」

病室にいたのは『上条恭介』<sup>かみじょうきょうすけ</sup>、さやかの幼馴染である。彼は将来有望なバイオリニストであったが、最近事故にあい、現在はリハビリに励んでいる。そんな恭介に、さやかは献身的に見舞いに来ていた。さやかは、上条恭介が好きだからだ。さやかは恭介に一枚のCDを差し出した。クラシック音楽のCDだ。

「うわあ……いつも本当にありがとう。さやかはレアなCDを探す天才だね」

「あはは……そんな、運がいいだけだよ、きっと」

さやかは嘘を言っていた。さやかは恭介を喜ばそうと、必死になってCDを探していたのだ。恭介は早速、CDプレイヤーにCDをセットする。

「この人の演奏は本当にすごいんだ。さやかも聴いてみる？」

「ふえ!？」

そう言っ、恭介はイヤホンの片側を差し出す。さやかは思わず、頬を赤くする。

「い、いいのかな？」

「本当はスピーカーで聴かせたいんだけど、病院だしね」

断るわけにもいかず、さやかはイヤホンをつける。自然と顔が近づきドキドキするさやかであったが、音楽が流れると心臓も落ち着いてきた。クラシックには、心を落ち着かせる何かがあるのだろう。

「……っ……!!」

ふと、さやかは恭介を見る。恭介は窓を方を向き、涙を流していた。さやかは何も言うことができず、ただ音楽を聴くことしかできなかった……

(恭介……)

#### 第14話【願いと夢、マミの思い】

「やああああ!!」

「ティロ・フィナーレ!」

ファイズの『クリムゾンスマッシュ』とマミの『ティロ・フィナーレ』によって使い魔は殲滅された。あれから数日が経とうとしていた。結界が消え去ると空はすでに暗く、マミは電灯の上で巨大な銃を持ち立っていた。

「いやーやっぱマミさんはかっこいいーなー!」

マミの戦いを見て興奮気味のさやか。最近はそのこ力をつけてきている。巧がさやかに戦い方を教え込んだのがよかったのだろう。マミはそんなさやかに半分あきれながら、電灯から飛び降りる。ファイズも変身を解き、巧の姿に戻る。

「もう……見世物じゃないのよ? 危ないことをしているっていう自覚は忘れてほしくないわね」

「いえーす!」

調子に乗っているさやか。だが、巧との特訓で慣れてきたとはいえ、まだ魔女との戦いには内心ビクビクしていた。

「それにしても、グリーンフィード落としませんでしたね」

まどかがつぶやく。

「なんかさー、ここ最近ずっと使い魔<sup>はずれ</sup>ばっかだよ」

「使い魔だって放っておけないわよ。成長すれば、分裂元と同じ魔女になるもの」

「くっ！ やっぱマミさんかっこいいなあ！ 正義の味方って感じだ」

利益を省みずに戦うマミを、さやかは尊敬していた。

「ところでマミ、ここ最近使い魔ばかりで魔力を回復出来てないはずなのに、やけに大技連発してたけど、大丈夫なのか？」

「え……？」

巧の言葉にマミは戸惑う。

「あの……あ、節約してますから！ あまり消費しないように……さ、さあ、行きましょう」

マミは茶を濁し、さっさと歩き出す。まどかとさやかはそのままついていったが、巧は不審そうにマミを見ていた。

「まあ、マミさんもかっこいいけどさ、戦い方を見なければファイズも凄いよね！ あのキック技、めっちゃかっこいいしさ！」

「戦い方なんて綺麗に見せなくていいんだ。別にいいだろ」

「いやいや巧はあまいなあ！ マミさんを見ろ！ 強さと可憐さを併せ持つ、パーフェクトハーモニー完全調和だぞ！」

それを聞き、マミは少し様子がおかしかった。それを、巧は見のがさなかった。

「と、ところで二人とも。何か願いごとは決まった？」

「ん……まどかは？」

「私もまだ……」

魔法少女体験コースが始まり一週間がたっていたが、二人はまだ願い事が見つかっていなかった。

「まあ、そういうものよね。いざ考えろって言われたら」

マミはこれまでも何度か同じ質問をしていたが、いずれもまどか達の返事も無かった。

「あの……マミさんはどんな願い事で魔法少女になったんですか？」  
まどかはふと思った疑問をマミに投げかける。その瞬間、マミの

表情が暗くなった。

「あ、いや！ あの、どうしても聞きたいってわけじゃ……」

まどかは慌てふためくが、マミの静かに口を開く。

「私の場合は……考える余裕さえなかっただけ」

マミの顔がどんどん暗くなっていくが、マミは続ける。

「もう二年になるかしらね……家族でドライブに行った時に交通事故にあって……それはとてもひどかったわ。運転席に座っていた両親は即死、私も死に掛けていたわ。でも、その時に……」

契約した……マミの願いは「生きること」……マミがリボンを使うのは、命を結ぶ為、マミの願いが具現したものだのだ。三人はその話を聞き、驚きを隠せなかった。特に巧には、マミの心境がいたい程わかった。巧もまた、家族を失った一人だったのだから……

「後悔しているわけじゃないのよ。今の生き方も。あそこで死ぬよりは、良かったと思ってる。でもだからこそ、ちゃんとした選択の余地のある子には、キチンと考えた上で決めてほしいの。私にできなかったからこそ、ね」

「マミさん……」

「ねえ、マミさん。誰かの為に、願いを使っちゃ駄目なのかな……」

「え？」

さやか of 言葉に、マミは疑問符を浮かべる。

「例えばの話、あたしなんかよりよほど困ってる人がいて、その人のために願い事をするのは……」

「さやかちゃん、それって……上条君のこと？」

「た、例え話って言うてるじゃんか！」

「上条？」

「さやかちゃんの幼馴染なんです。バイオリンの演奏が上手なんですけど……最近事故にあっちゃって……」

さやかは上条の名前を聞き、思わずうろたえてしまう。一方で巧

は上条のことを知らなかったので、まどかがフォローする。

「……ひどいのか？」

「私はよく知らないんですけど、ひどい怪我だったらみたいで……今はリハビリ中なんです」

まどかからそう聞き、巧はふとある人物を思い出す。海堂直也のことだった。

「別に契約者自身が願い事の対象になる必然性はないんだけどね。前例がないわけじゃないし」

キュウベえがさやかにそう答える。それに、マミが続ける。

「でも、あまり関心できたことじゃないわね。他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはっきりさせないと。美樹さん、あなたは彼に夢を叶えてほしいの？ それとも、彼の夢を叶えた恩人になりたいの？」

「ッ！」

マミの言葉に、さやかは息を詰まらせる。

「同じようでも全然違うことよ。これ」

「マミさん……」

まどかが思わずマミの名前を呼ぶ。

「その言い方は……ちょっと酷いと思う」

さやか、バットを強く握る。マミも言い過ぎたと思ったようで、さやかに謝る。

「ごめんね。でも、今の内に言っておかないと。そこを履き違えたまま先に進んだらあなた、きっと後悔するから」

「……そう、だね。私の考えが甘かった……ごめん」

空気が一気に重たくなる。

「え……つと、巧さん！ 巧さんの願って……夢って何ですか！？」

空気を变えようと、まどかは巧にたずねる。さやかもそういえばと機嫌を直した。願いについて話していた巧には、どんな願い……



夢があるのか、まどか達は興味津々だった。

「俺の夢か？ 俺の夢は……『世界中の洗濯物が真っ白になるみたいに、皆が幸せになりますように』、だな。」

「何それ。なんか幼稚っぽいなあ」

「さやかちゃん、言い方が……！」

巧の夢を聞き、さやかは馬鹿にするような発言をする。

「こんな夢でも、ようやくつかめた初めての『夢』なんだよ。俺にとっては」

「「初めて？」」

まどかとさやかは口をそろえて言う。

「俺さ、昔っから夢とかそういうのが無くて、結構悩んでたんだ。けど三年前、色々あってな。それから見つかったんだ。誰かを幸せにするって夢がさ」

三人とキュウベえはそれを静かに聞いていた。

「だから、俺は戦ってる。誰かが幸せになりますようにってな。だから、さやかと同じようなモンかもな、誰かの為の願<sup>ゆめ</sup>いって意味ではな」

「巧……」

「まあ、願<sup>ゆめ</sup>いってのは見つけるのが大変なんだ。だからさ、もし願い叶えるんだったら、もっと時間をかけてもいいと思うぜ」

「うん……そうだね、ありがと」

さやかは笑みを浮かべる。

「まあ、僕としては早ければ早い程いいんだけどね」

「「……」」

完全に空気ぶち壊しのキュウベえである。

「駄目よキュウベえ。女の子を急かす男子は嫌われるぞ」

マミの一言に笑う一同。

「あの、巧さん。やっぱり、うれしかったですか？ 夢が見つかった時」

「ああ、うれしかった。なあ、お前ら知ってるか？ 夢を持つとな、

時々すっごい切なくなるが、時々すっごい熱くなれる、ってな」

「……どういことですか？」

巧の謎の言葉に首をかしげるまどか。さやか達にもよく分からないように、彼女達も首をかしげていた。

「俺が昔聞いた言葉だ。これを聞いたときの俺はまだ夢を持ってなくて、その意味が分からなかった。けど、夢を持った時、それがどういう意味だったのか、分かった気がしたんだ」

そして、巧はまどかとさやかに言い聞かせる。

「だから、この言葉の意味がわかるような、そういう夢、ちゃんと見つけろよ。ま、それで契約なんてするなよ。そういう夢は、自分の力で叶えるものだからな」

そう言った後、巧は背伸びをする。

「ああ、疲れた。早く帰ろうぜ」

「そうしましょうか。それじゃ、今日は解散ね」

「マミ、今日はまどかの家に泊まるよ」

キュウベえはそう言い、まどかの肩に乗る。

「ほほう、キュウベえもにくい奴だなあ。マミさんと巧を二人つきりにするなんてさ。マミさんが襲われても知らないよ？」

「お前はそういう話題をいつまで引っ張ってるつもりだああああ！」

再び一同が笑う。さやかがしっこさに切れる巧なのであった。

~~~~~

まどか宅、まどかの部屋。

「はあ……やっぱり、簡単なことじゃないんだね」

夜も遅く、まどかはパジャマ姿である。まどかはいまだに願い事が見つからないことに悩んでいた。

「僕の立場で急かすわけにはいかないしね。助言するのもルール違

「反だし」

「ねえ、ただなりたいてだけじゃ駄目なのかな」

「まどかは力そのものに憧れてるのかい？」

「いや、そんなんじゃないかって……うん……そう、なのかな」

まどかは一度は否定するが、どこかそう思っていると自覚したのか肯定する。

「私って鈍くさいし、何の取り柄もないし、だからマミさんみたいにカッコよくて素敵な人になれば、それだけで十分に幸せなんだけど」

「まどかが魔法少女になれば、マミよりずっと強くなれるよ」

「え？」

キュウベえの思わぬ一言に、まどかは思わず声を上げる。

「もちろん、どんな願い事で契約するかにもよるけれど、まどかが産み出すかもしれないソウルジェムの大きさは僕にも測定しきれない。これだけの資質を持つ子と出会ったのは初めてだ」

「あはは、何言ってるのよう……嘘でしょう？」

まどかはキュウベえの言う事に耳を疑う。自分に魔法少女としての素質がそこまで高いはずなんてない、まどかはそう思っていた。

「いや」

「まどか、まだ起きてるかい？」

キュウベえの言葉を遮ったのは、父知久の声だった。

「う、うん。どうしたの？」

「うえへええい……ただい……ま……頭痛……」

「はあゝまたかあ……まったくもう……」

帰ってきたのは、酔いつぶれた詢子であった。こういうことはよくあるようで、まどかはため息をついていた。まどかは詢子を寝室へと連れていき、リビングでココアを飲みながら一息ついていた。

「ふう……」

「ありがとう。いつも悪いね」

「ううん。……ねえ、なんでママはあんなに仕事が好きなのかなあ？ 昔からあの会社で働くのが夢だった……とかじゃないよね？」

「ううん……ママは、仕事が好きなんじゃなくて、頑張るのが好きなんじゃないかな」

「え？」

「頑張るのが好き？ どういうことだろう、まどかはそう思ってた。

「嫌なことも、辛いこともいっぱいあるだろうけど、それを乗り越えた時の満足感がママにとっては最高の宝物なのさ」

まどかはふと、ママのことを思い出す。

「そりゃあ、会社勤めが夢だったわけじゃないだろうけどさ、それでもママは自分の理想を生き方を通して。そんな風にして叶える夢もあるんだよ」

「生き方そのものを夢にするの？」

そういえば、巧さんもそんな感じだなあと心の中で思う。

「どう思いかは人それぞれだろうけど、僕はね、ママのそういうところが好きだよ。尊敬できるし、自慢できる。素晴らしい人だってね」

「……うん」

まどかも、頑張る詢子が好きだ。そして気がついた。自分は、ママの頑張る姿が好きなのだ……

~~~~~

ママの家、巧の寝室。

「ん……？ なんだ？」

疲れて服のまま寝ていた巧だったが、物音に気づき目覚める。キ  
ュウベえはまどかの家に居る。となれば今ここに居るのは巧とマミ  
のみ。巧は泥棒が入ったのかと思い、アタッシュケースを持ち出す。  
いざとなれば鈍器として使えばいいと思っているのだろう。巧はこ  
っそりとリビングへと向かう。すると、玄関で鍵が開く音がする。  
気づかれぬように覗き込むと、そこにはマミがいた。マミは扉を開  
け外にでる。

「あいつ……こんな遅くにどこに行く気だ……？」

巧は気づかれぬよう、マミの後について行くのだった。

~~~~~

夜遅くのとある広場。マミを尾行している巧。

「あいつ……何を？」

念のためアタッシュケースを持ち込んでいる巧。マミが突然立ち
止まる。巧は慌てて物陰に隠れる。物陰から見ると、マミの前には、
曉美ほむらがいた。

「巴マミ、分かっているの？ あなたは無関係な一般人を巻き込ん
でいる」

「彼女達はキュウベえに選ばれたのよ。もう無関係じゃないわ」
その会話はかろうじて聞き取れる。巧は少しずつ距離をつめてい
く。

「それは建前に過ぎない。あなたはあの二人を魔法少女に誘導して
いる」

「だとしたら何？ それが面白くないわけ？」

マミは悪びれなさそうに答える。だが、巧はそれを聞いていた。
(……どういうことだ……!?)

「……否定しないのね。ええそう、迷惑よ。特に鹿目まどか」
それを聞き、マミは眉毛をぴくりと動かす。

「ふうん……あなたも気づいていたのね。あの子の素質に」

（素質？ なんの話をしているんだ……？）

『素質』、その言葉を聞いた巧は首をかしげる。

「ええ。だからこそ、彼女だけは契約させるわけにはいかない」
ほむらの表情が陰しくなる。

「自分より強い相手は邪魔者ってわけ？ いじめられっ子の発想ね。
醜いわよ？」

マミはほむらを鼻で笑う。だが、それを見てほむらはくすりと笑う。

「ふふっ……醜いのはどっちかしらね」

「……どういふことかしら？」

マミが眉間にしわを寄せる。

「知っているのよ。あなたが夜な夜な出歩き、町中の魔女を狩っていることを」

「！」

（なんだと……！？）

ほむらの一言でマミは表情を変え、巧は眉間にしわを寄せる。

「せいぜい、彼女達と行動している時に使い魔と接触しやすいようにするため、私にグリーンフィードを狩らせないためでしょうけど」

「な、なんのことかしら。知らないわ。私はただ、魔女が出たから……」

マミは知らないと言い張るが、明らかにあせっている。巧にもそれは見えた。

「まあそうすれば、彼女達と居る時に魔女が出にくくなるものね。

魔女を相手するより、使い魔と戦った方があなたを『正義の味方』

として見てくれる。『巴マミは利益を考えない素晴らしい魔法少女』
ってね。それに魔女、使い魔の両方を狩っていれば自然とこの町には魔女が減る。そうなれば私はグリーンフィードを得ることが出来ない。よって、私は魔力があろうと無かろうと使うことが出来なくなる。魔力が回復出来ない以上、浪費することもできなくなるものね。
あなたは、私が活動しないように影ながら妨害していた、そうでし

よ?」

マミの言い分を無視し、ほむらは自論を展開する。

「ち、違うに決まってるじゃない! それに、魔女が危険なのはあなたも分かっているでしょ!? だから、せめて使い魔のみにしようと……!」

「それは結局、使い魔退治で自分を際立たせ、自分に憧れるように仕組んだ事を認めているようなものじゃない」

「……ッ!」

核心をつかれたのか、マミは黙り込む。

(マミ……嘘だろ……!?)

『くっ! やっぱマミさんかっこいいなあ! 正義の味方って感じでさ』

さやかはマミに憧れていると言っていた。おそらく、まどかも。それが、マミの策略による物だとしたら……怒りを覚えた巧は拳を強く握り締める。

「……あなたのやり方は最初こそ完璧だったわ。でも、乾巧が、フアイズが戦いにおいて先頭に出るようになってから、あなたよほど焦ったのね。自己アピールが過ぎてたわ。大技をむやみに出して魔力を消費、使い魔との戦闘続きでグリーンフシードは入手できていない。本来ならあなたのソウルジェムは相当穢れてるはずなのに、あなたの魔力は尽きなかった。これはあきらかな矛盾よ。おそらく、乾巧にも気づかれてるでしょうね」

『ところでマミ、ここ最近使い魔ばかりで魔力を回復出来てないはずなのに、やけに大技連発してたけど、大丈夫なのか?』

『あの……あ、節約しますから! あまり消費しないように……さ、さあ、行きましょう』

(……やっぱ、そうことか……)

マミのあの時の焦りは、これが理由だったのか。巧の怒りが除除に高まっていく。

「巴マミ、あなたは魔法少女としてふさわしくない。自分のために魔法少女を増やし、道連れを作り出そうとするあなたには」

「くっ……!」

(もう……限界だ!)

マミは唇を噛む。それは明らかに、自分が潔白ではないという証拠であった。今のマミの姿は、巧の知るものではない。巧の怒りは頂点に達し、そこから飛び出そうとする。

「なんでよ……なんで、私が悪者扱いされなきゃならないの!？」

だが、マミは突然声を張り上げる。思わず巧は引込み、再び物陰に隠れる。よく見ると、マミは涙を流していた。

(マミ……!?)

「本性を現したわね。巴マミ」

「黙りなさい! あなたに、何が分かるというの!？」 私の……この孤独が! 家族を! 自分自身を! 何もかも失った私の何が分かるというのよッ!？」

巧は思い出す。マミが交通事故で家族を失い、契約したことによって命をとりとめ、一人生き残ったことを。

「あの時、私は『後悔がない』って言ったわ……でも、そんなものは嘘。本当は、ずっと後悔してる。私一人、生きていることを……あのとき、『みんな助けて』って願えば、私達家族みんな、助かったかもしれないって!」

マミはしゃくり上げながら、泣きながら叫ぶ。これがマミの本当の姿、中学生としての、人間としての巴マミだ。孤独を恐れ、苦しむ、ありのままの巴マミ。

「私は……そんな私が許せなかった! そんな自分を認めたくなく

なかった！ だから、外では何事も無いように振舞って！ 魔女との戦いが怖くても、必殺技を叫んでごまかしたり！ 色々やったわ！ そして一度、友達になってくれた魔法少女が居たわ。心が弾んだわ。とてもうれしかった。寂しさが消えていったわ」

マミの表情がわずかに明るくなる。だが、それも一瞬。マミの表情は、再び暗くなる。

「……けど、その娘も結局離れていったわ……それからずっと同じ……いいえ。それ以上の苦しみを味わったわ。一瞬でも寂しさを忘れた罰なんだと思った。苦しくて……死んでしまいたいそうだった……家に帰ればずっと泣いてて、気がつけば寝てて、そして朝がくる。そんな、繰り返しだった……けど、私はまた出会ったのよ、あの娘達に。もう、あんな思いは嫌……！ だから……私は……！」

「だから何？ だから、あの二人を魔法少女に誘導したの？ あなた……それでも先輩？ 後輩に申し訳ないと思わないの！？」

「もうたくさんなのよ！ 彼女達は私の……魔法少女の友達になってくれるかもしれない娘達なの！ だから……手放したくない！ 私の側にずっと、居てほしいの！」

「いいかげんにして！」

ほむらが怒鳴る。その取り乱しようは、常時冷静な彼女らしくなかった。

「そんなもの……ただのエゴよ！ あなたは自分勝手な理由で彼女達を地獄に落とそうとしているのよ！？ どこまであなたは最低なの……！」

「最低でもいいわ！ 私は……！」

「もう止めろ！」

マミは後ろから怒鳴り声が聞こえ、驚く間もなく振り向く。ほむらも予想外の事態に驚きを見せる。

「乾さん……！？ いつからそこに！？」

「お前が外を出てからずっとだ。何やってるのかと思ってな。マミ、お前は間違ってる」

巧にも否定され、マミはさらに声を張り上げる。

「なんで……なんでそう言えるんですか！？ 何も知らないあなたに何が……」

「俺も、お前と同じだ。家族がいない。火事で全て失ってな」
「え……!？」

巧の過去を知り、マミは驚く。

「俺も、お前と同じ思いをした。だから分かる。お前の味わった孤独も、喪失感も。だからこそ、お前が間違ってるって分かる。魔法少女になるってことは、今までの日常を捨てることになるんだろ？ つまり、家族とのかかわりも少なくなっていく……下手をすれば、まどかやさやかに同じ思いをさせることになるんだぞ？ お前は、それを望んでるのか？」

「……ッ」

巧にそう言われ、マミは戸惑いを見せる。

「お前、前に一緒に戦いたって言ったよな。それって、強くなりたかったからじゃないのか？」
「!」

（乾さんと一緒に戦えば、もっと強くなれるかもしれない……そして、なれるかもしれない。何も恐れない、『正義の味方』に!）

マミは、あの時思ったことを思い出す。今の自分はたして、正義の味方なのだろうか。マミはそう思いはじめる。

「俺が言えることじゃないが、孤独に立ち向かえるようになんきや強くなれないと思う。だからあいつらを、これ以上振り回すのは止めないか？ もう、開放してやらないか？」

「…そんな……」

「俺じゃあいつらの代わりになれないのか？ 俺は……」

「乾巧、もういいわ」

そう言って、ほむらは巧の声をさえぎる。

「巴マミ、あなたには心底うんざりしたわ。あなたがこれほどまで弱くもろい女ひとだったとはね」

ほむらはあざ笑うように笑む。

「あなたがそんなだと彼女達が知れば、どれだけ失望するか……」

「もう止めてッ！！ あなたとなんて……二度と会いたくない！」

ほむらの過剰な罵倒をマミの叫びがかき消した。ほむらは一瞬驚く反応を見せた後、落ち着きを取り戻したように髪をかき上げる。

「私としたことが、少し熱くなってしまったわね……」

ほむらは改めて深呼吸する。

「ええそうね。これからは二度と会わないようにしましょう、巴マミ」

そう言って、ほむらは振り向き立ち去ろうとするが、何かを思い出したかのように立ち止まり、再びマミ達の方を見る。

「乾巧、話があるのだけれど」

ほむらから話の誘い。だが、巧は泣きじゃくるマミを心配しそれを断った。

「悪い。今日は俺も疲れてるんだ……明日じゃ無理か？」

そもそも巧は疲れきって寝ていたのだ。多少寝てたとはいえ疲労が完全に回復しているわけではない。

「……別に構わないわ。それほど急ぐものでもないしね。巴マミ、正しい判断を出してくれるのを楽しみにしているわ」

そう言って、ほむらはその場を立ち去るのだった……

（乾巧。彼が来たのは予想外だったけど、むしろ事が進んだわ。……それにしても、巴マミと以前一緒にいた魔法少女って……？）

「……マミ、帰るぞ」

巧はマミの肩を叩くが、反応がない。

「……すみません……色々と整理したいんで……先に帰っててもらえますか？」

今回のことでマミも混乱しているのだろう。マミは無表情になっていた。巧も無理強いはず、おとなしく身を引く。

「……分かった。出来るだけ早く帰ってこいよ」

そう言い、巧も立ち去り、広場にはマミ一人が残される。そして、マミは膝き再び泣き出す。

「どうして……こうなるの？ 私……！」

「やあ、マミ」

マミは聞き覚えのある声を聞き、声の主の方を見る。そこには、まどかの家に居たはずのキュウベえがそこにいた。

「キュウベえ……どうして？ 私はちゃんと、やっていたのに……あなたの言うとおりに！ 体験コースも、真夜中の魔女狩りも！なの……なんで!？」

なんと、これまでのマミの行動は全て、キュウベえの提案によるものだったのだ。

「僕に聞かれてもね。僕はあくまで提案したに過ぎない。成功しようとして失敗しようと、悪いのは実行していたマミ、君じゃないか」

「……！」

キュウベえの言っていることは正論だ。マミは何も言い返せずにした。

「このままじゃいずれ、君はまどか達から切り離される。間違いく」

「嫌よそんなの！」

「じゃあどうするんだい？」

マミは泣き叫ぶ。キュウベえは相変わらずの無表情である。

「……暁美さんは、鹿目さんの素質を妬んでいる、だから妨害しようとするのよ。……でも、なんで乾さんまで……」

マミは錯乱状態に陥っていた。キュウベえはため息をつくようにまぶたを閉じ、うつむく。

「……やれやれ。マミ、君は本当に乾巧が味方だと思っているのかい？」

「え……？」

キュウベえの思わぬ一言に凍りつくマミ。

「乾巧と暁美ほむらが内通しているという可能性は考えないのかい？」

「どうということ……？」

「聞いてしまったのさ。暁美ほむらと乾巧が話しているところを。」

暁美ほむらが乾巧にマミを監視するようにってね」

「そんな……！」

マミはキュウベえの言っていることが信じられず、首を横に振り拒絶する。

「それに、彼らは全く同じタイミングで現れているんだよ。マミから見て対極する立場で」

言われてみれば、ほむらはキュウベえを襲い、敵対する立場に、対して巧は結果的にキュウベえを助け、マミの味方という立場であった。

「きつと、彼は君に信用されるために、演じてたんじゃないのかな？」

「そんなこと……」

キュウベえはマミの意見を聞かず、持論を展開していく。

「それに彼の持つファイズのベルト、そしてオルフェノク。全てが謎だらけ、彼自身もね。そんな人間を、どうして信用できるのかな？」

その言葉を聞き、マミは黙りこんでしまう。

「それにさ、最初こそ君の話題が出ていたが、最近はファイズ、乾巧の話題だ。まどか達は、乾巧に惹かれつつある。下手をすれば君より、乾巧の方についていくかもしれないよ？」

「!？」

それを聞き、マミの顔色が急激に青ざめて行く。

「それにさ、彼は元々まどか達が魔法少女になることを反対していたじゃないか。その点では彼と暁美ほむらは同じ意思を持っている。それにさっき暁美ほむらは乾巧に話があると言っていた。確定事項ではないが、あの二人はつながっていると考えてもいいだろう」

「……よ……」

マミは震えながら何かを呟く。

「まあ、どう思いかはマミしだいだ。乾巧が敵なのか、それとも味方なのか。まあ、味方だったらマミに仲を引き裂くなんて酷いことはしないでらうけどね。これはあくまで僕の考えに過ぎない。それを忘れないでね」

そう言ってキュウベえも立ち去っていった。

「乾さんが……私を……？　だって、あの人は……乾さんは……嘘よ、嘘よそんなことおおッ！」

マミは泣き叫び続けていた。キュウベえはそれを気にかけず、どこかへと歩いていったのだった……

——暁美ほむら。君はマミを追い詰めてまどか達から切り離そうとしているんだろうけど、残念だね。むしろ利用させてもらうよ。君の目的は分らない。けど、君にこれ以上動いてもらうと面倒だからね……乾巧、君もね……

……今、本当の運命が回り始める。それは冷酷に、非情に。そして、残酷に……

To
Be
Con-
tin-
ued.

第14話（後書き）

とりあえず今回書きたかった事

- ・ マミの過去。それに共感する巧
- ・ 夢を語る巧
- ・ ほむらとマミの対立、ほむらの逆転
- ・ マミの精神的弱さ
- ・ キュウベえの陰謀？

巧も家族を失っているということから、マミの気持ちが分かるんじゃないかと思い書きました。

夢について語る巧ですが、これこそ『本編終了後』という設定を最大限に生かしたシチュエーションです。夢の無い巧では決して出来ないアドバイス。今の巧なら、きっと魔法少女を救ってくれる。そんな気がします。

ほむらとマミについては……。実は、僕としてはマミはそれほど好きなキャラクターではありませんでした。原作においても、マミは二人を魔法少女に誘導していることを否定するどころか、むしろ肯定しているようでした。ですからあの場面では、むしろほむらの方が正しいんじゃないかと思ってましたね。で、ほむらの逆転に関してはファイマギだからこそほむらはマミを攻められた、というところでしょうか。

そして問題のマミの精神の弱さの件ですが、以前マミには魔法少女の友達がいて（ドラマCDネタ）、しかしいなくなってしまう、より寂しさを感じるようになってしまったという感じでしょうかね。そのせいでマミは色々追いつめられてたと……こういう複線をも

っと入れるべきでしたね。完全に僕の実力不足でした。結局マミは子供なんです。家族を失い、独りぼっちの孤独の耐えられるわけがありません。だから、まどか達を手放せない。はたして巧は、マミを救えるのか…？

そしてキュウベえ、いままで空気だっただけにいつきに濃くなっていきました。本性がどんどん明らかになってくるころ、巧達はどうなっていくのか……！？　これからご期待ください！

長くなってしまい申し訳ありませんでした。次回はいいよ運命との戦い！　はたして、マミの運命は！？　巧は、救い出すことが出来るのか！　そして、まどか達は……キュウベえの狙いは！

次回第15話、【マミの答え、迷いの果て】。次回もお楽しみに…

：

第15話（前書き）

予定変更によりサブタイトル変更。ストーリー自体に変更はありません。

前回のあらすじ。

- ・ 巧、夢探しのアドバイス。
 - ・ マミとほむら対立
 - ・ キュウベえ、マミに巧への警告
- 巧「キュウベえ、マミの雲行きが怪しくなってきたな……じゃあ、始まるぜ」

第15話

「んぐ……はっ!？」

マミの家リビング。巧は卓上で目覚める。巧はあの後、マミが帰ってくるまでずっと起きていたのだ。結局、6時ごろには疲れて寝ていたが。巧は目を擦りながら時計を見る。時刻は既に正午。結局、巧が起きていた間、マミが帰ってくることは無かった。

「はぁ……マミの奴……」

巧はあくびまじりのため息を吐く。すると、巧は掛け布団がかけられていることに気づく。巧が自分で用意していたわけではない。ふとテーブルを見ると、マミからの置手紙があった。巧はいそいでそれを取り、手紙を読んだ。

——乾さん。起きている間に帰ってこなくて、ごめんなさい。帰ってきたとき、乾さんがそこで寝ていて驚きました。疲れていたのに、わざわざありがとうございます。起こしてはいけないと思い、布団をかけておきました。それと、台所にご飯を置いてあるので、食べてください。　巴マミ。

「あいつ……夜中ずっと外に……」

ピーンポーンと、インターホンが鳴る。玄関に出てみると、そこにはほむらが居た。

「お前……学校は!？」

「ちょっと抜け出てきたわ。それより、昨日の話なのだけど、ここにきて」

そう言っ、ほむらはメモを巧に手渡し、帰っていった。

「わざわざ学校抜けてきてまで……ま、いっか」

とりあえずメモ用紙はズボンのポケットにしまい、昼食をとるために台所においてあった朝食用であっただろう品々を持って来る。

巧は手を合わせ、昼食をとる。

「……うまいな」

ママは料理が得意で、巧もそれを喜んで食べていた。だが、今日の料理は、どこか変だった。

「……うまいけど……なんか不味いな……」

それはまるで、ママの心境を表しているかのように……

~~~~~

「なんか……今日のママさん変っすよ？」

「……そう？」

学校の屋上、まどかとさやかはママと一緒に食べていた。さやか  
はママの様子が妙なことに気づく。

「なんか目の下クマできてるし……はっ！ まさか……巧の奴とあ  
つつあつな一夜を……あででででっ！？」

下ネタに走るさやかの頬を器用に箸でつまむママ。

「妙なこと言わないでほしいわね」

「いだだだっ！ ふいまへん！ ふいまへんっへ！！」

さやかは少し泣きそうになり、涙を浮かべる。ようやく箸つねり  
から開放され、頬は赤くなっていた。さやかは頬を擦る。

「ふえ……ジョーダンなんだから本気にしないでよ……」

「言っていいことと悪いことがあるのよ？」

ママの言うことはもつとも。さやかは反省する。

「ふぁ……冗談抜きにしても、今日のママさん明らかに変だっ  
て。なんか、目がどす黒いって言うか、目が死んでるっていうか。  
なんか病んでるって気がする」

「女の子にそれは失礼よ」

「ママさん……」

さやかがそう言うが、ママはそれを否定する。が、さやかの言っ  
ていることはあながち間違っただけではなかった。確かに、ママの目に

は輝きがなかった。まどかもマミのことが心配であった。ただ一人、キュウベえだけは、相変わらざるの無表情である。どこか、笑みを浮かべているようにも感じるが……

## 第15話【マミの答え、迷いの果て】

「ここは……？」

オートバジンに乗り巧はやってきたのはどこにでもあるような廃工場だ。

「……こういう場所はいやだな……」

かつてスマートレディからあの仕打ちを受けたのも廃工場、巧はトラウマを思い出し、思わず身震いを起こす。やや引きながらも工場内に入っていく。

「乾巧、来たわね」

先に来ていたようで、そこにはほむらが居た。

「……で、話って何なんだ？」

「まずは巴マミの件。あなた、巴マミのことをどう思ってるのかしら」

ほむらからの突然の質問。

「……まあ、嫌いじゃない。ただ、昨日のことはちよつとな……」

薄々感づいていたとはいえ、マミが自分の力を見せつけまどか達を引き込もうとしていたことにはショックを受けていた。

「乾巧、彼女はああいいう人種なの。自分の為ならどんなことだってやってのけようとする悪人なの」

「なら、お前もそうだよなあ。俺に『魔女退治の時は積極的に前に出ろ』だの『必殺技使え』だの。どれもマミを焦らせるためだったんだろ？」

巧はほむらをにらみつける。だがほむらはそれを無視する。

「……あなたがそれに気づくのが遅すぎただけ。私に非は無いわ」

「お前な……」

巧はほむらに苛立ちを覚える。ほむらは構わず話を続ける。

「それで、次の話。あなたは、私と協力してくれるのかしら？」

「……しなかったら、どうなる？」

「さあ……ただ、多くの人間が死ぬことになるわね」

その瞬間、巧の目の色が変わった。

「どうということだ？」

「今は何も言えないわ。あなたが協力するか分からないし。乾巧、どうするの？」

詳細を言わず、聞きたければ協力しろといわんばかりにほむらは詰め寄る。そして、巧はほむらの思惑通りに折れたのだった。

「……分かった。ただ、協力する以上、互いに信頼しとこうぜ」

巧がそう言うが、ほむらはそっぽを向き呟く。

「……別にいいわそんなもの……信頼なんて、とうの昔に捨ててきたわ」

「……はあ？」

巧にはそれはギリギリ聞こえず、巧はよくわからないような顔をしていた……

~~~~~

ほぼ同時刻。病院前。

「はあ……よう、お待たせ」

なぜか、さやかががっかりしながら病院から出てくる。まどかは心配そうにさやかに声をかける。ちなみに、まどかの肩にはキュウベえが乗っている。

「あれ？ 上条くん、会えなかったの？」

「何か今日は都合悪いみたいでさあ。わざわざ来てやったのに、失礼しちゃうわよねえ」

さやかはため息をつきながら歩く。まどかはその後を追うが、突

然立ち止まってしまおう。それに気づいたさやかはまどかの側に歩み寄る。

「まどか……？ どうしたの？」

「あそこ……何か……」

と、まどかが指指した壁。よく見ると何かが刺さっていた。黒い、禍々しい何か。

「……グリーンフシードだ！ 孵化しかかってる！」

そう、壁に刺さっていたのはグリーンフシードであった。点滅しており、その危険性をより感じる。

「嘘……なんでこんなところに！？」

「不味いよ、早く逃げないと！ もうすぐ結界が出来上がる！」

キュウベえはまどか達に逃げるように言う。

「やっかいな結界が……あ！ まどか、マミさんの携帯聞いてる？」

「え？ ……ううん」

まどかは首を横に振りながら答える。それを聞き、さやかは考え込む。

「まずったなあ……まどか、先行ってマミさんと呼んできて。あたしはこいつを見張ってる」

「そんな！？」

さやかの提案にまどかは驚く。

「無茶だよ！ 中の魔女が出てくるまでにはまだ時間はあるけど、結界が閉じたら君は外に出られなくなる！ マミの助けが間に合うかどうか……」

キュウベえの言ってることはもっともだ。今のさやかに武器はない。万が一襲われてしまえばひとたまりも無い。だが、さやかは反論をする。

「あの結界が出来上がったら、こいつの居場所も分からなくなっちゃうんでしょ？」

さやかの脳裏に、上条恭介の姿が浮かぶ。病院に魔女が生まれてしまえば、弱っている人達が危険にさらされる。上条も例外ではな

い。

「……放っておけないよ。こんな場所で」

すると、キュウベえがまどかの肩から降り、さやかの側に近寄る。「まどか、先に行ってくれ。さやかには僕が付いてる。マミならここまでくればテレパシーで僕の位置が分かる。ここでさやかと一緒にグリーンフシードを見張っていれば、最短距離で結界を抜けられるよう、マミを誘導できるしね」

「ありがとう、キュウベえ」

さやかはほっとするような表情を見せた。

「私、すぐにマミさんを連れてくるから！」

カバンをその場に置き、まどかはマミの家へ走り出した。そしてそれから数秒後、グリーンフシードが強く輝き出した。

「あ……ううっ！」

さやかはそのまぶしさに思わず腕で光をさえぎる。そして、さやかの姿は、そこから消えたのだった。結界に閉じ込められて……

「怖いかい？ さやか」

今、さやか達の目の前には、孵化前のグリーンフシードがある。先ほどより点滅の速度が増している。

「そりゃあまあ……武器もないし、当然でしょ」

「願い事さえ決めてくれば、今この場で君を魔法少女にしてあげることも出来るだけど……」

「いざをなったら頼むかも……でも、今は止めとく。あたしにとっても、大事なことから」

さやかは、昨日巧が言っていたことを思い出す。

「出来ることなら、いい加減な気持ちで決めたくないしさ……」

~~~~~



「……で、教えてもらおうか。お前の知ってること」

「ええ……今から……」

その瞬間、ファイズフォンに着信が鳴る。マミからだった。巧は急いで電話に出る。

『巧さん！ 大変なんです！』

声の主はマミではなく、まどかだった。

「その声はまどかか！？ どうしたんだ！？」

『見滝原病院に……孵化しかかったグリーンフィードが！ 早くしないと、さやかちゃんとキュウベえが……！』

「わ、分かった！ 病院だな……すぐに行く！」

巧は通話を切る。

「いったいどうしたの？」

「さやかが不味い……今マミとまどかが向かってるみたいだけど……！」

「なっ……それは本当なの！？」

ほむらは驚く。

（だとすれば……不味い……！）

「乾巧、私も連れて行きなさい！」

ほむらが巧の背を追う。

「いいけど……お前ヘルメットは？」

するとどこから出したのか、ヘルメットを持っていた。工事現場で使うよな、頭部のみの物だったが。

「どこから出し……まあいいや。乗れ！」

巧は自分の後ろのほむらを座らせ、オートバジンを走らせる。

~~~~~

それから少しして、マミとまどかは一足先に結界の前に居た。

「ここね」

ママはテレパシーを行い、キュウベえと会話する。

<キュウベえ、状況は？>

<まだ大丈夫。すぐに孵化する様子はないよ>

<さやかちゃん、大丈夫？>

キュウベえが中継しているようで、まどかもさやかとテレパシーで通じる。

<へーきへーき！ 退屈で居眠りしちやいそう>

無論、さやかの強がりである。

<むしろ、うかつに大きな魔力を使ってグリーンフシードを刺激する方が不味い。急がなくていいから、なるべく静かに来てくれるかい？>

<分かったわ>

ママは結界に通じるゲートを作りだす。

「あの……ママさん？」

「どうしたの？ 鹿目さん」

「あの……お昼の時とあまり変わってないようになって思っちゃって……」

ママはいまだにどす黒いような目をしていた。

「それに、さっきだって……巧さんに連絡する時に『あなたがして』って……巧さんと何かあったんですか……？」

「……行くわよ」

ママはそんなことに構わずまどかと共に中へと入っていくのだった。

それから数十秒後。銀色のバイクに乗った男女が病院に近づいてくる。巧とほむらだ。

「ほむら！ 結界に入れるようにしといてくれ！」

突然の巧の要望に、ほむらは疑問符を浮かべる。

「どうするつもり？」

「めんどくさい……このまま結界に突っ込む！」
強引な方法に、流石のほむらも焦りを見せる。

「え、ちょ……待ちなさ……きゃあああああ……！」

そして、巧達も結界に突入するのだった……

~~~~~

「ふう……でも、間に合ってよかった」

「無茶し過ぎ……って怒りたいところだけど、今回に限っては冴えた手だったわね。これなら魔女を取り逃がす心配も……」

マミは突然黙りこみ、立ち止まってしまう。まどかは後ろを振り向く。

「え？ あっ」

ほむらと、ファイズに変身した巧がこちらに向かって走ってくる。

「マミ、まどか！」

「巧さん！」

ファイズと再会し、喜ぶまどか。

「巴マミ……あなた……！」

「言っただけよね……？ もう二度と会いたくないって……」

対して、ほむらとマミは険悪なムードであった。

「マミ……さん？」

まどかはそれを見ておどおどしている。

「今回の魔女は私達<sup>えもの</sup>が狩る。あなた達は手を引いて」

「……ッ！」

マミの表情が険<sup>かお</sup>しくなる。

「……そうもいかないわ。美樹さんとキュウベえを迎えに行かないと」

「その二人の安全は保障するわ」

ほむらはマミを行かせまいとする。すると、マミは何を思ったか、

ソウルジェムを取り出す。

「……信用すると思っ……」

マミのソウルジェムが光り出す……が。

「頼むマミ。今日は黙って引いてくれ」

「え？」

ファイズにまで言われ、マミは静止する。

「なんで……？」

「ちょっと見ただけで分かる。今日のお前は変だ。夜、俺が帰った後で何かあったのか？」

「……」

マミは黙ったまま、何も言わない。

「……鹿目まどか、あなたは帰りなさい。行くわよ乾巧……」

「行かせるのですか……」

マミは通り過ぎようとするほむらを押し戻し、マミのソウルジェムが輝く。すると、ソウルジェムリボンが飛び出し、それはほむらを拘束、花の錠がかけられた。

「なっ!？」

「ば、馬鹿。こんなことやってる場合じゃ……ほどこきなさ……」

そう言って、動いたその瞬間だった。リボンがきつくしまり、鈍い音が辺りに響いた。

「っ……グアアアアアアアアアアアッ!！」

「ほむらちゃん!？」

「ほむら……マミ……お前何をした!？」

ほむらが突然悲鳴を上げ、まどかとファイズは驚きを隠せない。

「何って……拘束しただけです? 何か問題でも?」

マミは悪びれなさそうに言う。しかも、無表情で。

「じゃあ……なんでこんなに痛がつてんだ!？ 早くこれをほどこけっ!」

ファイズが叫ぶ。だが。

「……なんで、そんなこと言うんですかあ?」

「……あ？」

まるで幼女のような顔で言うマミに、ファイズは疑問符を浮かべる。

「ああ……やっぱり、キュウベえの言った通りだったんだわ……あなた達は私を……！」

その瞬間、リボンはファイズを捕まえ、拘束したのだ。もちろん、それには花の錠がかけられる。

「マミさん……！？」

「なっ……これ……はっ！？」

ファイズは拘束しているリボンを破ろうとするが、びくともしない。

「無駄ですよ。だってそれ、ファイズでも解くのが難しくなるようにしているもの。暁美ほむらのもね」

ファイズがびくともしない。それはすなわち、リボンには十単位の力があるということだ。つまり、生身であるほむらがこれに逆らい、締め付けられれば……。

「怪我をさせるつもりはないのよ？　ただ、暴れると、暁美ほむらのように骨が折れますよ？」

マミはほむらを『暁美さん』と呼んでいた。だが、今は『暁美ほむら』、名前をそのまま呼んでいる。

「まあ、あなたをファイズのまま放置するわけにはいかないけど」「なっ！？」

そう言つて、マミはファイズからベルトを奪った。動力を失ったスーツは消え、乾巧の姿に戻ってしまった。マミはリボンでバックを作り、それにベルトをしまいこみ、まどかに手渡す。

「鹿目さん、あなたが持ってなさい。うまくいけば、あなたや美樹さんが使えるかもしれないわ」

「あの……マミさん？　なんでこんな……！」

「馬鹿野郎！　それはまどか達に使えるわけがない！　返せ！」  
巧はリボンに締め付けられない程度に抵抗する。

「ふん……信じるのですか」

だが、マミはそれを鼻で笑い、返そうとはしない。

「マミ……なんでこんなことをするんだ!？」

「あなたが、私を裏切ったからに決まってるじゃないですか! この女と手を組んで……私から鹿目さんや美樹さんを私から切り離そうとしたくせに! 全て……キュウベえから聞いたのよ! あなた達は裏で手を取り合っている内通者だって!」

そんなもの、根も葉もない話だ。巧とほむらはそんな関係ではない。だが、マミはそれを信用しない。

「お前……あいつを信じるってのかよ!？」

「当たり前じゃない! 友達だもの……キュウベえは私を裏切らない! だから信じる! そしてあなたは裏切った……だから信じない! ……それだけよ」

マミの叫びが響く。まどかは顔を青白くし、マミをずっと見ていた。

「……鹿目さん。行きましょう」

「待ちな……さい! 今度の魔女は、これまでの奴らとは……わけが違うのよ!？」

ほむらは苦しそうに言う。だが、マミはそれを無視する。

「大丈夫。おとなしくしていれば帰りにちゃんと解放してあげる。だから、出来るだけ無傷でいなさい? さ、行きましょ」

「え!?! あっ! ……はい……」

まどかは手をつながれ、マミと一緒に歩いていく。

「待ちなさ……ぐっ! 鹿目まどか! あなたは巴マミに騙されているの! 目を覚まさない!」

まどかがチラチラとこちらを見るが、マミに逆らうことが出来ず、見える背中は大団円と小さくなっていく。

「くっ……そお……! 戻れ……行くな……ッ! ぐっ……マミイ  
イイイイイイイイイイッ!」

巧の叫びはもはやマミに届くことはなく、ただ、空しく響くだけだった……

——素晴らしい。いい、いいよマミ……

To Be Continued.

## 第15話（後書き）

急展開、緊急事態！ 巧、ベルトを奪われる……！

キュウベえを信じ、巧を見捨てたマミ！ 自由を奪われ、動けぬほむらと巧！ 魔女を見張るさやか、なすすべ無しのまどか……。そして、運命が牙を剥く！

マミを救うのは……誰だ！？

次回第16話、【まどかの答え、それぞれの決意】！  
マミ「次回に続く……」



## 第16話（前書き）

前回のあらすじ……

- ・ 巧、ほむらと協力関係を結ぶ。
- ・ 病院にグリーンフィード。さやかとキュウベえは結界に閉じ込められる。
- ・ マミ、ほむらと巧を拘束、さらに、巧からベルトを奪う。

## 第16話

「……？」

「どうしたんだいさやか」

突然辺りを見渡すさやかを見て、キュウベえが首をかしげる。

「いや……どっかで声がしたような……」

「気のせいじゃないかな？　もしかしたら、使い魔のうめき声かもしれないね」

「怖いこと言うなよお……」

身震いを起こすさやかであった。

### 第16話【まどかの答え、それぞれの決意】

「あ、あのママさん！」

「何？」

まどかはママに手をつながれ歩いていた。

「なんで、あんなことしたんですか？　それに、ほむらちゃんが言ってたことって」

「全て真っ赤な嘘よ。彼女は私を陥れようとしているの。乾巧、あの人も……」

「そんな……」

むしろ、嘘をついているのはママの方だ。だが、今のママの精神状態は異常だった。あの夜、ママは錯乱を起こし冷静な判断が出来なくなっていた。ママは巧を信頼していた。憧れていた。だが、キュウベえの話を聞き、それは一気に崩れ去った。信じたくない、でも、キュウベえの言ってることも嘘だとは思えない。なら、何を信じればいい……そして、ママはキュウベえを選んだ。ママは、独りになりたくなかったから。

そして、錯乱と苦悩の末、今の巴ママとなってしまうた。精神が

不安定で、キュウベえの言葉を簡単に信じてしまうようになってしまった。そして、欲しいを思ったまどかの声さえ、届かない……

「マミさん。あの……」

まどかは怖気つきながら、マミを呼ぶ。

「どうしたの？」

「願い事、私なりにいろいろを考えてみたんですけど……」

「……決まりそうなの？」

マミの表情がわずかながら変わる。笑みを浮かべている。ようやく、努力が実った、マミはそう思っていた。

「はい。でも、……もしかしたらマミさんには考え方が甘いって怒られそうで」

まどかはうつむいてしまう。

「どんな夢を叶えるつもり？」

マミの声に生氣が戻っていく。まどかのことでうれしいのだろう。今のマミに、まどか達を騙している罪悪感など微塵も無かった。

「私って、昔から得意な学科とか、人に自慢できる才能とか何もなく……きつとこれから先ずつと、誰の役にも立てないまま、迷惑ばかりかけていくのかなって。それが嫌でしょうがなかったんです」  
まどかは、自分にとりえないことにコンプレックスを持っていた。巧が夢を持てず、悩んでいたように。そして、まどかは顔を上げる。

「でも、マミさんと会って、誰かを助けるために戦ってるのを見せてもらって、同じことが私にもできるかもしれないって言われて。何よりも嬉しかったのはそのことで……だから私、魔法少女になったらそれで願いごとは叶っちゃうんです！」

（鹿目さん……あなた……）

「こんな自分でも誰かの役に立てるんだって、胸を張って生きていけたら、それが……一番の夢だから」

そう言うまどかの表情は明るかった。笑みを浮かべ、マミには輝

いているように見えた。マミはまどかの手を離す。マミの中に、迷いが生まれ始める。

（……落ち着くのよ、巴マミ、ここで取り乱したら……）

「……大変だよ。怪我もするし、恋したり遊んだりしてる暇もなくなっちゃうよ?」

「でも、それでもがんばってるマミさんに、私……憧れてるんです」  
（憧れ……!? 私を……こんな……!?）

マミは思わず立ち止まってしまう。急に、罪悪感が湧き出してくる。自分に憧れている。そう聞いた瞬間、マミの精神が一気に平常に戻ったからだった。まどかの純粋な想いが、マミの心を動かしたのかも知れない。

「私……なんてことを……!」

「マ、マミさん?」

マミの様子がおかしいことに気づいたまどかは困ったような表情をする。

「……憧れるほどのものじゃないわよ、私……」

「え?」

「無理してカッコつけてるだけで、怖くても辛くても、誰にも相談できないし、一人ぼっちで泣いてばかり……それに、私……あなた達を騙していたの」

マミはついに、真実は話してしまう。

「騙し……でもさっきそれは嘘だって……」

「嘘をついてたは私。私は、あなた達が私に憧れるように、真夜中に魔女を倒して使い魔との接触しやすくしたり、戦いを華やかに見せたり……あなた達が魔法少女に憧れて、なってくれば私の孤独も消えると思って……」

「マミさん……」

「ほら、失望したでしょ? 戦いを見て憧れを持ったんだから……私は、最低な人間なの」

（私……なんでこんなこと言ったんだろ……馬鹿ね。もうちょっと

我慢すれば、出来たのにな……友達)

マミは自分で自分を笑う。他人に言われなければ自分の罪も分らなかった……そんな自分を皮肉っていた。しかし。

「そんなの、関係ないです」

「えっ……!？」

予想外のことに、マミは戸惑う。

「私、マミさん自身に憧れるんです。戦いを華やかに見せたって構いません」

「でも……私に憧れてるんだっただけならおさら……」

「マミさんは特別ななんかじゃないんです。マミさんも普通の女の子なんです。独りが怖くてもいいじゃないですか。真夜中の魔女退治だって、結果的には人を助けてますし、要は考えようですよ」

「鹿目さん……」

「それに、私、マミさんを支えられるような……そんな、魔法少女になりたいんです」

まどかは、マミの手をとり、そう言った。そしてマミは、涙を流す。

「本当に、これから私と一緒に戦ってくれるの？ 傍にいてくれるの？」

「はい、私なんかでよかったら」

マミは手で涙をぬぐい、笑みを浮かべる。その表情はいつもの、それ以上に輝いた顔だった。

「参ったなあ。まだまだちゃんと先輩ぶってなきゃいけないのになあ。やっぱり私ダメな子だ」

「マミさん」

まどかは安堵の表情を浮かべる。いつもの、いや、本来のマミの姿を見れてうれしいのだろう。

「でも、せっかくなんだし、願いごとは何か考えておきなさい」

「せっかく……ですかね、やっぱり」

まどかは苦笑いをする。

「契約は契約なんだから、ものはついでおこうよ。億万長者とか、素敵な彼氏とか、何だっていいじゃない」

「ええ……じゃあ、『マミさんが仲直りできますように』……とかですかね」

それを聞いた瞬間、マミはきよんとする。まどかに欲は無いのか、マミはそんな風に思ってしまった、くすりと笑う。

「……はあ……鹿目さん、あなたって娘は……全くもう」

「きゃっ!？」

マミは、まどかに抱きつく。マミの胸が当たり、まどかは顔を赤くする。

（この娘、自覚してないみたいね……そういう他人思いなところが人を元氣付けてることに……あなたのおかげで気づけた……ありがとう）

「……あ、そうだ！ 巧さんとはむらちゃん……早く離してあげてください！」

「……そうね急いで」

<マミ!>

「!」

キュウベえからのテレパシーが入り、マミの言葉は中断される。

<グリーンシールドが動き始めた！ 孵化が始まる、急いで!>

「……鹿目さん。悪いけどあの人達は後回しになりそうね。あの魔法、私があの場合で解かなきゃいけないの」

「……そう、なんですか」

正直、マミは助かったと思っていた。巧はともかく、ほむらを解放したくなかったからだ。まどかによって心は取り戻した。が、最後の最後でマミはキュウベえを信用してしまっていた。

「……とにかく、乾さんのこともあるし、今日という今日は速攻で片付けるわよ！」

「はい！」

マミは左手をかざし、ソウルジェムが飛び出す。そしてソウルジェムが強く光り輝く。そしてソウルジェムは光に変化、それがマミの体を包みこんだ。

「はぁ！」

そして、黄色い光から魔法少女となったマミが現れる。マミはマスケット銃を構える。

「さあ、行くわよ！」

~~~~~

「……マミの奴、大丈夫なのか？」

巧達はあれから動けずにいた。ほむらは先ほどの鈍い音からして骨折しているのだろう。顔色が悪い。

「おそろく、今回の戦いで……巴マミは命を落とす」

「な……なんだと!？」

ほむらからの衝撃の発言。巧が驚かないわけがなかった。

「どうということだ！」

「今回の魔女は手ごわい。そして、巴マミはあの状態……最悪な状況よ。巴マミが死ねば、彼女達が危険に晒される」

少なくとも、ほむらの言っている事は間違いではない。ほむら達の見たマミの精神状態ではまともに戦うことも出来ないだろう。もちろん、まどかのおかげで平常に戻りつつあることは知らない。それでも、マミが死ねば対抗することの出来ないまどか達が危険であることに変わりはない。巧は焦りだし、もがきだした。

「くっ……くそ！ ほどけ……ぐああああっ……！」

抵抗したせいか、リボンがしまり巧は苦しむ。

「……ぐっ！ どうする……！」

苦しみながらも、なんとか脱出できないかと考える。そして、巧はある策を思いつく。だが、それはある意味危険な策であった。自分が狙われかねない、苦肉の策。

「……ほむら、目、つぶっててくれないか？」

「……どうしたというの」

突然のことに、ほむらは若干の戸惑いを見せる。

「企業機密ってやつだ」

「はあ？」

「頼む。俺と協力したいってなら、絶対、目を開けないでくれ」

そう言われ、ほむらは一瞬きよとした表情をする。

「……わかったわ」

そう言って、ほむらは目をつぶる。どうしても協力したいのか、絶対見開かないように強くつぶっていた。巧はそれを見た後、深呼吸をし、集中する。

（例えば危険な賭けだとしても俺は……あいつらを守る！）

「……うおおおおおおおおおっ！！！」

巧は力いっぱい叫ぶ。そして、巧は――

~~~~~

「ふっ！ はあっ！」

マスケット銃の乱れ撃ち、バズーカ砲の発射、マミは使い魔を圧倒していた。それはまるで、戦場を走り抜けるかのような快進撃であった。マミの心は、幸せや喜びに満ち溢れ、いつも抱えていた孤独や恐怖などの暗い気持ちなどどこにも無かった。

――体が軽い。こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて……

「やあっ！」

――もう何も怖くない……！



「はああああっ!!」

——私、独りぼっちじゃないもの!

「さあ、鹿目さん!」

「は、はい!」

マミとまどかは手をつなぎながら走っていく。そして、二人は扉の中へと、入っていくのだった。

「!」

すると、景色が一変。お菓子などが大量にある空間。お菓子の家のような気もしないわけでもないが、ここは魔女の結界。人間はむしろ、食われる側だ。

「あ、さやかちゃん!」

まどかは大きなドーナツの影に隠れているさやかとキュウベえを発見する。二人はさやか達に駆け寄る。

「よかった……間に合ったあ」

さやかはほっとする。だがそれもつかの間。

「気をつけて! 出てくるよ!」

キュウベえがそう告げた時、空間が裂け、そこから魔女が現れた。ふわふわと空を舞う羽のようにゆっくりと落下、十メートルはあるだろう高い椅子に落ちるように座った。キャンディの包み紙のような頭、赤いマント、まるでぬいぐるみのような姿、見た目はとてもかわいらしい魔女だ。

『お菓子の魔女』、その性質は『執着』。

魔女の座っていた椅子が突然傾き、魔女は落下する。マミが椅子

の足を破壊したからだ。

「せっかくのところ悪いけど……一気に決めさせてもらうわ！」

マミはマスケット銃をバットのように構え、魔女が落下してきたところをマスケット銃で殴り飛ばす。魔女は壁に叩きつけられ、さらに連続でマミの銃弾を浴び、地に落ちていく。マミは力なく地に倒れた魔女の頭にマスケット銃の銃口を突きつけ、零距离で発砲する。マミは使用済みとなったマスケット銃を投げ捨てる。

それからまもなく魔女は黄色いリボンに拘束され、空に連れられていく。

「やったあ！」

さやか達はマミの勝利を確信する。マミもまた微笑んでいた。持っていたマスケット銃が光りだし、それを魔女に向けると、巨大な銃となった。

「ティロッ！」

そしてその形状はさらに変化。白い固定砲台のようになり、より強力であることが感じられた。そして、マミの必殺技、『ティロ・フィナーレ』が発射される。

「フィナーレ！」

それまでのものが全ての飲み込む巨大な光弾なら、今回は全てを射抜く鋭い弾丸。銃弾は真っ赤なリボンに変化し、魔女の腹を貫いた。そして赤いリボンがそのまま魔女を縛りつけていく。誰もがマミの勝利を確信していた。

だが。

「え？」

魔女の顔が膨らみだし、口からピエロのような顔が飛び出したのだ。その大きさは顔だけで既に魔女の体を超えていた。そして魔女は一気にマミの元へ動き、その全体があらわとなる。手足のない蛇のような黒い体、これがこのお菓子の魔女の真の姿なのだ。

僅か数秒の出来事。マミが反応出来るわけがなく、マミはただ立ち尽くすしかなかった。

「ああ……！」

「マミさ……！」

さやかは今起こったことが理解できず、まどかはマミを呼びかけようとする。魔女はその大口を開き、鋭い刃のような歯が、マミを食らおうとしていた。マミは確信した、自分の死を。そして、魔女は、マミの頭に食らいつこうとする。

「そこまでよ」

銃声がその場に響く。もちろん、マミのものではない。

「ギャアアアアアア！」

魔女が悲鳴を上げる。マミが振り向いて見ると、そこには銃を構えたほむらの姿があった。

「曉美さん……！？ どうして……！」

《Standing by》

聞きなれた機械音が聞こえる。

「変身！」

## 《Complete》

それは、ファイズの物だ。変身したファイズがほむらの側に駆け寄る。なんと、巧とほむらはあの状況の中、脱出に成功したのだ。

「いったい、どうやって……！？」

「ああ……ま、なんとかなった」

ファイズは茶を濁すようにつぶやく。

「……巴ミ」

「……暁美さん、ごめんなさい。それと……ありがとう」

マミは涙を浮かべ、謝罪と礼をする。

「勘違いしないことね巴ミ、あなたを助けたわけでも、助けるわけじゃない。あの魔女を倒すだけよ」

ほむらは相変わらぬツンとした態度を見せる。それを見て、ファイズは仮面の下で微笑する。

「まあ、そういうことだ。マミ、後は任せて下がってろ」

ファイズはマミをまどか達の方へむかわせ、右手をスナップさせる。

「さて、少し憂さ晴らしさせてもらおうかしら……」

「覚悟しろよ……マミを殺そうとした罪、償ってもらうぜ」

ほむらは拳銃を、ファイズはフォンブラスターを構える。まどか達は安堵の表情を見せる。そして、マミはこう思った。

——これが、現実だったらよかったのに。

いままでのマミが刹那に描いた妄想。巧とほむらが来られるわけがない。あのリボンを破るには、相当な力が要る上、すぐに脱出できるものではない。そしてついに魔女はマミに噛み付き、マミの首から上は魔女の口内。マミは何も出来ぬまま空に持ち上げられた。

「ああっ……！」

「いや……マミさん！」

さやかとまどかはおびえて固まってしまった。

「まどか、さやか！ 早く願い事を！ このままじゃ君達も危ない！」

——私、死ぬのね……私って、ほんと最低……自分が助かるような妄想をして……私が死んだら、鹿目さん達が……暁美さんの言うとおりであった。あの時、暁美さん達の言うことを聞いて、一緒に行動していれば……

それは、遅すぎた後悔だった。都合のいい妄想をした自分が恨めしかった。キュウベえを信用して、ほむら達を徹底的に否定した自分が許せなかった。まどか達まで危険に晒すことになった自分の不

甲斐無さに失望した。

——死にたくない……だって、乾さんや、美樹さんに謝らなきゃいけないもの……それに、鹿目さんと、皆と一緒に生きていきたい……だから、お願い……

マミには心残りが多すぎた。そして、マミが最後に思ったことは、皮肉にも、あの時と同じものだった……

——誰か……助けて……

そんなマミの小さな願いは、自身の頭と共に……噛み砕かれたのだった。

「マミさああああああああんツ!!」

まどかが泣き叫ぶ。しかし、その声はもう……

マミには聞こえない。

To  
Be  
Con-  
tin-  
ued.

## 第16話（後書き）

……はい。こういうことになりました。今回でもう見るのやめるとかは止めてくださいね！？ 一応、元々こういう結末を考えてました。まあ、少なからずマミるクロス系もあることにはありますけどね……。何が言いたいかって言うと……マミさんファンの皆様、開始直後からマミさんのキャラがややおかしい点も合わせて、申し訳ありませんでした。

次回、第2章クライマックスの第17話です。はたして、まどか達の……巧達の運命は一体……！？



## 第17話（前書き）

今回で第2章は終わりです。かなりーり長くなってしまいました；  
前回のあらすじ

- ・まどかの説得によりマミは心を取り戻す
- ・マミVSお菓子の魔女<sup>シヤルロッテ</sup>
- ・マミ……マミる

それでは、どうぞ……

## 第17話

「マミさああああああああんッ!!」

まどかの叫び声はその空間にこだまする。さやかは呆然としてしまい、何もかも終わったと思った。だが、そんな空気を破壊するように、突然魔女の周りで爆発が起きたのだ。

「グギャアアアア!」

「え……!?!」

魔女が苦しみだし、吐き捨てられるようにマミが開放される。そしてその瞬間、マミの姿が消え、再び爆発が魔女を苦しめる。

「マミさんが……消えた!?!」

さやかとまどかは辺りを見渡す。

「危なかったわね」

後ろで声がし、二人は振り向く。すると、そこには魔法少女となったほむらが、マミを抱えていた。ほむらは荒い呼吸をしており、顔色もそれほど優れていなかった。そして、左腕は垂れていた。骨折しているようだった。

「ほむらちゃん! マミさん!」

「転校生……なんで今になって……ていうかその腕どうしたのさ!」

ほむらがマミを寝かせ、まどかはマミに寄り添う。一方で、さやかはほむらの腕を心配する。

「別に問題ないわ」

そう言っ、ほむらはマミを見る。頭を噛み砕かれ、血まみれであったが、かろうじて呼吸はしている。帽子についているソウルジェムは黒く穢れつつあったが傷ひとつない。

「……よかったわね。巴マミは無事よ」

「このどこが無事なんだよ！　こんな血まみれで！！」

「あの状況で生き残ったのよ。無事と言わないでなんというの」

さやかはほむらに食ってかかるが、ほむらは真顔でさやかに返す。

「ほむらちゃん……」

「あなたは悪くないわ、鹿目まどか。気休め程度だけれど、これを使いなさい。魔力を回復させて傷の回復をさせるのよ。彼女の肉体は比較的再生力が高い、魔力さえ回復すればなんとかなるかもしれないわ」

そう言い、ほむらはまどかにグリーンフィードを投げ渡し、戦場<sup>まえ</sup>へと足を運ぶ。

「ほむらちゃん……！　巧さんは……」

「……下がりなさい。あの魔女は……私が倒す！」

ほむらは魔女に向かって駆け出す。

「え？　巧も来てんの？」

さやかは巧が居るのかと想い、なぜか辺りをきよろきよろと見渡す。

（おそらく、マミの拘束を受けていたはずだ。ファイズ無しにいったいどうやって……）

テレパシーである出来事の一部始終は理解していた。キュウベえはまどかの持っている黄色いバックを見つめながらそう思っていた。

魔女はほむらを噛み殺そうと、ほむらへと向かっていく。巨体ながら素早い動きで、魔女はほむらに食らいつく……が、そこには誰も居なかった。魔女は辺りを探し回る。

「ここよ」

ほむらはいつの間にか、高い位置にある足場に立っていた。

「嘘……いつの間に！？」

さやかは目を擦りながらほむらを見る。魔女は諦めず、ほむらを

丸呑みしようと足場ごと食らいつく。だが、またもや空振りだった。ほむらはいつの間に別の足場に立っており、それはまるで瞬間移動だった。

魔女はほむらを食い殺そうと何度も足場ごとほむらを捕食しようとする。だが、なんどやっても失敗してしまっていた。

「ハア……ハア……！」

ほむらは荒い呼吸をしながら魔女の攻撃を避けていく。ほむらが次の足場の乗り移る。が、魔女がそれを先読みしていたのだ。魔女はほむらが足場に乘った瞬間、足場ごとかじりついた。

「あぁっ！」

「ほむらちゃん!!」

さやかとまどかが叫ぶ。だが、その瞬間魔女の口内で爆発、魔女が口から黒い煙を出す。魔女はまたもやほむらを見失う。そして、連続で爆発、魔女はまともに食らい、そのダメージは大きい。魔女、いや、まどか達もほむらの姿を捕らえることが出来ない。ほむらの戦いは謎が多いが、魔女を圧倒しているのは確かだ。

（これで……最後よ!）

ほむらは勝利を確信しつつも、堅実に攻めていく。そして、魔女にとどめを誘うと、爆弾を盾から取り出す。足場から飛び立とうとした時だった。

「キュウッ！」

「がっ……しまった!？」

なぜか女装していた使い魔がほむらに体当たりを仕掛けたのだ。既に片足を上げ姿勢が不安定な状態であった為、体当たりを食らったほむらはそのままバランスを崩し、よろけてしまう。魔女はその隙を逃さず、尻尾でほむらを壁までたたきつけた。

「ぐああああぁっ!!」

「ほむらちゃん！」

「転校生！」

魔女はそのままほむらを尻尾で何度も叩きつけ、壁から崩れ落ちることを許さない。ほむらは見る見る内に血まみれになっていく。まどかは、それを青白い顔で見ていた。恐怖で体が震えていた。

「……きゃ……私が……やらなきゃ……」

「まどか……?」

そう言っ、まどかは黄色いバックから、ベルトとファイズフォンを取り出し、ベルトを巻きつける。

「確か……5を三回……!」

「ちよつと、なんでまどかがそれを持つてんの!? 巧は……」

さやかを無視し、まどかは変身コードを入れ、ENTERを押す。

《S t a n d i n g b y》

コードを入れた後、まどかはさやか達から離れ、前へと出る。

「まどか、危ないから戻って!」

さやかはまどかを引きとめようとするが、マイが心配でその場から離れられず、まどかはさやか達から離れていった。

「な……鹿目まどか、戻りな……ガハッ!」

ほむらはまどかを止めようとするが、魔女の相変わらずの尻尾攻撃に何も出来ない。

「……へ、変身っ!」

まどかは両手でファイズフォンを天に掲げベルトにセットし、巧同様構えを取る。

だが。

《E r r o r》

「きゃああああっ！」

まどかはベルトにはじかれ、しりもちをついてしまう。すると、魔女がまどかに気づき舌で口元を舐め回す。標的がほむらからまどかへと変わった証拠だった。

「え……ああ……」

まどかは魔女から向けられた自身への殺気を感じ、恐怖でその場から動くことが出来なかった。涙を流しながら、後ろへと退く。

「ぐあ……くっ……！」

ほむらは壁から崩れ落ちかけながらも盾に手をつける……が。

「……そんな……『発動』しな……きゃあああああ!？」

ほむらはついに壁から崩れ落ち、悲鳴を上げる。そして、魔女はまどかに向かって動き出した。

「転こ……まど……！」

「さやか、早く契約を！」

さやかはどうすることも出来ず、キュウベえは契約を迫る。

「きゃあああああああ!！」

まどかの悲鳴が響く。

「……キュウベえ! 私の願いは……！」

その光景を、ほむらは落下していきながら見ていた。なぜか、スローモーションに感じる。

(美樹さやかが契約してしまう……鹿目まどかが……こんなときに魔法が使えないなんて……)

ほむらの右腕がまどかへと伸びていく。もはや全てが絶望的だった。さやかが契約したとしてもおそらく、まどかは助からない。そして自分自身も何も出来ず、落ちていくだけ。ほむらの涙が、空に浮いていた。

「……まどかあああああああッッ!!」

ほむらがまどかの名を叫んだ、その時だった。その空間の壁が、派手な音を立てて崩壊したのだ。ほむらや魔女、その場にいた者全員がそこを見る。そこから煙が立ちこめ、そこから、銀色のロボットが飛び出してきた。さらに。

「うおおおおっ!! ほむらあああああああッ!!」  
「乾……巧!」

巧が壁にあいた穴から飛び出し、落ちてゆくほむらを追う。巧は壁を蹴り、ほむらとの距離を縮めていく。

「俺につかまれえええ!!」

巧はほむらに手を差し伸べ、ほむらはその手を掴む。そして巧はほむらを引っ張り、その全身を受け止め空中で回転、大きな音を立てて巧が着地する。

ロボットは空中を飛び、魔女に向かってタイヤのマシニングを恐ろしい速さで撃ちだす。それは魔女に命中、魔女は悲鳴を上げる。流れ弾が契約しようとしていたキュウベえの足元に被弾し、キュウベえは跳び上がる。さらに女装していた使い魔も撃ち、使い魔は事切れる。魔女は使い魔を倒され腹を立てたのか、まどかからロボットへと標的を変え、噛み砕こうと大口を広げロボットに向かう。

「……ッ!!」

高いところから落ちたのだ。衝撃を受け止めきれず、足がしびれるように痛む。巧は声にもならない悲鳴を上げながら、ゆっくりと

立ち上がる。

「……だ、大丈夫だったか？」

「……！」

しばらく呆然としたほむらだったが、ふと気づくと自身がお姫様抱っこ状態であることに気づく。ほむらは顔を一気に赤くする。

「……早く！ 降ろしなさい！」

「痛てっ！ 落ち着けてっ！」

暴れるほむらを抑えながら、巧はまどかの元へと駆け寄る。

「まどか……」

「……ごめん……なさい……」

まどかは大粒の涙をこぼしながら巧に謝る。巧はまどかの頭をぽんぽんと叩き、慰める。

「巧いー！」

その場にさやかも駆け寄る。

「さやか……ママは！？」

「巴ママは……死んではないわ。ただ、死に掛けている」

「……そうか」

答えたのはさやかではなくほむらだった。それを聞き、巧は悔しそうにつぶやき、齒を食いしぼる。

「てか巧、あれ何！？」

さやかはロボットに指指す。ロボットは魔女を回避しながら銃弾を浴びせている。

「オートバジンだ」

「オート……って、まさかあのバイクッ！？」

さやかは驚く。あれはオートバジンの戦闘形態、『Battle Mode』だ。

「あいつが無かったら俺達も危なかったからな……」

~~~~~


それはまだ巧達が拘束されていた時の話。

「……うぐあああああああ!!」

巧の悲鳴が辺りに響く。それから静かになり、ほむらは恐る恐る目を開ける。巧が荒い呼吸をしていた。

「ゲホッ……悪い、無理だった」

「……くっ!」

巧は咳き込み、ほむらは唇を噛む。すると、遠くからバイクの走る音がする。ほむらが振り向く。すると、無人のバイクがこちらに向かって走ってくるのではないか。

「あれは……!?!」

「……来てくれたか」

それは巧のバイク、オートバジンだった。結界に入る際、オートバジンに乗ったまま入り、入り口付近で降りていた。そして今、巧の危機に駆けつけたのだ。

「こいつ破ってくれ!」

『PiPi』

巧がそう言うと、オードバジンは変形する。

《Battle Mode》

「内が駄目なら外からだ……ほむら、怪我したくなかったら動くなよ」

「え?」

オートバジンは左腕のタイヤ、『バスターホイール』でリボンを撃ち抜く。同じマシンガンでも、バスターホイールはオルフェノクにダメージを与えるほどの威力だ。オートバジンは巧達を拘束しているリボンをすれすれで撃っている。本来これは精密射撃には適さ

ない、人に接しているリボンを人体すれすれで撃つのは容易ではない。オートバジンは慎重にリボンを撃っていく。

「……よし、いける！」

リボンが緩みだし、巧とほむらは力を込める。するとリボンが破れ、巧達は脱出に成功したのだ。

「……急がないと」

「おい……ちょっと待て……！」

ほむらが先に進もうとし、巧はそれを引きとめようとする。だが、ほむらはその場から姿を消してしまったのだ。

「なっ……!？」

巧は見間違いかと思い、目を擦りながら辺りを見渡すが、ほむらの姿はどこにも無かった。

「……はあ、仕方ない。一気に行くぞ！」

そして巧はオートバジンの力で壁を壊して進むという荒業で、なんとか魔女の元まで向かったのだった。

~~~~~

「……拘束？ まどかがベルト持っていたり、もうわけわかんないんだけど！ 一体どういうことなのさ！」

この場で真相を知らないのはさやかのみ。さやかは混乱する。

「話は後だ……さやか、ほむらを頼む」

「え、ちょ……転校生……意外に重いッ！」

「……失礼ね……」

さやかは巧からほむらを託され、ほむらは再びお姫様抱っこ状態に。そして、さやかの一言に怒りを覚える。

巧はベルトとファイズフォンを拾い、ベルトを装着する。

「お前ら下がってろ！」

『5』を押す。

「あいつだけは……」

もう一度『5』を押す。

「許さない！」

さらに、もう一度『5』を押す。

「こいつらを殺そうとした罪……背負ってもらおうぞ！」

そして、ENTERを押した。

《Standing by》

ファイズフォンを折りたたみ、勢いよく天に掲げる。

「変身！」

《Complete》

巧は赤い光に包まれ、ファイズへと変身する。巧は右手をスナックプさせながら、左手でミッションメモリーを取り出す。そして右腰に取り付けられているファイズポインターを取り、ミッションメモリーを取り付ける。

《Ready》

それを右足に取り付け、ファイズフォンを開きENTERを押す。

## 《Exceed Charge》

ファイズはだらけるような体勢でしゃがみこみ、ベルトからフォトンブラットが送られ右足に取り付けたファイズポインターに集中した。

「ふっ！」

ファイズは高く跳び上がり、そこに丁度オートバジンが近くにより、トスの要領でファイズをさらに高く上げる。魔女がファイズに気づくが既に時遅し。ファイズは空中で回転し、両足を魔女に突きつけた。

「はあっ！」

ポインターから赤いレーザーが打ちだされ、魔女を捉えると円錐状に形を変える。ファイズは蹴りの体勢に入る。

「やああああっ！」

ファイズの『クリムゾンスマッシュ』が魔女をドリルでえぐるように炸裂、魔女の背からファイズが現れ、赤い『Φ』が浮かび上がり、魔女は爆発した。

「やった！」

さやかがガッツポーズをする。まどかも安堵の表情を浮かべる。しかし、ほむらだけがいまだ不安な表情をしていた。そして、ほむらの不安は的中してしまった。

魔女が爆発してから数秒、ファイズは降下していく。だが、爆発の際に出来た煙から、倒したはずの魔女が勢いよく飛び出してきた。  
「何っ!？」

「「そんな!」」

魔女はファイズを食らおうと大口を開く。当然ファイズは回避な

どできず、そのまま胸から上を噛まれ口内に。まどかとさやかは思わず声を上げてしまう。

「ぐあああああっ!!」

巧は鋭い牙によるダメージで悲鳴を上げる。魔女はファイズをくわえたまま振り回す。オートバジンはホイールバスターで魔女を撃つが尻尾で弾かれ、壁に激突する。

「ぐうう……くっ!」

ファイズは手探りでなんとかファイズフォンを取り出し、『106』と入力しENTERを押す。

## 《Burst mode》

「はっ!」

魔女の口に右腕を突っ込み、フォンブラスターの三連射弾を魔女の口内に撃つ。流石の魔女もだえ、ファイズを吐き捨てるように地面に向かって放り投げる。

「ぐあああああっ! ガハッ!」

「きゃあ!」

ファイズは抵抗も出来ず、まどか達が隠れていたドーナツに激突、ドーナツは形無く崩れてしまった。

「ぐっ……強い……!」

「そんな……ファイズでも……」

まどかはそうつぶやく。胸のプレートが無ければ最悪噛み切られていたかもしれない。流石の巧も恐怖を感じる。今は再びオートバジンが魔女の相手をしているところだ。

「……くっ!」

ほむらは何を思ったのか、突然マミの頬をはたく。マミのソウルジェムは再び黒く濁りつつあった。

「ちよっ……転校生!」

「起きなさい……早く起きなさい! 魔力は回復したんでしょ!」

早く起きて私の怪我を直しなさいよ!」

「ほむら! 落ち着け!」

ほむらはマミを叩き起こし自分の怪我を回復させようとする。だが、それは所詮悪あがき。ファイズに止められる。

「くっ……! あの魔女を倒せるのは私だけ……私さえ戦えるようになれば……!」

確かに、ほむらはあの魔女を圧倒していた。身体が万全であれば勝てただろう。しかし、今の彼女は満身創痍。まともに戦える状態ではない。この結界から逃げようにも難しい。ほむら自身満足に動けない上、マミは意識がない。まどかとさやかに戦う力は無い。かといってファイズに全員守りながら戦えるのかと言われれば難しいのが現状だ。

「まどか、さやか。君達が今この場で契約すればこの危機を脱することが出来る! だから、早く僕と契約を!」

「くっ……そんなこと……」

キュウベえはまどか達に契約を迫る。ほむらは契約させまいとするが……

「その必要はない」

契約を止めたのはほむらではなくファイズ、巧であった。

「あいつは、俺が倒す」

ファイズは立ち上がり、体についたドーナツの汚れを払い落とす。

「あなた……体験したでしょ? ファイズの力でも倒せないのよ!」

「だったら、死ぬまで倒すだけだ」

ほむらはファイズを止めようとする。だが、ファイズは止まらない。

「それが出来ないって言ってるのよ! あれ魔女は再生力が異様に高い! さっきの技を食らってもすぐに再生したじゃない!」

「なら、再生できないくらいになるまでやる」

「あなた馬鹿！？ だからそれが……」

「ファイズには、そのすべがある」  
おれ

そう言っ、ファイズはほむら達に左腕を見せ付ける。リストウオッチのような物を取り付けていた。いや、以前から付けていたというべきか。これまで目立たなかっただけで、ファイズは常にこれを付けていた。

「あいつに、お前らの分まで礼をしてきてやる」

ファイズはリストウオッチ型コントロールデバイス『ファイズアクセル』から『アクセルメモリ』を取り外し、ファイズフォンに取り付ける。

## 《Complete》

すると、ファイズの胸のアーマーが展開し、肩に収まる。あらわになったアーマーの下は、まるでモーターのよう。そして、ファイズの赤いフォトンストリームが光りだし、赤から銀へと変わり、複眼は赤色に変化した。

「姿が変わった……！？」

ほむらが驚きながらつぶやく。二人もファイズの姿が変わったことに驚いていた。これがファイズのもうひとつの姿、『アクセルフォーム』だ。

「グギャアアアアアアッ！！」

ファイズに気づいた魔女はオートバジンからファイズに標的を切り替え、突進してくる。だが。

「はあっ！」

「ビュッ！？」

ファイズの蹴りが顔面を沈めた。アクセルフォームは、通常のファイズ以上の性能を引き出すことが出来るのだ。

「ふっ！ はっ！ やあ！」

連続で殴りつけ、蹴り飛ばす。魔女は壁に衝突する。ファイズはジャンプし、オートバジンが再びトスの要領でファイズをさらに高く飛ばし、ファイズは高い足場に飛び乗る。魔女はファイズを逃がすまいと追うが、噛み付こうとした際に天狗のように長い鼻を掴まれる。

「はあっ！！」

そして魔女は上空に蹴り飛ばされ、魔女は宙に浮いた。

「強い……」

「けど、あれでは倒せない……！ どうすると言うの？」

さやかはファイズの格段に上昇した戦闘力を見てそうつぶやく。だが、ほむらは相変わらずだ。しかし、このままでは魔女を倒せないのは確かだ。

しかし、ファイズアクセルフォームは戦闘力を上げるだけではない。アクセルフォームにはある能力があるのだ。

「よし……行くぞ！」

ファイズはファイズアクセルの赤いボタン、『スタータースイッチ』を押す。

《Start Up》

聞きなれない機械音、ファイズの周りが熱気で歪みだす。巧は右手をスナップさせる。

「はっ！」

そして、ほむら達の視界から、ファイズが消えた。

「ええ！？ ファイズが消えた！？」

「まさか……！？」

さやかとほむらは驚いていた。そして、宙に浮く魔女の回りにあの赤い円錐がひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ……と大量に現れていく。



「なっ……!!?」

それはファイズの必殺技『クリムゾンスマッシュ』だ。そして、これはファイズアクセルフォームの能力、十秒間のあらゆる動作を通常の千倍で行うことが出来る『超加速モード』によって可能となった、『アクセルクリムゾンスマッシュ』だ。一度に何発も発動しているように見えるが、これは超加速状態によって一発一発の発動が急速に早くなっているためだ。目にも留まらぬスピードで動き続けるファイズ。そして、十数にも及ぶエネルギーが、ほぼ同時に魔女に炸裂した。

「はああああああ!!」

「ギャアアアアアアアアアアアッ!!」

連続の『クリムゾンスマッシュ』に魔女は悲鳴を上げる。全ての円錐が発動された後、魔女が開いていた大口に、さらにもうひとつ赤い円錐が放たれた。開いた口に突っ込む状態である。

《Three》

十秒間の終わるカウントダウンが始まった。

《Two》

「これで……終わりだああああ!!」

ファイズは蹴りの体勢を取り、一気に急降下していく。

《One》

「やああああッ!!」

魔女の全身を貫くように『クリムゾンスマッシュ』が炸裂。そし

て、尻尾の先までたどり着き、ファイズが抜け出したところで、十秒間の終了が告げられた。

## 《Time Out》

ファイズが着地した瞬間、赤い『Φ』が浮かび上がり、魔女は断末魔を上げる間も無くその肉体を霧散させた。魔女が、死亡した瞬間であった。

## 《Reformation》

そして、ファイズの元ヘグリーフシードが落ち、ファイズがそれをキャッチしたところでフォトンストリームが赤色に、複眼が黄色に戻り、アーマーも再び展開し、ファイズの姿が元に戻った。

「……いよっしゃあ！」

さやかが派手にガッツポーズを決め、ほむらは一息つく。

（まさかファイズにあんな力が……敵に回さなくて正解ね……）

「う……ん……」

「……マミさん……？ マミさん！」

マミが意識を取り戻し、まどかがマミに抱きつく。ファイズもそれに気づき、変身を解きながら駆け寄る。そして、魔女が倒れたことによって結界が崩壊し、元の景色へと戻っていった。

「マミ！ 大丈夫か！」

「……巧さん……暁美さん……」

マミは辺りを見渡す。まだ現状が理解できていないようで、ぼーっとしていた。

「……そうよ……私……私！」

ママは全てを思い出し、ガタガタと震えだす。

「どう？　巴ママ。自業自得で死に掛けた気分は」

「おいほむら！」

巧はほむらを止めようとするが、何も知らないさやかが食いつかないはずが無かった。

「……さっきから、どうということなの？　ママさんが何かしたの？」

「さやかちゃん……その、あのね」

「巴ママがあなたを魔法少女にしようとしていた……と言えいいかしら？」

「……は？」

さやかはほむらの言っている事が理解出来ていない。

「巴ママはあなた達を魔法少女に誘導していたの。見た目重視で戦ったり、使い魔を選んで戦ったりしてあなた達が自分に憧れるように仕込んでね。さっきも邪魔な私達を縛り付けていたわ。まあ、そのせいで死にかけたのだけれど」

「ほむら、もう止めろ！」

自重しないほむらに、巧が怒鳴る。

「……ママさん、嘘でしょ？　……ねえ」

さやかは小さな声で言う。ほむらの言っていることが受け入れられないせいだ。

「……ごめんなさい」

そのママの一言で、さやかは理解した。自分が騙されていたことに。

「……はは……そういうことだったんだ……あたしって馬鹿だなあ……」

さやかは自分をあざ笑う。

「……ママさん、人に契約とはちゃんと決めておけつて言っときながら、そんなことしてんたんだ……ふざけんな！」

さやかがぶち切れる。

「正義の味方だっと思ってたのに……憧れてたのに……それを利用

して?」

「待ってさやかちゃん! マミさんは……寂しかったただけなんだよ!」

「寂しかったから何!? それで人を騙していいわけ!? あんた

……最低だよ!」

そう言っ、さやかは病院へ向かう。

「み、美樹さん……待って!」

「さやか……お前」

「……悪い、頭冷やしてくる。病院の人たちも心配だし」

マミと巧が止めようとするが、さやかは言ってしまった。

「……美樹……さん……」

「当然の結果ね、彼女はあなたの策にハマりすぎた。故にこうなった」

「……」

確かに、さやかはマミに憧れていた。確実にマミの策に乗っていた。マミは黙り込む。

「……マミ、僕はさやかと話をしてくる」

キュウベえはそう言っ立ち去ろうとする。

「……待ってよ。元はといえばあなたのせいじゃない……あなたが、あんなことを言わなければ……」

「……はあ、失望したよマミ」

キュウベえはため息をつくようなしぐさをする。

「え?」

「言っただろ? あれは考えに過ぎない。信じるに値しないものさ。あの時、ちゃんとそう言っただよ。だけど、君はそれを鵜呑みにした。さて、悪いのは誰なのかな?」

「……!」

マミはショックを受けたような顔をする。

「まあ安心してよ。さやかにはちゃんと話しておくからさ。それとまどか、君も来てくれないかな?」

「え？ ……でも」

さやかのことにも心配だが、まどかはマミのことにも放っておけなかった。

「僕だけじゃさやかを丸め込むことが出来ないかもしれない。一応ついてきてほしいんだ」

「……分かったよ」

しかし、キュウベえにそう言われ、まどかはしぶしぶ承諾する。

「巧さん、ほむらちゃん。マミさんをお願いします」

そして、まどかとキュウベえもその場から居なくなってしまった。

ほむらはマミの側に寄り、その場にひざをつく。

「それと私の怪我、治してくれないかしら」

「……ええ」

マミは魔法でほむらを回復させる。骨折も直ったようで、ほむらは左手を動かす。顔を歪ませているところを見ると、痛みはまだあるようだが動かすことに支障はないようである。

「乾巧、グリーンシードを貸してくれない？」

「あ、ああ」

巧がほむらにグリーンシードを渡すと、ほむらは自分のソウルジェムの穢れを取り除く。

「ありがとう、返すわ」

そう言って、ほむらは巧に……ではなく、マミに投げ渡す。

「……無様なものね巴マミ。あなたは命を失わなかった代わりに、信頼を、絆を失った。それに、今回のことで二人とも恐怖を覚えたでしょうね。あなたはこれからもずっと、独りよ」

「！」

そのほむらの一言は、精神的に大きな傷を負ったマミには、酷すぎた。マミは跪き、大粒の涙を溢れさせ、アスファルトにその後を点々と残す。

「さよなら巴マミ。あなたとはもう会うことはないでしょうね。あ

あなたはもう戦えない。その身に、より大きな恐怖が刻み込まれたのだから」

そう言って、ほむらは立ち去った。

(……計画通りね。それにしても、巴ミミをわざと死ぬ寸前まで放置するのには骨が折れたわ……ただ死んでもらうより、こっちの方が彼女達を魔法少女から遠ざけることも出来るものね。それに、巴ミミは絶望で……まあ、あいつの活動の助長をしているようにいやだけれど……それに、乾巧が来なければ本気で危なかった……これからは動き過ぎないようにしないと……)

ほむらはミミの戦いを傍観していたのだ。ミミが死に掛けるまで、ずっと。巧を離れて行動したのはこの為だったのだ。ミミは、キューベえ、そしてほむらの思うがままに動かされていたのだ。

(巴ミミ、文字通りあの娘達の見本になってもらうわよ……)

「……ッ」

無言で泣くミミを見て、巧は胸を痛める。

(……俺は、ミミを救えなかった……！ 今のミミを、俺は、手助けできるのか……!?)

そして巧はファイズフォンを手に取り、開くのだった……

巴ミミは生き残った。だが、代わりに負った心の傷は深い。はたして、彼女は死ぬべきだったのか、生き残るべきだったのか。

希望と絶望の物語は、今、本格的に動き出す……

第17話【悲しみの加速】

Chapter 2 ends.  
Followed by Chapter 3.

---

【第3章予告】

Open your eyes for the next 5  
55☆MAGIKA!

「もう、あの時みたいにはなれないよ」

「私のせいで……あの娘達は……」

「イレギュラーが多すぎる……困ったものだよ」

「なんで……まさか!?!」

「今の……もう一回言ってみろよおツ!!」

第3章【正義と悪、譲れぬプライド編】

「もっと楽しませてよほらぁ!」

「変っ身!」

絶望<sup>やみ</sup>を切り裂き、希望<sup>ひかり</sup>をもたらせ！

To Be Continued.



## 第17話（後書き）

はい、今回で第2章は終わりです。

前回は反響が凄く、マミったことでマミさんは死んだと思った人も大勢いるでしょう。しかし、マミさんはマミりながらもほむらによってギリギリのところを救われました。しかし、マミさんは救われたように救われていません。さやかに見捨てられ、まどか達は魔法少女になるか分からない。さらに大切な友達のキュウベえにも失望される。そして、自身もおそらく恐怖で戦えなくなっている……マミさんが生き残ったことはある意味良くなかったかもしれません。そして、ほむらは何か企んでいるよう……

さて、ファイマギでのマミさんについて少し話しましょうか。今作のマミさん、皆さんのイメージからしてちょっと違うと思うところがあります。皆さんのイメージがきれいなマミさんだとすれば、ファイマギのは汚いマミさん。キュウベえにたぶらかされたせいもありますが、戦いを見た目重視でやったり、裏工作をしたり、悪いイメージでしょう。そして、精神もより弱くしています。第2章では、マミさんにはちょっとした悪役になってもらいました。はたして、マミさんはある意味最悪な状態で生き残り、これからどうなっていくのか……。

そして、アクセルフォーム登場！多重クリムゾンはカッコいいですよー……ところで、オートバジンがファイズを高く上げる描写でシザーズを想像した方、シャルロッテにマミられるかもしれませんよー（

次回は第3章、原作ならさやかが魔法少女になり、杏子が出てくる……そして……

果たして、ファイマギではどうなる……!?

今後予測不能な展開でやっていききたいと思うので、よろしく願  
いします!

## 第18話（前書き）

はい！長らくお待たせしました。いよいよ第3章始動です！ なかなか集中できなくて作業がはかどらなくて； 実況動画おもしろすぎる（駄目じゃん

前回までのあらすじ！

- ・ファイズアクセル登場
- ・マミが死に掛ける。
- ・さやか、マミに失望
- ・ほむら、草加臭（

というわけで第18話、行きます！

## 第18話

「まどか?」

「え?」

ぼうっとしていたまどかに詢子が声をかける。まどかは我に帰り、反応する。

「さっさと食べないと遅刻するぞお」

「う、うん」

しかし、まどかは再び思いにふける。まどかが考えていたことはマミのことだった。マミはあれから一言も喋ることなく帰り、夕食も食べないまま寝たらしい。マミは心に大きな傷を負っていた。あのようなことになっては無理もないが。

(……マミさん……)

「姉ちゃ、どうったの?」

タツヤが舌足らずながらもまどかに声をかける。まどかは涙を流していた。

「ま、不味かったかな?」

知久が気まずそうに聞く。まどかは目をこすり、涙を拭く。

「ううん。おいしい、おいしいの。生きてると、パパのご飯がこんなにおいしい……」

知久と詢子は、まどかがどうしてしまったのか、全く分からなかった。いや、分かるはずがない。昨日何があったのか、二人は知らないのだから。

~~~~~

一方、マミの家。

「う……ううん……」

マミは目を覚ます。日差しがまぶしく、マミは腕で朝日をさえぎ

る。気分は優れず、起き上がることにすら億劫だった。何も考えられず、生きている心地がしない。よほど死に掛けた事や、さやかに失望された事に対するショックが大きいのだろう。マミはため息をつく。

「……私、なんてことを……」

昨日のことを思い出し、マミの目がにじむ。すると、扉を開ける音がする。巧が来たのだろう、マミはそう思っていた。だがそこに現れたのは。

「あつ、起きた？」

見知らぬ男だった。

「……きゃああああああああああッ!!」

「うわあっ!？」

マミが叫び、男は肩をびくつかせ驚く。

「なんだなんだどうした!？」

今度は正真正銘、巧がやってくる。

「い、乾さあん! 知らない男の人があ……」

先ほどまでの調子はどこへ行ったのか。マミは混乱しながら巧に助けを求める。

「あわわわわ……ぼ、僕『菊池啓太郎』。たっくんの知り合いだよ!」

「たっくん……あ、乾さんの知り合いの人ですか……?」

啓太郎は焦りながら自己紹介をする。よほどマミの反応に焦っていたのだろう、額に汗をかいていた。『たっくん』が誰なのか一瞬誰のことかわからなかったが、それが巧のことであると分かり、マミは一息つく。

「何かあったの？」

「啓太郎がマミにちょっかいかけようとしてた」

「いやいやそんな気ないから！」

今度は女性が現れ、巧は冗談を言い、啓太郎はそれを全力で否定する。

「あなたも、乾さんのお知り合いなんですか？」

「あ、私『園田真理』。よろしくねマミちゃん」

「あ……よろしく願います。菊池さん、園田さん」

真理の自己紹介も済み、マミは軽くお辞儀をする。

「あの、どうしてお二人はここに？」

「昨日たつくんから電話もらってね。『助けてくれー』って」

「おい、俺そんなこと言ってねえぞ」

あの後、巧は啓太郎達と連絡を取っていたのだ。マミの状態を見て巧は自分だけでは力不足と判断し、啓太郎達を見滝原に呼んだのだ。ちなみにクリーニング屋は長期休業にきてきたらしく、しばらくの間見滝原にとどまるつもりらしい。

「でも、『俺だけじゃどうしようもないから手伝ってくれ』ってさ、そう言ってるもんだよねー」

「うるさいな。それを言うなよ」

「あはは……」

真理に暴露され、巧はそっぽを向いて頭を掻く。耳を赤くしているところを見ると、恥ずかしかったようだ。そんな巧を見て、苦笑いせずにはいられないマミ。

「ほら、早く起きて。ご飯食べよ？」

そう言って真理はマミの手をとる。

（暖かい……）

今のマミにとって、真理の手から感じられるぬくもりは何よりも暖かく、凍りついた心が溶けていくような感覚を感じていた。

「……はい」

そんな感覚を覚え、マミは微笑まずにはいられなかった。

第18話【揺れ動く心】

『今年2011年に入ってから政治家の汚職発覚件数が増え、政府は――』

テレビのニュースが流れ、巧達は朝食を食べていた。大抵の家にはほぼ当たり前のような風景だ。

「……おいしいです」

真理の作った料理を食べ、マミは笑みを浮かべる。それを見ていた巧はほっとした表情を見せる。それを見て啓太郎はにやにやしながら辺りを見る。

「それにしてもたっくん、ここで一週間も過ごしてたんだー」

「なんだよ急に」

「いや、何にも無かったのかなあって」

それを聞いた瞬間、巧は固まった。

「……お前もそれかあああああああ!!!!」

「うわあっ!?!」

突然巧が叫び、啓太郎は驚く。

「さやかといいあいっといういなんで俺をロリコン扱いすんだよおおおおお!! 俺は、俺はあああああああっ!!」

「うわあああなんかゴメン! ほんとにゴメンたっくん!」

これまで何度もロリコン扱いされ、巧の怒りが頂点に達する。啓太郎は土下座しながら謝る。

「巧、変わったなあ」

「真理さん?」

真理のつぶやきに、マミは首をかしげる。

「巧って昔はもっと無愛想で、人を寄せ付けない感じだったのに」「そう……だったんですか?」

「性格のせいでアルバイト100件近くクビになったらしいよ」

「……私にはそんな感じには見えないんですけどね」

出会って間もないが、マミんは巧がそのようには見えなかった。食事でおいしいと喜んだり、魔女との戦闘が終わるたびに心配した

り、マミには『他人思いの優しい人』という認識があった。

「夢を持てたからかなあ」

「……確かに、夢を語ってたときの乾さん、とてもうれしそうでした。夢を持つと時々すごい切なくなるけど、時々すごい熱くなれる、って力説してました」

「……そ、そうなんだ」

真理がわずかに頬を赤らめる。

「どうしました？」

「それ、私が巧に言ったことなんだよね」

真理は照れ隠しのように頭を掻く。

「あ、そうだったんですか？」

「あはは……なんだか受け継がれてるみたいで、ちょっと恥ずかしいかも」

真理はマミに見えないように顔をそらす。相当恥ずかしいのだろう。マミはそんな真理をチラッと見た後、ため息をつく。

「……乾さんって、すごいですね」

「え？」

マミの一言に、真理は首をかしげる。

「とても心強くて、かつこよくて、頼りがいがある……私には、とてもマネ出来ないくらいに素敵で……本当に、私には……」

マミがその後を言おうとしたときだった。

「ちよっと、たっくん大丈夫!？」

啓太郎が声を張り上げていた。二人が見てみると、巧がふらつきながら立ち上がっていた。

「大丈夫だ」

「大丈夫って……たっくんふらふらじゃん!」

巧はふらふらで、今にも倒れそうだった。啓太郎が腕をつかむが、巧はそれを振りほどく。

「だから大丈夫だって! いいから離れ、ろ……て……」

巧は玄関に向かうが、言い切る前に巧の体が大きくふらつき、巧

はそのまま、倒れてしまった。

「たつくん……!!? たつくううん!!」

巧が倒れ、啓太郎が大声を張り上げながら巧に近づく。

「巧!?! しっかりして!?!」

「真理ちゃん! 救急車! 119番!!」

啓太郎は巧を揺さぶるが、反応がなかった。真理も巧の側に寄ろうとするが、啓太郎に言われ、急いで携帯で救急車を呼ぶ。巧は、意識を失っていたのだった。啓太郎は巧を仰向けにする。巧は青白い顔をして弱弱しく呼吸をしていた。

「乾さん、大丈夫ですか!?! 返事してくださいっ!」

一方でマミは巧の体を揺さぶりながら、大粒の涙を流していた。それでも、巧の反応はなかった。

~~~~~

昼休み、見滝原中学校屋上。まどかとさやか、ついでにキュウベえは昼食を食べていた。

「マミさん、学校に来なかったね」

「あんな目にあったんだから、しょうがないでしょ」

「……マミさん、大丈夫かなあ」

「巧がいるし、なんとかなんじゃない?」

まどかとさやかの会話は、何度も途切れていた。さやかが少し不機嫌気味だったからだ。昨日の事が、まだ整理できていないのだろう。まどかも気まづくなり、沈黙状態となった。それは一分程度のものだったが、まどかにはそれが何十分にも感じてしまった。そん

な重い空気の中、さやかが口を開いた。

「ねえまどか。今でもまだ、魔法少女になりたいって思ってる？」

「……」

「……そうだよね」

さやかがまどかに告げる。それに、まどかはうつむいたまま黙っていた。そのまま、再びその場に重い空気がのしかかる。が、まどかが静かに口を開き、沈黙を破る。

「私、昨日マミさんに言ったの……『マミさんを支えられる魔法少女になりたい』って……『一緒に戦う』って約束もして……なのに……！ マミさんが目の前であんな目にあって、怖くなっちゃったの……」

「まどか……」

まどかは涙をこぼす。

「私、マミさんに嘘ついちゃったよお……魔法少女になるって言ったのに、今はもう、なりたくないの……あんな風になりたくない。死にたくないよお……」

一歩間違えれば、マミは死んでいた。そして、自分達も危なかった。特にまどかは、あの時魔女に襲われかけた。あの時の事を思い出すと、まどかは身震いを起こしていた。それに対し、さやかは握りこぶしをふるふると震わせていた。

「あたし達には行っちゃいけない世界だったんだよ、魔法少女なんて。それがどんなに危険なものなのか。それなのに、あの人は……！」

「さやかちゃん。マミさんの事、嫌いにならないで……マミさんは」  
「分かっている！ 分かっているけどさあ……昨日も言い過ぎたと思ってる。でもあたしは、裏切られた気分なんだよ。とてもじゃないけどさ、もう、あの時みたいにはなれないよ。マミさんに、魔法少女に憧れた時には……」

「さやかちゃん……」

さやかも、マミのことを全否定することは出来ない。マミがどれ

だけの孤独を抱えていたのか、さやかにもそれは分かってはいる。だがそれでもまだ、さやかはマミを許せずにいた。

「……分かったよ。二人とも魔法少女にはならないんだね。僕も無理強いは出来ない。別に魔法少女になってくれる娘を探すことにするよ」

「ごめんね、キュウベえ」

「いや、こっちこそ巻き込んで悪かったと思ってる。それと、出来ればたまにマミをも会ってあげて欲しい」

「うん」

「……わかった」

そして、キュウベえはその場を去ろうとするが、突然立ち止まり、まどか達にこう言った。

「ついでに聞いた話なんだけど、乾巧。入院だつてさ」

「ふうん……は？」

さやかは鳩が豆鉄砲を食らったような表情になる。まどかも不安そうな顔をしていた……

~~~~~

——見滝原病院。病室には巧がおり、啓太郎が付き添っていた。

「昨日の戦いでひどく疲れてたのに、たつくんだったら一睡もしないでマミちゃんの様子見てるんだから……倒れて当然だよ」

病院に搬送された巧。結果は『過労による体調不良』だった。昨日の戦いの前からの疲れもそれほど取れていなかったようで、それが今回倒れる原因にもなっていた。

「仕方ないだろ。心配だったんだから……」

なんだかんだで巧も心配性なのだ。マミのことが放っておけずに、

徹夜でマミの様子を見ているほど。それを聞いて、啓太郎はあきれ気味にため息をつく。

「はぁ……とりあえず、一日入院なんだから、ちゃんと休んで、ね。たっくんが倒れちゃったら皆心配するしさ」

「ああ、そうする」

結局、巧は一日入院することになった。むしろ、啓太郎はそれを願っていたのだった。まあ、倒れるほど疲れているのだから、これ以上体に鞭打ってほしくないというのが啓太郎の願いだ。

「あ、そうそう。連絡したら今日さ、海堂さんお見舞いに来るって」海堂、『海堂直哉』のことだ。かつては音楽に精通していた、気まぐれな男だ。巧とは違い、啓太郎達とはそこそこ連絡は取っているようだ。

「……あいつほんと気まぐれだな……」

巧はため息をつき、布団に潜るのだった。それからわずか数秒で、巧は寝息を立てていた。

~~~~~

時間が経ち放課後。まどかはマミの家に行った。啓太郎と真理は買い物に行っており、マミとまどかの二人きりだった。

「……そう」

まどかは魔法少女にならないことをマミに話していた。マミは悲しそうな目をして、うつむく。

「ごめんなさいマミさん。私……」

「いいの。いいのよ鹿目さん。それが、あなたが最終的に出した答えなんだから」

まどかは謝ろうとするが、マミはそれを止める。

「……」

それからお互い口をふさいだまま、重たい空気となってしまうていた。数分の沈黙の後、まどかは思い立ったかのようにマミを見、口を開く。

「ま、マミさん！ 魔法少女にはなれませんが……お友達にはなれます……」

それはマミを思っつての、自分に出来ること。マミの孤独を感じさせないことだ。

「……もう、いいの……」

これ以上、まどかの言うことをマミは聞きたくなかった。だが、まどかは止まらない。

「ほむらちゃんも、さやかちゃんも、マミさんを信用しなくなって……でも、だからこそ、せめて私がマミさんのそばにいないと駄目なんだと思っつて」

「もう……止めて……」

それはまどかの優しさだった。しかし、マミはそれを拒む。まどかにこれ以上、自分に関わってほしくなかったからだ。しかし、マミは耳を両手で隠し、聞こえないようにしていた。

「だから、私は……」

それでも、まどかはマミを見捨てることが出来なかった。マミに寂しい思いをしてほしくなかったからだ。

しかし、ついにマミが切れた。

「もう止めてよ！ 聞きたくないわっ！！」

「！」

マミがそう叫びながら、テーブルを握りこぶしにした両手を叩きつける。大きな音が部屋に響く。

「……マミ、さん……」

まどかは驚いた表情をマミを見つめていた。

「……ごめんなさい。私……！」

それを見て、マミは我に返る。なんてことをしてしまったのだらう、そんな後悔がマミにのしかかる。

「……いえ、いいんです。私こそ……ごめんなさい」

まどかはうつむき、そう言いながらカバンから何かを取り出し、マミに差し出した。それは、あの時まどかがマミ達に見せていた魔法少女の絵が描かれた、あのノートだった。

「これって……っ!？」

マミはそれを手に取り、まどかを見る。まどかは、泣いていた。テーブルに床に涙のしずくが落ちる。

「私、弱い娘で……ごめんなさい!」

「あっ……鹿目さん!」

まどかはマミの家を飛び出してしまった。マミは引きとめようとしたが、遅すぎた。マミ一人が取り残され、マミはテーブルにつっぷし、すすり泣く。

「……どうしたの? まどかちゃん……だっけ、泣きながら出てっちゃったけど……マミちゃん?」

その後二人が帰宅する。真理がマミに声をかけるが、状況が分からず首をかしげることしか出来なかった。

~~~~~

「……ほむらちゃん」

マンションから出、まどかは道を歩いていた。そしてその途中、ほむらと出会ったのだ。まどかとほむらは、お互い黙ったまま歩き続ける。まどかは落ち着いてきたのか、目をこすって涙をぬぐう。

「……警告、聞き入れてくれたのね。これで、あなたの運命は変わった。それだけで、私はうれしい」

まどかにはほむらの表情が見えないが、ほむらは、わずかに笑みを浮かべていた。

「……もし、私がつと早くほむらちゃんの言うことを聞いていたら、こんなことにはならなかったのかな……」

「どうしようが、巴マミはあなる運命だった。下手をすれば、死んでいた。生き残ったのが、むしろ奇跡なくらいよ」

むしろ、マミを無傷のまま、ほむらはマミを救えたはずだ。しかし、ほむらはマミがあなるまで動かずにその光景を眺めていた。まどか達に、魔法少女になったらどうなるかを見せ付けるために。

「……ほむらちゃんって、マミさんとは別の意味でベテランって感じがするよね」

「……そう？」

「……見てきたの？ 魔法少女が死ぬところを何度も」

まどかの声のトーンが低くなる。ほむらは気にせずまどかの問いに答える。

「ええ。数えるのを諦める程」

それを聞いて、まどかの表情は暗くなっていった。まどかはほむらの後ろにいるためその表情は見えないが、仮に見えていても関係ないだろう。ほむらはそのまま続ける。

「魔法少女が結界内で死ねば、こちらに死体は戻ってこない。永遠に、行方不明者のまま。そんなものよ。魔法少女の最期なんて。巴マミも、そうなるところだった」

魔法少女の非情な最期。それを聞き、まどかの瞳が潤む。

「……酷いよ。頑張って戦ってきたのに、死んでも誰にも気づいてもらえないなんて……そんなの、寂しすぎるよ……！」

そして、まどかは再び涙を流してしまう。見えていなくても、ほむらはそれに気づく。

「そういう契約で私達はこの力を手に入れたの。誰のためでもない、自分自身の願いのために戦い続けるのよ。死んだとして、誰に気づかれなくても、忘れ去られても、それは仕方の無いこと」

ほむらはそのことをすでに割り切っているようだった。むしろ、自分の最期に興味が無いのかもしれない。

「いつか、巴マミや私もその中に入ることになる。そして」

「私は覚えてるよ！ 忘れない、魔法少女のこと、マミさんのこと……絶対！」

ほむらの声をさえぎるように、まどかは声を張り上げて言う。

「そう言ってもらえるなんて、巴マミは幸せね。羨ましいくらいだわ」

「ほむらちゃんのことだって……忘れない、忘れないよ！ 昨日助けてくれたことも、絶対忘れたりしないよ！」

それを聞いたからなのか、ほむらが突然立ち止まる。まどかも驚くように立ち止まる。

「ほ、ほむらちゃん？」

「あなたは優しすぎる」

「え？」

そう言うほむらの表情は、どこか悲しげだった。

「忘れないで。その優しさが、もっと大きな悲しみを呼び寄せることもあるのよ」

「あ……」

さつきも、まどかが優しさを見せた結果、マミはあのような反応を見せた。まどかはそれを理解してしまった。

（私が、マミさんを苦しめたんだ……）

そう思った瞬間、何かが崩れたかのように、まどかは泣き出した。涙が落ち、足元にその後を転々と残す。ほむらは黙ったまま、まどかを置いてその場を去っていった。

（あなたを傷つきたいわけじゃない。けれど、あなたが魔法少女にならないためになら、私は止めてみせる。誰かを利用してでも、傷つけてでも。最悪、あなたを傷つけてでも……！）

ほむらがなぜ執拗なまでに、まどかの契約を阻止するのか。その真意は、誰にも分からない。


~~~~~

まどかが帰ってからすぐマミは家を出たものの、まどかを見つめることは出来なかった。それからマミは町をうろろしていた。ソウルジェムを持って。いつものパトロールだろう。

「……」

しかし、そこにいつものマミの表情はなかった。うつむいて、手のひらに乗せたソウルジェムだけを見ていた。何度も人とぶつかりそうになりながら。しかし、ソウルジェムが光ることはなく、マミは近くの公園のベンチに腰掛ける。マミはため息をつく。

「今日は収穫無し……ね」

今のマミには、それが何よりうれしいことに思えてしまった。なぜなら、『戦わなくていい』のだから。

「なんで……こんなにも体が震えるのかしら……おかしいわね……」

「もう、何も怖くなかったはずなのに……なのに、怖い、怖いよお……！」

魔女に大きな恐怖を覚え、ようやく再認識した。自分は、別の世界の人間も当然の存在なのだと。それは、まどか達と会おうまで、思ってきたことのはずだった。だが、まどか達と触れ合うことによって薄れていったのだった。

「私のせいで……あの娘達は……」

マミは後悔した。まどか達を、この世界に巻き込んでしまった事を。巧の、ほむらの言うことをちゃんと聞き得ていれば。あれから何度も、何度も思ったことだ。そしてそれは、遅すぎたではない過ちであった。

「もう、私は駄目なんだ……もう、正義の味方にも……乾さんみたいにも……なれない……！」

マミはうずくまり、すすり泣く。そして、ソウルジェムが黒く濁りだしていることに、マミはまだ気づいていなかった。

悲しみ、そして絶望が、少女達を蝕み始めていた。

To Be Continued.

## 第18話（後書き）

クロス物の大抵は鬱展開クラッシャーが多いですが、ファイマギがむしろ鬱が増します。どんどんシリアスになってきますが、ちよいちよいギャグも入れていきたいなあ。とりあえずたつくんはロリコンじゃない！

はい。そんなわけで啓太郎と真理復帰です。今後はレギュラー扱いになるかと。ま、影は薄くなりそうですが； 巧と一緒に、マミ達を救えるのか……？ それ以前に、たつくんちゃんと休んどけw

マミさんは戦闘恐怖症になり、実質戦線離脱……？ このままだといろんな意味でやばい。はたして、ほむらの思惑通りの展開になってしまうのか！？

次回第19話【さやかと葛藤と決意】。お楽しみに！ ……ってシリアスを楽しめっていうとなんかなあ；

## 第19話（前書き）

今回めちゃくちゃ遅くなってしまい、申し訳ありませんでしたあああ  
ああ！！！！

うまく描写などが書けず、会話だらけ、地の文が少ないなど、これまでには最低なクオリティーになってしまいました；　そして長い。最近長くなりがちです；

そんなわけで、おさらいもかねて前回までのあらすじ！

・巧、倒れる……

・まどかとマミ、深まる溝

・暗躍するほむら

・マミ、戦闘恐怖症

・そして、ソウルジェムが黒く濁りだす……

どんどん暗くなっているファイマギ、今回も一部を除き暗いです。ではどうぞ。

## 第19話

マミが泣き崩れていたその同時刻……見滝原病院。

「恭介ー今日もCD持ってきたよ」

今日もさやかは上条の見舞いに来ていた、いつものようにCDを渡したり、最近の話などをしていた。ただ、今日の上条はどこか様子がおかしかった。元気がなく、さやかの話にもあまり興味を示していないようだった。

「さやかはさあ、僕を苛めてるのかい？」

「……え？」

上条の思いがけない一言に、さやかは啞然とした。

「何で今でもまだ、僕に音楽なんか聴かせるんだ。嫌がらせのつもりなのか？」

「え……だって、恭介音楽好きだから……」

「もう聴きたくないんだよ！ 自分で弾けもしない、ただ聴いてるだけなんて！ 僕は……僕は……っ、うあああああっ！！」

上条は叫びながらその左腕を振り下ろし、CDを叩き割る。CDに破片で切った傷口からの出血。真っ白な布団の一部が赤く染まる。

「……止めて……止めて恭介！」

さやかは上条の左腕を押さえつける。出血は少なくはなく、傷も大きい。しかし、上条はそれを痛がる様子はなかった。

「動かないんだ……もう、痛みさえ感じない。こんな手なんて……！」

「大丈夫だよ、きっと何とかなるよ！ 諦めなければいつかきつと……！」

上条は痛みを感じていなかったのだ。好きだった演奏が出来なくなった上条はもはや、自暴自棄になっていた。さやかは涙を流しながら、上条をなだめようとする。さやかも混乱していた。

「諦めろって言われたんだ！ 先生から直々に言われたよ、演奏は

もう諦めてくれって、今の医学じゃ無理だって！ 僕の手はもう二度と動かない……奇跡か、魔法でもない限り治らないんだよ！」

（『奇跡』……『魔法』……）

ふとさやかが窓の方を見る。

「……ッ！」

そこには、キュウベえがいた。まるで、その時を待っていたかのように。

（……そうだ、願えば……奇跡を願えば……）

奇跡を願う。それはすなわち、『契約』だった。

「……あるよ」

「え？」

さやかの一言に、上条は思わず声を漏らした。

「奇跡も魔法も、あるんだ——」

「あるんだよ」そう言おうとしたさやかだったが、勢いよく開けられた扉の音によってかき消されてしまった。

「おーっす乾！ お前ぶっ倒れたんだって……な？」

……。

「……あり？」

その時、まるでその部屋の時間が硬直してしまったように、物静かとなってしまった。ほんの数秒前までの殺伐とした空気を破壊したこの男の名前は『海堂直也』、巧の見舞いに来たはずだったが、どうやら間違えて上条の病室に入ってしまったようだった。

「……の、ノックぐらいしなさいよ!？」

「いやいや触れるとそこそじゃなくね？」

さやかの間違ったツツコミに思わずツツコミ返してしまった海堂なのだった……

## 第19話【さやかの葛藤と決意】

「ほらよ」

海堂はさやかに缶ジュースを投げ渡す。一応、炭酸ではない。

「あ、ありがとうございます……ごさいます」

さやかはそれを受け取り、礼を言う。

「あの坊ちゃん、お前の幼馴染なのか」

「……うん」

さやかと海堂は看護婦を呼び、上条の手当てを任せて病室を後にしていた。二人は廊下にあるベンチに腰掛けていた。

「バカだよなあ……あたし。恭介を苦しめてたことにも気づけないなんて……」

「人間なんてそんなもんだ、気にすんなくて。あ、俺は『海堂直也』。よろしくな」

「あたし、美樹さやかです」

さやかはショックから立ち直れていないようだ。ため息をつくさやかに海堂はフォローしながら自己紹介する。それに対してさやかも自己紹介を済ませる。

「まあ俺の推測からすりゃ、お前あの坊ちゃんに惚れてるな？」

「え!?! あ、いや……否定は出来ない、かな……?」

「いや絶対惚れてる。でなきゃ頻繁に見舞いに行く奴なんて滅多にいないぞ」

海堂の言ってることは当たっている。さやかはそれをストレートに言われ、いつものようにはぐらかせなかった。海堂はいやらしそくにやけながらさやかの様子を見て、さやかが上条に気があることを見抜く。

「……で、お前さ、ぶっちゃけあの坊ちゃんの何が好きなわけ？」

「え？」

海堂の

「なんかあるだろ？ 優しい所とかカッコいい所とかさ」

「……なんだろ。演奏してるところとか……近すぎて、逆に分かんないかも」

「ふうん……」

海堂は缶ジュースを飲みながら聞いている。妙な表情をしながら。

「……あ。ところで、巧の所行かなくていいの？」

途切れ気味の会話。さやかは巧のことを話題に出す。さやかにそういわれた海堂は、気まずそうに言った。

「ああ……実はさ、嘘なんだよ。病室間違えたってのは」

「え？」

『嘘』、そう言われさやかは啞然とする。

「盗み聞きってわけじゃなかったけどさ、つい聞いちまってな」

「……何で……？」

「お前が取り返しのつかないことをやろうと思うって止めに入った。『契約』、する気だったんだろ？」

『契約』、それを聞いたとき、さやかはバツと振り向き、海堂の顔を見る。その表情から『どうしてそんなこと』と考えていることがわかる。

「……なんでそれを……!？」

「乾とは『同業者』、みてーなもんだからな、大体の事は分かっている。魔法少女のこととかな」

「……そう、なんだ」

少なくとも、間違いではない。とくはわからないが、とりあえずさやかは納得する。

「あいつの気持ち、わかったよ。同じ経験者として」

「……え？」

「俺も以前は音楽の道を歩んでたんだ。けど、事故が原因で、俺は音楽の道を絶たれた。あいつも、そんな感じなんだろ？」



「……うん」

上条も、事故が原因であまってしまった。似たような だったからか、海堂には上条の心境が痛いほどわかる気がしていた。

「なあ、もしお前が契約してあいつの腕が治ったとする。それで、お前は どうするんだ？」

「どう、って……」

「他人の為に願いを叶えてその後、お前に何が残る？ お前は、何のために戦うんだ？」

「ッ！」

海堂の問いが、さやかに重くのしかかる。さやかは考える。上条の腕を治したとして、自分は どうしたいのか。あの時のマミの言葉がさやかの脳裏に蘇る。

『あなたは彼に夢を叶えてほしいの？ それとも、彼の夢を叶えた恩人になりたいの？』

この言葉までもがさやかに重くのしかかり、さやかは押しつぶされているような気分だった。

（あたしは……恭介に何を求めているの？ 腕を治してどうしたの？ また演奏してほしいの？ 恭介の演奏を聴きたいの？ それとも、ありがとうって、感謝されたいの？ あたしは……）

そう考えだすと、キリがなかった。頭の中で自問自答が繰り返される。ひとつ、またひとつと繰り返されるたび、さやかの心境は悪くなっていく。胸のモヤモヤが大きくなっていき、気分が悪くなっていくように感じた。

「……あたしって、嫌な子だ……！」

自分の思慮の足りなさにさやかは嫌悪感を抱く。

「しかたねえさ、それが『人間』だ。誰だって見返りは欲しい」「けどさ……！」

その後が浮かばなかったのか、黙ってうつむく。

「恭介、この先ずっとあのままなのかな……音楽を諦めて、ずっと……」

「……まあ、夢を諦めるのは難しいわな」

「……海堂さんは、どうやって立ち直れたんですか？」

「俺の場合は……夢を継いでくれた後輩が居たからな……きれいさっぱりってわけじゃねえけど、それなりにな」

「そういやあいつどうしてんだろうな、海堂はそう思いながら言う。さやかはため息をつき、うつむく。

「……願いつて、夢って何なのかな……巧は『夢は時々すごく切なくて、時々すごい熱くなる』って言ってた……でも、恭介はそんなレベルじゃないよ……すごく苦しそうだっただもん……呪われたみたい……」

「……『呪い』、ねえ」

海堂は『呪い』という言葉聞き、過去の自分を思い出していた。

『夢ってのはな、呪いと似たんだよ。呪いを解くには、夢を叶えなければならぬ。けど夢を諦めた奴は、一生呪われたままなんだよ』

かつて、友だった男に話した『夢』というものの自論を。夢を諦めきれないもどかしさ、ジレンマを『呪い』に例えたものだった。

「……とりあえず、今日は帰れ。あの坊ちゃんとも落ち着いてから、だな」

「……うん」

だんだん話しづらくなってきたのか、海堂がそう提案する。さやかもこの空気の重さに耐えられなくなったのか、素直に応じていた。

「あ、あと契約だけはすんなよ。なんか乾がうるさいみたいだぜ」

「巧が……？」

「ああ、なんか『奴は止めとけ、絶対止めとけ！』ってな。まあ、

ぶっちゃけあの白い野郎が信用できないんだろうな」

白い野郎、キュウベえのことだろう。さやかは思い出していた。昨日さやかがあの場から離れた時、すぐにキュウベえがついてきたことを。あの時はなんとも思っていなかったが、今考えてみればキュウベえはマミ曰く『友達』。しかし、キュウベえは傷ついた友達<sup>マミ</sup>を置いてさやかについてきた。友達ならこんなことをするのだろうか。それに、ようやく考えてみれば、あの時窓の方にキュウベえがタイミングよくいたことも不自然だった。さやかは妙な違和感を覚える。

「あっ……巧のお見舞い……ま、明日になれば普通に会えるんだし、いっかな……」

ふと、巧のことを思い出す。しかし、いろいろあってさやかも疲れていた。今日はもう帰りたい気分になっていた。だが、今日は巧と一度も顔をあわせていない為か、さやかはため息をつく。まるで寂しがっているように。

「……って、なんで残念そうにしてんだあたしは!？」  
そして、突然一人ツツコミを始めるのだった。

~~~~~

その頃、マミは……

「……はあっ、はあっ!」

マミは魔女を見つけて……いや、鉢合わせてしまったのだ。マミの持つソウルジェムが強く黄色い輝きを放つ。いつもならさつと魔法少女に変身し、結界に入っているはずだった。しかし、今のマミは戦いを恐れていた。故に結界に入ることもままならなかった。戦いたくとも戦えない……いや、戦いたくないのだ。

「い……いや! 私は……私は……ッ!」

マミは魔法少女だ。魔女と戦うことがは使命であり、生きるすべ。言わば、『戦わなければ生き残れない』……なら、戦わない魔法少女は一体なんなのだろうか。自分は、一体なんなのか。マミはそう考えていた。願い次第で、両親と共に生きること出来た。しかし、マミは自分だけ助かってしまった。『助けて』と願ったために。マミはそれを罪とし、その罪に苦しんでいた。魔法少女となり、魔女と命がけの戦いをする。そんな危険な日々を、マミは罰だと考えていた。ばっさり言ってしまえば、マミは戦うことによって罪から逃げてきたようなものだ。そして戦えなくなった今、マミはどうすればいい。マミに植えつけられた恐怖はとでもごまかしきれものではない。かつて味わった恐怖など比ではない。戦わなければいけない、けど、戦いたくない。そのジレンマに苦しみ、結局マミはその場から動くことはなかった。

やがてソウルジェムの反応が悪くなり、魔女が遠ざかっていったことを確認する。すると、マミは膝から崩れ、地に手をつき、その手元を涙でぬらしていた。

「やっぱり、駄目……恐い、私はもう駄目なんだ……！」

戦えない自分に生きている価値はあるのか。両親を捨て一人生き延びてしまった罪を、どうすればいい？ オルフェノクと戦っていたあの時のように背負えるのか？ マミはそんなことを考えていた。「もう、私が居なくても、曉美さんや乾さんがやってくれる……きつ……と……」

それから少しして、突然マミは立ち上がる。不敵な笑みを浮かべて。そして、重い足取りで歩き出す。魔女の方へと向かって。

「そうよ……戦えない私なんて……もう生きている価値なんかない……死ねばいい……消えちゃえばいいのよ……あはは、あはははは」
マミの首筋には、パソコンのモニターのような、黒い紋章が浮かび上がっていた。

それは紛れもなく、『魔女の口づけ』だった。

~~~~~

「やあ、さやか」

「キュウベえ……」

外も暗くなりはじめ、帰ろうとしていたさやかの目の前にキュウベえがやってくる。

「どうしたんだい？ さっきは契約してくれそうな感じだったけど」  
海堂がやってくるかなければ、さやかは契約をしていただろう。  
だが、今のさやかは、契約するかどうか悩んでいた。いや、ほとんど固まりつつあった。『契約』しない道を。

「……あたしさ、やっぱり……」

「……夢は呪いと同じ」  
「え？」

『契約しない』、そう言おうとした矢先、キュウベえは何か引つかかるようなことを言う。かつて、海堂が考えていたこととほぼ同じことを。

「さっき、彼が『呪い』という言葉聞いたとき妙な表情をしていたし、夢が何なのかを聞かれて反応に困っていたようだからね。なんとなく、そう思っただけさ」

キュウベえは海堂の反応を影からしっかりと見ていたのだ。キュウベえはすぐに続けて言う。

「上条恭介は夢を絶たれ、永遠にその呪いに苦しむことになる。夢を諦めたら、永遠に呪われたままだからね。それに、あのままの状態だといずれ精神的に弱って魔女に目をつけられるかもしれないし」

「……じゃあ、どうすりゃいいのさ。どうすれば恭介は……！」

今のさやかには何もすることが出来ない。さやかは声を荒げる。  
「呪いを解くには、夢を叶えなければいけない。けれど、彼にそれ

はもう出来ない。音楽が出来ないんだからね。けど、君ならそれは出来る」

それは明らかに、海堂の夢がなんなのかという自論そのものだった。キュウベえはあの会話を聞いたただけで、海堂の自論と全く同じ考えを思いついたのだった。そして、それを交えながらキュウベえは契約を迫る。

「君が願えば、僕は彼の怪我を治してあげられる。腕が動くようになるんだ。呪いを絶つ事が出来るのは、魔法少女だけなんだ」

「魔法少女、だけ……」

「それに、この見滝原に魔法少女はもはや暁美ほむら一人といっても過言ではない」

「……どうということ？」

この見滝原にはまだ巴マミがいる。マミの名が挙がらなかったことにさやかは違和感を覚える。

「マミが魔法少女としての使命を放棄した、とでも言えればいいかな。マミが魔女と戦うことを恐れ、敵前逃亡したのさ。しかもあろうことか、魔女の口づけを食らってしまった。そして、君の友達である志筑仁美も魔女の口づけを受けていたよ」

「!？」

「そのほかにも多くの人間が魔女に取り付かれてしまっている。おそらく、自殺願望のタイプ。それも集団自殺だ。マミが見逃し、マミが取り込まれてしまった魔女がこれだけの被害者を作ろうとしている。君はそれを放っておけるのかい？ 暁美ほむらも昨日負傷している。傷は癒えてはいるが、万全ではないだろうし、君が頼りにしている乾巧もあの状態。おまけにまどかは契約もしないだろうし、精神的に弱ってしまって逆に魔女に魅入られてしまいうさだ。一体この町を、魔女に殺されそうになっている人たちを救えるのだ誰かな？ もちろんさやか、君だ」

「……!」

キュウベえはさやかに何も言わず、間髪いれずに話を進めてい

く。

「さやか、君は正義の味方に憧れているんだよね？ 上条恭介を、友達を救いたいんだろ？ なら、君が戦うべきだ」

「あたしは……あたしはっ！」

「そしてなればいい。呪いを断ち切る、魔法少女に」

「呪いを、断ち切る……？」

その言葉に、さやかは心が揺らぐ。

「そうさ。だから……僕と契約して、魔法少女になってよ！」

そう言っ、キュウベえは笑みを浮かべる。キュウベえの巧みな話術。さやかの意思は大きく揺らぎ、困惑していた。契約すれば友達、上条恭介を救えるかもしれない。そう考えると、契約しなければと思うようになっていく。しかし、本当にそれでいいのか、さやかは考える。それで自分は後悔しないのか。自分はどうしたいのか。そして……

「……ゴメン」

それが、さやかの答えだった……

To Be Continued.

## 第19話（後書き）

三点リーダー多すぎだあああ！！ 長ったらしいし読みづらくなっ  
てしまった；

とりあえず、海堂直也登場！ 彼も一応ギャグキャラですが、SL  
ほどのインパクトはないでしょう； ていうか、今回巧名前だけ：  
…まあ、主人公がまるまる一話出ないなんてよくあることだし；  
海堂がこのタイミングで登場。感想でも言われていたことですが、  
海堂と上条は設定が似ているんですね。事故で音楽ができなくな  
ったという。メタいことを言いますが、なぜ上条はそれほど叩かれ  
ないんだろう。仁美が叩かれすぎてかわいそうなんですが； まあ  
…：さやかを救う要因でもあるし、そのせいかな…：？

さて話は戻って。キュウベえあくどい。海堂のあの考えを再現して  
さやかに言いやがった…：！ ようやくキュウベえをまともに書け  
そうですw どうでしょう。キュウベえらしくなっているでしょう  
か？

そして、魔女の口づけを受けたマミ…：やばい。めちゃくちゃバ  
イです。巧が動けない今、一体どうなってしまうのか…：！？ …  
：あれ？ 誰かを思い出しそう。

そして、さやかの『ゴメン』とは…：…！？

次回、第20話【偽りの楽園】！ 次回はなんとかしてもっと早く  
書きますのでよろしくお願いします！…：…；

それと、誤字などがあればよろしくお願いします；



## 第20話（前書き）

とりあえず、更新目標は10日に1度は確実に、で。これを目標に頑張って更新していこうと思います！

前回のあらすじ！

- ・ 傷心の上条
- ・ 海堂登場
- ・ 夢は、呪いと同じ……
- ・ マミや仁美の危機！？

追記…書き忘れていたことをひとつ。仁美ですが、まどかとさやかは原作では名前呼びだったことを知らず、ファイマギでは苗字を呼んでいましたが、仁美のまどさやの呼び方を原作に戻したので、『仁美はまどさやを名前で呼んでいる』、という脳内補足をよろしく願います。

では、本編をどうぞ！

## 第20話

「……はあ」

空が暗くなり、電灯や建物の光が町を照らす。まどかは町の中を歩いていた。特に理由もなく。しかし、まどかの表情は暗く、うつむきながら歩いていた。自分がママを苦しめてしまった、という罪悪感を感じながら。

「私、これからどうしたらいいんだろう……あれ？ 仁美ちゃん？ 自分はどうするべきなのか。そう考えているとまどかは人々が行き交う中に一人の少女を見つける。志筑仁美だった。知り合いを見つけたからか、まどかの表情がやわらかになっていた。

「仁美ちゃん、今日はお稽古……!？」

まどかは手を振りながら仁美に近づく。しかし、仁美に近づいたところで、まどかは仁美の首に何かが浮かび上がっていることに気づく。パソコンのモニターの、タトゥーのような紋章。『魔女の口づけ』だった。

（あれって……あの時の人と同じ……!？）

まどかは魔法少女体験コースに参加していた初日、魔女の口づけを受けた女性を見ていた。魔女の口づけを受けた人間は自殺や事故を引き起こす。そして、今それは仁美に……それに行き着いた瞬間、まどかの脳裏に考えたくもない最悪の光景が浮かび上がる。

「仁美ちゃん……ねえ、仁美ちゃんってば!」

まどかは恐ろしくなり仁美に声をかける。

「あら、鹿目さん。ごきげんよう」

いつもなら、仁美はまどかのことを名前呼びしていた。しかし、今仁美は苗字を呼んだ。明らかに仁美の様子はおかしかった。いや、よくよく思い出してみれば、歩き方も奇妙だった。まるで踊っているように。

「ど、どうしちゃったの？ ねえ、どこに行こうとしたの？」

「どこって、ここよりもずっといい場所ですわ」

「ひ……仁美ちゃん……」

まどかは焦っていた。仁美の言う『いい場所』、おそらくそれは、『死後の世界』。今の仁美は魔女に操られている状態、このまま放っておけば、仁美は魔女に殺される。まどかは、それだけは避けたかった。しかし、まどかのそんな思いがかなうはずかない。

「ああ、そうですわ。鹿目さんもぜひ一緒に……ええそうですわ、それがすばらしいですわあ……」

そう言って、仁美はまどかの腕をつかみ、まどかと一緒にどこかへ行こうと歩き出した。

（どうしよう……マミさん……ほむらちゃん……巧さん……駄目だ、電話番号もわかんなし、巧さんも……）

ほむらはともかく、マミは戦える状態ではない。そして、巧も今は一日入院の状態。しかも連絡の手段も厳しい。まどかは誰にも助けを求めることが出来なかった。

「仁美ちゃん止めて……お願い、放して！」

「大丈夫、何も恐くないですわ……だって、私たちだけじゃありませんもの……」

今の仁美にまどかの声が届くはずもなく、まどかは怯えながら、仁美に引っ張られ歩くしかなかった……

## 第20話【偽りの楽園】

それからどれだけ時間がかかっただろう。まどかと仁美はある廃工場の前にいた。

「ここですわ」

そう言いながら、仁美はまどかを引っ張り中へと入っていく。

「そうだよ、どうせ俺なんて……こんな小さな工場ひとつ満足に切り盛りできない駄目な奴なんだ……こんな時代に俺の居場所なんて

……」

「あーあ……なんかもう、どうでもいいや……」

薄暗い工場内には十数人も人間がいた。おそらく全員が魔女の口づけを受けている。中にはこの工場長だったであろう男もいた。

「……鹿目さん？」

聞き覚えのある声。まどかが声のした方を見ると、そこのはマミがいた。

「マミさん……よかった！　ここの人達皆、魔女に……！」

まどかは安心した。マミがいれば、この場をどうにかしてくれる。そう思った。しかし……

「あなた、どうして鹿目さんを？」

「……え？」

マミが話しかけたのはまどかではなく、仁美の方だった。

「鹿目さんにも是非この儀式に参加していただきたくて」

「そう……そうなのね、鹿目さん」

「マミさん……？　どうしちゃったんです……か……！？」

まどかにはマミの言っていることが理解できなかった。怪しく思ったまどかの目に、信じられない物が見えた。マミの首筋に浮かぶ、魔女の口づけを。

「そんな、マミさんまで……！？」

まどかは絶望するしかなかった。あのマミも、魔女に操られてしまっていた。これではまどかを助けるどころか、逆に殺すことになってしまう。そうしていると、女が二種類の洗剤を、男がバケツも持ち出した。

「あれって……」

それを見たまどかは、あることを思い出す。ある時詢子が言っていたことを。

『いいか、まどか。この手の物には、扱いを間違えるとんでもな

いことになる物もある。下手すりゃあたしら家族全員あの世行きだ。絶対間違えんなよ?』

詢子が言っていたことは、洗剤には酸性とアルカリ性の二種類があり、それらを混ぜてしまうと有毒ガスが発生してしまうということだった。まどかはそれを思い出し、今あの男女がやろうとしていることの理解をする。

「駄目……それは駄目えッ!」

まどかがそれを止めようと駆け出すが、仁美がそれを阻止する。

「いけませんわぁ、邪魔をしては。あれは神聖な儀式ですよ?」

「だって、あれは危ないないんだよ!?　ここにいる人、皆死んじやうよ!」

もしここで有毒ガスが発生すれば、仁美もマミも、まどかも。全員がガス中毒で死ぬことになる。仁美はそれを神聖な儀式と呼び、まどかを押さえつける。

「そう、私達はこれから素晴らしい世界へ旅に出ますの。それがどんなに素敵なことかわかりませんか?　生きてる体なんて邪魔なだけ……鹿目さん、あなたにもそれがすくにわかりますから」

「いや……駄目だよ……お願い!　放してよお!」

まどかはなんとかして止めようと仁美の妨害を振り切ろうとする。

「鹿目さん」

それを咎めたのはマミだった。

「マミさん……?」

「ねえ、あなた言ってたわよねえ……魔法少女にはなれなくても、一緒にいることは出来るって……」

「それは……」

「私、ここに知っている人はいないの。鹿目さん、あなた一人だけ。お願い、心細いの……一緒にいて?　今から、これから……」

「マ……ミさ……ん」

（私が苦しめたから……マミさんがこんなに、魔女に操られちゃっ

たんだ……

ワタシノセイデ)

その瞬間、まどかの脳裏に声が響く。

——そうだよ。あなたのせいでこの人は狂ってしまった。

(私の……せい)

——そう。もし許されたいんだったら、ここにいて、一緒に逝こうよ？ その人と一緒に。それが今のあなたに出来る償い……

(……そうだよ……私が、マミさんと一緒にいてあげれば……)

そして、まどかの首筋に、口づけが浮かび上がり始める。

「……はい。いいですよ」

まどかの目がうつろとなっていた。

「……本当に？ これからずっと一緒に居てくれるの？ これからも……？」

「はい……私なんかでよかったら……」

「その必要はないわ」

突然工場内に響く銃声。全員がそれに気をとられていると、バケツと洗剤が窓に投げ込まれ、窓を割って外へ飛び出す。ガラスの割れる音でまどかは正気に戻り、浮かび上がりかけた口づけが消える。まどかがバケツのあった場所を見る。するとそこには……魔法少女に変身したほむらの姿があった。

「ほ……ほむらちゃん！」

「全く、あなたという……いえ、今はそんなことを言える状態じゃないわね」

まどかを咎めようとするほむらだったが、周りを見てため息をこぼす。まどか以外の工場に居た人間全員が、ほむらに敵意を向けていた。集団自殺を妨害された怒りが、ほむらに集中する。ほむらはため息をつきながら、盾から何かを取り出す。

「……仕方ないわね。鹿目まどか！」

「は、はいっ！」

ほむらの呼びかけにまどかは反射的に背筋を伸ばし、まっすぐに立ってしまう。

「今すぐしゃがんで、目を伏せてなさい！」

「え……？」

まどかはきょとんとしてしまったが、ほむらを取り出した物を見て、ぎょっとしてしまう。ほむらが手にしていたのは、手榴弾のようなものだった。まどかは急いで焰の言うとおりに動く。

「はっ！」

ほむらが手榴弾のようなもののピンを引き抜き上空に投げると、それは突如まぶしい輝きを放ち、廃工場内はまばゆい光に照らされる。その光に、誰もが動きを止めていた。

「ぐっ！」

「ううっ！」

「あうあっ！！！」

そして男女の声。まるで一発殴られたような声を上げ、人が倒れるが何重にもなって響く。光がおさまると、まどかとほむら以外の全員が倒れていた。

「ほむらちゃん、今のは……？」

まどかはほむらの側に駆け寄る。ほむらは手刀をするように空を切る。

「閃光弾よ。安全だし、この人達も気絶してもらっただけ。それよりも早くここから離れなさい。そろそろ、魔女の結界が現れるわ」

「でも……」

「志筑仁美やほかの人達の命の安全は保障するわ。だから……」

「……うん、わかった。絶対だよ!」

仁美や、ここに居る人達を放っておくことはできない。しかし、まどかはほむらのことを信じ、後を任せその場から離れていった。

「……ふう」

それから少しして、周りの空間が捻れ始め、結界が出来上がっていく。精神を集中させ、息を整えているとき、ひとつの銃声が響いた。

「……ッッ!」

ほむらは右腕に痛みを感じる。どうやら、銃で撃たれたらしい。ほむらは傷を抑えようとするが、傷口から真っ赤に染まった黄色いリボンが飛び出し、ほむらの右腕を巻きつけ、一人の人間に向かって飛ぶ。そして、それを一人の少女が掴み取る。

「うふふ……酷いじゃない……邪魔をするなんて……」

「巴مام……気絶していなかったの……!?!」

それは、口づけを受け、いまだ魔女に操られていたمامだった。

「邪魔はさせない……魔女も倒させないわ……そんなの、私が許さない」

مامは歪んだその笑顔でほむらをにらみつける。その狂気から、今のمامの危険性を感じる。

「……魔法少女が魔女を守るなんてね……魔女であろうと使い魔であろうと関係なく倒していたあの巴مامが、ずいぶん落ちぶれたものね」

ほむらはその光景を皮肉り、مامをにらみつけながら言う。

「黙れ……全部……お前のせいだ! お前がいなければ……! 大體なんなの? 黙って死なせないよ……!」

「悪いけど、あなたにその死に方はさせない。あなたには……魔法少女らしく死んでもらうわ……!」

ほむらとمامはリボンの引っ張り合いを始め、その場から動かない。少しでも力を抜けばあっという間にもっていかれ、一気に殺ら



れるだろう。ほむらはベストコンディションでない分、不利であった。ほむらは苦悶の表情を浮かべ、齒軋りをしていた……

~~~~~

「ほむらちゃん……大丈夫かなあ……」

ほむらを心配するまどか。ほむらの言うとおり廃工場から出て、ある程度離れていた。

「くっ……！」

すると、廃工場から男が出てくる。ふらつきながら、首の後ろを押さえて。

「だ、大丈夫ですか？」

まどかは心配そうな表情で男に駆け寄る。

「なんだったんだあの小娘……おかげで、殺りそこねちゃったじゃねえか……」

「え？」

男の妙な言葉に、まどかは耳を疑う。すると、男の顔に紋章のようなものが浮かび上がり、その姿を灰色の怪人、オルフェノクへと姿を変えた。まどかは悲鳴を上げながら逃げようとするが、誤ってこけてしまった。

「逃げんじゃねえよ」

まどかは腰が抜けてしまい、後ずさりながらもその場を離れようとする。その様が面白く感じたのか、オルフェノクはわざと殺さずに追いかけ、まどかに恐怖を与えていく。

（これって、罰なのかな……？ 私がひどい子だから……うそつきだから……マミさんを、苦しめたから……？）

そう思ったときまどかはその動きを止めてしまっていた。オルフェノクはうれしそうに、残念そうにしてまどかの目の前で立ち止ま

る。

「もう終わりかよ……まあ、いっか。選ばれることを願うんだなあ」
そう言ってオルフェノクは右手を差し出し、人差し指に青い炎を
灯す。使徒再生だ。ハツとするようにまどかは我に帰るが、その光
景を目の辺りにし、まどかは自分の死を悟った。

「じゃあ……なあッ!？」

オルフェノクが使徒再生を行おうとした瞬間、何本もの片刃剣サーベルが
オルフェノクの足元に突き刺さり、オルフェノクは後ろに跳ぶ。そ
して、突き刺さったサーベルに、白いマントに身を包んだ何者かが
降り立つ。

~~~~~

上条はガバリと、突然起き上がる。左腕に妙な感覚を覚え、上条  
は左腕を見、そして驚愕した。

「……!」

左腕が、手が自由に動いていた……

~~~~~

「貴様……何者だ？」

「何者? ……『通りすがりの魔法少女だ』、ってね! 覚えとけ
!」

白いマントに身を隠していた者はマントを広げ、その姿をあらわ
にする。その少女は、美樹さやかであった。

「さ……さやかちゃん!？」

その姿は騎士^{ナイト}のようだった。青と白を基調としたカラーの服装で、動きやすそうなのがすくに見てわかる。そして、ベルトのバックル部分には三日月のような形をした青いソウルジェムが輝いていた。

さやかはサーベルから飛び降り、そのサーベルを勢いよく引き抜く。月明かりに照らされ、サーベルの刀身が光り輝く。さやかは手首をスナップさせるように剣を振る。その仕草はまるで、ファイズ……巧のようだった。

「魔法少女……ああ、あれか。まあいいや。さっさとどけ！」

オルフェノクはさやかを退けようと襲い掛かるが、それよりも早くさやかが前に出る。

「ハアッ！」

さやかの一突きでオルフェノクは苦しみながら後退する。さやかは剣を振りながら、鋭い眼光でオルフェノクをにらみつける。

「あたしの大切な友達に……何しようとしてんだコラアッ!!」

「グッ……この餓鬼がああああ!!」

「うわあっと!!」

オルフェノクは激情し、攻撃を繰り出すがさやかはそれをギリギリでかわす。それからオルフェノクは攻撃を仕掛け続けるが、さやかは全て防いだりかわしていた。軽装である分すばやく動けるからだ。

「フッ、ハッ! セイヤアッ!」

今度はさやかが一気に仕掛けて出る。一撃自体はそれほどの威力ではないようだが、何度もすばやく繰り出される連続攻撃にオルフェノクは苦しみ声を上げる。

「ああああああああアッ!! ハアアアッ!」

声を張り上げながら気合をためた一撃で、オルフェノクは吹っ飛ばされる。

「ぐおああああ!!」

ダメージが蓄積しているようで、転がりながらも立ち上がるが、すでにフラフラだった。

「くっ……ここは一旦……！」

「あ、待てこんちくしょ……」

今の状況がまずいと判断したようで、オルフェノクは逃走を図る。さやかはそれを追いかけてようと走り出したところで、男のうなり声が辺りに響いた。

「うおおおらああああ！！！」

「ぐぎゃああああああ！！！」

そして、オルフェノクは吹き飛びながら青い炎を吹き上げ、爆発を起こして灰と化した。オルフェノクがやられたであろう場所には、ファイズショットを構えたファイズの姿があった。

「ファイズってことは……巧さん？」

「違うな。今日は、俺がファイズだ」

まどかは巧とは妙に雰囲気が違うなと思いつつもたずね、やはり巧ではないことを知る。さやかはそのファイズの声に聞き覚えがあった。

「その声……海堂さん！？」

「ピンポン。大当たりい！」

さやかが指差しながらファイズに問いかけ、ファイズはオーバーリアクションをしながらそれが正解だと言う。まどかは海堂を知らないため、反応が薄いのは当たり前だが、まどかにはそれよりも気になることがあった。

「……あのさやかちゃんが、『さん』づけ……？」

「アラッ!？」

その言葉にさやかは思わずっこめる。

「あのってなんだあのって!? まるであたしが敬語使えないみたいじゃん！」

「実際そうでしょ？」

まどかのやや酷い言葉にツッコミを入れるさやか。しかし、まどかは不思議そうな顔をしながらさらに続ける。

「いや……一応マミさんあのみこにはそれなりに……」

「んなことどーでもいいーんだよ」

さやかは落ち込みながらも反論を続けるが、ファイズにツツコミ混じりで止められる。

「結局、なっちまったんだな……魔法少女に」

首を振り、ため息混じりでファイズはうなだれる。

「……うん。でも」

「反論とか別にいらねーよ。やらなきゃいけねーことあんだろお？」
そう言って、ファイズは灰工場をチョンチョンと指差す。

「あ、ほむらちゃんがまだ！」

まどかはほむらがまだ戻ってきてないことを思い出し、さやかに告げる。

「……そういやキュウベえが言ってたっけ。仁美やマミさんあのひとも魔女の口づけ食らったって」

さやかはあの時キュウベえが言っていたことを思い出していた。

（そーいや……転校生……）

ほむらが万全の状態でないことも思い出し、さやかはまどか達に背を向ける。

「転校生も万全じゃないみたいだし……ちょっとら助太刀してくる！」

「おーう、まどか（こいつ）は俺に任せてさっさと行きやがれーい」
なんだか死亡フラグみたいな言い方ですねと言うまどかをよそに、さやかは灰工場の中へと入っていた。ファイズ、海棠はそれを見送りながら、心の中でつぶやいていた。

（……乾……すまねえ）

To Be Continued.

第20話（後書き）

というわけで、さやかは魔法少女になりましたとき、めでたしめでたS（ちよつと待て

はい、というわけで大方の人は感じていたであろう、さよかの契約でした。ただし、肝心の契約シーンは？ 結構肝心なところなんです

が、そこはおいおい明かします。そしてさよかの服装ですが、アニメではへそ部分にソウルジェムがありますが、漫画版ではベルトのバックル……ファイマギは仮面ライダーとのクロスオーバーなので、漫画版の容姿を採用しました！これでライダーとお揃いだね（ていうかさやかが「セイヤー」……だど……！？（え

そしてさりげなく海堂ファイズ登場。今夜は巧に変わってファイズとして戦っていたようで。そしてオルフェノクとしか書かれなかったかませオルフェノク、乙。アントオルフェノクより扱い悪いやW初陣のさやかにも圧倒されてるしW

そして、さよかの戦い方には巧の面影があるようで……このさやか、何かが違う！？

……それにしても、後半海堂ファイズのせいでギャグだねW まどかも膝ビザに本編でも黒いよ！ 本編はスピノフほどじゃないですけどややSが目立ちます。でもほんと、今ぐらいがそのピークかな……？ 空氣的に。

ていうかママさんつつーか病みさんがヤバイ！ ほむらもヤバイ！ そしてさやかはその中へ！ これはまた修羅場となりそうだ！

そして巧今回もゴメン（汗 多分次回も出番はない！

巧「冗談じゃねえぞヲイ！」

???? 「こりゃあ、次回は来たな！」

次回第21話【蒼き閃光】！ さやかよ、病みを切り裂き、ママを救え！（

第21話（前書き）

うーん； 今回は結構雑なつくりになってしまいました。下手すると、一部書き直しかあるかも；

前回の出来事！

- ・ マミ、魔女に操られる！
- ・ ピンチに、ほむらが駆けつける！
- ・ しかし、オルフェオクに襲われまどか再びピンチ！
- ・ しかしそこにさやかが現れる！ そして、さやかは契約していた！
- ・ そして海堂ファイズも駆けつけ、さやかはまどかを任せて魔女の結果へ……

ちなみに、処刑用BGMはファイズアクセルのテーマ曲といっても過言ではないあの曲です！ タイトル？ 大体分かってくれ！
それでは行きます！

第21話

魔女の結界内

「「ハッ！」」

結界内に銃声が何重にもなって響き渡る。ほむらは左腕に盾を出現させ、縛られて自由の利かない右腕でなんとか銃を取り出して発砲。リボンを撃ち抜いて破り、ほむらとマミは銃撃戦を繰り広げていた。

「チッ……拉致があかないわね……！」

ほむらはなんとか抜けようとするが、マミの連射やリボンがそれを許さない。ほむらはマミの防止についているソウルジェムを見る（……ソウルジェムが濁っている。戦い方と魔力の消費を省みない所を見ると、完全に操られているようね）

マミと銃撃戦を繰り広げる中、ほむらはマミの戦い方に注目する。ほむらの知る限り、マミの戦い方は正確に相手を狙い、効率よく、最小限の消費で決着をつける方法だ。まあ、まどかやさやか目の前では派手な戦い方をしていたのだが。

しかし、今のマミは効率など考えず、とりあえず撃つ。『下手な鉄砲も数打てばあたる』、といったところだろう。とにかく、無駄撃ちが多い。リボンと組み合わせた戦法だからこそほむらは苦戦しているが、単なる銃撃戦であれば切り抜けることなどたやすいことであろう。

「ずいぶん野性的ね……死ぬわよ？　あなた」

「ふふっ……私はもうすぐ楽園へ行くの……いまさら、恐怖心なんて無いわ！」

そう叫び、マミはほむらに急接近する。

「なっ……しまっ！」

おそらくマミは肉弾戦を仕掛けてくる気だ。だが現在ほむらの持

つ武器は拳銃一丁のみ、明らかに肉弾戦では押し負けてしまう。マミはマスケット銃を振り回し、ほむらはそれを必死に避ける。操られているものの、マミの實力は本物だ。銃使いでありながら、肉弾戦にも対応している。

「ぐはっ！」

いよいよほむらは追い詰められ、殴り飛ばされる。そして、黄色いリボンに再び高速されてしまった。四肢を縛られ、大の字になっていた。

「ふふふ……これで、もう動けないわね！」

そして、マミは発砲する。右腕、左のふともも、横腹……ほむらは身体を撃ち抜かれ、苦悶の表情を浮かべる。しかし、マミはほむらに手をかざし、ほむらの傷を癒す。

「なぶり殺しにする気……？」

「いいえ……痛そうだから治してあげただけよ？　まあ、まだ許せないから続けるんだけどね。あなたが悪いのよ？　あなたが私の邪魔をするから……」

マミは笑顔でそう言う。本心ではないとはいえこの態度。ほむらは殺気を抱き、マミをにらみつける。

「……なあにその目……あなた、自分の立場分かってるのかしら？　あなたが死ぬか生きるか、全部私次第なのよ？」

「くっ……！」

「まあ、飽きていたし、そろそろ……」

マミがほむらの額に銃口を押し当て、頭を撃ち抜こうとした時だった。

剣が降り、それはほむらを拘束していたリボンが破れ、さらにほむらの額に押し当てられていたマスケット銃の銃身が蒼い斬撃によって切り捨てられた。

「何っ!？」

「……まさか!？」

マミは驚きながらも後ろに跳び後退する。解放され地に膝をつく

ほむらの前にいたのは、さやかだった。

「あんた……何やってんだ!？」

「美樹さやか……あなた!」

「あら美樹さん……あなたも一緒に逝く?」

マミの言葉にいらだちを覚えるさやかに、立ち上がったほむらが一応フォローを入れる。

「美樹さやか、巴マミは今魔女に操られている状態。彼女の自我はどこにもないわ。そして、今回のことが記憶に残ることも無い。あなたが何を言おうと無駄よ」

「……ッ、ずいぶん都合がいいもんだね……!」

さやかは舌打ちしながら剣を構える。

「まあ、ああなったのはあなたのせいでもあるのだけれど」

「……あはは……否定できないや」

ほむらの鋭いツツコミに、さやかは否定できず苦笑する。

「転校生。あの人はあたしに任せて、魔女を倒してくれない?」

「構わないけど、あなたにやれるの? 彼女は」

「敵を目の前におしゃべりなんて……よくできるものねえ?」

そういいながら、マミは二人に銃を向ける。

「分かってるって。あの人の為にも、あたしの為も……助けないと」
さやかから何かを感じたのか、ため息をつきながらもほむらは承諾する。

「……分かったわ、今回はあなたの作戦に乗る。ただ、それなりに持ちこたえてなさいよ」

「あたし足止め前提かよ!？」

足止め扱いされ、さやかは思わずツツコミをいれてしまう。それに切れたのか、マミは銃を構え二人を狙う。

「……もう、待つのば飽きたわ」

銃声が結界内に響く。しかし、二人は一斉に動いてそれを回避する。

「じゃ、よろしく!」

「ええ」

さやかはマミに、ほむらは魔女がいるであろう場所へと走り出す。
「うおおおおおおおお……でえいッ!」

さやかは猛スピードで駆け、剣を振る。しかし、マスケット銃で防がれ、つばぜり合いになる。

「ふっ……魔法少女成り立てのあなたが……どこまで持ちこたえられるかしらねえ? 私は……あなたを倒す!」

「悪いけど……持ちこたえる気なんてさらさら無いから!」

——そういえばあたしは、マミさんの何に憧れたんだろう……強さ? それとも正義に? あたしは小さい頃、よく特撮番組とかアニメのヒーローに憧れていた。だから、憧れたのかなあ……? ただ、少なくとも……

『……マミさん、人に契約とはちゃんと決めておけって言うときながら、そんなことしてんたんだ……ふざけんな!』

『寂しかったから何!? それで人を騙していいわけ!? あんた……最低だよ!』

——最低だったのは、あたしの方だった。

第21話【蒼き閃光】

「ハアアッ!」

「フンッ!」

マミとさやかは激しい攻防戦を繰り広げていた。剣と銃がぶつかり合う。マミが一步出て攻撃すれば、さやかは一步下がって回避する。さやかが一步前へ出れば、マミは一步離れる。互いに一定の距離を

取り合い、その凄まじい斬り合いを展開する。するとマミはさらにもう一本のマスケット銃を召喚し、さやかの持つ剣を撃ち落とす。マミは使用済みの二本のマスケット銃をさやかに向かって投げ捨て、さやかの落とした剣を拾い、さやかに斬りかかる。

「はあっ！」

「くッ！」

マミの投げたマスケット銃をさやかは何とか避け、マミを蹴り飛ばして新たに剣を召喚する。斬る、防ぐ、跳ぶ、激しい動きを見せ合いながらさやかとマミは切り結んでいく。マミの荒々しい攻撃に押されそうになるも、さやかはなんとかふんばり、体勢をすぐに立て直す。

（こんな強い人がこんなことになるまで弱るなんて……！）

さやかはあの時マミを蔑み、見放したことを後悔していた。あの時自分がああしなければこんなことにはならなかったのではと。しかし、今更思ったところで変わることは無い。さやかは剣を振り続ける。

「ところで、どんな願い事をしたのかしら？ やっぱりあなたの思い人の腕を治したの？」

「今のアンタには……必要ないでしょッ！！」

さやかに問いかけるマミであったが、さやかに押され後退する。さやかは一步下がりは手首をスナップさせ、剣を構えなおす。

「何それ……乾さんの真似？」

「……少なくとも、アンタの戦いを見るよりは参考になってるよ。ぶっちゃけ、巧の方が師匠って感じかな？」

確かに体験コース見てきた限りではマミは今のような肉弾戦はしておらず、近距離戦を得意とするさやかからすれば、マミより巧、ファイズの戦い方を参考にするだろう。特にファイズには『ファイズエッジ』がある。剣を扱うさやかにとってこれほど参考になるものはない。

「まあそうよねえ。私は銃、あなたは剣。そしてファイズは多種多

様な装備を持ち、剣まで持っている……それならあなたが彼を師として仰ぐのも変ではないわ……けど！」

ママが一気に距離を詰め、さやかの懐へと攻め立てる。さやかはとっさに逆手に持ち直し、斬撃を防ぐ。

「ぐッ……！」

「なかなかいい判断ね……けど、甘いわ!!」

「がッ!？」

ママの肘がさやかのわき腹に入り、さやかは声を上げる。わき腹を押さえながら後退するが、ママは逃がすまもなく一気に仕掛けてくる。

「所詮あなたは経験の浅いひよっこ……私にかなうわけが無い！」

「ぐわぁ！」

ママがそう叫びながら一閃、さやかは弾き飛ばされる。

「それにあの人の真似をしたところで私は全て見ている、見切れる

！ もはやあなたに勝機はないわ！」

そう高らかに叫ぶママ。さやかはフラフラになりながらも立ち上がる。

——あの時のあたしの犯した罪は重い……だからこそ……償う！
ママさんを救って、全ての過ちを正す！ するために、あたしは

……！

「……そうかもね。アンタが言っている『見ている』だけだったら

……！」

「……は？」

ママにはさやかの言っている意味が分からなかった。

「どういうつもり？ あな……た？」

ママは問おうとしたが、さやかが腰を低くし、クラウチングスタ
ートのような姿勢をとる。

——戦う！

「はあああああ……ッ！」

さやかは唸りを上げて力をためる。マミは何か嫌な予感を感じ、マスケット銃を召喚、さやかを狙う。だが、さやかはそれよりも早く動く。地面を蹴り、さやかは凄まじい速さでマミの懐へ入り、剣のナックルガードを利用したアッパーがマミの顎にクリーンヒットする。

「やあッ！」

「ガッ!？」

(い……いつの間に……!?)

マミは宙に浮き、さやかはマミの背中に回りこむ。

「おりゃあああああああ!! でえい！」

「うぐああッ！」

それからマミの背中に何度も蹴りを叩き込み、マミは高く蹴り飛ばされる。

「見てろよ……ハッ！」

さやかは手首をスナップさせて高く飛び上がり、マミを越えていく。空中に青い魔法陣が現れさやかはそれを足場にし、マミに狙いを定める。そして、マミの周りにはいくつもの魔法陣が現れる。

「こ……これは!？」

「はッあああああああああああああッ!!」

さやかは魔法陣を蹴り、再び凄まじいスピードでマミに向かい、斬りつける。そして、マミの周りに出現させた魔法陣を蹴り、再び猛スピードで斬りかかり、それを何度も高速で続けていく。それはまるで、ファイズアクセルの『アクセルクリムゾンスマッシュ』のようだった。

「これでとどめだ！」

さやかは最後の魔法陣を蹴る。さやかは空中で回転、蹴りの体勢に入り、マミの腹を蹴りつけ、そのまま急降下していく。

「でえええええいッ!!」

「うああッ!？」

そして、マミは地面に叩きつけられた。マミは血を吐き、そのまま失神してしまった。良く見ると、マミは斬りつけられたにもかかわらず、マミの体どころか服にすら斬られた後がなかった。みねうちにしていたのだろう。実質、打撃のみだ。

「ふうう……」

さやかは深呼吸する。辺りを見渡すと結界が歪みだしていた。魔法女が倒され、結界が消滅していく。

「おっ、転校生も終わったみたいだね」

結界が消滅し、ほむらがさやかに歩み寄っていく。

「まさか、あなたが巴マミを倒すなんてね」

ほむらはグリーンフシードをさやかに投げ渡す。

「あげるわ、今回はあなたのおかげで助かったわ。私はもう使ったから、後は好きにきなさい」

「……ありがとう」

さやかは軽く礼をいい、ソウルジェムを浄化する……ただし、それはさやかの物ではなかった。

「なっ、何をしているの!？」

「何って、浄化だよ。マミさんの、ね」

さやかが浄化していたのは、マミのソウルジェムだった。

「ど、どうして!？」

「助けるのに理由がいるの？」

「それは……」

ほむらは本当のことを言うわけにもいかず、別の話をしてはぐらかした。

「……それよりも、何故なったの……魔法少女に」

ほむらは真剣な表情でさやかを見る。

「巴マミを見れば分かるでしょ？ 以前と同じ生活は送れなくなるのよ。鹿目まどかや志筑仁美と一緒に遊んだり、笑いあったり……」

上条恭介とだって……」

「恭介は関係ないでしょ……っていうかなんで知ってんの!？」

いつものように返そうとするが、ほむらが上条のことを知っていることに気づき、さやかは逆に聞いてしまう。当然、それはスルーされてしまうのだが。

「あなた、魔法少女になってよかったとでも思ってるの？」

「少なくとも、よかったと思ってる。いろんな人を救えたし……それに、もし契約しなかったらあんたも仁美も危なかったし、魔女から逃げてたまどかもオルフェノクに襲われて殺されてたかもしれないし」

「ま、まどかが襲われた!？ 大丈夫なの!？」

まどかがオルフェノクに襲われた、それを聞きほむらは動揺していた。それを変に思いはしたが、さやかは答える。

「ギリギリで助けられたよ。今は海堂さんと一緒に……」

「あ、さやかちゃん!」

「おーっす! 無事みたいだなー」

「まどか! 海堂さん!」

さやかが話そうとするとちょうどまどかとファイズに変身したままの海堂が工場に入ってきた。まどかはさやかとほむらが無事なのを確認して、ほっと息をつく。

「ファイズ……!？ 乾巧ではないの!？」

「よおお嬢ちゃん。俺は海堂直也、よろしく」

「え、ええ。よろしく」

海堂の自己紹介に、ほむらはやや困惑しながらも答える。ふとさやかの方を見直すと、さやかはほむらに手を差し出していた。なぜかはむらはさやかを疑いの目で見る。

「……どういうつもり？」

「いや、最初はいやな印象しかなかったけどさ、昨日は一応助けてもらったし、もうあんたが悪い奴には見えないんだよね。だから……味方になってとか、友達になれってわけじゃないけど、『敵対し

ない』っていう意味でさ……『ほむら』」

「！　あなた……！」

ほむらはさやかに名前で呼ばれたことに驚くような反応をする。
「あんたも『美樹さやか』って堅苦しく呼ばないでさ、『さやか』
って呼んでよ。ほら、ほむら早く手を出して。『あたし達は争わな
い』って、握手しようよ」

さやかは歯を見せて、無邪気な子供のように笑っていた。だが、
さやかのその手を、ほむらは払いのけた。

「いでっ!？」

「気安く名前を呼ばないで……不愉快なのよ!」

ほむらは鋭い目つきでさやかをにらみつける。

「あ、ちょっ……!」

「私はあなたのような仲間なんていらな!　仲良しごっこなんか
している暇はないのよ!」

ほむらはそのままどこかへ去ってしまった。さやかは全身を震わ
せ、その怒りをあらわにした。

「……あああああああ!　くっそあの超頑固電波ツンツン
ストレートの馬鹿『転校生』めえええ!　せっかくデレてやったっ
てのに!　もう知らん!　勝手にしろおおお!」

「さやかちゃん……」

微妙に間違っているさやかのほむらへの怒りに、まどかは苦笑い
していた。

「……ちゅーか、こいつこのままでいいのか?」

「「……あ」」

二人は倒れたままのマミのことに気づき、起こそうとする三人だ
ったのであった……

——ほむら、一緒に帰ろうぜえい!

——そーだ！ クレープ食べようよ！ あそこの美味いんだあ

——ま……どか……まどかあああああッ！！

「……ほんとッ、不愉快よ……！ あなたに名前を呼ばれると思
出す……！ あんな思い……もうこりごりよ！」

ほむらは握りこぶしを震わせ、怒りをあらわにする。

「ここでは美樹さやかもイレギュラーとなりつつあると言うの……
！？ イレギュラーはどこまで私を追い込めば気がすむの！？ あ
なた達は……邪魔なだけなのに……何もかも狂わせる……ファイズ
も、オルフェノクも！！」

~~~~~

「いやあ、まさか君が来るとはねえ」

あるタワーに、キュウベえが座っていた。その隣には、一人の少  
女の姿があった。

「ちよいとこっちに来てみたらマミの奴が腑抜けになったって聞い  
たからさあ。けど、なんなのあいつ？」

「さっき契約したばかりの魔法少女さ。これからはマミに変わりに  
この見滝原で魔女を狩るだろうね」

それを聞き、少女は虫の居所が悪くなったようで、たい焼きに思  
い切りかぶりつく。

「チッ、マジでむかつく……でもさあ、こんな絶好の餌場、みすみ

すルーキーもひよっ子にくれてやるってのも癪しやくだよねえ……」

「……どうする気だい？」

分かりきっているのにわざと聞くような言い方をするキュウベえ。  
少女は立ち上がる。

「決まってんじゃない。ようするに、ぶっ潰せばいいんでしょ？」

「……そいつ」

八重歯が鈍く光ったように見えた。その少女は隣町の魔法少女……  
佐倉杏子だった……

To Be Continued.

## 第21話（後書き）

どうも先に台詞作ったあとで地の文入れるとぐちゃぐちゃになっちゃうなあ；

というわけで、マミVSほむらはやることにはやりましたが、まさかのさやかVSマミ、ちょっとしたブレイドの再現になってしまいましたw しかしそのせいで箱の魔女の出番が……エリーは犠牲となったのだ……（え

そして、さよかの放った必殺技、どうやらファイズの物と類似しているようで……どうやら、さやかにとって師匠は巧になっているようです。さよかの手首スナップ……

ちなみに、さやかは普通に強いと思ってます。多分、天性のバトルセンス持ちですよ、さやかは。

さやかに名前を呼ばれ逆上したほむら……その真意は……？ そして長らくお待たせしました！ いよいよ、彼女の出番です！

次の話はさよかの今の心境や、今回と前回では回収できなかったものを回収しようと思います。

次回第22話【二人の守り人】。次回もお願いします！ ……あ、もしかしたら外伝はさむかもしれません。感想お待ちしてまーす！

## 外伝【Part A 第21話外伝】（前書き）

今回も外伝は二本立てです。まずは21話のほむら視点のものから。一人称構成です。

## 外伝【Part A 第21話外伝】

「まあ、飽きていたし、そろそろ……」

私は死を感じた。身動きもとれず、額に銃口を押し付けられ、歯軋りをした。けれど、私を救ったのは、思いもしなかった者だった。

「あんた……何やってんだ!？」

「美樹さやか……あなた!」

美樹さやか。私の、嫌いな人間。

結局、今回も契約したのね。

色々あって美樹さやかの提案を呑み、彼女にバマミを任せ、私は魔女を倒しに行くことになった。正直、期待していないけれど。せいぜい足止め程度にはなってよね……そう思いながら私は銃弾を避け、魔女の元へと向かった。

「じゃ、よろしく!」

「ええ」

美樹さやかとバマミがぶつかり合うのを横目で見ながら、私はその場を後にした。

## 外伝【Part A 第21話外伝】

「邪魔よ」

うじゃうじやと沸いて出る、天使の輪っかと羽のついた人形のよ

うな使い魔。倒すことなど造作もない。私は一気に片付け、全速力で魔女の元へ駆ける。

——見つけた。

今回の魔女、パソコンのモニターに羽をつけたような姿をした、『箱の魔女』。この魔女の特徴は分かっている。私は気を持ち直し、魔女に攻撃を仕掛ける。私は盾からマシンガンを取り出し、一気に撃ち出す。奴に弱みを握られない内に。

魔女を守ろうと使い魔が群がる。正直、まずい。私は肉弾戦、近距離戦は苦手だ。私は使い魔とは一定の距離を保ち、一気に片付ける。しかし、魔女はモニターから使い魔を呼び出し、それを私に向かって放つ。私は舌打ちをしながら考える。

——いっそ、対象を魔女のみに絞ろう

何度も使い魔を呼ばれてはやかいだ。私の武器には限りがある。それならば、多少の危険はあろうとも、魔女を一気に叩いた方がいい。私は盾に手をつけ、盾を稼動させた……

それからは圧倒的だった。魔女は目の前に突然現れた私に驚きを隠せず、隙を作った。私はそこをつき、盾から取り出したバズーカを0距離で撃ち出す。少しもつたいないと思いがら。

「……終わったわね」

魔女は私の足元に沈み、虫の息だった。私は銃をつきつけ、とど

めをさそうとした。だが、そんな私の周りに、ビジョンが現れる。

『そんな……こんなことって……』

『目の前でいきなり爆発とか、止めてほしいんだよねえ』

『こんなのってないよ……あんまりだよお……！』

『あなたは後何回……』

箱の魔女の特性、それは相手の触れたくない過去、トラウマなどの記憶を映し出し、相手の動きを鈍らせる。当然今の魔女にそれを利用して反撃するほどの力が残ってはいない。せいぜい、苦し紛れの行為だろう。

「……さっさと死になさい」

当然私は感情的になる。しかし、今の状態ではなんの意味はない。さっさと引き金を引き、とどめをさした。魔女はグリーンフィードを落とし消滅した。私はそれを手に取り、ソウルジェムを浄化して、美樹さやか元へと歩き出した。



~~~~~

「おっ、転校生も終わったみたいだね」

「まさか、あなたがバマミを倒すなんてね」

正直、信じられなかった。あの美樹さやかがバマミに勝ったなど。ありえないとも思った。しかし、現に美樹さやかの足元にはバマミが倒れている。

——美樹さやかが強くなっている……!?!? 乾巧とかかわった影響なの……?」

ファイズというこれまでにないイレギュラーが美樹さやかに影響を及ぼした、そうとしか考えられなかった。でなければ、初戦でこれほどの戦闘力であることなどありえない。

とりあえず、私は魔女から手に入れたグリーンフィードを彼女に投げ渡す。今回ばかりは、彼女の手柄でもある。だが、彼女は予想外の行動にでた。バマミのソウルジェムを浄化してしまったのだ。

「ど、どうして!?!」

私は素で驚いてしまった。バマミのソウルジェムは順調に濁っていた。後一步というところで……! まあ、美樹さやかが魔法少女になってしまった以上、下手に刺激することは出来ない。一応、鹿目まどかの大切な存在であるから。

私はなぜ契約したのか、美樹さやかに問いつめる。その時、鹿目まどかがオルフェノクに襲われたと聞き、思わず動揺して名前を呼んでしまった。鹿目まどかを一人にしたのが仇となってしまった。私はそれを後悔するが、鹿目まどかは無事なようなので、とりあえず一安心する。

「あ、さやかちゃん!」

「おーっす！ 無事みたいだなー」

「まどか！ 海堂さん！」

そんな中、鹿目まどかと、ファイズがやってくる。乾巧かと思いきや、美樹さやかはファイズを『海堂さん』と呼んだ。乾巧ではないことに、私は驚きを隠せなかった。

「よおお嬢ちゃん。俺は海堂直也、よろしく」

「え、ええ。よろしく」

男、海堂直也が自己紹介をし、戸惑いながらも私は言葉を交わす。一応、乾巧以外でもファイズに変身することができることを確認した。

私は美樹さやかの方を見直すと、彼女は私に手を差し出していた。

「……どういうつもり？」

「いや、最初はいやな印象しかなかったけどさ、昨日は一応助けてもらったし、もうあんたが悪い奴には見えないんだよね。だから……味方になってとか、友達になれてわけじゃないけど、『敵対しない』っていう意味でさ……『ほむら』」

『ほむら』と美樹さやかに呼ばれた時、心臓が止まりそうなほど驚いた。今まで自分を『転校生』と呼んでいたあの美樹さやかに、名前で呼ばれた。それだけでも、私の頭をかき乱すようなものだった。

「あんたも『美樹さやか』って堅苦しく呼ばないでさ、『さやか』って呼んでよ。ほら、ほむら早く手を出して。『あたし達は争わない』って、握手しようよ」

美樹さやかは子供のような笑顔で私を見る。一瞬手を取りそうになっちゃったが、私は彼女の手をはたくように払いのけた。美樹さやかは手を押さえ、痛みを訴える。

「気安く名前を呼ばないで……不愉快なのよ！」

感情的にならずにいらなかった。過去を、トラウマを思い出すから。私は美樹さやかをにらみつける。美樹さやかはそれにひるんだようで、私はそんな彼女を放って、工場からでようとする。もう、ここには居たくなかったから。美樹さやかは私を引き止めようとする。だが私はそんなことはお構いなし、さっさとその場から離れたのだった。

「私はあなたのような仲間なんていらない！ 仲良しごっこなんかしている暇はないのよ！」

そう、叫びながら。

~~~~~

「……ほんとッ、不愉快よ……！ あなたに名前を呼ばれると思いつ出す……！ あんな思い……もうこりごりよ！」

トラウマを思い出し、私は怒りをあらわにし、握りこぶしを震わせる。

「ここでは美樹さやかもイレギュラーとなりつつあると言うの……！？ イレギュラーはどこまで私を追い込めば気がすむの！？ あなた達は……邪魔なだけなのに……何もかも狂わせる……ファイズも、オルフェノクも……！」

もう、何もかもがうんざりだった。これまでの全てが崩れていくようだった。オルフェノク、ファイズ……見たことも聞いたこともない、今まで現れたことのない『イレギュラー』が多数現れ、私はうんざりしていた。もう、何もかもが邪魔だった。精神的に疲れていた。

もう、今日のところは休もう。私はそう思い、家へと帰るのだった。

To Be Continued.  
Next Part B.

## 外伝【Part A 第21話外伝】（後書き）

ほむら……地味に勝利したの今回が初めてですw 弱くはないのに……今までがややかませ状態でしたw  
箱の魔女、案外やっかい。そしてほむら今回感情的になりすぎでした；

そして海堂の登場に動揺するほむら。巧以外がファイズを使っていることに驚いている様子。ついでに言うと、ほむらはマミがファイズに一度変身したことを知りません。

そしてさやかに名前を呼ばれ激怒したほむら。その理由はいつか明かします……というか原作知ってる人なら分かりますよね。

今回はシリアスですが、次の外伝は原点回帰(?)のギャグ回にする予定です。なにげに、あの人登場？

そんなわけで、次回もお楽しみに！

**外伝【Part B 21. 5話】（前書き）**

外伝2つめです。更新めちやくちや遅れてすみませんでした（土下座）

## 外伝【Part B 21. 5話】

「マミちゃん、遅いなあ……」

マミの帰りを待つ啓太郎と真理。だが、外が暗くなっているにもかかわらず、いまだマミは帰ってこない。心配していた二人だったが、インターホンが鳴り、慌てて玄関へ向かいドアを開いた。

ドアの前に立っていたのは、マミを背負った青髪の少女とピンク色のツインテールの少女、そして海堂であった。

### 外伝【Part B 21. 5話】

時はさかのぼり……

「とりあえず、救急車呼んでとんずらすっか」

「だ、大丈夫なんですか？」

ほむらが去った後、変身を解いた海堂。まどかは仁美など、魔女の被害者達が心配だった。

「大丈夫だ、問題無い」

「なんだそのフラグ発言!？」

海堂のフラグっぽい発言にさやかがツツコミを入れる。

「それに、俺達がここにしていることが怪しくねーか？　こんな廃工場近寄る奴自体いなさそうだし」

「うっ……まあ、そうだよねえ」

「まあそういうこった。この黄色の嬢ちゃんはお前に任せた」

海堂はそう言ってマミを持ち上げ、さやかに託す。ちなみにお姫様抱っこで。

「え!?!　あの、ちよっ……マミさん重ッ!」

もし今の聞かれてたら殺されるなあ、とさやかは思っていた。

「……ていうか、なんでお姫様抱っこ!? 大体あたしはする側じゃなくてされる側だっつーの! まあ、まどかとかお姫様抱っこしたいとかはあるけどさあ!」

「……さやかちゃん……」

マミを背負いなおしながら大声を上げるさやか。それを聞いて顔を真っ赤にするまどか。それを見て海堂は「こいつ、まんざらでもないんじゃないか?」と思うのだった。

~~~~~

「そ、それは大変だったね……」

啓太郎は苦笑いをしながら、さよかの話を聞いていた。ちなみにマミは寝室で寝かせている。

「分かる……? マミさん背負って歩くあたしを見る周りの目……妙な視線を感じだよ……男のいやらしい目線とか」

「あんた女の子に何させてるのよ」

真理は海堂を白い目で見る。そんな視線を感じ、海堂はやや焦り気味に主張する。

「いや考えてみろって。仮に俺がこの嬢ちゃん背負ったとして、ほらこの嬢ちゃん胸でかいし中坊だし、そしたら周りが俺をどう見るかわかるか? 明らかに変態を見る目をされるぞ?」

「仮にそうだとしても女の子一人に任せるってどうなの!? あとさりげなく『胸大きい』とか言わない!」

海堂のボケ(?)と真理のツッコミ。まさに漫才という流れに、まどかとさやかは苦笑していた。

「と、とりあえずマミちゃんのことありがとう。俺、菊池啓太郎。こっちは真理ちゃん」

「園田真理。よろしくね」

「あ、こちらこそ……私、鹿目まどかです」

「あたしは美樹さやか。こっちこそよろしく!」

自己紹介を済ませた四人。和やかな雰囲気となり、四人はあっという間に馴染んでいた。

「それにしても、遅くなっちゃったなあ……パパが心配するだろうなあ……」

まどかがケータイの時計を見て呟く。現在家庭ではすでに夕食の時間となっているであろう時間帯である。

「あ、なんだったら今日食べてかない？」

「えっ！？ いいの!？」

啓太郎に夕食の誘いを受け、なぜかさやかが反応する。『先輩の家にお呼ばれされて、ついでに夕食も食べさせてもらった』という口実が出来るが、無論まどかにはそんな考えは微塵もない。啓太郎の好意として受け取っていた。さやかは単にただ飯が食えるという考えだろうが。

「こっちは別にいいわよ？ それに、皆と一緒に食べた方がおいしいし」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて……」

パパに連絡しないと……とまどかはケータイを開く。真面目な子だなあと、啓太郎はそんなことを思いながら微笑んでいた。ちなみに、ついでのように海堂も一緒である。

~~~~~

「すっごくおいしいです！」

「いゝな、巧と啓太郎さんはいっつもこんなおいしいご飯食べてるのかあ。真理さんあたしの嫁になって」

まどかとさやかは、真理の料理のおいしさに驚いていた。さやかはやや余計なのが目立つが。

「そう言ってもらえると、嬉しいな」

それを聞いて真理も照れていた。

「流石俺の見込んだ女」

「え？ 海堂さん真理さんのこと好きなんですか？」

「昔はなあ。ふられてからはなんとも」

「へえ……ところで、真理さんってどっちとデキてんのお？」

海堂の話を聞き、さやかは黒い顔で真理に聞く。

「ちよつ……ちよつと!？」

「おーそうだなあ、どっちが発展したんだ？」

真理は顔を真っ赤にし、海堂も悪乗りしてさやかの話に乗っかった。

「いやっ……俺もたっくんもそんな関係じゃないから!」

真理の代わりに啓太郎が否定する。

「……『たっくん』？」

それを聞き、さやかは不思議そうな顔をした。

「どうかしたの？」

「あ、いやあ、まどかんとこにも『たっくん』がいるからさあ……」

へえ、巧も『たっくん』なんだあ」

さやかはにやにやしながらそう言った。今度話のネタにでもするつもりなのだろう。

「へえ、まどかちゃん家のたっくんに会ってみたいなあ」

啓太郎がそう言うと、まどかはケータイを取り出し、それを啓太郎に見せた。

「タツヤって言うんですけど……」

まどかのケータイに入っていたタツヤの写真を見て、啓太郎は笑みを浮かべた。真理と海堂も横からそれを見て、同じような反応をしていた。

「うわあ、かわいい……」

「あっちのたっくんには無い要素だよねー」

さやかのそんな一言で一同は大笑いした。そんな和やかな空気を請わすように、乱入する者がいた。

「やあ、さやか。初陣はどうだったんだい？」

キュウベえである。

「え……何その白い生き物!？」

「かわいい……のかな？」

「こいつが噂のキュウベえねえ……」

真理、啓太郎、海堂にもキュウベえは見えており、流石のキュウベえも驚きを隠せなかった。

「君達、僕が見えるのかい？」

見えるも何も……、と三人は同じ反応をする。いよいよさやかはキュウベえの存在に疑問を持つ。

「キュウベえ、あんた本当に魔法少女にしか見えないわけ？ 普通に見えてるんじゃないの？」

そんな疑問を持ったさやか。そして、海堂が余計な一言を放った。

「とうに時期を過ぎた奴にも見えてるんだもんなあ」

それを言った瞬間、海堂はまさに『ものすごい』勢いで壁に叩きつけられた。顔面は拳の形に赤くなり、海堂の顔面があった場所には、真理の左拳があった。

「今の……もっかい言ってみなさいよ……誰が年増女よおおおおお！」

「真理ちゃん抑えて抑えて！ 海堂さんもう気絶してるから！ あとそんなこと誰も言っていないからあああ！」

気絶させてなお殴りつけようとする真理を、啓太郎が必死で押さえつける。まどかはそれを見ておびえ、さやかの背に隠れていた。

「……わけがわからないよ」

キュウベえは誰にも聞かれないように呟いた。

~~~~~

「ふう〜おいしかったあ」

「じゃあ、そろそろ帰らないと……」

「まどかちゃん、よろしくね」

「わーってるって！ だから手を下ろせ！ なっ！」

満足してその場に寝そべるさやか。帰宅しようとするさやかについていくように催促、海堂は慌てて受ける。先ほどの一撃がよほど効いたのだろう。

「それじゃあ、ご馳走様でした」

「うん、またおいでよ」

啓太郎は手を振りながらまどかを見送る。ちなみにその後でさやかも帰り、「新しい嫁候補発見」と呟いていたとかいなかったとか……

~~~~~

とある工事現場。そこはかつて廃屋だった場所であり、現在改装工事による建て直しが行われている。

「ふう……私も帰りますか」

そしてそこには、琢磨逸郎の姿があった。彼はこの工事の為に見滝原へ赴いていた。今日の仕事も終わり全員帰宅、琢磨も今し方帰るところだ。

だが。

「ん……？ 今、誰か……？」

夜で明かりも無く全く見えない状況であつたが、琢磨は誰かが工事中の建物へ入って行くのを確認した。ふと琢磨は思い出す。工事前の廃屋は心霊スポットとして有名で、ここでの自殺者もいたという。一応お祓いなどやることはやっているようだが、それでもその手の人間には引き付けられる何かがあるのだろう。

一応建物としての興味本位で入って怪我をされても困るので、琢磨はため息をつきつつも建物へと入っていった。

懐中電灯を使い、真っ暗な内部を歩いていく。この時琢磨はすでにある違和感を持っていた。足音が聞こえないのだ。この建物は特別広いわけではない。それ以前に、今この建物には琢磨、琢磨が見かけた人間しかいない。この物静かな空間には、琢磨の足音しか響いていないのは不自然だ。

「まさか幽霊じゃないですよね……ま、そんなのがいるわけないですが」

見間違いだつたのだろう、琢磨はそう思い帰ろうとする。だが、突然周りの景色が歪み、奇妙な空間へと変わっていく。

「……そういえば、幽霊みたいなものがありましたね……『魔女』……！」

スマートレディから話は聞いていたが、琢磨が魔女と遭遇するのは今回が初めてだ。ろうそくのような使い魔が現れ、琢磨を囲む。だが琢磨は焦らず、冷静に状況を確認する。今琢磨を囲んでいる使い魔は十数匹。少々きついのが、対処できないこともない。

そして、琢磨の顔に紋章のようなものが浮かび上がる。

「まあ、私も似たようなものですがね……！」

琢磨は全身に針金を巻きつけたような灰色の体、ムカデの特質を持つ『センチピードオルフェノク』へと姿を変えた。センチピードオルフェノクは茨のように大量のトゲのついたムチを召喚、鞭を地面

に叩きつける。

「さて、覚悟しなさい……！」

センチピードオルフェノクは襲い掛かってくる使い魔をムチで叩きつける。その威力は絶大で、自分を囲んでいた使い魔はあっという間に消滅してしまった。

センチピードオルフェノク、かつて大企業組織『スマートブレイン』の四天王的存在『ラッキークローバー』の一員であった。その実力は本物であり、巧も苦しめられた相手だ。

「確か抜け出す方法は魔女ほんたいを叩く……使い魔がこの程度なら、恐るに足りませんね」

センチピードオルフェノクは結界から抜け出すべく、魔女の元へと向かった。

~~~~~

使い魔をムチで蹴散らしつつも結界の中を駆けていると、何者かの声が聞こえる。声の感じからして女性だ。センチピードオルフェノクは先ほど見た人影は魔法少女であり、おそらく魔女との戦闘中だと推測する。オルフェノクは魔法少女に警戒されており、下手をすれば戦闘になりかねない。センチピードオルフェノクは魔法少女との接触を避けるためその場から立ち去ろうとする……だが。

「うりゃあああああッ！」

中世のランプのような怪物が突然こちらに向かって倒れ、琢磨は間一髪で回避する。『洋灯の魔女』と戦闘していたのは、チャイナ服のような赤い服装で、赤い槍を武器とする魔法少女だった。魔女を守るように使い魔が魔法少女に襲い掛かるが、少女はそれを難なく撃破する。

「終わりだッ！」

赤い一閃。魔女は切り裂け、爆発を起こす。残されたのはグリーンフシードひとつのみ。魔法少女はそれを拾い、辺りが元に戻っているのを確認する。その際、驚いてその場から動けなかったセンチピードオルフェノクを視界にとらえた。

（……しまった！）

魔法少女に見つかり、センチピードオルフェノクはたじろいでしまう。

「ちっ……オルフェノクかよ……！」

（……オルフェノクを知っているのか……！？　だとすれば、まずいですね……）

魔法少女は槍を構え、臨戦態勢となる。一方でセンチピードオルフェノクは目の前の魔法少女がオルフェノクのことを知っていることにある危機感を持っていた。目の前の魔法少女はすでにオルフェノクとの接触済みか否か。どちらにせよ魔法少女はオルフェノクを警戒、敵視している、となれば今ここで戦闘になることもありうる。それだけならまだ問題はないだろうが、センチピードオルフェノクは目の前の魔法少女に対して危機を感じていた。

（見ただけで分かる……彼女は、強い……！）

魔法少女の威圧感、センチピードオルフェノクはそれを感じ構える。

「……はあ」

だが魔法少女は構えを解き、かったるように頭を掻く。不可解な行動にセンチピードオルフェノクは驚きを隠せない。

「何故……？」

「あ？　決まってんじゃない。やる気のない奴を戦おうなんて思わないよ。それに魔力の無駄だしさあ」

そう言って、魔法少女は立ち去ろうとする。センチピードオルフェノクは引き止めようとするが、下手をすれば戦闘になりかねない。あちらから戦闘を放棄した以上、相手を刺激することは出来ない。結局、センチピードオルフェノクは魔法少女が立ち去るのを見てい

るだけだった……

~~~~~

赤の魔法少女は変身を解き、私服に戻る。その少女は、佐倉杏子であった。

「ツイてるなあ。ここの魔法少女がポケットとしてくれてたおかげでここに入りたての魔女を狩れたよ」

杏子は赤いソウルジェムにグリーンシードを近づかせ、浄化する。

「……何やってんだか。馬鹿マミ……」

そう、小さく呟きながら。

To Be Continued.



## 外伝【Part B 21. 5話】（後書き）

何かとお姫様抱っこ状態で渡されるさやかw

啓太郎と真理とまどかとさやか、お前ら馴染みすぎだw 本当はまどかと真理で中の人ネタやろうと思いましたが、以前やったので今回は自重しました。その代わり『たっくん』ネタを使いました。

後半はようやく登場琢磨逸郎。ただしへたれは相変わらずw 出来ればこうちよつとかっこいい活躍させたかった……今後から勝負です。ただ、今のところ目だった活躍とか考えてないです（えそして琢磨と杏子が遭遇。杏子はすでにオルフェノクの名前は知っているよう。キュウベえから聞いたのかそうでないのか……。

洋灯の魔女についてですが……詳細設定は考えてませんすみません；ぶっちゃけやつつけです……；

今年中にもう一話更新したいけど……無理……かなあ；

今日のまとめ…マミさんが空気だったorz

## 第22話（前書き）

はい。またまた更新が遅れてしまい申し訳ありませんでした； 最近動画ばかり見て……なんか、サボり癖がついてきました早く何とかしないとなあ；

今回は色々とつめこんで結構長くなってしまいました。現時点で最長……かな？ これぐらいじゃないと、1話1話が短くなって話数だけがどんどん増えてしまいますからねえ；

さて、前回のあらすじ！

・さやかVSマミ

・さやか勝利！

・さやか、ほむらと和解しようとするもほむらから拒絶される。

・そして、新たな魔法少女が……

暗雲立ち込めるファイマギ。それでは始まり始まり！

## 第22話

「ふぁーあ……あ、はしたない。ごめんあそばせ」

さやかが契約して翌日。あくびをする仁美。

「珍しいね仁美。寝不足？」

「ええ。昨晚は病院やら警察やらで夜遅くまで」

「へえ……何があったの？」

昨夜のことは二人共知っているのだが、当然知らないふりをしてさやかは仁美に聞く。

「なんだか私、『夢遊病』っていうのか……それも同じような症状の型が大勢いて。気がついたらみんなと同じ場所に倒れていたんです。お医者様は集団幻覚だとかなんだとか……今日も放課後に精密検査に行かなくてはなりませんの。はぁ、面倒くさいですわ……」  
本当に面倒くさいのか、ため息をつく仁美。

「そんなことなら学校休んじゃえばいいのに」

「駄目ですわ。それこそまるで本当に病気みたいで、家の者がますます心配してしまいますもの」

「さっすが優等生！ 偉いわー！」

「や、止めてくださいまし……恥ずかしいですわ……」

さやかは仁美の頭を撫で、仁美は恥ずかしそうにしていた。そんな和やかな光景に、まどかは微笑まずにいられたかった。

（なんだか、あんなに笑ってる仁美ちゃんを見るのは久しぶり……あれ？）

仁美の笑う顔を見て安心するまどか。しかし、何か妙な感覚を覚え、まどかはここ最近の記憶を掘り起こす。

（そういえば私達、最近仁美ちゃんと遊んだりしてたっけ……？）

ここ最近は魔法少女体験コースなど色々あり、仁美ともあまり一緒に居られなかったことを思い出す。魔女は精神的に弱った人間を狙う。となれば、仁美がああなってしまったのも、自分達のせいな

のでは、まどかはそう思うのだった。

「……ん？」

ふと、誰かの視線を感じまどかは教室の入り口を見る。。しかし、そこには誰も居ない。まどかは首をかしげる。

「……今の、誰だろう……あ、ほむらちゃん」

するとちようどほむらが教室に入り、まどかはほむらに挨拶をする。

「ほむらちゃん、おはよう！」

「……ええ、おはよう」

ほむらはそっけなく返し、机にカバンを乗せる。

「あ、おはようほむ……転・校・生っ！」

さやかもほむらに挨拶をしようとし、名前を呼びかけたところで昨日のことを思い出す。『転校生』と呼びなおすさやか。発声の仕方から意地になっているようである。

「……ふっ」

それを鼻で笑うほむらにカチンときたのか、ほむらをにらみつけるさやか。さらにほむらもさやかをにらみつけ、火花が散っているのが容易に想像できるほど視線をぶつけ合っていた。その様子を見て周りにいるクラスメイトは、二人から逃げるように遠ざかる。

「ふああ……おふた方、どうかなされたのですか？」

「えへへ……ちよつと、ね……」

事態を把握出来ないようで、あくびをしながらたずねる仁美。まどかは二人の様子を見て苦笑することしか出来なかった……

~~~~~

「たっくん、元気になってよかったあ！」

「ああ。迷惑かけたな」

巧の退院を喜ぶ啓太郎。巧もわずかに微笑みながら歩いていた。

一日入院していた巧は一晩で体力を回復し、活気付いている。しかし病院内を歩いていると、看護婦がなにやら妙な話をしていて。そしてそれは巧の耳に入った。

「ねえ、あの患者さん腕が治ったってほんと？」

「確か、交通事故に遭った患者さんでしょ？　確か、天才バイオリニストの……あ、上条君」

『上条君』、巧はそれ聞き立ち止まる。そして同時に、嫌な感覚を覚える。

「奇跡よねえ。手がたった一晩できれいに動くようになったのよ？　先生も『演奏を諦めろ』って言うぐらい酷かったのに」

上条、バイオリニスト、交通事故、それは全て、さやか of 幼馴染である上条恭介に当てはまるもの。そして、『たった一晩できれいに動くようになった』。奇跡としか言いようの無いもの。だが、そんな都合のいい奇跡などあるわけが無い。嫌な予感が巧の頭をよぎった。

「……たっくん、どうしたの？」

「あ……いや、なんでもない」

啓太郎が心配そうに巧に声をかけ、巧は慌てて歩き出す。

「それにしても、たっくんずいぶん明るくなったよね」

「そうか？」

「そうだよ。だってさ、一週間ぐらいで仲のいい子達が出来たんだからさ」

「……まあ、そうだな」

よくよく思い出してみれば、啓太郎や真理も、ある程度時間が経ってから打ち解けていた。まどか達のように、短期間でこれほど打ち解けることなど、昔では少し考えにくい。俺も変わったんだな、と巧は思い、心の中で微笑していた。

「それにしても、最近の中学生の女の子は指輪してるようなものなのかなあ？　マミちゃんやさやかちゃんもつけてたけど……あ、そういうえば指輪はめてる指の爪だけネイルアートしてたっけ」

「なっ……!?!?」

それを聞き、巧はある時のことを思い出す。

~~~~~

それは巧がママの家に居候することになった初日のこと。ママの指輪をはめている指の爪だけにネイルアートがあることに気づいた巧。

「ママ、それなんだ?」

「え? ああ、これですか。確か、契約した頃にはすでにあって……キユウベえの話だと魔法少女の証のひとつみたいなものらしいんですよ」

~~~~~

(あの時ママが言っていたことが本当なら、さやかはもう……)

「……くそっ!」

「ツッ!? た、たっくんどうしたの!?!」

突然巧が声を張り上げ、啓太郎は驚く。

「あ、い、いやなんでもない……」

無意識に発してしまったのか、啓太郎に言われて自分が取り乱していたことに気づく。

(さやか……あの馬鹿……)

第22話【二人の守り人】

「あー爽快爽快! ひっさびさに気分いいわー!」

さやか、まどか、そして退院した巧の三人は土手で座り込んでいた。巧は偶然会ったようである。

「俺としては、むしろ憂鬱だけだな。結局契約しちまったわけだし」

「あ、うん……それはホントごめん」

巧はため息をつき、さやかは申し訳なさそうに謝る。

「やっぱり、上条あいつの腕か？ 看護師とか騒然としてたぞ。たった一晚で医者が匙投げた手が治ったってな」

「よかったあ……ちゃんと治ったんだ」

「さやかちゃん……」

巧の話聞き、上条の腕が治ったことを確かめたさやかは、安堵の表情で一息つく。それを見て、まどかはどこか不安そうにさやかを見ている。

「……で、契約した以上、覚悟はあるんだな？」

「ん？」

「魔女や使い魔だけじゃない。マミみたいにオルフェノクと遭遇することもありえるんだ。もしそうなったとき、お前はあいつらを殺たおせるのか？」

確かにそうだ。まどか達はこれまでに何度もオルフェノクと遭遇したことがある。もし今後さやかの前にオルフェノクが現れた場合、殺たおさなければならぬ。当然さやか達はオルフェノクの正体を知っている。知っているからこそ、戦うにはそれ相応の覚悟がいる。さやかにそれがあるのか、巧はそこが心配でならなかった。

「……うん、いざとなったらね。そういうのを踏まえて、契約したわけだし」

「……そっか」

真剣な表情のさやか。まだ不安はぬぐいきれないものの、さやかの覚悟を感じ取り、巧は頭を掻いた。

「あたしは、契約で願ったこと以外にもあるんだよね、願いがさ。魔法少女になってからじゃなきゃ出来ないことが」

「……なんなんだ、それ？」

巧は不思議そうに聞く。

「巧、言ってたよね。『夢を守りたい』って」

「……ああ」

「あたしもさ、守りたいんだ。恭介の夢。それに、『呪い』に苦しんでる人達も」

「『呪い』？」

今度は、まどかが不思議そうな顔をした。

「キュウベえが言ってたんだ。『夢は呪いと同じ』だって。もしそうだとしたら、叶えられなくなった恭介は、一生呪われたまんまなんだよ？ 心が弱って、いつか本当に魔女に呪われるかもしれない。それに昨日だって、まどかと仁美を失いかけたわけだし」

あの野郎……と、巧はキュウベえに対して怒りを覚える。

「あたし、そっちの方が恐かったよ。大切なものがなくなる恐怖っていうか……『呪い』がどれだけ人を苦しめるのか、分かった気がする。だから……」

さやかは一呼吸入れ、決意と共にそれを口にする。

「あたしは、人を苦しめる呪いを消し去りたい。全ての呪いを断ち切りたい。多分それが、あたしの『夢』だから」

夢を語るさやかの表情にはいつものような陽気そうな感じは無く、真剣そのものだった。その眼光からはまるで、さやかの信念や決意が見えた気がした。

「さやかちゃん……うん、いい夢だと思うよ」

まどかは微笑みながら、さやかの夢に感動していた。

「まあキュウベえの間違ってないとは思ったださあ。巧の言ってることの方が正しいよなーって思ってた……とかとにかく！ この見滝原市はこの魔法少女さやかちゃんとファイズであるたっくんがガンガン守りまくっちゃいますからねえー！」

「別に俺はここを守る気はないぞ」

さやかは巧の思いがけない発言に驚いた。

「うええっ！？ そりゃないって！ お願いだよししょー」

さやかは甘えるように巧の腕を揺さぶる。

「誰が師匠だ」

それでも巧はそっけない態度をとる。

「だって一応あたしを鍛えてくれたわけだし……まあ本気じゃなかったわけけど」

正直、巧は修行などの類は好きではない。実際、あの修行はほとんどマミの考案であった。

「俺は元々ここには用事があって来たただけ。終わったら後はすぐ帰る」

「ええ……そんなあ」

元々は見滝原に行くようにと言われただけ。用が済んでしまえば後は帰るだけだ。だが、しょんぼりとしたさやかをちらっと見て、ため息をついて、あくまでそっけなく言った。

「……ま、ここにあるあいだなら考えてやってもいいけどな」

それを聞いたさやかはすぐさま表情を変え、『ばあああっ』という擬音が似合うぐらいに、その表情を明るくした。

「なんだ驚かせないでよ！　ほんとツンデレだなたつくくんは！」

調子にのったさやかは、巧の背をバシンと叩く。

「誰がツンデレだっ！　っていうかお前がたつくんて言うな！」

（こいつ単純過ぎだろ！　ていうか、啓太郎……後でぶっ飛ばす！）
せめてもの心遣いが裏目に出たかと巧は思っていた。そのついでに、二人に見えぬよう拳を握り締め、啓太郎への怒りをあらわにする。自分を『たつくん』と呼ぶのは、昨日まどか達と一緒に夕飯を食べていたという、啓太郎のみだからである。

「……ありがと、巧」

さやかはこっそりと、頬をわずかに赤らめて呟いた。

「ん？　なんか言ったか？」

「なんでもないよ」

「いや、絶対なんか言ってたろ」

「いやいや気にしないでいってほんとになんでもないから！」

はつきりと聞こえなかったのが気になったのか、追求する巧。さ

やかは両手を振りながら誤魔化す。そのやり取りを見て、苦笑いするまどか。朝にもこんなことがあったなあと思い返していると、ふとその時思ったことを口にする。

「……ねえさやかちゃん」

「ん？ どうしたのまどか」

「うん……あのね、私達、最近仁美ちゃんと一緒に居たかなあと思っ
て……」

「え？ ……ああ、そういえば」

「さっきから思ってたけど、その仁美って誰なんだ？」

何度かその名前は聞いてはいるが、具体的にどういう人物なのか、巧は知らない。

「志筑仁美ちゃんって言って、私達のクラスメイトで友達なんです」

『志筑』という苗字に心当たりなのか、少し考え込む巧。そして、何か何か思い出したようで、顔を上げる。

「志筑……そういえば最近『志筑財閥』って聞いたけど、もしかしてその志筑か？」

『志筑財閥』、この見滝原では有名であり、仁美はその娘であった。

「はい。仁美ちゃんの家はとてもお金持ちで……」

「本当だったら、見滝原中なんかじゃなくてさ、女学校とか、お嬢様学校とか行ってるようなのなんだよ、仁美は」

「……どういふことだ？」

「小学校とかはさ、お嬢様が行くようなお高いところに通ってて、中学も最初はそういうところだったんだよね。けど去年のいつだったかなあ、あたし達が1年の時に転校してきてさ。あの時は驚いたよなあ。まさかお嬢様がこんなところに来るなんてーってさ」

見滝原中学は最近改築されたことを除けばごく普通の中学校である。

「あの時の仁美ちゃん、何かから解放された感じだったよね」

「うん。確か、前の中学校は疲れるとか言ってたっけ……」

さやかとまどかは、一年の頃の記憶を掘り起こす……

~~~~~

それはまどかとさやかが一年だった頃、仁美が転校してきて数日後のことである……

「ふう……」

「あ、あの！ えっと……志筑さん！」

四時間目の授業が終わる。疲れたようで、ため息をこぼす仁美。そんな仁美に声をかけたのは、まどかである。その後ろにはまどかの親友であるさやかの姿もあった。

「えっと、あなた方は確か……」

「私、鹿目まどか！」

「あたしはさや……美樹さやか。よろしく」

「ええ。よろしくお願いいたしますわ」

まどかとさやかは自己紹介し、仁美はお辞儀をする。

「わざわざそんなことするかなあ……」

「これが最低限のマナーですもの」

「ああ……そっ」

お辞儀までするのがあるのか、さやかはそんなことを思っていた。

「あの、志筑さん……その……」

「鹿目さん、なんですか？」

「一緒にさ、お昼食べない？」

まどかとさやかは仁美を昼食と一緒に食べる誘いをしたのだ。

「お昼……ですか？」

「うん。ほら、交流とかしたいし」

それから少し、仁美は考え込むよにしていた。

「あゝ、もしかして駄目だった？」

「……いえ！　ぜひご一緒させてくださいまし！」  
「うおっ!？」

断られると思っていたさやかだったが、いきなり仁美が両手をつかんできたので、驚く。

「……はっ！　し、失礼いたしましたわ！」

とっさにとった行動だったのか、すぐに我に返った仁美は慌てて頭を下げて謝る。

「あ……いや、こっちもゴメン。ちょっと驚いちゃってさ」

「い、いえこちらこそ。私、こういうのに憧れていたの……」

「「憧れてた？」」

まどかとさやかは声を揃えて言う。

「知っての通り、以前私は俗に言うお嬢様学校に通っていましたの。最初は通うことになんとも思っていませんでしたわ。でも、ある時この生徒が笑いながら歩いているのを見て、急に窮屈に感じるようになったんです。私が通っていた学校には、そういうことが無かったの……」

「庶民……という失礼ですよ。ごく普通の暮らしがしてみたくて……それでお父様達に無理を言って、ここに転校させてもらったわけですの。変……ですよ」

「う、ううん？　全然変じゃないよ仁美ちゃん！」

「『仁美』……ちゃん？」

思わず名前で呼んでしまい、まどかは謝る。

「あ、ごめんなさい！　つい……」

「……いえ、気にしてませんわ。むしろ、そう呼んでくださいまし」「え？」

「その……うれしかったというか……私、遊んだり、笑いながら話が出来るとななお友達が欲しくて……」

仁美は過ごし恥ずかしそうに、頬を少し赤らめながら言う。

「……うんうん！　仁美が何を言いたいかだいたい分かった！　ようするに、あたし達を友達になりたいわけか！」

「さ、さやかちゃん！ いきなり呼び捨てはよくないよお！」

「別にいいですわ。美樹さん、あなたの言うとおりですわ。私、お友達が欲しいんですの。でも、クラスの人達はあまり話しかけてくれなかったりで……」

「うん分かったよ仁美。これからはあたし達が友達だ！」

「ほ、本当ですよ！？」

仁美はうれしそうに、まるで目を輝いているように見えるほど喜んでいた。

「さやかちゃんは嘘はつかないのなあ！」

「こないだ私に嘘ついたよね？」

まどかの黒い笑顔を見て、さやかはうぐつと声をあげる。

「うふふ……よろしくお願いいたしますわ。鹿目さん、美樹さん」

「おおっと！ 友達になったからには苗字は無し！ ちゃんと名前で呼ぶこと！ 分かった？」

「……分かりましたわ。まどかさん、さやかさん」

それから、まどかとさやか、そして仁美の交友関係は始まったのである……

~~~~~

「……そんなことがあったのか……」

若干感動したようで、巧は空を見上げていた。ほろりとくる何かがあったのだろう。

「今考えてみたら、仁美がああなった原因って私達だよね……？」

体験コースとかで仁美ちゃんと一緒に帰れなかったりとか……」

「うん……仁美って習い事とか多くて遊んでもあまり一緒に居られなかったからねえ……そういうとこに甘えてたのかな……あたし達」

まどか達を友人関係になった仁美ではあったが、ラブレターは貰

えても友人自体はあまり増えていなかった。そのため、普段から仁美はまどか達と一緒にいたのだ。まどか達の友人とも仲良くはやっているようだが。

「……私達に見せてなかっただけで仁美ちゃん、寂しがっていたんだね……」

「酷いこと、しちゃったなあ……」

まさか、魔女に狙われるようになるまで苦しめていたことに、二人は気づけなかったことを後悔していた。

「これから大変だな。そいつとの付き合いをおろそかにしないように魔法少女の仕事を両立しなきゃいけないんだからな」

「うへえ……大変なことになっちゃったなあ……」

「お前、ほんとに馬鹿だな」

「ぐふっ」

巧の鋭い追い討ちが入り、さやかは落ち込んでしまった。

「……ま、なんかあったら俺に言えよ。なんとか力にはなってやるから」

ポンッ、と巧は軽くさやかの頭を叩き、優しく撫でた。

「っ……う、うん。ありが……と」

さやかは耳を真っ赤にする。完全に不意打ちでしょ！？ そんなことを思いながら。それを見てまどかはにやにやしていた。巧はさやかの頭から手を離すと、屈伸しながら立ち上がる。

「巧さん？」

「これから約束があつてな。今日は付き合いえない。悪いな」

「いや、気にしてないよ。バイト？」

「……働いてたところが相当厳しいとこだったみたいでな、昨日の無断欠勤のことでこっちの話をまともに聞かないでクビにされた……」
巧はうつぶせ、落ち込む。とりあえず、啓太郎がクリーニング屋でバイトをはじめてはいるのだが。

「ああーうん。ゴメン」

流石に悪いと思ったのか、さやかは苦笑しながら謝るのだった。

「じゃあな」

「バイバイ……さてと。あたしもそろそろ時間だし、行くかな」
巧が土手を後にすると、さやかも背筋を伸ばしながら立ち上がる。

「さやかちゃんも用事があるの？」

「んーまあね」

おそらく、病院だろう。さやかもその場を立ち去ってしまい、まどかのみが残っていた。

「さやかちゃん……」

まどかはさやかの名前を呼びながら、ケータイを取り出す。カチカチとケータイを操作し、アドレス帳を開く。アドレス帳には、今日入れたばかりの新しい項目が入っていた……

~~~~~

——見滝原病院

「そっか、退院はまだなんだ」

「足のリハビリの方がまだ済んでないからね。まだ補助無しじゃ歩くのも難しいし」

さやかは今日も上条の病室を立ち寄っていた。足はまだ完治していないので車椅子だったが、上条の左手はちゃんと動いていた。それを見て、さやかは喜んでいた。

「手の方も何で突然治ったのか……医者が驚いてたよ。『こんなのあり得ない』って！」

それを聞くと、さやかは突然右手を上げ、天を指差した。まるで、某天の道を行き総てを司る男のように。

「おばあちゃんが言っていた……『あり得ないことはあり得ない』、  
ってね」

「あり得ないことはって……それ、漫画のキャラの台詞じゃないの  
かい？」

上条は微笑する。

「あははゝバレてたかあ。それで、恭介自身はどうなの？ どっか  
おかしい所とかはないの？」

「うん、無さ過ぎて怖いっていうか、何で病院のベッドで寝てるの  
かが不思議に思えるくらいだよ」

「そっか……よかった」

自分の願いはちゃんと叶ったんだ……さやかはもう何度目だろう  
か、安心感を得た。

「……さやか」

「ん？ どうかした？」

「……さやかの言った通り、これって奇跡だね。さやかには随分  
と酷いこと言っちゃったよね。いくら気が滅入っていたからって、  
今までお見舞いに来てくれてたのに」

上条は、さやかに申し訳なさそうに言う。

「いやいやそんなの気にしてないって！ 人間誰だってそういうの  
はあるじゃん！」

「でも……最初はお見舞いに来てくれた人もだんだん来なくなっ  
て、気づけばいつも来てくれてたのは、親を除けばさやかだけだっ  
た。さやかだけは、ずっと僕のことを心配してくれてた……なのに  
……！」

上条の表情はどんどん暗くなっていき、目も潤み始めていた

「……恭介」

「なんだいさや……ふがっ!？」

見ていられなくなり、声をかけるさやか。すると、さやかは上条  
の両方の頬をつかみ、引っ張って伸ばし始めたのだ。

「いーって言ってんのに聞かない口はどれだゝええ!？」



「いはい！ いはいっふえふあやか！？」

痛がる上条。さやかはすぐに手を離し、上条は頬をさする。

「酷いよさやか……僕をいじめてるのかい？」

「いじめてんのはどっちだよ？ 人がいいって言ってんのにしつこく蒸し返してさあ」

「う、うん……ごめん」

上条はまだ申し訳なさそうに謝る。しかし、今度は笑いながら。

「いいっていいて！ ……あ、そろそろ時間だね。それじゃ行こっか」

ふと、さやかは腕時計を見てそう呟く。

「？ 行くなって、どこに？」

「それはお楽しみ！ ほら、行くよ！」

さやかは困惑する上条をよそに、車椅子を押してどこかへ連れて行く。

「さやか、屋上なんか何のようで……あっ」

上条の車椅子を押し、さやかが来た場所は、屋上であった。そこには医者や看護婦、そして上条の両親がいた。

「本当のお祝いは退院してからだけど……足より先に手が治っちゃったからね」

上条には内緒で準備していた、サプライズのようなものだった。

さやかが車椅子を押しながら近づく、上条の父親が上条に手渡そうと何かを差し出した。

「それは……」

「お前からは処分してくれと言われていたが、どうしても出来なかったんだ……」

上条の父親が差し出したものとは、上条が捨ててくれと頼んだ、かつて愛用していたバイオリンであった。上条にとっても、両親に

とつても、深い思い入れのある物であった。

「父さん……」

少し戸惑いを見せていた上条であったが、意を決したかのようにバイオリンを受け取る。さやかは上条から離れ、自らも集団に入る。「さあ、弾いてごらん、怖がらずに……」

上条は黙ってうなづき、バイオリンをしっかりと持ち深く深呼吸。そして、弦を弾いた。

十人にも満たない、小さなコンサートの始まりである……

上条の奏でるバイオリンの音色は、ブランクを感じさせないほど美しく、誰もがそれに聴き入っていた。さやかもまぶたを閉じ、静かに演奏を聴いていた。

見ていなくても、聴いているだけで分かる。今上条は微笑みながら、演奏を楽しんでいた。明るい音色が、まるで心を洗っているかのように、気持ち清清しくさせる。これがさやかの愛した、上条のバイオリンなのだ。

正直、もう聴けないのではと思っていた。しかし、さやかが契約したことによって上条の左手は治り、再び演奏が出来るようになった。今、さやかは幸せな気持ちでいた……

——皆、あたしの願い、叶ったよ……

——巧はあたしのこと馬鹿だっと思ってるだろうし、マミさんもそれでよかったのかって聞いてきそうだし、まどかも心配するだろうけど……

——後悔なんて、あるわけない

上条の演奏が終わり、一同は一斉に拍手する。ほっと一息つき、満足そうにしている上条を見て、さやかは思った。

——あたし、今最高に幸せだよ

拍手をするさやかの手。その指にはめられた指輪についた青い宝石が、キラリと輝いた。

~~~~~

——同時刻、タワーの展望台

「ふうん、あれが新人の魔法少女ねえ……なんか気にいらないなあこいつ」

魔法でより遠くを見渡せるように魔力強化した望遠鏡を使い、佐倉杏子は病院の屋上、さやかの様子を見ていた。彼女の趣味なのか、魔力で強化された望遠鏡にはマールブルチョコの意匠がある。

「それで、本当に彼女と事を構えるつもりなのかい？」

「当たり前でしょ。あんなひよっこ、瞬殺だつーの。それとも何？　なんか文句でもあんのか？　アンタ」

魔力の供給を止め、望遠鏡を元に戻しながら杏子はキュウベえの問いに余裕そうに答える。それほど自信があるのだろう。ポリポリとスティック菓子を食べながら。

「そんなつもりは無いよ。ただ、甘く見ない方がいい。あれでもオルフェノクを一方的に退け、魔女の口づけを受けたマミを倒す程の力を持っている」

それを聞き、杏子は驚いていた。信じられないという思考が、その表情を見るだけで分かる。

「……なんの冗談だよ。あいつ、昨日魔法少女になったばっかなんだろ？　オルフェノクはともかく、あのマミが、たとえ操られてようがそんなへマするような奴じゃ……」

「僕はそれを直接見たわけじゃないから分からない。ただ、最初のオルフェノクとの戦いを見てなんとなく分かった。彼女は、ファイズの戦いに影響を受けている」

「……『ファイズ』？」

『ファイズ』の名を聞き、杏子は妙な顔をする。

「……何か知ってるのかい？」

「……まさか、知らないよそんなの」

どこか意味ありげに、そっぽを向く杏子。それを見てキュウベえは首をかしげていた。

「とにかく、彼女を侮らないほうがいい。もしかすれば、素質以上の力を持っているのかもしれない」

「……けっ」

キュウベえの言っていることがうざったいようで、杏子は悪態をつく。

「……それに、この町にはもう一人魔法少女がいるんだ」

キュウベえの言ったことに興味が湧いたのか、杏子は少し機嫌を

直しキュウベえの方を向く。

「へえ、何者なの？ そいつ」

「それが、僕にもよく分からない」

それを聞き、きよんとする杏子。

「……はあ？ どういうことだよそれ？ そいつもアンタと契約して魔法少女になったんでしょ？」

「そうとも言えるし、違うとも言える。彼女と契約した記録きおくがないんだ」

「はっ、わっけわかんね」

全ての魔法少女はキュウベえと契約することによって生まれる。いわば、キュウベえは魔法少女の生みの親だ。そのキュウベえですら知らない魔法少女。杏子は理解が出来ず頭を掻く。

「『曉美ほむら』、彼女は極めつけのイレギュラーだ。どういう行動に出るか、僕にも想像できない。もっとも、オルフェノクやファイズも、そのひとつであるんだけどね」

「……ところで、マミの奴はどうなんだ？」

「おや？ ずいぶん気にしているみたいだね。やっぱり気掛かりなのかい？」

「そんなんじゃないよ。あいつにまで出られると流石のあたしもキツイしさ」

「……どうやら戦いに恐怖しているようだよ。昨日も魔女との戦いを躊躇ちゅうちゆっていたようだったし。そのせいで魔女に魅入られたわけだけど」

「……馬鹿じゃねえのか」

何か気に食わなかったのか、杏子は再び悪態をつく。

「杏子、改めて言うよ。曉美ほむら、彼女には気をつけるんだ。マミがああなってしまったのも、これも全て彼女の仕業なんだ」

「オイ……それは本当なのかよ！？」

「詳しくは分からない。ただ、彼女のせいでマミの信念しんねんは折られてしまった。君に限ってそんなことは無いだろうけど、彼女は目的の

ためなら手段は選ばない、そういう人種のようなだからね。まあ、さ
やかも原因のひとつではあるのだけれど」

「ふうん……」

「君なら、マミのようにはないだろう。君の精神の強さには目
を見張るものがある。あんな事があっても君はぜ」

キュウベえが何かを言いかけたところで、杏子のソウルジエムか
らエネルギー体で武器が現れ、その矛先をキュウベえの目の前に見
せ付ける。

その杏子の表情はまさに『鬼の形相』。キュウベえに対して激し
い怒りと殺気を向けていた。

「……てめえ、死にたいのか？ ああ？」

この言動から、杏子がマジギレしかけているのは明白だった。

「今回ばかりは僕に非がある。素直に謝るよ」

キュウベえは頭を下げ、杏子は舌打ちをしながら武器をソウルジ
エムに納めた。

「ところで、どうしてこんなに早く見滝原に来てたんだい？ 数日
前からここに来てたようだけど」

キュウベえが聞くが、何か気まずいのか杏子は少しの間沈黙する。
「……あの町に居づらくなった、ただそれだけだよ。うざったいの
が増えてね……後、色々あったし」

杏子はため息をつきながら、またも意味ありげにそっぽを向く。

「それに、この街は絶好の餌場だし。あたしはここが欲しいんだよ
……欲しいものは何としても手に入れる。そのためのモンでしょ
？ 魔法ってやつはさ」

杏子は昨日手に入れたグリーンフシードをお手玉のように投げている。

「さて、と。昨日取ったグリーンフシードもあるし、たまには派手に
やってもいいよねえ。面白そうだし、久々に楽しめそうだよ」

そして杏子はそれを少し高く投げ、空を切る勢いでグリーンフシー
ドをキャッチ。キュウベえの方に振り向き、八重歯をむき出しして

不適な笑みを浮かべた。

「で、何処にするんだい？ ……祭りの場所は」

~~~~~

——人通りのないどこか

「よお」

巧は海堂と会っていた。

「とりあえず、わりい。あの嬢ちゃん契約させちまって。もうちょい押しときゃよかったのによお……」

嬢ちゃん、さやかのことだ。

「いや、別にいい。あいつは全部納得した上でだからな……まあ今はそれはおいといて。さっさと用件を言え」

今回は巧からではなく、海堂からの誘いだった。

「ああ。どうやら最近あいつらに動きがあったらしくてな」

「！ ……スマートブレインか」

スマートブレイン3年前、巧や三原修二が戦った、オルフェノクの巣とも言うべき組織だ。『王』が倒されてから、唯一の生き残りである影山冴子は姿を消した。だが、消息を絶ったわけではなく、どこかで仲間を増やしつつあったようだ。

「数年かけてようやく潜伏先を突き止めたと思ったらこれだぜ……」

海堂が言うには、最近スマートブレインのアジトを突き止められたらしいが、向かった頃にはすでもぬけの空だったらしい。

「そういや知ってたか？ 最近不可解なことが多いって噂が多いってな。廃墟にビルが青い炎で燃え上がったただの人間が灰になったりだの妙な景色を見ただの」

「……最初のはよくわかんないけど、他のはオルフェノクや魔女が

らみだな」

「んでもってここ最近のオルフェノクの動向を探ったらよ、どうやらここら辺での活動が活発になってるみてえなんだよ」

「……すると、あいつらはこの近くに？」

「かもな。けど、数年間全く動きを見せないで隠れ続けた奴らがなんで今になって……こんなに分かりやすい行動を起こして……なんというか、らしくないな」

身を隠している以上、下手な動きはしないはずだ。しかし、今回スマートブレインはやたら活動的なのだ。下手をすれば見つかるというのにだ。

「ああ。罠かもしれないし、もしかしたら別の目的があるのかもな。こっちにどう動かれようが構わない、そんな何かが」

「……なるへそ」

相手にも手があるのかもしれない、それは罠であろうと無かろうと可能性は十分に高いだろう。

「……出来れば、魔法少女は巻き込みたくないな」

オルフェノクの問題はあくまで自分達の問題。まどかや、魔法少女たちを満期込みたくは無かった。

「そうだな……」

海堂はそう呟きながら、バイクにまたがった。

「ん？ どこか行くのか？」

「ああ。ちよっくら取りに行くもんがあってな……あ、そういや」

「どうかしたのか？」

「見滝原に来る途中、変わったバイクを見たって話聞いたぜ。今時サイドカーのついたバイクだってな」

「……それって、まさか……！？」

それに、二人は心当たりがあるようだった。

「まあ、とにかくだ。間違っても油断したりして、死ぬなよ」

「……ああ。分かった」

海堂はバイクを走らせ、巧も別方向に歩き始めた……



~~~~~

——いつものカフェ

「それで、話ってなんなの？」

まどかのアドレス帳に入っていたのは、ほむらのものだった。まどかはほむらをこのカフェに呼び出したのだった。

「その、さやかちゃんのことなんだけど……」

それを聞いたほむらは、「なんだ」という感じの表情をした。

「さやかちゃんって、思い込みが激しくて意地っ張りで、すぐに人とケンカになっちゃうし……でも、すごいいい子なの！ 優しくて、勇気があって、誰かの為に一生懸命になれて、それで頑張りすぎちゃって……それでも、私も何度もさやかちゃんに助けってもらったし……出来れば、傷ついてほしくないの」

「……」

ほむらはやや不機嫌そうにしながらも、コーヒーを飲んで黙って聞いていた。

「その、魔法少女同士なんだし、仲良く出来ないのかな……って魔法をやつつける時も、一緒に協力して戦えば、ずっと安全なはずだよね」

「……はあ。あなたはこれほどの目に遭ってまだそんな甘いことが言えるのね。逆に関心してしまうわ」

「え？」

ため息をとくほむら。まどかは不安そうな表情をとる。

「魔法少女は獲物を狩るライオン、そして自分以外の魔法少女全員は獲物を奪い取っていくハイエナ。ハイエナとつるむライオンなんて居ないわ。結局は、手柄の奪い合いをするものなの。それなのに魔法少女同士仲良くしろですって？ はっきり言って仲良くする気もないし、不可能よ」

「そんな……だって、ママさんは！」

「巴ママは甘い考えしか持たない愚か者なだけよ。だからいともたやすく信念を折られ、あんなことになるの。あなたは美樹さやかにそんな風になってほしいの？」

「そんな言い方しないで！」

ママを罵倒されたと思ったまどかは、バンツと机を叩く。ほむらは一瞬驚いたような雰囲気を見せる。

「あ、ごめん……なさい」

ほむらだけでなく周りの人まで驚かせてしまったことに気づいたまどかは謝りながらゆっくりと座りなおす。

「……それで、そんなくだらないことを言いに私を呼び出しただけ？ それなら、私は帰らせてもらうわ。それとしつこいようだけど、あなたは魔法少女になるべきではない。そんな甘いことばかり考えているようではすぐに死ぬのが目に見えているもの。魔法少女にとって、甘さは死に直結する。それをしっかり胸に刻んでおきなさい」そう言った後、ほむらは立ち上がろうとする。

「お願い！ 私はもうさやかちゃんの力になってあげることが出来ないの！ だから……お願い……さやかちゃんを……助けてあげて！」

まどかは今にも泣きそうな表情でほむらの腕をつかむ。

「……なんで、美樹さやかなのよ……！」

ほむらは齒軋りをし、聞こえないよう呟いた。

「え？」

「……なんでもないわ」

ほむらは冷静を保ち、髪を掻き揚げる。

「結論から言わせてもらおうと、無理よ」

『無理』と言われ、まどかは放心してしまったように座り込む。

「なんで……？」

「たとえ協力したところで、彼女が救われることはないわ。彼女はもう魔法少女なの。一度魔法少女になってしまえば、もう救われる望みはないの」

「どうということ？」

「あの契約はたった一つの奇跡と引き換えに、全てを諦めなければいけないものの。巴ミミを見ていれば分かるでしょ？ だから、助け合いをしようが何をしようが、結局無駄なの」

マミは自分の命と引き換えに両親を失い、人間としての生活が出来なくなり学校でも孤立。魔法少女としても今は恐怖で戦えなくなり、何のために生きているのかが分からなくなって精神的に弱り魔法に魅入られた。彼女は契約してから救われたことなどない。ただ、周りに迷惑をかけたようなものだ。

「ほむらちゃんも諦めてるの……？ 自分のことも、周りのことも？」

「……時間を無駄にさせたわね。ごめんなさい」

ほむらはまどかの質問に答えず、立ち去った。一人残されたまどかは、涙をためながら呟いた。

「……私、どうしたらいいの……？ さやかちゃん……」
どうすればいいのか、まどかには答えが見つからなかった……

To Be Continued.

第22話（後書き）

そういえば、土手のシーンって何気にどっちも名シーンだなあと思った今回。さやか『夢』、いかがでしたか？

そして、仁美に関しての自己解釈設定。これもいかがでしたでしょうか？ 僕はガイドブックの類は持っていないので詳しい設定などは分からないんですが……

まあ、二次創作作品によっては豪邸に住んできたりいろいろあるんで問題はないでしょうが。

上条、お前羨ましすぎる。正直そこ変わって欲しい（ヲイにしてもこのさやか、ノリノリであるw それでもシリアスと使い分けてる分、結構いいキャラになったなあと思ってます。

そして杏子が本格的に動き出します。なんか浅倉臭がしますが、そこはまあスルーしてください。イライラしてるだけでしょから（笑）

オルフェノクも影で動いているよう……なんか、色々とやばくなっ
ていきそうです。

ほむらとまどか、いつの間に連絡先交換したんだ……？ まあ、前回みたいにならないうようにするのであれば当然のことではありますわ

色々とフラグやらが出始めたファイマギ！ 今後も目が離せない展開になるよう、努力していきます！

次回【託されたモノ、奪う牙】！ 次回もよろしく！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3532v/>

仮面ライダー×魔法少女 555☆MAGIKA ～THE LAST K/NIGHT MISSION

2012年1月8日02時47分発行